女鑑
貳拾四年第八號


東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
中元及び暑中の御贈答用
に適當の品に取揃へ申
候外豫て御高評を蒙
り候弊店新案の腰
捷模樣入手拭、ハ
ンカチーフ、帛紗
中形類等種々賣
出し申候間多少
に拘はらず御
用被仰付度
奉願上候

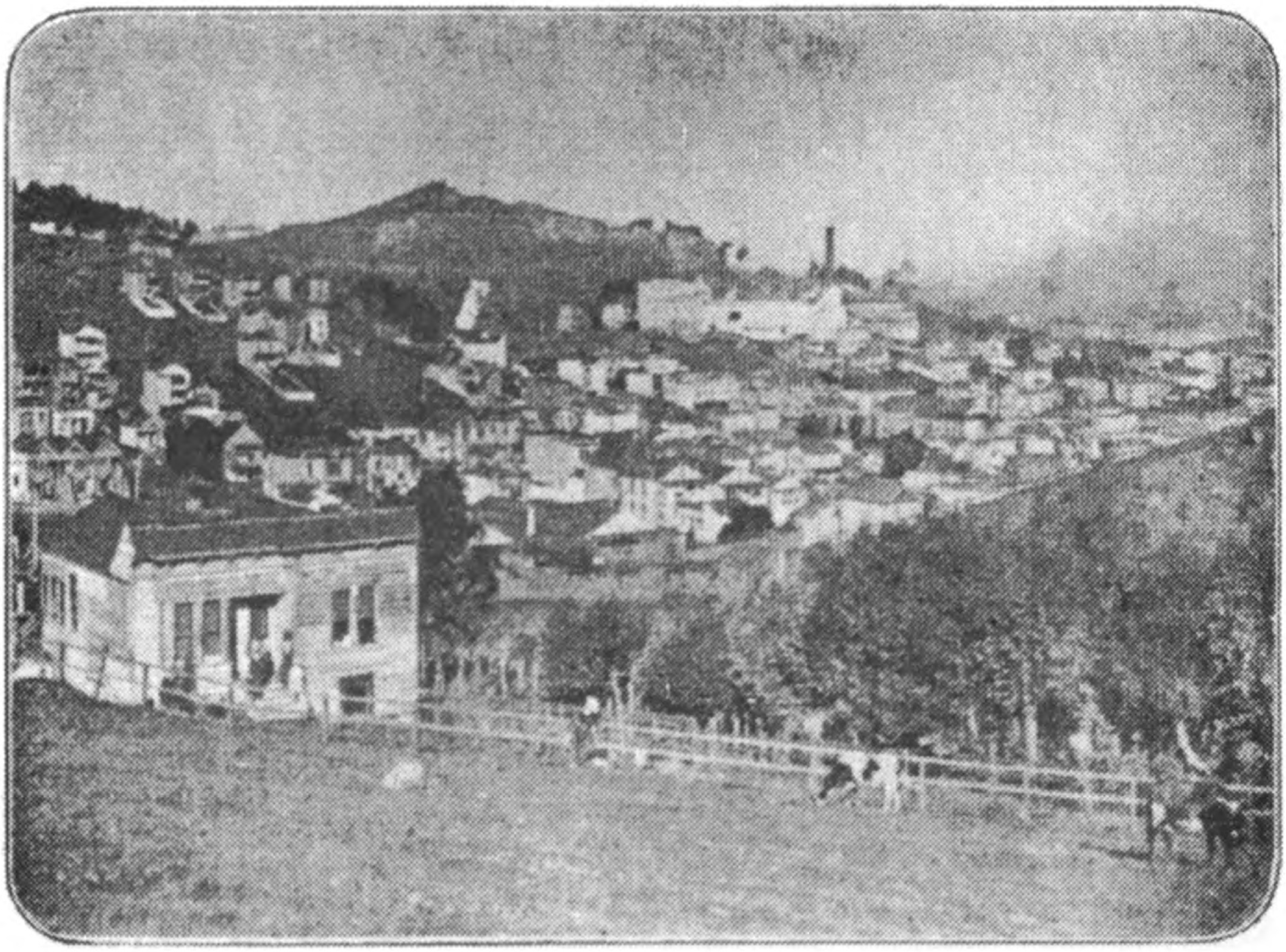
女鑑 第拾四年 第八號 目次



伏見若宮博恭王殿下



同妃經子殿下

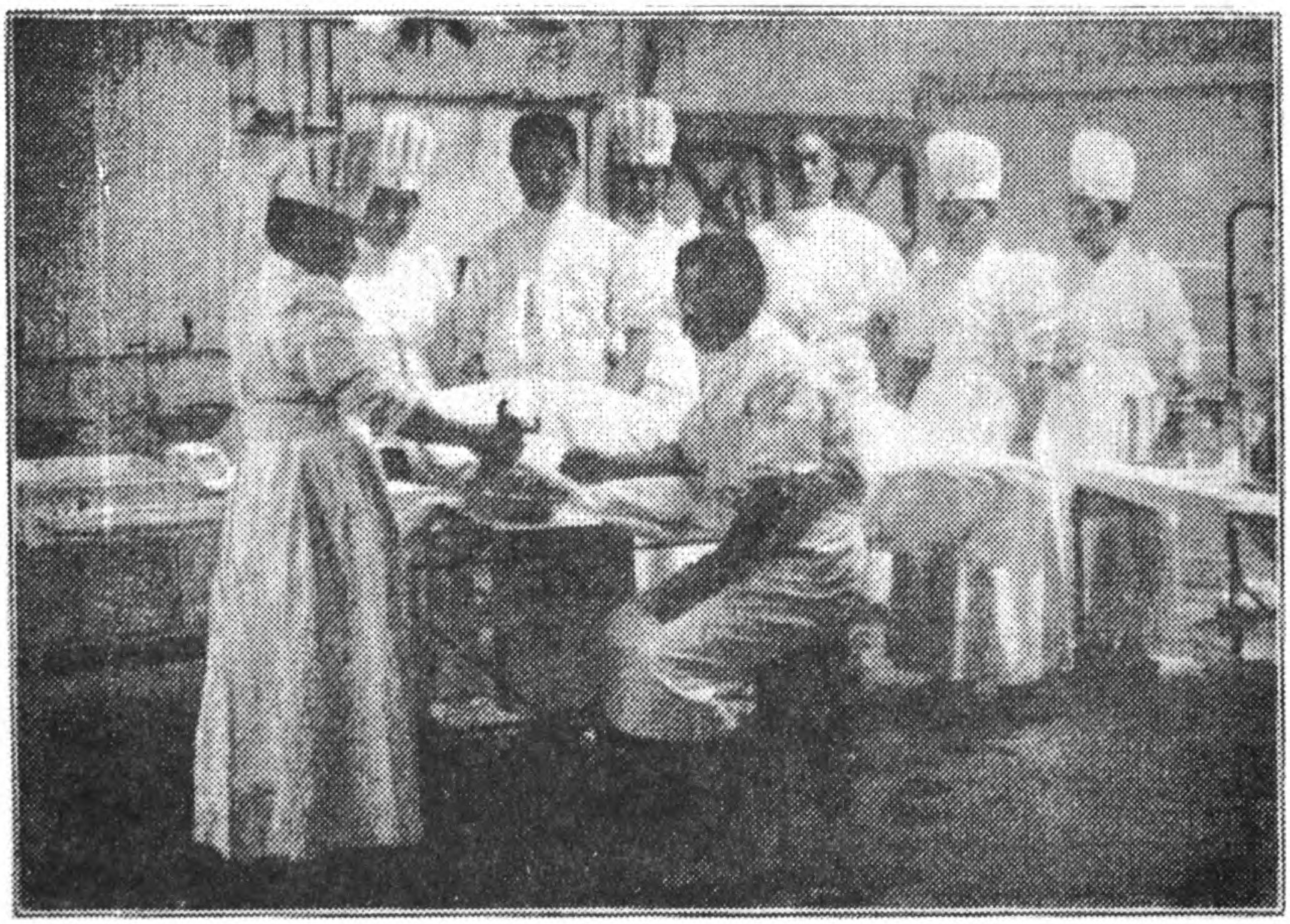


米國桑港市街

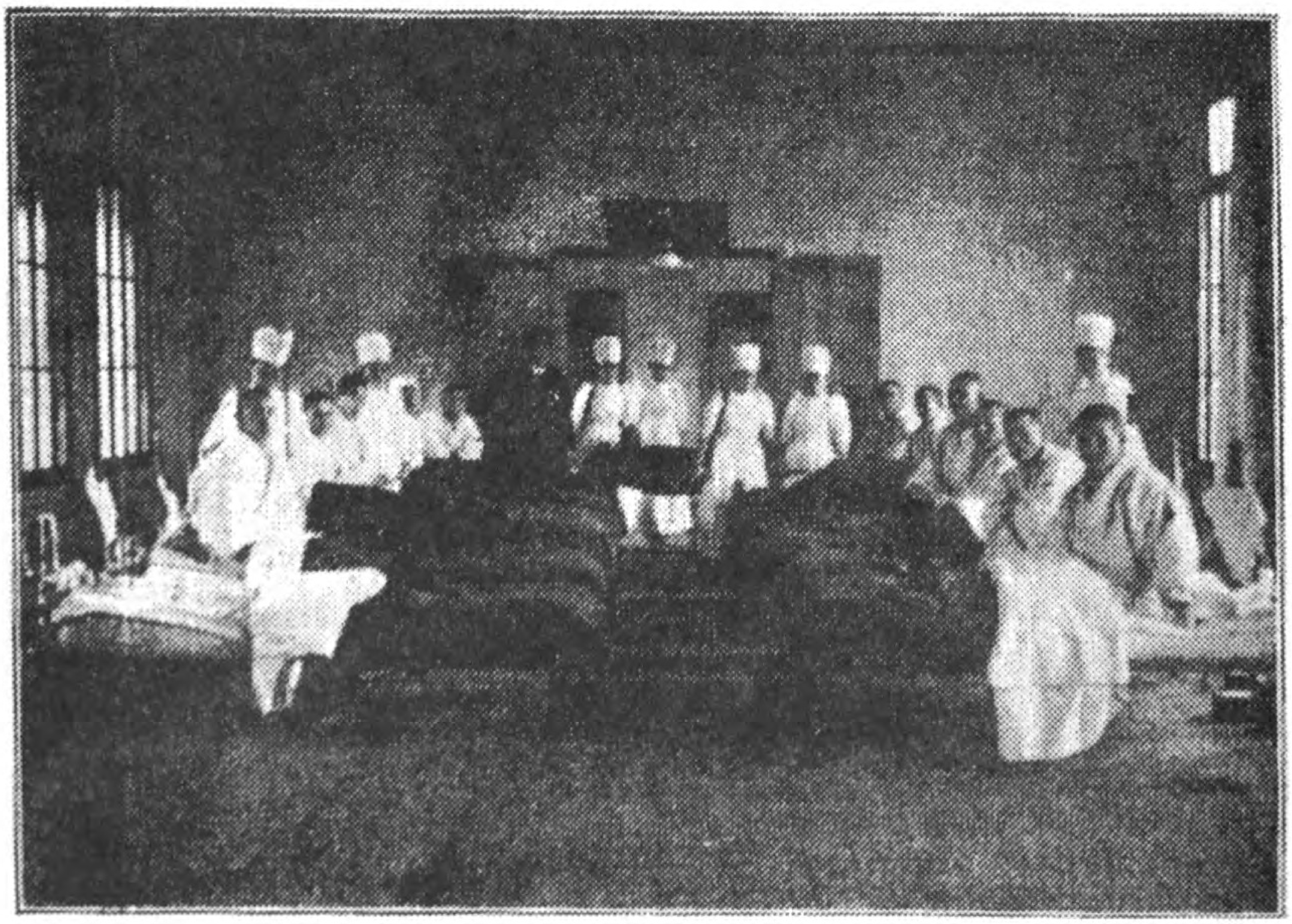


同金門公園內博物館

東京豫備病院內手術室

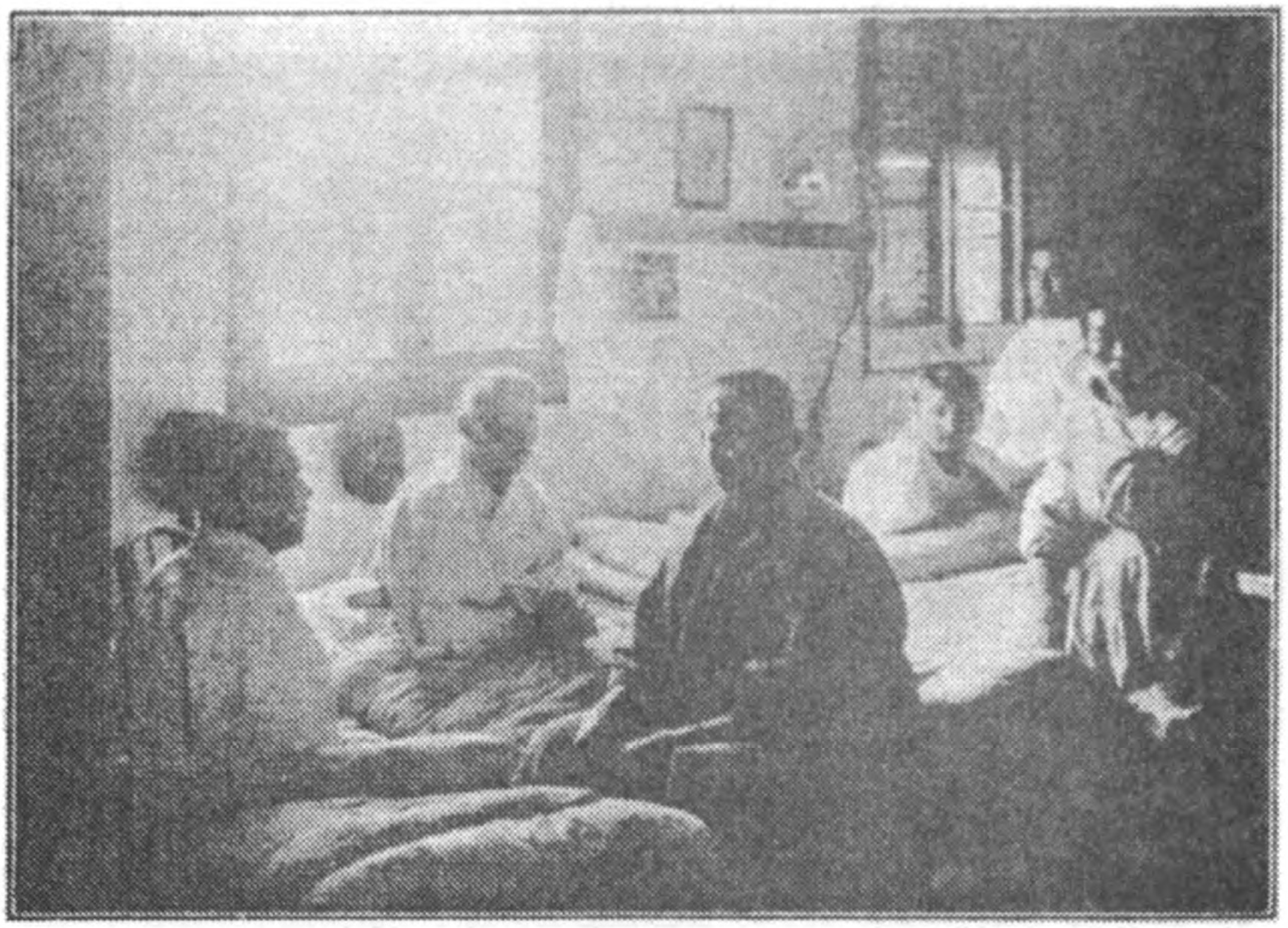


同上病室



露國捕虜兵負傷者看護の狀況（仁川日本赤十字病院）







（記事は家庭欄にあり）

故湯淺海軍少佐並に未亡人榮子及愛孃

夏季女子講習會廣告

本會は女教員及び一般女子に必須なる智識と技能とを得しめ以て教育の改進を計り且女子の品位を高めんか爲め左記要項に依り本年八月夏季女子講習會を開催せんとす希はくは有志女子の奮つて入會し本會をして所期を達するを得しめ而して此の國家の進運に際し實力をして益々内に充溢する所あらしめんことを

明治卅七年七月

東京市神田橋外　**東京府教育會**（電話本局七八八）

夏季女子講習會要項

一、日時　本年八月一日より凡そ三週間毎日午前七時より正午まで

二、學科及び講師

（一）**教育**（凡そ二十時間）
講師　女子高等師範學校教授　黒田定治君

（二）**國語**（凡そ二十時間）
講師　東京高等師範學校教授　吉田彌平君

（三）**音樂**（凡そ四十時間）
相當なる方法を立て素養ある者にも素養なき者にも遺憾なく得る所あらしめんことを期すべし
講師　東京高等師範學校教授　鈴木米次郎君

（四）**家庭衞生**（凡そ二十時間）
家庭衞生の一般に渉りて講習し且傷病手當のことを說き特に兒童に關して多く注意を加ふべし
講師　醫學士　三好常三郎君

三、講習料　一科一圓二十錢音樂は一圓六十錢（本會會員、生徒は十錢減）二科二圓音樂兼習は二圓五十錢（本會會員、生徒、講習生は一割減以下同じ）三科二圓五十錢音樂兼習は三圓四科三圓五十錢

四、證明狀　出席の度數を案して授與す

五、入會申込　入會せんとする者は氏名宿所族籍職業を記したる書面を以て（用紙半紙）七月十五日までに申込むべし

新奇發明 **增酒資料**(さけふやすもと)

壹斗の清酒は即座に倍増し(即ち貳斗)となる大金儲的醸造化學作用の一大發明新法なり、(附錄)腐敗酒直し法、醬油參倍增法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍增法、味噌速造法等以上の醸造家及び請賣營業者の大有益案內……右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に倣せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……(當館は去廿壹年の創立也)

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

● 肉體 **色白新劑**

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくだし 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にても忽ちキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

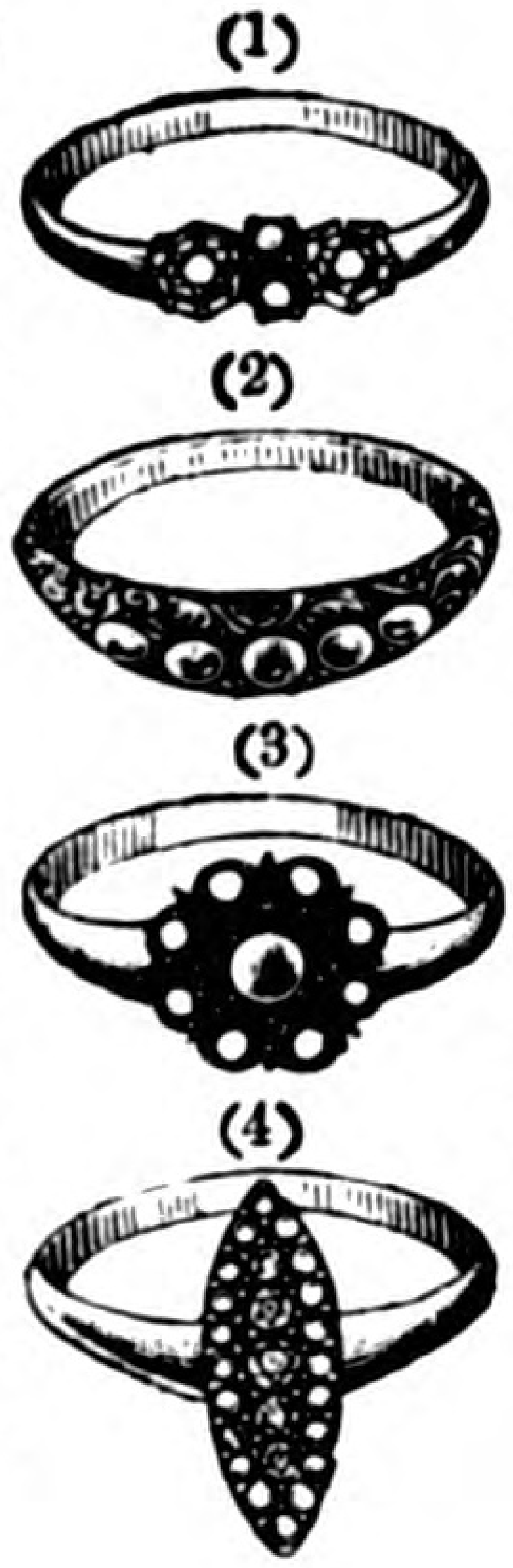


● **わきが**(腋臭症) **根治確證新發見藥**

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵劵代用必ず二割增の事(電話下谷五四六番)

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

新製 寶石入指環



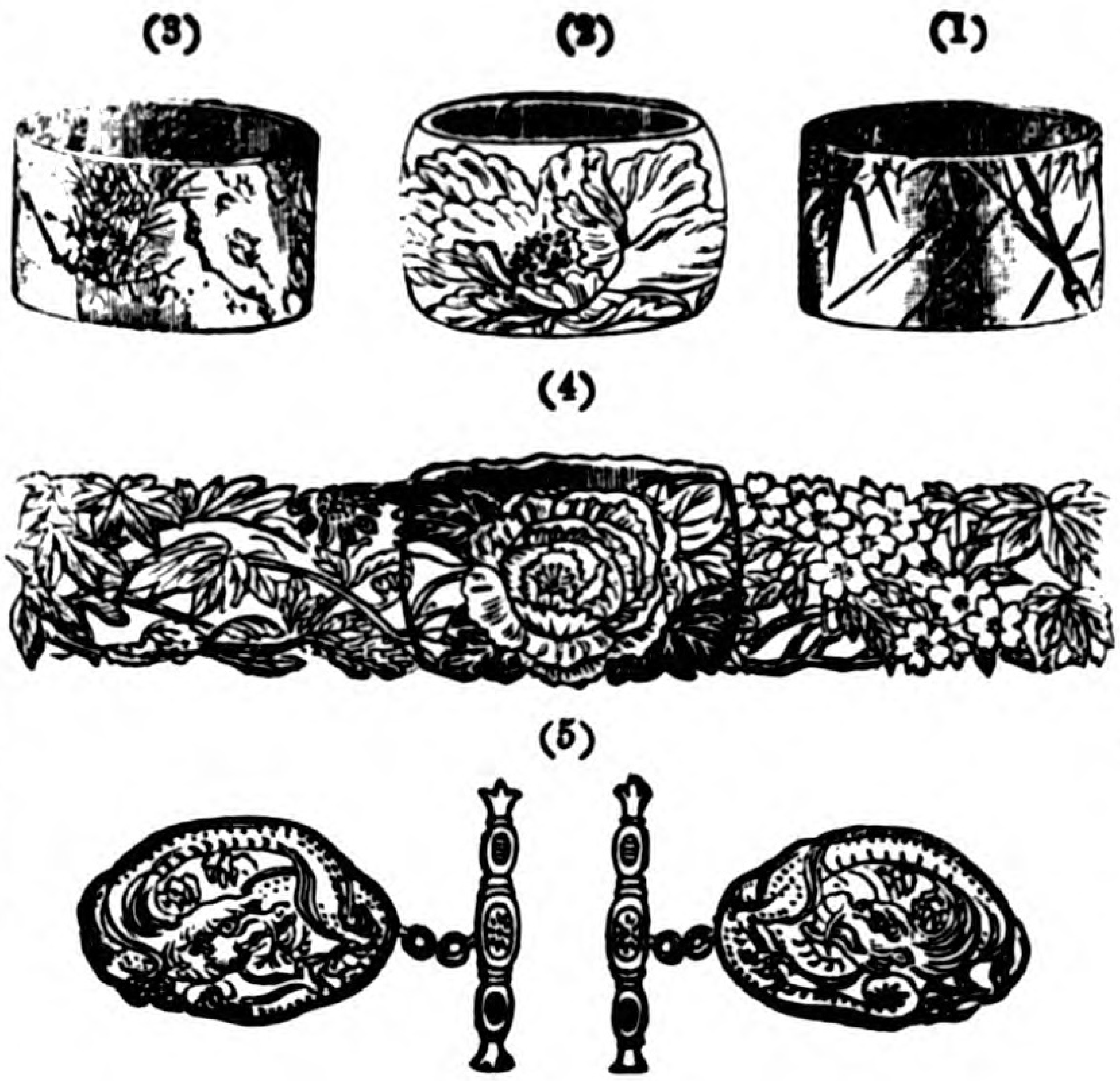
(1)拾金製……價九圓六拾錢
(2)拾八金製……價廿貳圓卅五錢
(3)拾八金製……價廿三圓五拾錢
(4)拾八金製……價廿六圓廿錢
（市外郵送料拾五錢）

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地

時計寶玉類貴金屬
美術品及銃砲火藥商 天賞堂
電話番號新橋（特三三三）（三一五三）

● 無料呈贈 天賞堂營業一覽（送費四錢）

新製指環及

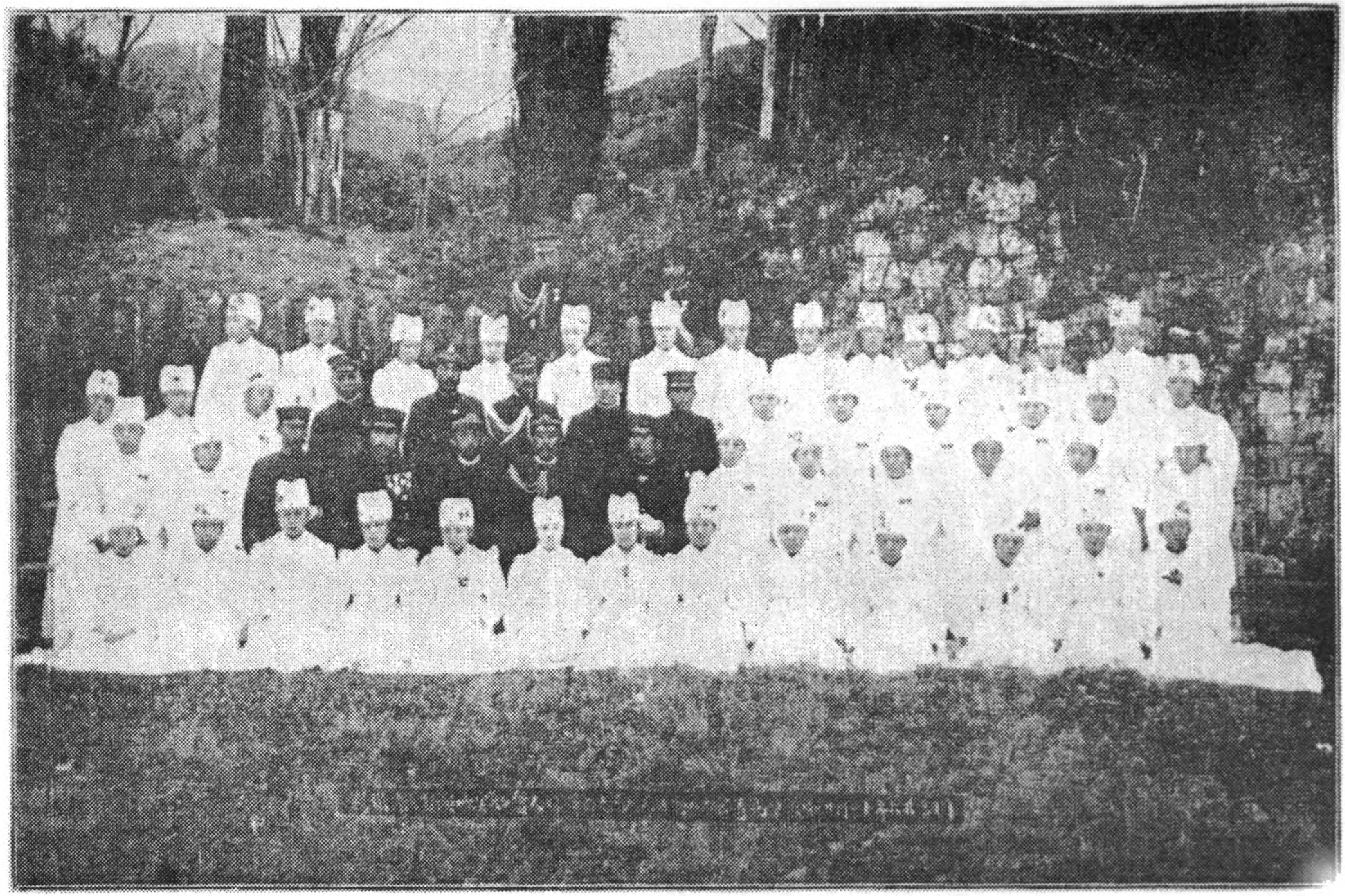


(1)價廿一圓八拾錢……廿二金三匁付片切刻
(2)價廿七圓八拾錢……同……高刻
(3)價二拾圓八拾錢……同……片切刻
(4)價五拾六圓五拾錢……同四匁付……高刻
(5)價卅二圓九拾錢……十八金三匁付高刻

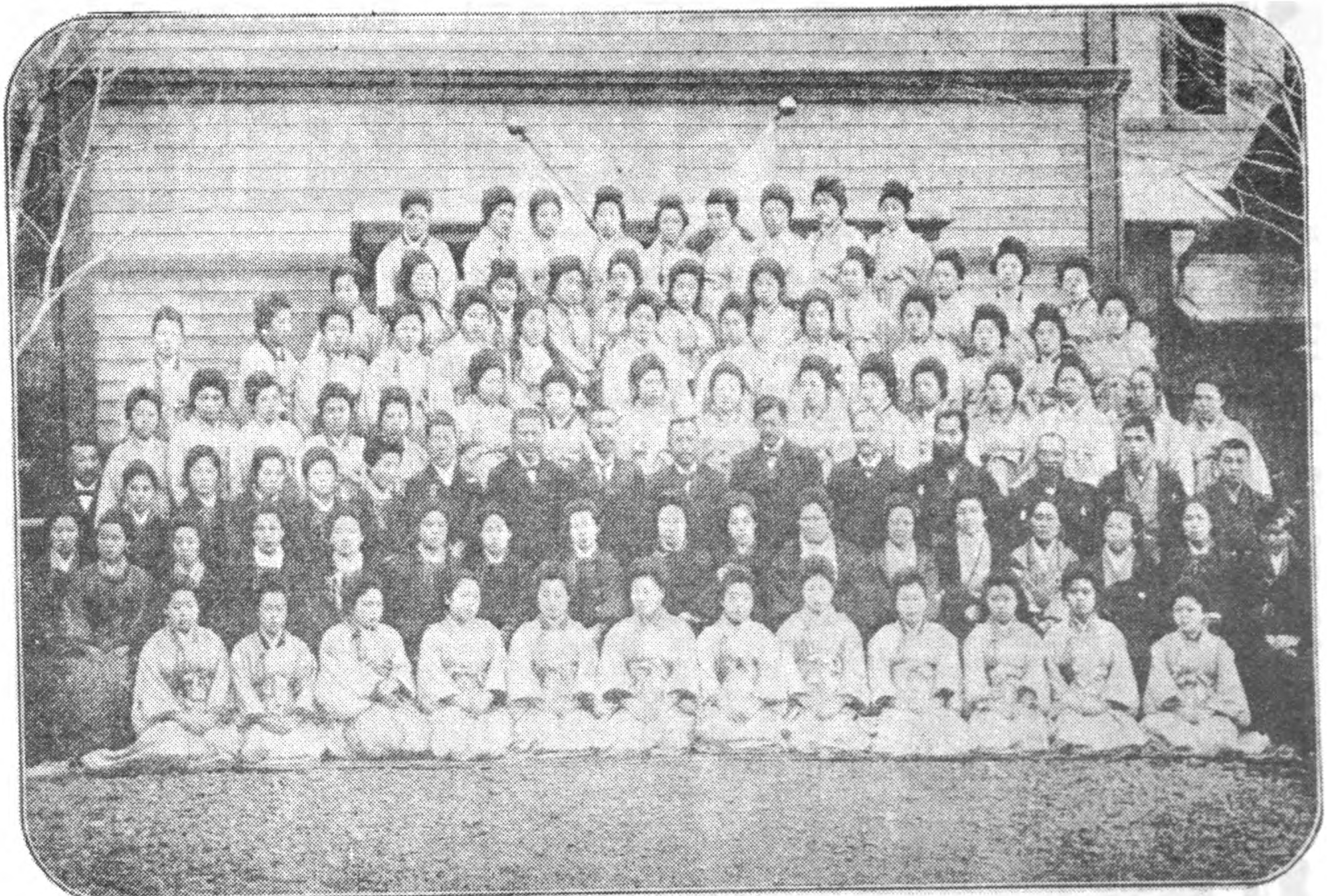
東京市京橋區尾張町貳丁目拾六、七、八、九、番地

時計寶玉 貴金屬
美術品及銃砲火藥商 天賞堂
電話新橋（特三三三）（三一五三）

天賞堂出張所々在地
●東京市中田小川町 ●横濱市
●名古屋市 ●大坂市 ●廣嶋市
●熊本市 ●長崎市 ●小樽區[illegible]



對州嚴原特志看護婦人會（城報欄参觀）



實踐女學校職員並卒業生

第五回大競點短歌募集

題　戰爭

撰者　金子元臣君

取重　卅七年八月十五日限

料紙書式　半紙形を用ゐ竪詠草紙式に認めらるべし

緣規定購讀者（緣二冊分前納の方）は一人一首に限り印刷費補助を要せず

第五回大點短歌募集規定

○出詠數　制限を設けず

○撰拔法　始め出詠者の互撰投票をなしその點數の最高點より以下五十首を採りこの五十首につき更に撰者の精選を受くるものとす

○應募の歌　匿名にて八月發刊の緣に掲載し出詠者は各人五首宛精選し投票用紙に記入し九月十日迄にわかば會に到着する樣送付あるべし

○結果報告　十月發刊の緣誌上に於てすべし

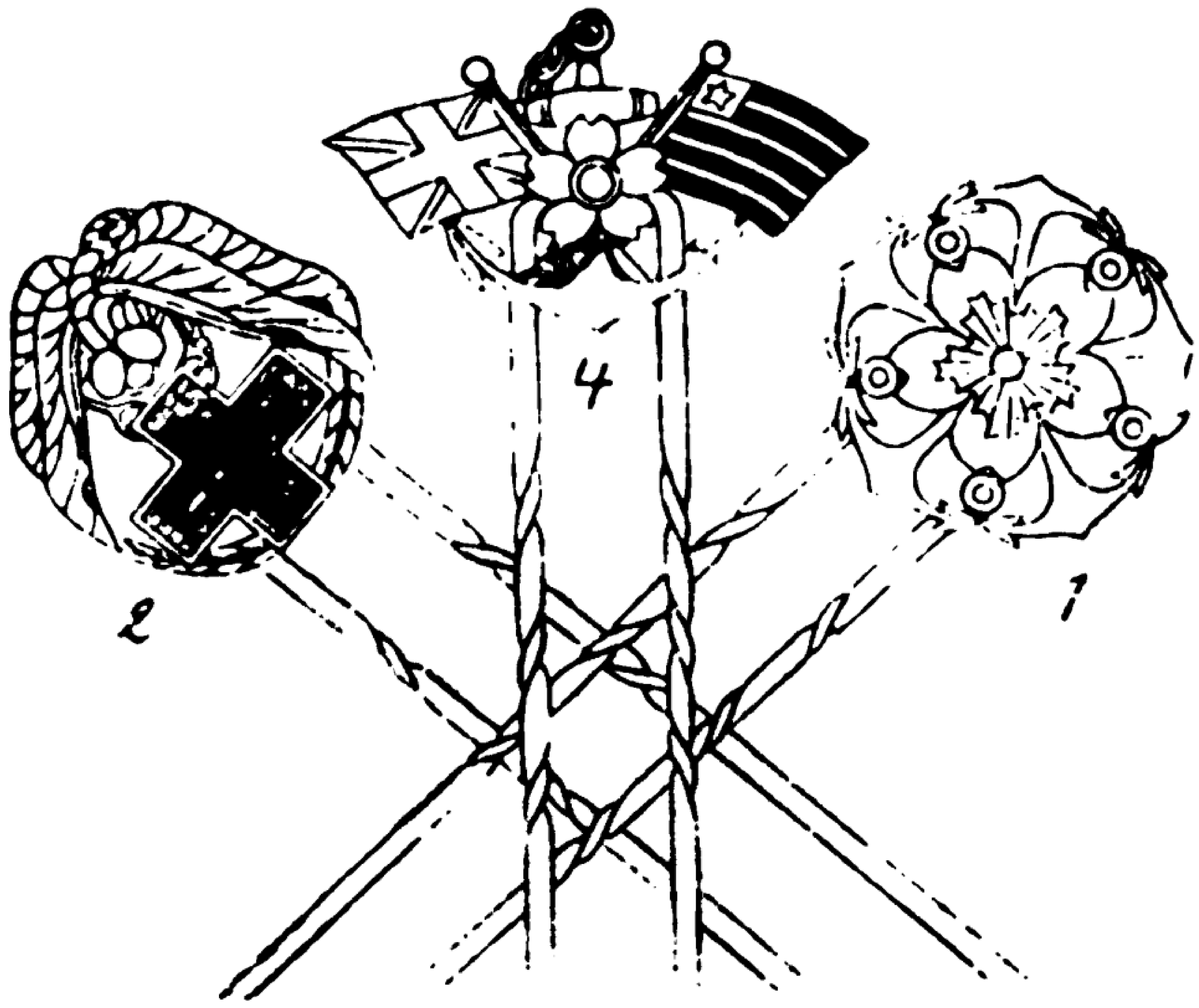
○賞品　撰者精撰の一等二等三等及びこれに次ぐもの五首、互撰の最高點より八首計十六首を受賞の歌とし賞品は書籍と定む

○雜則　本競點出詠者は印刷費補助として出詠一首につき金五錢宛添付あるべし又臨時出詠冀望の方は右の外に緣（投票用紙付）購讀の申込あるべし

以上

わかば會
京橋區本材木町
三丁目河岸十一號地

戰捷紀念簪



開戰以來向ふ所敵なき我陸海軍の大捷紀念として上圖の如き束髮ピンと前差とに兼用の簪發賣仕候

一號　陸海軍紀念
二號　赤十字紀念
三號　同盟の紀念

三種何れも純銀製にして金色製と各色の七寶とを配合せしいとうるわしき品に有之候

此紀念簪は聊か戰捷の祝意を表し特別廉價にて差上候間御注文わらんことを

一號二號　金　貳　圓
四號　金貳圓五拾錢
市外送料　金　拾　錢

東京市京橋區尾張町

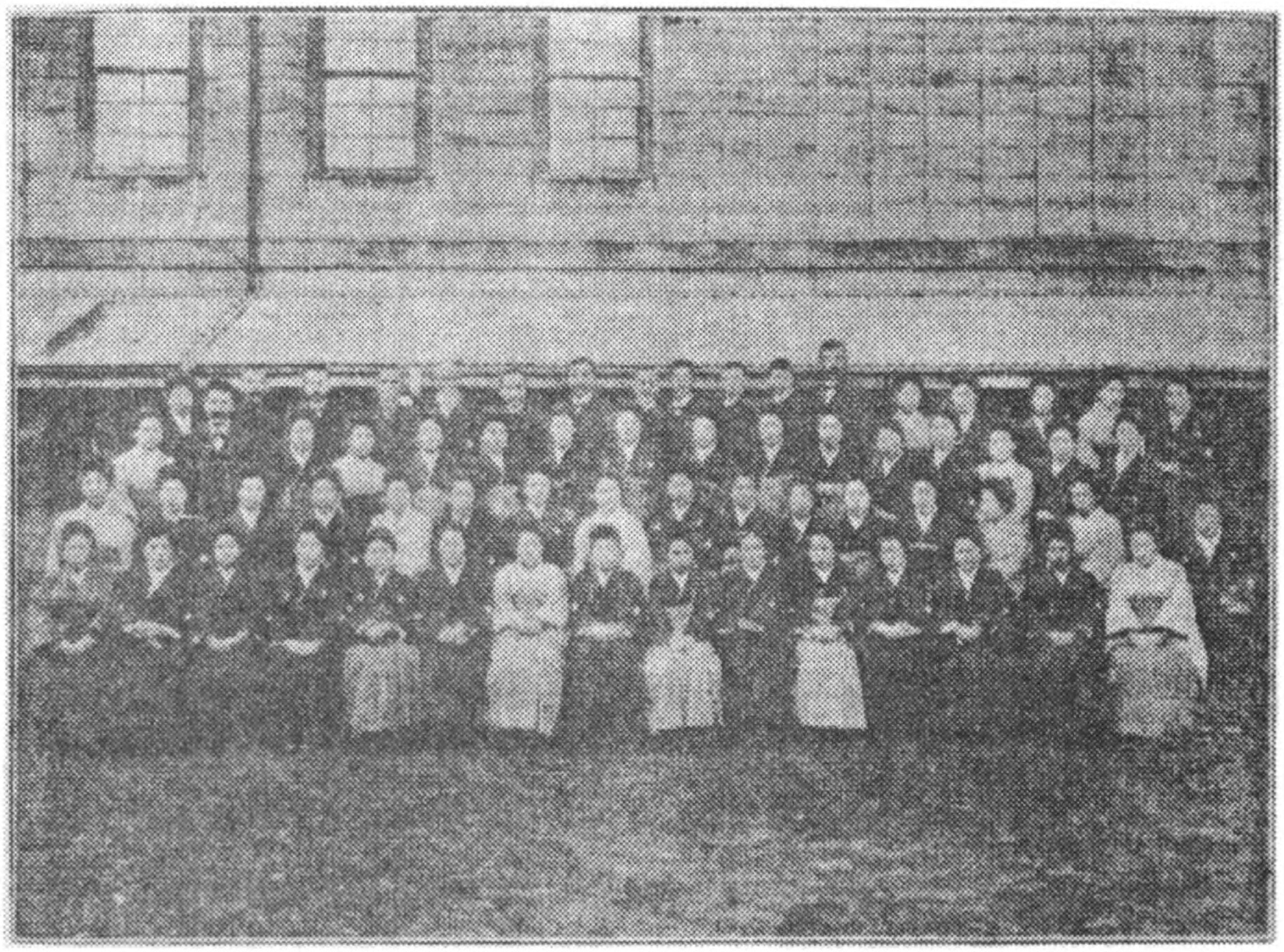
白牡丹本店

松田幸治郎

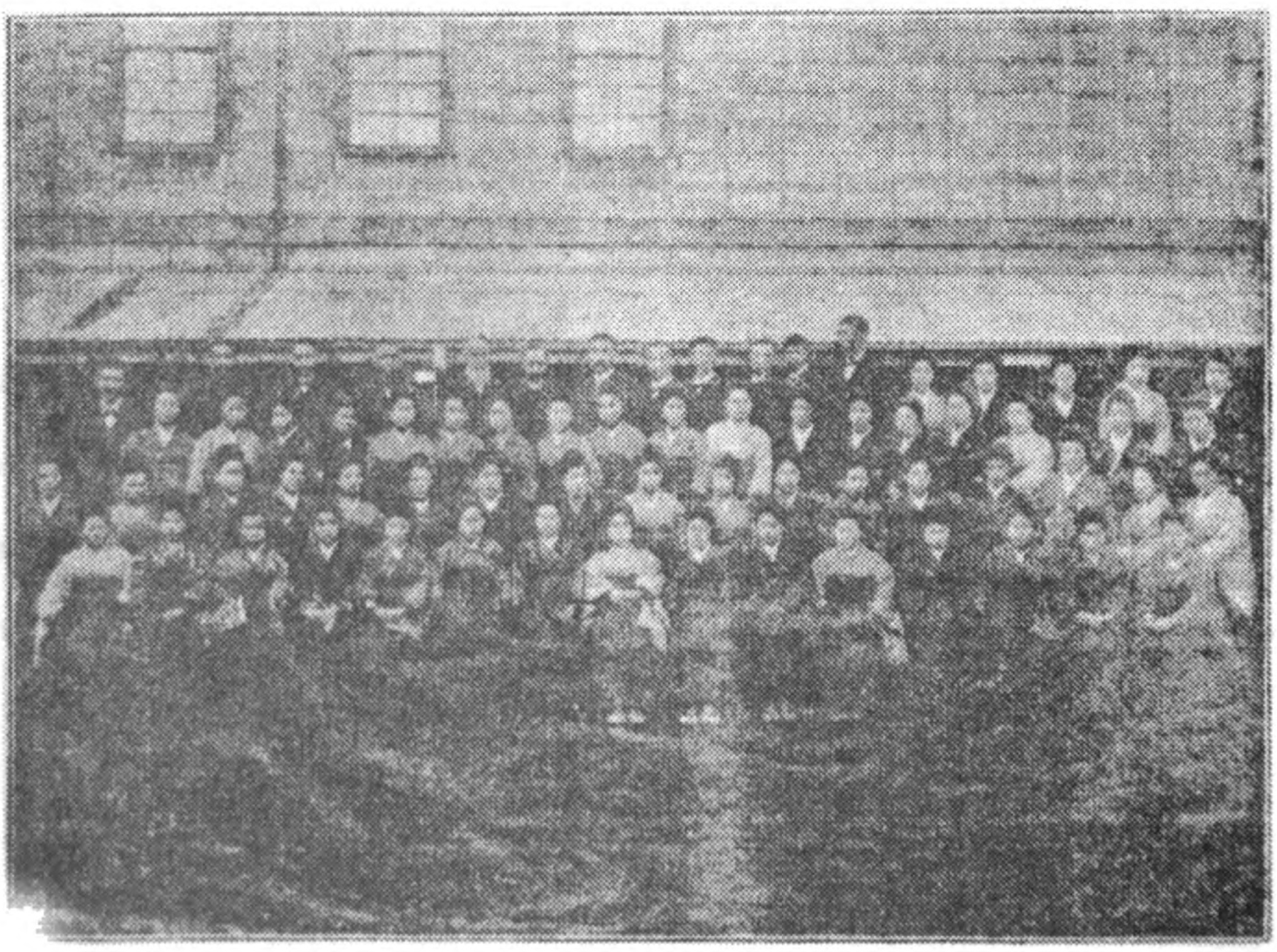
特 電話新橋五五一番



麻布家事專修學校職員並卒業生

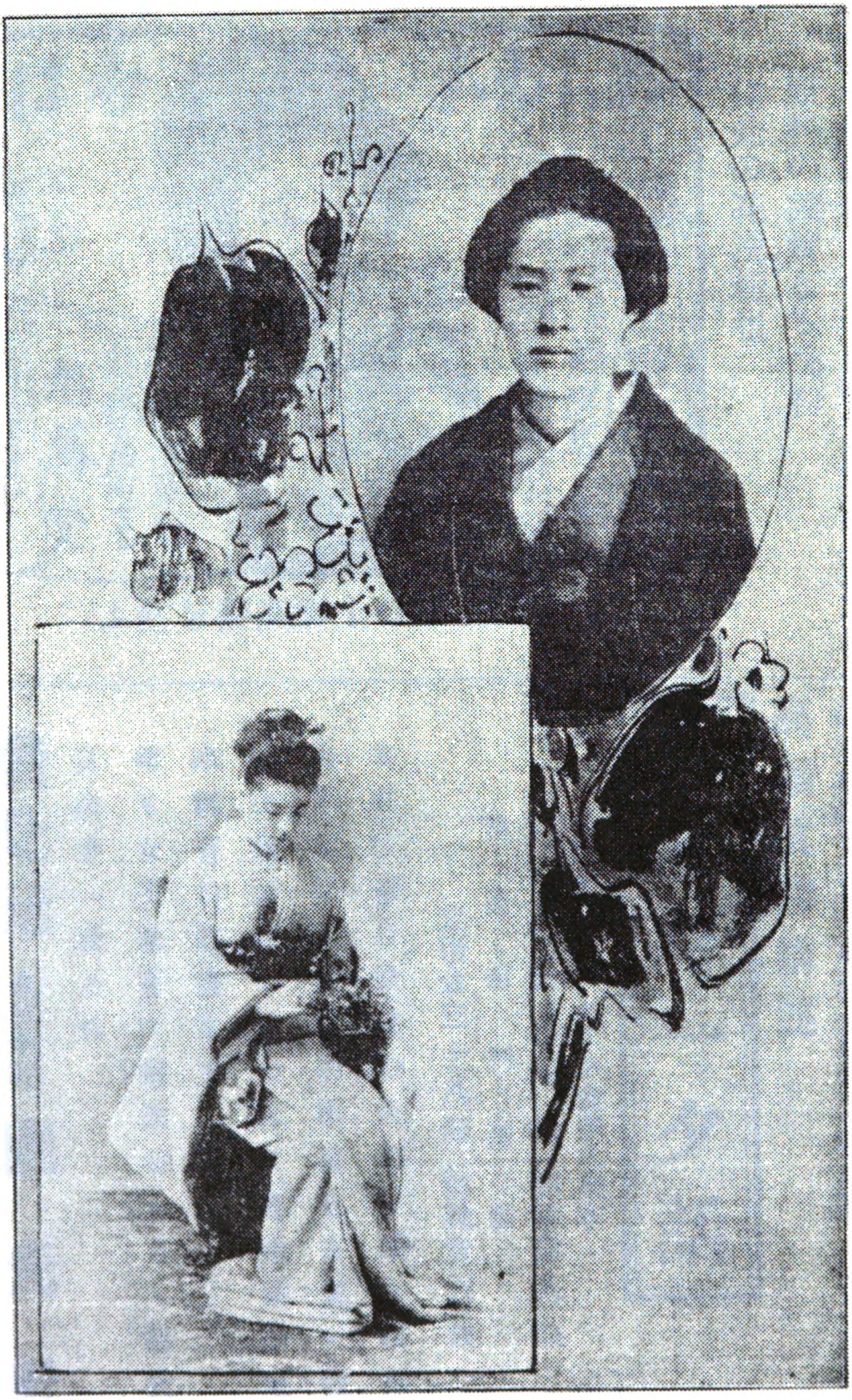


埼玉縣女子師範學校本科職員並卒業生



浦和高等女學校職員並卒業生

女鑑兼題投稿優等者



永井さい子

石川薫子

中等教科書目

市川源三著

檢定濟

高等女學校用 **教育學教科書**

菊判總クロース美本　全一冊
定價五十錢郵稅六錢
市川源三利根川與作共著

檢定濟

高等女學校用 **國史教科書**

菊判總クロース美本
定價各五十錢郵稅六錢　全二冊
川村理助著

檢定濟

高等女學校用 **動物學新教科書**

菊判總クロース製美本
定價五十錢　郵稅六錢　全一冊
川村理助著

檢定濟

高等女學校用 **植物學新教科書**

菊判總クロース美本
定價五十錢郵稅六錢

川村理助著

高等女學校用 **生理衛生新教科書**

檢定濟

菊判總クロース美本　全一冊
定價五十錢郵稅六錢
國光社編輯局編纂

中等漢文讀本

檢定濟

菊判大和綴定價一、二、廿五錢
三、四、卅錢五、四十錢　全五冊
國光社編輯局編纂

中等國語讀本

檢定濟

菊判大和綴　定價各廿二錢　全十冊
阿多廣介原田長松共著

理科教授書

檢定濟

菊判洋裝厚表紙皮クロース
定價各五十五錢　郵稅四錢　全四冊
宮森麻太郎著

コンポジション イージーレッスン

檢定濟

四六判總クロース美本
定價一、五十五錢二、六十錢

大宮兵馬著
檢定濟
中等日本文典
菊判總クロース美本
定價五十五錢郵稅八錢

大宮兵馬著
檢定濟
國語漢文假字遣
菊判洋裝定價十八錢郵稅二錢

大林弘一郎著
中等國文學史
全菊判總クロース美本
定價六十錢郵稅八錢

松本敬之高橋正熊共著
法制教科書
菊判總クロース美本
定價六十錢郵稅六錢　檢定濟

松本敬之高橋正熊共著
經濟教科書
全菊判總クロース
定價六十錢郵稅六錢　檢定濟

茨城縣師範學校長鈴木龜壽著
實驗理科教授法
全菊判總クロース美本
定價五十五錢郵稅八錢

華族女學校編纂
國語假名遣ひ一覽
全折本定價十二錢郵稅二錢

茨城師範學校教諭
岡部時次郎森田廣吉共著
教育適用 舞踏遊戲法
全菊判洋裝定價廿二錢郵稅四錢

指原乙子著
女子文章軌範
菊判和綴定價卅錢
郵稅四錢

石田鐵郎著
水產製造論
菊判總クロース美本
定價一圓廿錢郵稅十錢

NESTLE'S MILKFOOD

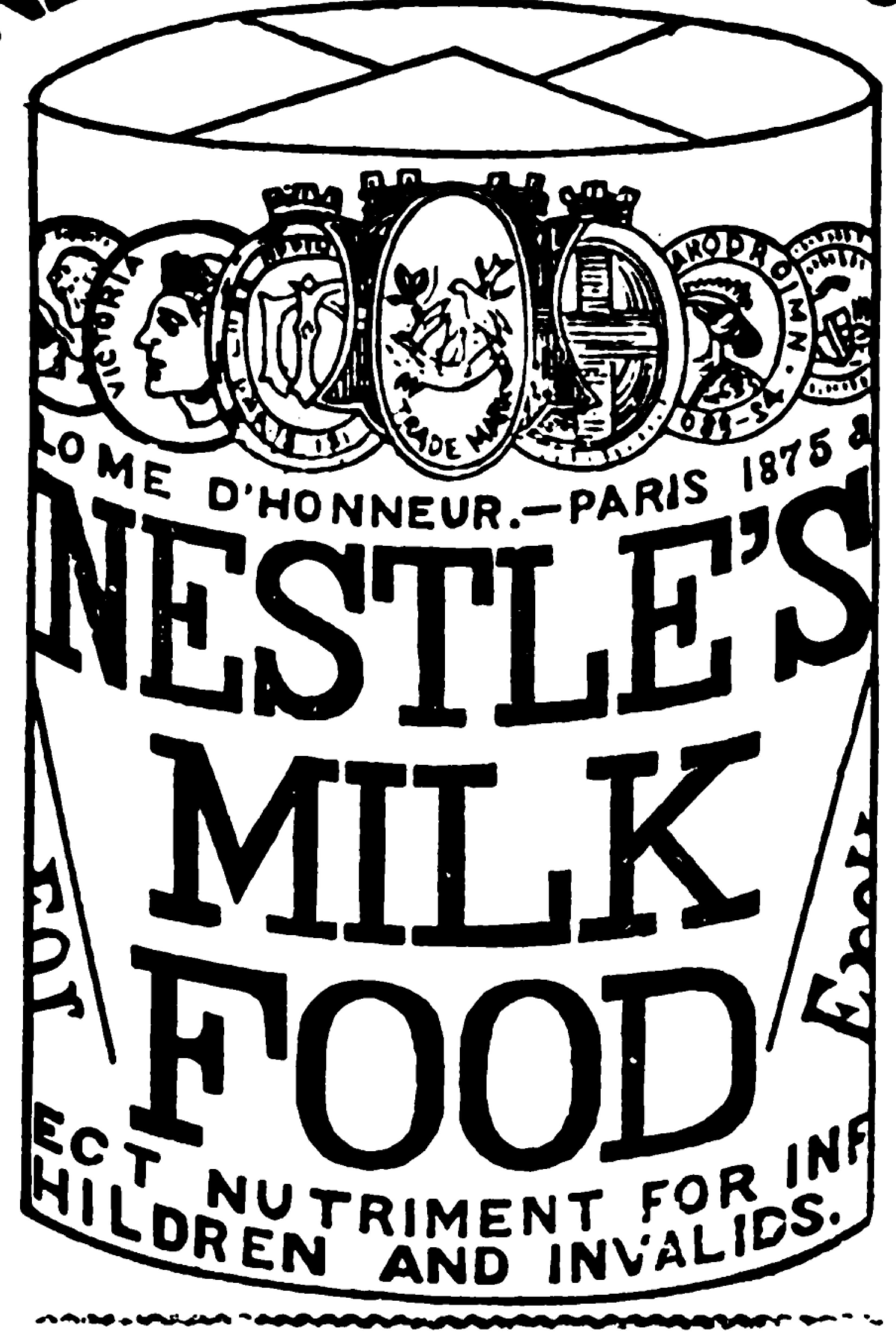
瑞西國ヘンリーネッスル氏製

ミルクフウド

各國帝室御用品

各國醫科大學大病院

醫學博士ノ賞讃ヲ恭フス

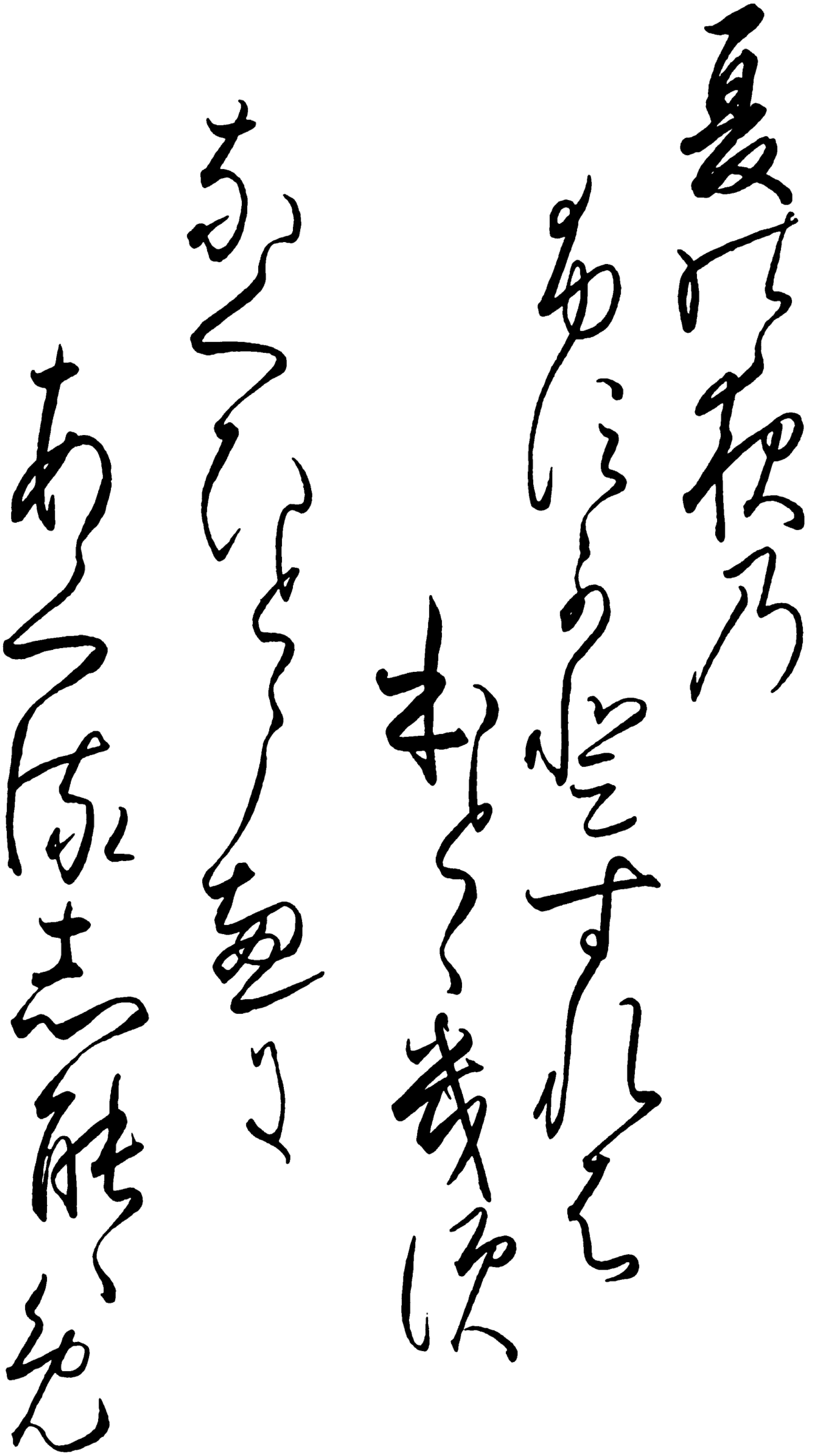


（全國洋食品店及藥舖にて販賣す）

ミルクフウドは麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

ミルクフウドは小兒の生育、病者、虚弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり


ミルクフウドは完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの塲合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり



宮里三木枝子書

杉之海之艸（女帯模様）

日本美術協會第三十五回展覧會
三等賞銅牌



南保是樂

此圖の按説明は次号に掲

本年九月入學セシムベキ當校私費數學物理化學專修科生二十六名ヲ募集ス入學志望者ハ來八月廿五日マデニ願出ヅベシ尙詳細ハ五月二十四、五兩日ノ官報又ハ當校ニ就キ承知スベシ

明治三十七年七月

女子高等師範學校

東京美術學校長正木直彦序
同校教授島川佳矣
同卒業生野口駿尾　共著

女子技藝 編物模樣圖按

石版極彩色
自一至十二度刷
四六倍判和綴

●本書は毛糸、木綿糸等にて書模樣を編み或は刺繡するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなれば女子技藝に於て教育上參考上必携書なり

全五册松、四十錢▲櫻、藤各五十錢▲菊、梅各五十五錢各郵税二錢

總目次

●松の巻
一 片假名
二 平假名
三 歐文字
四 歐文字三種
五 連續模樣十八種
六 同十種
七 同三種
八 同十二種
九 同六種
十 同二種

●櫻の巻
一 連續模樣四種
二 同三種
三 同二種
四 同二種
五 蛙、蜻蛉、蟷螂、
六 蝶、蟬、野菜物 薔薇、菫、撫子、
七 牡丹 金魚、貝類、鯉、
八 海老 雁、燕、鷹、鹿
九 鶴、龜
十 花筏、立田川

●藤の巻
一 隅模樣八種
二 隅模樣四種
三 方形模樣六種
四 圓形模樣六種
五 圓形模樣七種
六 團扇、夕顔、
七 小督局、八ッ橋
八 花車
九 朝顔
十 紙雛、桃花

●菊の巻
一 子、丑、寅、卯、辰
二 巳 午、未、申、酉、戌 亥
三 山茶花
四 菊
五 秋海棠、露草
六 紫陽花、蝸牛
七 河骨、鶺鴒
八 罌子粟、蝶
九 木芙蓉、蜻
十 孔雀

●梅の巻
一 春
二 秋
三 鶴、梅
四 鴛鴦
五 音呼鳥
六 猫
七 富士山
八 布袋
九 令孃
十 紫式部

東京美術學校教官 小林萬吾著

▲中等習畫帖

全八册 四六倍判
定價 一、二、各廿錢 三、四各廿二錢 五、六各廿四錢 七、八各卅錢
郵税各金二錢

發兌元 東京築地二丁目 國光社




正眞無毒諸化粧
常に用ゆれば色を白くするのみならずきめを細にし顔の吹出物をなをす
水晶おしろい
發賣本舗
東京日本橋通塩町
大和屋商店

女鑑
第拾四年
第八號

戰時に於ける日本婦人の特性

征く者をして、後顧の憂なからしめ、留まる者をして、饑寒の悲みなからしむるは、婦人の力として、又其の業として、決して容易のことにはあらざる也。しかも日本婦人は能く刻苦耐忍して、此の容易ならざる勤めに當り、征く者の心を安んじ、留まる者の心を慰むるなり。而して一旦其夫の名譽ある戰死の訃音に接するに方りても、肅然として自ら愼み、寸斷の心緒を深く胸底に繫ぎて、卑しき擧動を現はさゞるなり。

戎衣の袂を牽きて、其夫の首途を送りたる時の心情は如何なるべきか、普通女性の常としては袖を掩ひ聲を飮み、紅涙潸々として頭を擧げ得ざるも亦強ち咎むべきに非ざれども、日本婦人は嫣然微笑を含みて一滴の涙をすら流さゞるなり。日本婦人豈無情ならんや。豈又涙なからんや。只今

や國家危急の時に方り、戰場に赴かんとせる其夫をして、未練の心を起さしめんことを恐るればなり。妻子を思ふの情を生せしめんことを憚かればなり。後顧の憂を留めんことを慮かればなり。言はぬは言ふに彌優る、其心寧ろ甚だ哀しからざらんや。

而して昨日は夫と生別して、憂愁の情未だ痊へざるに、今日は早く、その舅姑を養ひ、兒女を育くむの計を爲さゞるべからず。心には夫の安否如何を氣遣ひて、寸時も寧んずる暇なきに、身は紡績裁縫より、割烹洒掃の事に至るまで日夜留意し、朝夕劬勞して、汲々たらざるを得ざるが如きは、是れ豈に纖弱なる女性の能く耐へ得べきところならむや。しかも幾微の面貌に顯はるるなく、よく内守の務を全するは、寔に感賞するに餘わることゝいふべし。

されど夫が名譽の陣歿を遂げて、戰場の露と消えたりとの報に接したる時には、如何なる鐵心石膓を以てするも、爭で哭泣失魂せざるを得べきとは、何人も想倒すべきところなるに、何ぞ知らん、一期の大浮沈、終世の大危難たる此の大事の時に方りても、猶は騒がず、紊れずして、靜に其の間に處し、哀痛則を超えて、心爲に悩み、悲傷度を過ごして、膓爲に斷ゆるが如き、不體裁なる擧動を爲すことなきは、是れ豈に最も嘆賞に値ひすべきことにわらずや。

その最愛の夫をば生死も知らぬ遠征の途に送りて、再會殆んど期すべからずと覺悟する時、安んぞ亦啼きて啼きて、涙盡きて血を見るの情なからんや。況んや一身を以て一家の事に當り、舅姑

に奉事し、兒女を養育するの大任を負ふの困難は、如何なるべきぞ。何ぞ況んや、最愛の夫が遂に戰場の露と消ゆるを聞くに迨びては、悲慘之に過ぐるなく、寔に一生無限の不幸なり、終世不磨の恨事なり。無事太平の日にありては、哀曲に泣き、悲歌に泣き、他人の憂愁にも袖を濕し、隣人の苦痛にも巾をしぼりたる身を以て、自家の危期に臨みては、泰然動かざること斯くの如きは、豈俄かに學びて得べきところならむや、急に習うて得べきところならむや。蓋し系統上先天的に承繼したるものありて、不幸暗憺の時に當り、燦然光輝を放つが爲めに外ならざるなり。

武士的家庭に成育せられたる日本婦人は、骸を異鄉の土に曝し、血を原上の草に染めて、忠義の名を千歲に留むるを以て、己が任責なりと確信せる日本武士と同じく、大節に臨みて、毫も惑はざるなり。危期に際して毫も恐れざるなり。されば忠勇義烈の精神は、吾が出征軍人によりて、戰場に發揮せられ居ると同時に、之と同一なる精神は貞淑靜婉なる婦人によりて、家庭に於ても顯揚せられつゝあるなり。英國の某雜誌が、此の戰爭に於て、日本は一の軍に非らずして、武裝したる一の國人なり、勢力なき極少數の例外を除けば、日本群島の總ての男子、總ての女子、總ての小兒は、皆な露國の侵略主義を憎み、之を擊退せんことを熱望し、國民獨立の爲には死を以て露國と戰はんと欲すといへる評を下したるも、強ち誇張の言にはあらず。若し戰場に於ける日本軍人の働らきを以て萬國無比といふを得ば、留守せる日本婦人の行もまた實に世界無類といふ

て可なるべし、故に旅順の閉塞の如き、鴨綠江の戰の如き、南山の攻擊の如き、忠勇なる吾が軍人が、殆んど人爲とは思はれざる程、動天驚地の奇功を奏したるも、暗々の裏に見えざる手の力わりて、之を激勵したるを疑ふべからざるなり。アヽ我が軍人をして、前には奮進の力を與へ、後には後顧の憂なからしめたる日本婦人の力は、實に今同の戰捷に於て發揮したり。その裏面の功績の大なること、以て推知すべきにわらずや。

必ずしも病傷兵の看護といふなかれ、必ずしも繃帶卷といふなかれ、必ずしも恤兵献納といふなかれ、是等の業務の賞すべく、是等の志の感ずべきはいふまでもなきことなれど、家庭に留守せる一般日本婦人の操行は、看護よりも、繃帶よりも、献納よりも、一段優れたる精神の旁礴として、充滿せるを見るなり。婦人の職務は內に在り、善く內を守ること斯の如くなるは、日本婦人の特性にして、此の特性や、之を明治の歷史に表彰して以て、千萬年の後にまで傳ふべき價値わるを信ず。

予輩は今日の日本婦人に向つて、頌德表を捧呈せんとするものにわらずと雖も、彼等が今日に處するところの行ひは、日本軍人の妻女として、其夫と相並びて實に双璧の美を有するものなるを知るなり、此頃某軍人の寡婦を訪ひて、操守の毅然たるを見て感服に堪へず、記して江湖の人士に同情の意を頒たんとするなり。

論議

戰時の女學校

普通學務局長　澤柳政太郎

戰時に於ける教育は、猶平時のそれの如く落付いて居て、眞面目に其本分を保ちて居たいのです、教育迄も悉く武裝するのは、却つて其獨立を喪ふ所以で、頼もしくないのです。

教育は、絶えず永久に、國民の後繼を造るのです、而して今日の如き、大戰爭の秋には、教育は益々大任務を有するのです、故に戰爭熱に浮かされずに、平時の態度を以て、愼重に其職務を盡すべきであります、併しながら戰時に教育が其影響を蒙むることは、それは勿論でありませうが、たゞ此中に立つて搔かず、狼狽へず、泰然自若平時の如くあり得るならば、是は戰時教育として最上の者であらうと思ふのです。

然るに、往々教育者が、戰時熱に浮かされて、自己の本分を疎忽に付するのがありますのは、實に教育の何たるを知らないからです、如斯きは甚だ其國民の度量が小さく、又心が淺く見えるのです、而して特

に女學校に於いて其必要を感ずるのであります。

女學校は男子の學校の如くに、軍隊送迎、或は戰勝祝賀の行列を爲すが如きことはないが、女學生も亦男子に劣らぬ程種々戰爭に關係を有して居ます、繃帶卷、手製品献納等戰爭に關係を有することもありますが、之が必らずしも女學校當然の職務では無いのであります、隨つて女學生の頭上に當然落ちかゝつて居る義務では無いのであります、即ちかゝることは、特別なる仕事で、一般のものでは無いのであるから、各自銘々の事情の許し得らるゝ範圍内に於いて、個人々々が盡さるゝが至當であります、元來教育上の事務では無いものを、その然るが如く心得て强制的に女生徒に斯る戰時の仕事を爲さしめて、多少此本分たる教育を疎忽にするは、甚だ可く無いことであります。

然るに目今の處では、殆んど流行の如くなつて居つて、他の學校が何々の手製品を戰地に送つたから、此校でも是非何か送らねばならぬといふ風に、即ち互に眞似をして競爭するのが、一の流行の如くなつて居りますまいか、けれども戰時國家が女學校に要求するものは、此流行熱よりは尙外に大なるものがあるのです、それは平日と變らずに、教育の本分を保ちて、今後尙よく大に役立たいのであります、良妻賢母を澤山に出して、可い國民を造る可きことであります、それとも已に戰爭狀態が、非常に切迫して、闔國を擧げて戰鬪事務に服し、女學校は悉く繃帶卷、手製品献納に從事せねばならぬ時となつたならば、それは仕方がありませんが、未だ今日はソンナ事情もありませんから、女學校などは落付いて極く平氣に考へて、自分の本分を全うするのが、第一の上策であると思ふのです。

戰時である、古今未曾有の時であるといつて、自己の本分を忘れて徒らに狂奔的體度を執るのは、亂に處して治を忘るゝもので、否全く國家が永久に立つ可き所以を知らないのであるのみならず、女子の如き、

薄弱な感情の強い、境遇に堪へ切らない者を教育するには甚だ間違つた仕方と思はるゝのです。

今日の學校が平時の如くに少しも變らずに教育せられたならば、日本の戰時女子教育は非難なきものでありましやう、女子に其本分として國家に貢献すべきは、克く自己を手落なく發達させて置いて、結婚後可い家庭を造ることが最も大なるものであります、日露戰爭の最後は、互の社會の力の競爭です、社會の力は、善い後繼者がなければなりませぬ、善い家庭がなければなりませぬ、國民の體力が立派でなければなりませぬ、而してこれ皆良妻賢母たる人々の盡す可きものでありますから、女子教育の目的は戰爭が大に盛んに外に鬪はれる時ほど、極く靜かに大局を考へて、其女子を良妻賢母に仕上ぐる道を講じて、着々其功績を教育上の方面に上ぐるのが必要です。

其處で私は、繃帶卷其他の仕事よりは、外に此戰時を利用して、大に女學校の面目を一新したいと思ふのです。

女學校に永い間、大なる宿題があります、それは女子の修飾に關することです、而して此問題にはこれ迄如何なる手段方法を講じても、どうも面白く行かなかつたのです、而して近頃では、女生徒の增加と共に、別して華美なる風習が行はれつゝあるが、私は此の戰時を利用して、之を打破したいのです、併し私が此にいひまする說は、戰時に起つて居る消極的儉約論ではありません、彼は戰時を餘り短かく、或は神經質的に見た者で、國家の進運はこれがため尠なからず妨遏を受けて居ますが、私のいふのは、恁んな考へからのでは無いのであります、即ち女學校の永い間の宿題たる修飾を、此の戰時を利用して、其實績を擧げて見たいと思つて居るのです。

女學校が修飾問題に悩みつゝあることは、何處も同樣であつて、例へば或る女學校の如きは、女生徒の衣

服を一切綿服に限るとしましたが、其の綿服にも新規を競ふといふ弊が生じまして、同一種類のものは着ないといふ様になりました、こんなことは多少女子の天性から來るので、又止むを得ないこともありまして、一概に其の嗜好や趣味を打消すことは出來ないけれども、今其の華美とか奢侈とかいふ風、即ち常道を外づれて居るのは甚だ可くないことであります、これは極端といはるゝ位強く反對して可いのであります、故に女學校の修飾問題などは極端に反對しても、容易に其實を擧ぐることができないものですから、戰爭を利用して一般に質素を旨とするやうになれば女生徒の父兄は屹度喜びます、又女子相互の間も可くなるのであります、即ち其交際上、衣服で彼是けじめを生じないから、交際が圓く行くのでありましよう。

然るに今や日露戰爭といふ未曾有の秋でありますにも係はらず、女子の奢侈を競ふ風は已まないやうであります、これ女學校の盛大と世の潮流が盛なる爲でもありませうが、結局外形の修飾に苦心して居る様は餘り感心せられぬ點が多いのです、其中で此頃人の眼に付くのは女子の夏手袋を嵌めることが流行になつて居ることですが、何も格別夏手袋の必要は無いことゝ思はれる。

戰時に於ては女子教育の參考となる可き好材料は、男子のと同じく澤山出來つゝあるのであります、男子で克く素養した人が、何程立派なる働きを戰地に立て、名を竹帛に垂るゝかは、新聞雜誌などに能く傳へらるゝ所であるが、女子も亦之と同じく、已に軍人などに結婚せられた人方が、必らず其爲人を其家庭に現はしつゝあるのであります。

而して其結婚せられた女子は、極く適切なる好材料を供給しつゝあるのです、克く謂ふ所の夫をして後顧の患なからしむるとは、這回好個の生ける例を見出し得らるゝのであります、これ等の好材料は女學校の

教育參考に最も適切なるもの、又一方には如何に女子教育が、必要なるかの證據となる者であります、今日已に世間の新聞雑誌が軍人其人の性行を寫すと同時に、併せて其家庭を傳へて怠らないやうであるが、之を狭くいへば、這は女學校に好材料を供給するもの、廣くいへば全く日本一般の婦女に好例を吹聽しつゝあるので、益々斯いふとは成る可く眞面目に遣つて勉強して貰ひたいものであります。

要するに戰時の女子教育も、今日の形勢から考へて、決して擾がず狼狽へず、即ち落付いて居て、平時の如くして行くのは、其最上なる教育であります、而して此戰時利用上からいへば、女子の修飾問題の如きは此際に實績を擧げて見たいのであります、倘終りに一言を加へたいことがあります。

遠く海外より、我國に來られて、軍隊の傷病兵看護慰問に從事せらるゝ、婦人がある、又彼の有名なる赤十字社の源を爲たといふ、ナイチンゲール孃の如き男子も及ばないほどの功績を世界に立てた婦人があるけれども、之等は何も教育の模範者では無いといふことを知らねばならぬ、その行は勿論尊ぶ可きことではありますが、併し女子教育の理想に叶ふたものではありませんです、女學校にて若し斯る人を賞贊して、其生徒をして所謂女丈夫たらしめんとせば、开は女子教育の目的を誤るものである。

或は又如何に良妻賢母たらんとしても、種々錯綜した事情上止を得ず、獨身生活をせねばならぬものがあるが、これも一の例外であります、普通女子教育の目的は良妻賢母たるにありとせねばならぬのです、故に女子教育家は其女生徒に談ずるに方り、戰時女丈夫のそれよりは、貞淑にして騒がず動かざる軍人の夫人のことを談ずべきものであります。

（をはり）

（本論は談話せらるゝまゝ筆記したるものにて文字の責任は記者にあり）

道徳の修養

伯爵 松平直亮

道徳の修養に就て、是より愚考を御話し致します、先づ道徳の修養には、第一理想を作ることが必要である、此理想と云ふことは、單に道徳上にのみ限つては居らぬが、茲に言ふ所の理想は、道徳上の理想を云ふのである。

そこで理想といふのは、道徳に適合せる想念でありまして、自分の經驗、智識或は想像等よりして、完全無缺と認むる道徳的性格を作るのである、此理想を作るに、人を以て理想とすることがあるが、それは甚だ危險と思ふ、人を以て理想とする時は、即ち孔夫子或はソクラテス等、其他の賢哲を理想とするのであるが、是等は其當時適合した人物であるが、現時に於て果して此社會に適合した人物であるか、我が標準とすべきものであるかを考へて見ると、缺點があつて滿足する譯には行きませぬ。必ず不完全なる所を見出すことがある、それのみならず、其人の短所迄も模するに至るの弊が起る、其處で人物を以て、理想とすることは到底出來ない、又理想としては危險である、勿論古今の賢哲は理想中の一部分、或は多部分を構成する所の資料なることは、明らかなことである、私の如きも理想の大部分を占むる人は、大聖孔夫子であります、併しながら孔夫子の全部を以て標準理想とすることは出來得ないのであります。

必ず其理想中の大人物、即ち孔夫子に加ふるに、東西古今の聖哲を以て補ひ、又其他智識經驗或は想像に依つて、現世に適應せる所の理想を作らねばならぬのである、此人物の人を以て、己の標準物とすることは、

到底出來得ないと思ふ、又此理想を作るには、我國民としては、國體を基礎とせねばならぬ、若し國體を忘れて理想を作つたならば、日本國民として眞正の理想とは言はれぬと思ひます、それから我國の歴史及國家社會の現狀、世界の大勢、自己の性質、境遇、職業等は理想を作る上に於て注意せねばならぬ點である、聖哲の傳記を參考とすること、道德上の智識を研くことが必要である、若し道德上の智識を缺いたならば、到底完全なる道德家となることは出來ないのである。

今茲に種々なる方法に由て、理想を作ることが出來たと假定すれば、今度は修養である、即ち其理想を標的として修養實現するのであります、然らば其理想を修養するには、どういふ風にしたらば宜からうと云ふに、修養上に消極の二方面がありますが、其必要なる點は先づ己を知ることである、自分の心術行爲を知るのであります、勿論何人も長所もあり、或は短所もある、それで長短何れも知らねばならぬが、先づ短所を先に知ることが必要と思ふ、長所は知る事を求めずして自ら知る事を得ますが、短所は自ら知る事が難いものである、其處で先づ己の短所を知り、怒り易い、或は吝嗇である、或は粗暴である、或は卑屈であると云ふが如き、己の偏性を知つてそれに克つのである、其短所を見出して除去するのであります、丁度醫者が患者に對して藥餌を投ずる如く、先づ病の根原、其患部を診察して缺點を見出し、然る後藥餌を投ずる如く、人間が道德を修養して行く上に於ても、先づ己の短所を知つて、さうして短所に對して道德藥を投ずるのである、又長所は助長して益々完成を期すものであります、それから身體の健康に注意することである、古來道德を說く人は、唯々德を修むる方に力を入れ、私欲を抑制して中正を得せしめ、完全なる性格を作る點に專らにして、肉體上の方に注意を及ぼした人が甚稀でありますが、此身體より精神に影響することの最も大なることは、疑ふことの出來ない事實であります、心と身の關係は密接なるも

のでありまして、其影響は實に著しいものである。

玆には心より身體に及ぼす方を省きまして、若し身體の一局部に疾病を生じたならば、其爲に精神に影響を及ぼすのである、古人の言つた如く、健全なる身體に健全なる精神存すと言ふ如く、身體の强健なる者に在つて、始めて健全なる精神を存し得ることは事實であります、其處で若し身體に疾病を來し、或は營養不良であつたならば、爲に生器の働きを弛緩ならしめ、從つて心の活動を全からしむることは出來ませぬ、彼の貧血の爲、或は胃病のため、心の活動に影響を及ぼして、精神の安靜を得ないとか、事物の判斷を誤まるとか、倦怠を來すとか、或は恐怖を起すとか、憤怒を發するとか云ふが如き、現象を呈することは事實である、是れ身體よりして精神に及ぼした影響に他ならぬのであります、若し身體より精神に此の如き影響を受けたならば、立派なる品性の人と云ふことは出來ないのであります、此の如き點に於て、自分の疾病或は營養上に深く注意せねばなりませぬ、即ち此注意を缺いた爲に、道德的品性を缺き、即ち下劣なる品性に陷ると云ふことは、大に留意すべき點であります。

又精神の安靜と云ふ事に就て、修德者は注意せねばならぬと思ふ、宋の邵康節の詩に、斯く云ふ事があります、

心安ケレバ身自ラ安ク、身安ケレバ室自ラ寛シ、心身ト倶ニ安ク、何事カ能ク相干セン、誰カ謂フ一身小ナリト、其安キコト泰山ノ如ク、誰カ謂フ一室小ナリト、寛キコト天地ノ間ノ如キヲ

此詩の意味は、人は自分の心が安らかで苦勞する所がなければ、自ら身も安泰である、身が安かつたならば、自分の居る室も自ら寛ろ〳〵とした心持がする、心と身と倶に安らかであつたならば、何事も干すことはない、一身は小さいものだけれども、其安らかなことは泰山の如くである、一室は小さいものであ

るが、寛かなること、天地間の如く、實に廣大寛濶なるものであると言はれました、即ち其心の安い結果でわります、若しも其反對で心が安くなかつたならば、身も亦不安である、身が安くなければ室も寛かでない、千疊敷に座つて居ても、殆んど身を容れる所がなき思ひがするのである、心と倶に安くなかつたならば、此五尺の身體が天地間にも容れる所なく、常に快々として貴重なる生命を滅盡する人があります、是れ何であるかと言つたならば、即ち心の安くない結果である、(精神の攝養に就ては、他日諸君の批判を乞ひたいと思ひますから、こゝには省きます)心を安く持たぬといふ結果は、其差ふこと千里で、心が安靜なれば即ち心廣體胖で、其怛蕩々たる樣子は、實に君子の品性を現はして居ります、修養は是非内部より起らなければならぬと思ふ、それから先づ修養が出來た上は、そこで始めて人格が現はれて來るのである、即ち順序を言つたならば理想を作り、其理想に向つて修養して行き、それで人格が現はれて來るのである、其人格の高低優劣は即ち理想の高低優劣に關するのである、理想が高ければ人格が高い、理想が低ければ人格が低い、即ち理想と人格は、相關係して居るのである、然れども單に理想と人格との關係ではない、理想が高くても修養が充分でなければ、其理想も遂に人格とならぬのである、即ち修養は其理想を實現することに勉むるのであつて、其實現せし人が即ち有德の理想を有するのであります、それで道德の修養に於ては、理想及び修養の二者を全うして始めて好き人格が現はれ、良國民とならるゝのであります、それから道德の修養上に最も必要なる者は、信念と勇氣である、信念に正信と迷信とがあるが、勇氣にも亦大勇と小勇とがあります、此正信と大勇とが必要である、即ち正信が修養の基礎となり、大勇が實行の力を助けねばならぬ、道德の修養上に必ず此二德は缺くべからざるものと思ひます、未だ御話し申すこともありますが、餘り永くなりますから、茲に止めて置きませう。

(をはり)

○偶感一則

「アメリカ婦人に用ゐらるゝ脂粉は、優に數千軒の家屋を塗るに足れり」とはアメリカの技藝家某が證言せるところなりと聞きゐるが、今我が東京にても、貴夫人令孃をはじめ、愛嬌賣りて、生計の資けとせる女共が、日々に費やす、紅粉の料を量りたらむには、少なく積りても一日に千圓位の事にはなるまじけれど、假りに之を千圓と見るときは、一月には三萬圓、一年には三十六萬圓、十年には三百六十萬圓となる勘定なり、東京だけですら斯の如くなれば、今之を日本全國に就きて計算せば、驚くべき金額となるべし此程尾上柴舟氏の譯せる新女訓を讀むに、

服飾と奢侈とを愛する念と、歡樂を欲する情とは、日を逐うて增加せり、されば女子は何處にも出て行かず、又すべての事に立ち離らずんば、全く不幸の地位にありと考ふ、故に現今の女子は、その快樂を與ふるを惜むとて兩親を非難し、簡略と節約と、知足と、謙退とは、女子の最上の裝飾たるのみならず又不足なく、幸福なる生活を營むの基礎たるを、全然忘却したるが如く見ゆ、人は世上幾千の誘惑に抵抗して、強く堅く「否」と言ひ得る勇氣なからざる可らず、而して若し此手段にも、無益なる裝飾を棄て、誘惑を避け、以て他を補助することあらば、之が爲め如何に喜ばるべきか、またもし、その貯蓄にて、己れを援くる善良なる娘を持たば、貧窮なる兩親は、いかに感謝すべきか。

と記せるは、よく時弊に適中したる味ひある言といふべし、女の情といふものは、何處にても同じものなるべきも、アメリカや、ドイツは兎も角もとして、今我が日本は千古未曾有の大事に際すれば、此時を機會として、先づ女學生丈けにても、紅粉廢止を實行したきものと思ふ。（某子爵夫人談）



蝴蝶軍

文學士 濱田紅於

我邦海賊の歴史は遠く平安朝時代に始まりて、天慶の亂の藤原純友の如きは、その首領たりき、土佐日記にも所々に海賊の恐ありしこと散見せり、その根據地は多く瀨戸內海の諸島にして、廣島縣の因の島の如きはその著例なり、朝廷にても屢武將をして征伐せしめられしも、濱の眞砂と盜人の種は盡くる時なく、殊に南北朝の際に至りては、海內鼎の沸くが如く、矢叫びの音、鯨波の聲、天下に滿ち、朝命は遠方に及ばざりしかば、海賊どもは時こそ來つれと、恣横行して良民を刧やかし、日本の天地にのみ慊らずして、外國にまでも押し寄せけり、これぞ朝鮮及び明にて所謂倭寇なる、されどこの倭寇なるものは、たゞ刧掠のみを以て目的となせしにあらざるべし、おもふに、我西南の邊民どもは、かの文永弘安の元寇の昔を偲び、朝憲のみだれに乘じて、祖先の宿怨を漏らしたるもあるべし、或は宮方の武士は、南風の漸く競はざるを憤りて、滿腔の餘怒を對岸の地に霽らしたるもあるべし、とまれかくまれ、他人の土地を蹂躪し、他人の財貨を掠刧したるは、善事にはあらざれど、彼等が一葦の扁舟に掉して、幾百里の浪路を凌ぎたる膨脹的行動は、我國史上の一大事實たり、彼等の將帥その人を得、彼等の目的が土地侵略なりしならば、雞林の山、朔北の野は早くも吾が手中に歸し、かの醜奴をして一指を加へしめざりしならん、又一方より觀るに、海賊の船舶操縱に堪能なるや、南北朝より戰國時代に至り、一變して海軍となりぬ、豐太閤の征韓の役に、我水軍の驍將た

りし九鬼氏の如きは則ち然り、かの露國が「コサック」兵を以て誇らば、我はこの海人を以てこれに應せんのみ。

今朝鮮及び明に於ける倭寇の活動を説くに先だち、武備志と兩朝平壌略等によりて、倭寇の如何なるものたりしかを云はんとす。武備志の記する所によれば、倭寇の乘りし船は、その形卑隘にして、もし巨艦に逢はゞ、仰ぎ攻め難し、大なるものにして三百人を容れ、小なるものは四五十人乃至七八十人を乘すべし、されど船底尖りてよく浪を破り、横風鬪波を畏れずして、行使便易なりと、彼等は船毎に、八幡大菩薩の旗を樹せしを以て、朝鮮人明人は、これを八幡船と稱したり、又武備史平壌略は、彼等に於ける行動の敏捷なるに驚けり、曰く、倭冦は甲冑を纏はず、夏冬常に布衫と短袴を着けたれば、輕捷飛ぶが如しと云ひ、又裸體にて踴躍突進するものありと云へり、彼等は歩戰に長じ、刀法に精しく、三尺の秋水を提げて舞動すれば、上下四方悉く白くして、其人を見ず、弓術に巧にして、弓長く矢大に、人に近いて發するが故に、百發百中、避くるに遑あらずと、又軍紀の嚴格を説いて曰く、大將高座に據り、衆皆その命令を聽き、各その部署に猛進す、一隊三十人を過ぎず、海螺を吹いて號となす、日暮に至れば歸り來りて、各劫かしたる財物を大將に獻じ、敢て隱蔽するものなしと、現今の露兵はこの倭寇に及ばざること甚だ遠し、又彼等が用兵の妙を陳べて曰く、その未だ戰はざるや、三々五々、或は草間に伏し、或は樹陰に隱れ、一人扇を揮へば、伏兵刀を振うて四方に起り、數我が軍後に遶りて、兩面夾み攻め、常に寡を以て衆に勝つと、これ蝴蝶軍の名ある所以なり、現今我が歩兵の精鋭は、天下無比の稱あり、由て來る所遠しと云ふべし、その行軍するや、長蛇の軍をなし、最强者を先鋒と後殿とに置き、徒らに沿道の民を苦めず、里人酒食を以てこれを勞らへば、毒あらんことを恐れて先づ甜めしむ、間道には伏兵あらんことを恐れて、必ず大道を濶歩し、

城に沿うて進まざるは、木石を拋たれんことを恐れてなり、側面單列にて緩歩するを以て、數十里を占めてよく近づくものなく、數十日を馳せて少しも勞せず、陣を布くには四分五裂するを以て、包圍攻擊に便なり、敵に對すれば、先づ二三人をしてこれに向はしめ、その矢石を空費せしめて後猛進し、敵軍の先づ動くを見て、後突入す、故に勝に乘じて長驅し、戰酣にして四面の伏兵起ると、用意の周到なる、現今の戰術に比して、多く遜色あるを見ず、以上は皆被害國の史籍に記載せらるゝを以て、敢て誇張の言となすに及ばざるなり、これより先づ朝鮮の倭寇を述べ、次に明の倭寇に及ばん、我が邊民が朝鮮に寇せしは、鎌倉の初代に始まりしが如し、後堀河天皇の嘉祿二年對馬の島民等、高麗の全羅州に至りて、人民を害し財貨を掠めしかば、高麗これを太宰府に訴へしことあり、四條天皇の貞永元年には肥前鏡社の住人、また彼地を侵掠せしことあり、是れ倭寇の嚆矢なるべけれど、唯我國の史籍にのみありて、彼邦の書物に見えず、時は南宋の末世にして、高麗の高宗の代なりき、その後もうちつゞきて、かの地に倭寇の患はありけんも、記載の徵すべきなし、龜山天皇の弘長三年に至り、高麗の順孝王使を遣はして、海寇を禁ぜんことを請ひたりしも、我邦は如何に處分せしや明ならず、後年文永弘安の役に、高麗が蒙古に黨せしは、その勢威に懾服せし結果とは云へ、彼がまた倭寇の故を以て、怨を我に懷きし所以にあらざるなきを得んや、やがて我邦と蒙古との交渉始まりて、遂に文永十一年の役となりたれど、倭寇は依然として止まず、弘安三年の頃、慶尙道の固城漆浦、及び合浦に寇しければ、高麗の忠烈王援を元に乞ひて警備せりき、されどこれらは防禦のよすがとならずやありけん、弘安五年には、八幡船は又もや顯はれて、沿海の郡邑を襲ひ、家を燒き人をそこなひしかば、蒙古軍五百人これを救けぬ、かくて連年寇害たえず、元史成宗本紀には歳至二倭冠一とあれば思半にすぐるものあらん。

かゝるほどに、我邦は南北分爭の世となつて、兇の星影月に映じ、旌旗雲の如く空に滿ちたれば、吉野の春も物淋しく、嵯峨野の秋を訪ふ人もなかりき、高麗にても、忠烈王淫虐にして、小人を親しみ良臣を疎んじ、日夜歌舞に耽り、酒におぼれ色をあさりて、政事を視ず、その後歴代の君みなおろかなりしかば、國内の爭擾やむ時なく、邊境の守禦もおろそかなりき、彼我の事情かくの如くなりければ、わが邊民の跳梁いよ〳〵烈しく、大擧して慶尙道の南岸固城竹林及び巨濟島を犯したり、倭寇てふ名稱は、この頃よりぞ始まりける、こゝに於てか、正平二十一年、高麗恭愍王の使者李夏生、對島に至りて、禁寇を宗經茂に請ひ、翌年使者金乙、金龍兵庫より京都に來りて、禁寇の事をこひしかば、朝廷にては大臣納言等議して、返書を贈らざることに決しぬ、而して倭寇は愈猖獗にして、恭愍王二十一年には、倭船二十七艘陽川に入る、諸將出で戰ひしも、水戰に習はざるを以つて大敗すと云ひ、辛禑の三年には、倭賊對島より海を蔽うて來り、帆檣相望むと云ひ、我が足利義滿は僧信弘を遣はして報じて曰く、草竊の賊は逋逃の輩にして、我が令に遵はざるものなれば、たやすく禁ずべからずと、倭寇が兩國の非常なる厄介物たりしを視るべし。

諺に曰く、兎も三年揶揄へば噛むとありと、さすがに懦弱なりし高麗人も、連年の侵寇に耐えずやありけん、大將軍李成桂等をして、倭寇を伐たしむ、成桂雲峰に據り三軍をはげまし、みづから弓矢を執りて奮戰し、大にこれを破りぬ、されど入道の倭寇を懾服せしむべくもあらず、全羅慶尙の兩道は尙巢窟となりて、沿岸一帶の地は靑色なかりき、こゝに於て鄭地といふもの辛禑に上書して、對島壹岐を征伐して、倭寇の根據をくつがへさんと請ひしかば、恭讓王の時、慶尙道元帥朴葳をして、わが邊陲を侵さしむ、實に後龜山天皇の元中六年なりき、朴葳は兵船百艘を帥ゐて、對馬の淺茅浦にあらはれしかば守護宗賴茂衆を督して敵船を燒き拂ひぬ、されどそ

の島民の劫掠を被りしこと少なからざりき、予はこゝに高麗の內情を略述するの必要を感ず、抑も高麗の倭寇に苦むや、一朝一夕にあらず、東南の海岸は年々歲々侵害を被りて、人民その堵に安んぜず、朝廷のこれを防ぐに當りては、軍兵と軍費とを民間に取らざるべからず、將士は奔命に勞れて、人民は塗炭に苦む、雞林八道擧て疲弊しつくしぬ、加之恭愍王の荒淫、辛耦の狂暴によりて、王家の威望やうやく衰へしに、李成桂は屢軍功を立てゝ聲譽日に盛に、文武の大權その手に歸して、遂に恭讓王を逐うて、八道に君臨するに至りぬ、時に我が元中九年なり、嗚呼高麗を滅ぼせしは李氏なれど、よくその原因をたずぬれば、實に倭寇これを滅ぼせしなり、誰かその勢力の强大なるに驚かざらんや。

成桂已に高麗の禪を受け、國號を朝鮮と改む、太祖皇帝即ちこれなり、使を我邦に遣はして、海寇を禁じ、通好を訂せんと請ふ、將軍足利義滿返書を與へぬ、是歲は我が後龜山天皇神器を後小松天皇に讓り給ひて、南北合一せし時なり、兩國の王家時を同じうして一變遷ありしは一奇と謂ふべし、爾來兩國の交情漸く親しく、西南の諸侯大內大友少貳の如きも、使者を遣はしたりしが、倭寇は尙やまざりしを以て、朝鮮の世宗は高麗恭讓王に倣ひ、柳廷顯、李從茂を將とし、兵船五百艘に兵士一萬人を乘せて、對馬の淺茅浦に來りしかば九州探題澁川義俊、太宰少貳滿貞等九州の諸將と共に、邀へ擊ちて大にこれをやぶり、敵首を斬ること約四千、時に應永二十六年なり、その後嘉吉の變を經て、應仁の大亂となりしより、足利幕府の威令頓に衰へ、倭寇は愈々暴威を逞しうせしかば、朝鮮の明宗憤りて、遂に日韓の交通を絕ちぬ、時に我が正親町天皇の天正九年なり、而して我足利幕府滅びて織田信長これに代りしが、中道にして僵れ、豐臣秀吉その後を承けて遂に天下を一統し、更に禹城四百州を徇へんとせり、恰もその時倭船十六隻、江原道の竹島に寇せしが、各鎭の舟師皆怖れて向ふものなかりしと云ふ、これ秀

吉が朝鮮の兵力を試みしものと云へど、いかゞあらん、されど朝鮮が秀吉の命に從はずして、却て明に屬せしは、こゝに啣む所ありしなりと、徳川時代に至りては、また倭寇の名を聞かざるに至りき。

嗚呼朝鮮の歴史が、倭人の入寇を記すること大凡四百年、その民の財産をうばひしこと幾何ぞや、彼等はまた日韓の平和を破るに至りしこと數次、加之彼等は遂に高麗國滅亡の一大源因となりぬ、彼等の勢力のいかに長久にして强大なりしかは、およそ想像することを得ん、我大和民族は由來膨脹的活動的の性質を有せるなり、徳川幕府の鎖國政略によりて一旦頓挫してまた振はざりしも、今日はこの氣象を復活すべき時ならずや、かの倭寇は邊陲の鼠賊にすぎずと雖、わが國民の天性を發揮して餘あり、今や義俠の皇軍韓山清海にみちて、威儀堂々たり、國威の擴張今を措きて、何日をか待たん。

蝴蝶軍の一篇、乾燥にして、趣味に乏しと雖も、之に依りて以て、庶幾くは、吾が對外の思想の由來を知るを得んか。

佐久間象山先生の姉（續）

梅廼屋主人

△寡婦時代の夫人

夫人が未だ四十路の坂を超えて、幾何ならざるに、朴翁は圖らずも重き病に罹りました。夫人は痛く憂ひて手に手を盡くし朝夕介抱をいたしましたが、其の甲斐なく終に歸らぬ人の數に入りました、哀れ夫人は人世の一大變化に遭うて、朴翁が殘せる三人の孤兒を率ゐて、世路の困難を甞めなければならぬことになつて。流石の夫人も兎やかう案じ煩ひつゝ、アヽ、吾が夫は全く死せる人、我れも亦半ば死したるものと、朝な夕な亡夫の靈位に侍いて、只管其の菩提を弔うて居りました。象山先生は之を慰めて、此度の不幸は申すも愚か、重々察し參らすれど、餘り心を惱まし給うては、姉上のお身に障りの生ずるのみならず、子供等が不仕合を招いて、偖は北山一家の存亡に關する事の起らぬとも限らざれば、御氣を取

直し給へと、厚い情の言葉に夫人も力附いて、去りとは侍の妻として平素嗜みの愚かさよ、不覺の數々幸に宥し給はれよとの答に、象山先生も安心されました。夫人は堅く孔孟の教を信じ、其の實踐躬行に力められましたが、女徳の極致は貞實に在りとて朴翁の生前には、善く之に事へて、唯其の及ばざらんことを恐れて居りました。然るに今や生前に於ける貞實を送りて、更に死後に於ける貞實を行ふべき時を迎へたのであります。偖儒教に所謂貞女兩夫に見えずとの訓戒は、夫人が後半生の理想で、先づ物見遊山などは申す迄もなく、輕々しく男子に出逢ふことより、身のまはり、言葉のふし〴〵、偖は立居振舞の些々やかな事柄までも愼みに愼みて、苟りにも亡夫の名折を招かぬやう心を用ひられました。去れどコハ唯形の上に現れたものに過ぎぬのでありますが、其の心の清く美はしいとは、更に一入欽仰を高からしめるのであります。夫人は貞實の根本は不足と言ふ考を抑えるのが第一であると申ました。

ソハ何故であるかと言ふに、何事でも不足に思ふ時は不自由が忍ばれぬ。すると早速望と云ふ慾が萌して、羨と嫉とが起る。即ち邪念煩惱といふ惡徳を増殖して全く道徳の線界を墜落した揚句、困じると狂といふ變體を生ずる、誠に寒心の至りである。去れど若し之が反對の方向に進んだならば、即ち不足の心を抑え得る時は、艱難に耐へることが出來て、奢侈や慾望の陋劣なるを感じて、自然に高潔の考が生ずる、名譽の尊むべきことも分かる。ケ樣な徑路に據りて進むと一歩一歩に節が附き、括り目が出來て、丁度竹幹の成長する如きもので道徳を判斷する力が確かに成る。此高潔な確かな眞心を以て夫に對するものが、即ち貞實で、然かも女子が世に處して、安心立命の道を求めやうと思はゞ、かく消極の道徳に據ることそ最と目出たけれと。當時は今日と世の有樣、女子の境遇二つながら其趣甚だ同じからず、道徳上の說明に於ても間々首肯しかねる者あれど、其識見の確立と卓越とは、明治の女流をして汗顏せしむ

るもの丶ないではありません。

△教育者としての婦人

ソハ兎も角夫人は、其後三人の孤兒を教養するを此上なき務として、有らん限りの力を用ゐられました。去れば誰れ言ふとなく、北山氏の子供等が言行の正しいのは、全く夫人が教訓の行き届けるに據ると、其の評判日に〳〵盛んに傳へられました。ソコデ親族や朋友、偖は近隣の人々まで、爭うて其の子女の教育方を夫人に懇望するやうになりましたが、夫人はふつゝかな女の身の當る所にあらずとて、初めは固く辭みたれど、終に斷りかねて之を引き受けることになりました。茲に夫人は其の局面が一轉して女子の教育家として、一意專心其の後半世の事業に力を盡されたのであります。

夫人が教育の要旨は、文讀み、字を習ひ、裁ち縫ふ業を婦人の學問中最も大切なものと定られました。書物が自由に讀めると、歴史、本草、其外ドンナ學科でも自分の力で遣ることが出來る。假令十分には參らずとも、女子として心得る位には讀書の力で自ら研究すれば、ソレデ大方は差支がなからう。女子は獨立のものにあらず。必ず人の家に嫁ぐべきものゆゑ六ケしい學問や、高尚な研究よりは家を持つた後に實際役に立つことが何よりである。唯々其の人々の性質嗜好などに依て、好いた學科の材料、即ち適當の書物の名稱を敎ふれば結構であらう。偖また習字は能く書けないと、生涯不自由であるばかりでなく、手蹟の惡いと云ふものは餘程其の人の品位に關係するもので、却て男子よりも其の影響がひどく感ぜられる。分けて習字の妙味は、巧みに筆を舞はし麗はしい字を玩ぶばかりでなく、大いに精神の修養を助くるもので、先づ筆を採るに當て中鋒とか直筆とか云ふとに注意せねばならぬ。此の中鋒と云ふことは筆の毛鋒が錘に糸を垂れたやうに、右にも左にも、前にも後にも歪まない鋒勢を現はすことで、直筆とは毛鋒より 更に意味が廣くなつて、筆の軸までを鉛直にすることである、斯く中鋒直筆を適當

にやらふとするには、指と手とを正しくしなくてはならぬ、ソレニハ身體を正しく搆へることが、最も肝要である。偖姿勢を正しくしやうとするには、豫め精神を正しくしなくてはならぬ。卽ち氣海に十分の力をこめ、丹田に精を注いで、心の態度に確かな整頓がないと、文字に現はれても見ばへのシッカリしたものは出來ぬ。恰も騎馬に巧みな人が、馬上に其の躰を亂さぬは、先づ其心を亂さぬといふ上に、十分の注意を拂ふと同じで、若し此の心がけのない人では、ドウも乘馬の名人と申すことが出來ぬ。此の乘馬と習字とは丸で其技を異にして居るが、修養の上で精神の割出し方は更に違ふもので無い。ソレゆゑ猶一歩を進めて考へると、此の修養から立居なり振舞なり、其外何なりとも、實際上活用することを忘れてはならぬ。次ぎに裁縫は、女子が自然の特職と申すべきもので、諸學科の中で、何より大切で有らうと思ふ。ソレデ此の讀書、習字、裁縫の三つは充分の時間を與へて、其の他の學科は餘りの時間で遣らせるが善いので、即ち古今の忠臣孝子義士節婦並に愛國殉難の士などの傳記を語り聞かせて、感情の修養を適當に施すことが、極めて要必である。由來女子は涙に脆く、感情に支配され易い。爲めに道理をおほひ、是非を誤り、動もすれば偏狹の沙汰に及ぶものゆゑ、之を訓へ導くには、其の手本となるべき偉人の傳記に據て、其の針路を照らすのが、最も利目が確かである。是れで女子が人の家に嫁ぎ一家を持ち、世に處する上に於て、先々差支が無からうと。勿論今日の如く教育の理論とか方法とかは精密な研究の無い時代なれば、其の主義とか、方法とか、將た學科の撰擇とか、材料の排列とか、凡てのことが系統的に出來て居なかつたのは已むを得ないが、智育に於て、德育に於て、技藝教育に於て、善く女子の女子たる所以を咀み分けて、有功に教育を發揮したことは實に感ずべきであります。

△愛國者としての夫人

夫人曾て長男安世をして長崎に遊び、西洋の學術を

修めさせやうと致しましたが、家計が豐かで無いために、志を果すことが出來ませんので、藩に請うて學費賜給の恩命を受けました。此頃は謂所開國攘夷の議論沸騰して、今にも大亂が起らうとするので、天下の諸侯何れも武備養兵の事に忙はしく、從て國用に缺乏を告げると云ふ有樣でありましたから、あはれ夫人は長男安世が、遊學の恩命は家老八木内匠の抗拒に依て、其支給を取消されやうとしました。是に於て夫人は家老の言の不信を責めて、

此度長男安世が、學費の賜給をお願ひ申せし處、幸に御聽許の恩命を拜し、誠に有り難く、嬉しく感じて出發のお指圖を待つて居りました。偖て今日の仰せ聞けに依れば、切角の恩命を取り消し遊ばされましたが、何れ御都合のあることゝは御了察申し上げますが、是非とも遊學のことに御詮議を御願ひ申したうぞんじます。

と。恭しく申し出たので家老は、

近頃甚だお氣毒の次第であるが、藩の經濟の都合で見合せになつたから、お諦めを願ひたい。猶更只今は學問よりは武備といふ焦眉の急があるので何事も緩急に從て取り計らはなくてはなりません。

と答へました。夫人は、

尤の仰せながら、此度の遊學は決して詩文を弄ぶといふやうな無用の事に從ふ次第で御座りません、海外の語に通じ、歐米の事情を探りて、御國に盡くしたいといふのが本望でムります。新たに御國が鎖國の禁をお解きになつたので、外國に對する關係が、次第に六ケ敷ならうとして居ります。今日第一の急務は彼れを知り、己れを顧みて、巧みに此間に處して御國の威勢を發揚するにあらうと存じます。偖此の大任に當るものは洋學者の外に有りません。安世が先きに洋學を學ぶ爲めに、學費支給を願ひ出たのは、只管此の精神に基いたのであります、已に恩命を辱うして今また之をお取り消しになつては、御國の御爲めよりも、緩急の

先後よりも、却て御爲めにならぬことゝ存じます。と理を盡くして諭ひければ、家老も終に爭ひかねて、安世に學費を給することゝ致しました。日ならずして安世は遊學出發の指圖があつたので、勇みて故郷松代を後に、長崎へ赴きました。其時夫人は安世に對ひ、

此度の遊學は、御身の仕合、我家の光榮、さては此母まで如何ばかり嬉しいのか。申すも畏しこけれど此の君恩に酬ひ奉る覺悟は、一日片時も忘れてはなりません。素より和漢の學問と異る洋學なれば、全く言葉も文字も初めてのこと、分けて外國の風俗習慣地理人情等を探るまでには、永い月日は勿論、非常の困難を凌がずば中々成業は出來ますまい。去りながら御身も母が子ならば、それしきのことに心を屈するものにも非らじ。母は御身が一日も早く成業して、君恩に酬ひ、御國の御爲めに盡くす大任を完うするの外更に望みは有りません。母の分れの此の言葉は、何時〳〵までも忘れずに居て貰ひたい。

と懇篤なる戒めを受けて出發いたしました。それより安世は長崎に遊び、業成りて後、郷里に歸り、御國の爲め大いに盡くさうと致しましたが、不幸にして天死して夫人の素望は全く水泡に歸しました。夫人は明治四年八月六十四歳でみまかりました、

（をはり）

（夫人の事蹟猶記すべきもの少なからずと雖も、あまり長編に渉る恐れもありますから、其の主なるものを擧ぐるに止めたり。他日機もあらば更に之を補ふことゝせん。）

女傑クリスチナ

城東野史

政治の局面に立ちて、統治の權を其の掌中に收め、宮中府中の事を司どり、內治外交の衝に當るは、男性の任にして、婦人の務にあらずと雖も、或は攝政の必要ありて、簾を垂れて政を聽きし例もあり、又た血統上の要求によりて、帝王の位に即き、一生の間至尊の位置に在りしもあり、カザラインの如き、

マリヤ、テレサの如き、エリサベスの如き、ヴイクトリヤ女王の如きは、即ち是れなり、瑞典のクリスチナ女皇も亦以上の女子と同じく、婦人の身を以て王位に登り、自ら政權を握りて、一國に君臨したる女傑なり。

クリスチナは、瑞典王グスタブス、アドルフ大帝の女にして、母をブランデンブルヒのマリヤ、エリヲノラといひ、千六百二十六年十二月十八日を以て、生れけり、幼き頃より稟性勇剛にして、體格また强健なりければ、父王グスタブス深く之を愛し、常に其傍を離れしめざりき、王その領地カルマル市に赴かれける時、クリスチナをも伴はれしが、クリスチナは此時齡やうやく二歳なりしかば、カルマル市の知事は、王の最愛の女を驚かさんを慮ばかりて、祝砲を放つの慣例を見合せけるに、王は斯くと聞きて、吾女は實に軍人の女なれば、かゝる事には、幼きより慣れしむるこそよけれとて、猶豫せず發砲せしめられけるに、思ひきや、クリスチナはその音を聞きて、肥へ太りたる兩手を拍ちつ、ホ、と許りに打笑みながら、一發の終る毎に、復び今一發をと所望しけるとぞ、クリスチナが、果敢勇決、男兒に勝りたる氣象は、早くも此時より發揮せられぬ。

父王グスタブスは、當時聞え高き英主なりしをもて最愛のクリスチナは、その保護と敎導とによりて、天晴れの女性ともなるべきに、惜いかな、クリスチナが七歳の頃、日耳曼軍と戰ふて、リユッチエンの野に於て、勇ましき最後を遂げたりしは、クリスチナに取りて、その一生の大打擊なりき、父王にして此の戰場の露と消えず、せめては今暫らくの間、生命を全ふせられんには、クリスチナの幸福は、之に過ぐべくもあらざりしに、早くも不幸なる出來事に遭ひたるは、クリスチナの大不幸にてありき。

さればクリスチナは、其後母后マリヤの下に養育されて、歳月を送りけるが、此のマリヤといふは心常に定りなく、怯弱にして、輕躁なること、普通の婦人と異ならざれば、今クリスチナ敎育の任に當りて、

方法よろしからざるは云ふまでもなきところなり、然るに幸にもクリスチナは、父王の性質を感受して、敏捷なる生れなるに加へて、學問執業にも熱心なりしかば、宮中に於て朝夕を共にする老女侍女の輩の徒らに喋々として口舌を弄び、心狹く偏執にして、交るに足らざるを見て、成るべく我が傍らに近づかしめず、たゞ偏へに信ずるところの道を求めんとせしぞ感ずべけれ、されど其頃ろ吾が志望を語るべき友垣とてもあらざりしかば、賢くも古人を尙友せんとて、普ねく書籍を涉獵しけるが、遂に性質品格相容れざる歷山大王と、ホーマーの二人をば、師とも友とも賴みて、其行を慕ひ、其詞を味はひしはたゞ面白しといはんのみ、かくて十四歲の頃となりければ、その智識も次第に廣くなりゆきて、政治に關する嗜好をさへ生じて、殆んど不思議と思はるゝまでに巧みに國事を談ずるに至りしかば、國民みな其の將來に望みを囑して、年月と共に經驗の積りて、必ず非常の才能を發達すべしとぞ噂し合ひぬ。

クリスチナは年やうやく長ずるに及びて、心自ら雄々敷なり、婦人の間に立交はるを嫌ふのみか、女子の務むべきもろ／＼の道をさへ痛く卑しみ嫌ひて、優美の性情全く消えたりしかば、宮中の婦人は、彌が上にも、クリスチナを惡み、間々穩かならぬ言語擧動もて、反抗するものすらありき、四圍の光景斯の如くなれば、クリスチナ亦激怒し易くなりて、婦人社會との間はいよ／＼遠ざかりける、されど女性は矢張り女性にて、男勝りのクリスチナも、何處にか弱點の存しけん、その弱點に付け入りて、名譽心を利用し、己が利慾を逹せんとする姦猾なる惡黨等に魅入られしこともありとかや。

凡ての婦女の最も重んずるところは、容色にあり、裝飾にあり、麗はしく鮮やかに着飾りて、人に褒めらるゝは、その唯一の希望なるに、クリスチナは卯の毛の先の露ほども、左る虛飾を思はざりき、宮中儀式の時に當り、並居る貴顯淑女達は、今日を晴れと盛裝して、光り輝く許りなる中に瑞典の女王たる

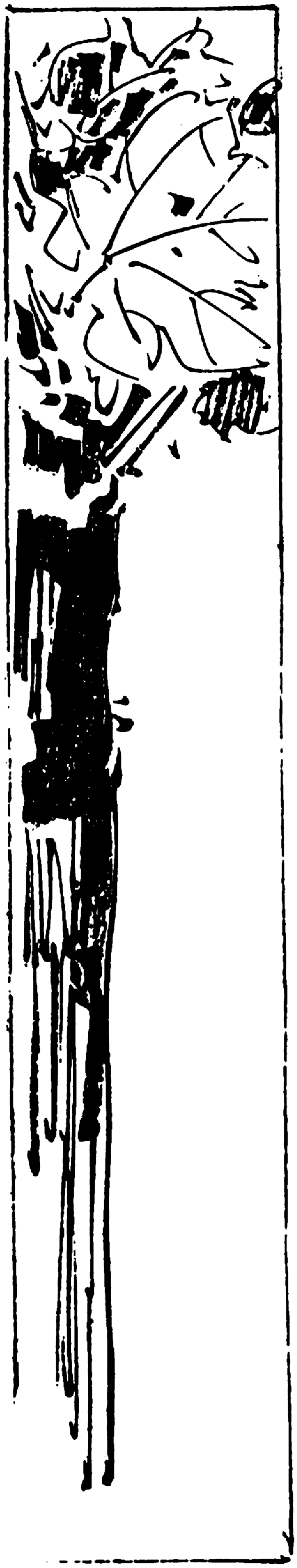
クリスチナは、粗野なる灰毛色の衣を着け、歩むに不便なればとて、故らに裾を短くし、袴を狭くし、鬖々たる毛髪をば、梳らざるまゝ、風に吹かせて、散り亂る、有様は、村婦田娘かとも思はるゝ許りなれども、少しも怯めず臆せず、雄々しくも席に就きしには、人みな驚ろかざるはなかりきとぞ、されば其の平日頭に戴くものとては、毛皮にて製れる男帽子にして、リボンもて髮を束ねたるまゝ、之を被ぶるにてありき。

かゝる男勝りの氣象なれば、瑞典王國の主權者として、重大なる責任を双肩に負ふて之に當り、一千六百四十四年始めて國務の全權を握りし以來、自ら大小の事件を處理して、注意周到、處決果敢、寸時も怠るところなかりしかば、議政官等は舌を捲きて、此の年若き女王の意志の堅確なると、才機の豐饒なるとに感服せざるなく、みなその指揮の下に甘んじて左右せらるゝに至りき、かくて一千六百四十八年には、ウエストフワリヤの平和訂結によりて、新たに領土を得しかば、國運愈々繁榮して、國務の大臣は女王の威勢を尊敬し、人民は德望を仰慕するに至りぬ、女王の體格と健康とは、一見してその長命なるを證して除あれば、此の王一代の内に、瑞典國は著しく發達すべしとは、一般の期待するところなりしぞ道理なれ。

然れども惜いかな、その幼時に於て養成せられたるクリスチナの性格上の一大缺點は、此時に當り愈々廣がり來りて、止むべくもあらずなりぬ。そは他人を指揮することにのみ慣れて、自己を制裁する道を知らざることにて、氣隨氣儘の性質は、愈々增長して、臣下に對する行ひの殆んど壓制とし も思はるゝに引換えて、自己の慾心は毫も制壓する能はざれば、此の缺點は女王の心中に喰入りて、猖獗の勢を爲し赫々たる功業もその光明を放つ能はずして、却つて暗くなるに至りしぞ憾みなれ、クリスチナは遂に此の性質の奴隸となりて、長く國務の爲めに其身を羈束せらるゝに堪へずとて、一千六百五十二年には早

くも讓位の志を洩らすに及びぬ、議政官等の驚愕一方ならず、人民また慨嘆措かずして、諸方より諫止の聲頻りに興り、皇儲たるチャアルス、グスタブスすら思ひ返へし給へと勸むるに至りければ、暫らくは事止みとなりしも、幾ばくもならずして斷然王位をチャアルスに讓り、一千六百六十年には瑞典の都を去りて、歐羅巴諸國へと旅行の路に上りぬ、扨て此の旅行は果してクリスチナの希望の如くに、自由自在欲して遂げざるなく、望みて達せざるなき程の幸福を求め得しか、否々、自己の職務を放擲して、心の平和を求めんとするは、木に緣りて魚を求むるよりも甚しければ、クリスチナは此の旅行の途に於て、却つて失望と困難とを感せしのみにて、當初の望みは達し得べくもあらざりき。

普通女性と異なること彼女の如く、虛飾を卑しむこと彼女の如く、學問執業に熱心にして才智の鋭敏なること彼女の如くにして、猶ほ一片心裡の慾念を抑ゆる能はざるが爲め、王者の位置をも甘んずるを得ずして、その末路の斯の如くなるを見れば、一般女子に在りては、女子に有り勝なる氣隨氣儘といへる性質を抑制して、常に其の心念に制裁を加ふべきの極めて必要なるを知るべきなり。



學藝

廣澤の記通解

文學士　境野天華

はし書き

庚子道の記を紹介した序に今一つ紹介して置きたいのは此の廣澤の記である。前の作者が白拍子であると似て此の記の作者大橋の前身は京都島原の遊女であつと云ふことである。然し其の作りた文字が如何に麗しく愛すべき者であるかを認めた以上は、決して人を以て言を廢する譯には行かぬ。殊に其の晩年の所夫栗原一素と云ふ人に別れて後は髪を削りて尼となり、時の名僧白隱和尚に禪を學び大乘法門に入りたと云ふとも傳へられて居る。此等を考へて來るときは非凡の才器を有して居たものとも思はれるので、愈以て其の文も尊とく讀まれる。作者の傳記に就いては前の武女と同じく此の外多くは知られて居ない。著作の年代延享五年は桃園天皇（德川將軍家重治世）の御宇になりて居る。

ことし延享五つちのえたつの夏卯月、はじめの七日、長康のぬしの廣澤の莊へまねかせ給ふまゝにちよの古道たどるたどるかの林につく。

延享五年戊辰四月七日と云ふ日に長康様の方から其の廣澤にある山荘に御案内を受けたので、仰せに隨つて行くことにした。廣澤への道路は彼の昔から能く歌に詠まれて居る千代の古道になりて居るので、此の千代の古道を尋ね求めて彼等の林まで漕ぎ着いた。

千代の古道　京都の西に當りて嵯峨、芹川廣澤方面に出る通路である。昔から千代の古道を歌に詠み込んだのは勅撰集にも幾つも載つて居る。即ち後撰集に在原行平朝臣の歌「さかの山みゆき絶えにし芹川の千代のふる道跡はありけり」とあり、新古今集に定家卿の歌「嵯峨の山千代のふる道跡とめて又露わくる望月の駒」とあり、新續古今集に從三位家隆卿の歌「春くれば千世のふる道ふみ分けて誰れ芹川に若菜摘むらむ」とあるなど其の一二の例である。

分入る野もせ千町ばかりあゆみ行く、夏盛しも春のなごりの草の香の　どやかに日影てりそふ。かなたおもてには主の出むかはせたまひて待かねさせ給ふ　などのたまひつゝしり　へにしたがひつゝまかる。

其處の林から尚奧の方へ野原を蹈み分けて行くとかれこれ千町、(千町と云ふの面積の上から云つたもので距離でないのは千町を里數につもれば三十里近くになるのでもわかるこゝの千町は或は十町の誤りかとも思はれる)ばかりで山莊へ着いた。時節は早や夏の初めと云ひながら何處にか春の名殘りが見えて道々の踏んで來た青草にも若々しい香があり、日の色も穩やかにゆつとりと照りて居ると云ふのはまだどうしても春過ぎて幾何もない景色を表はして居る。山莊では表口まで御主人自らお出ましになりて待かねて居たと云ふ御挨拶まで下され、其の後にお尾行き申して奧へ通りた。

西のかたのあみ戸を開き入る。若みどり、枝さしかはすときは木も、やゝしげりあひたるに、つゝじ山吹の花も咲のこりてさながら錦をわくるやうなり。池のこなたには釣臺を据させ給ふ。

家の西の方に竹(或は片木)の編戸がある。それを

押し開いて奥へ入りた。庭には新綠が左右から枝をさし交へて其の中には常盤木も打混じて茂りて居る。又躑躅の赤いのと、山吹の黄とが春の名殘に咲き殘りて居る。此の新綠、常盤木、躑躅山吹が一緒になりて居る中を通り行くのは宛もあや錦の中をわけ行くやうなものである。池に面して此方の岸に釣殿の構へが一つ。

釣臺　池に面して建てられた涼臺。これを昔から釣殿と云つて居る。必らずしも釣を試みる爲めに作りたものではない。こゝの釣臺も即ち此の種類である。

南のかたにより高ひきくつくり　軒にかはほりのやうにまどをつく。これより眺めやれば小倉山、龜のをの山、花の名に負ふあらし山、松尾もみねつゞきにて夏山のみどりはへたる、野べの青みわたれる、廣澤の池の水鳥のむれゐてあそぶ、おのがさま〴〵にほやかなる、音を聞て行かふもたゞ繪にかいたらんやうなり。

南の方に當りて、丈の低い亭を一つ構へてある。それに軒の處へ蝙蝠の形した窓を開けてある。此の窓から外の方を眺めた景色が實に面白い。小倉山とか、龜の尾山とか、櫻で有名な嵐山であるとか、栂尾の山まで一とつゞきに連なりて居て、夏のことであるから山は一寸のまじりけもない一面の綠色、それに野邊もまた一面の青色、彼方は廣澤の池！其の池の面には水禽が浮いて居て自由自在に遊び樂しむで居るのが實に奇麗に面白く見られる。また水禽が互に羽ばたきをしてあちらこちらに飛びちがふて居るのが繪に畫いたやうで面白い。

新樹の梢には蟬の吟を聞く、まだしき比なれば打しきるとも　なくしづけ　さをそふ。かしこにはかけひをもり聞ゆるそほ

づのおとなひ山にひゞきくるもいやめづらしくすべて耳なれぬ事のみ我ためにやといとかしこくまことの知らぬ國に來らんこゝちす。

新しい瑞枝若葉の梢には蟬が來て得意の歌を吟じて居る。それがまだ夏の初期であるのでさう其處にも此處にもと云ふ程でなく又た絕えず止めずくと云ふ程でもないので其の鳴く聲は反つて此の園の靜かな趣きを添へて居る。彼方には又た筧の水が流れて居て其の水の音の絕間々々には何處かで山僧のお務をして居るのが山をつたふて聞える一寸都とは異つて居て物珍らしく耳新しい事ばかりで、これも自分の爲めにさう作られてあるやうにも思はれて有難い。丸で知らぬ他國にでも往つて居るやうである。

しばしがほどこゝにやすらひ　かれひやうのものたうべ、みきなどもてなさせたまはりて釣臺のもとへゆき、ながめ殘して中垣しをり戶に入る。

此の別亭にしばらく休んで乾飯のやうなもの食べ又た酒饌の御馳走までも受けて、もとの水邊の凉臺へ立還り、しばらく眺めてまだ飽き足りはし無かつたが、大概にして中垣になりて居る所の柴折戶を押開いて中に入つた。

東のかた、いづみの水、こゝろこまやかに、名もなつかしき杜若のさかりもえもいはず、西のかたには宮城野の萩すゝきをまばらにうゑさせ給ふ。今より秋の千種をおもはれていみじ。

東方に當りし泉水がある、微細な處まで手入れが屆いて居て名を聞くさへなつかしい杜若の花が今を盛りと咲き匂ふて居る。西の方に當りては宮城野の萩やさては薄をばらりと餘りしつこく無く植ゑ込んであるが、萩薄の花咲く秋にもなり其の千

叢咲きこぼるゝ時はどの位か見事であらうかと其の時の様が今から想像される。

宮城野の萩すゝき　陸前宮城野は昔から萩すゝきの秋草を以て有名である處から茲にかう書いたので宮城野から移し植ゑたと云ふ譯ではない。

こゝにぞなのめにかけたる橋ゆゑ、なつかしうもろこしめきてつくりわたせり。からうたを得ざれば過し給はじと書るし給ふ。いにしへ今の世のはまれあるたれ〳〵もわたりたまひしと聞傳ふ。

此處に架けてある橋は極々粗造なものであるがそれが反つて意味ありさうに床しく思はれた。唐風に作りたものである。其處に「詩を詠せざるもの此の橋を渡るを許さず」と云ふ様な意味の榜標が立てゝあるが、昔から今日まで種々の名高い身分のある御方も此處に來られて此の規則に從つて「詩」と云ふ通過税を拂うて橋を渡られたと云ふことも聞及んで居る。

なのめに　凡て物の容易無造作なること、

いかでかとつとむねつぶるゝ。はかなきすさびもなくてはゆるしたまはじとて

さればこそながめわたらん言の葉も
　など及ぶべき庭のかけはし

とうちずしてゆけばぜんさいのかけひいといたうすゞしくてみぎはには紫の雲かとたな引、はふきあまたにかゝれる藤なみさかりなり。

此の榜標を見てはたと胸が塞がるやうに思はれた自分にも、何かつまらぬ歌でも詠んで出さなければ、事もなく此の橋を通して下されぬでは、なからうかと思つて、

(歌)只眺め眺めて渡り見るより外の事はない、此處のあたり橋の樣子のよい景色、とても人の言葉ではほめ盡されぬ。

如是云ふ歌を口に唱へて橋を渡りた。表庭の植ゑ込みの間には筧の水が落ちて涼しい音を立てゝ居る。泉水の水際には色々の樹木の幹棚に今を盛りと藤の花が咲きこぼれて花の浪を打たせ、紫の雲を棚引かして居る。

はふ木あまた　藤其他の蔦かつらの纒ひつくべき樹木の幹、棚を云つたものであまたは是等の木、棚が澤山と云ふ意、歌に詠んだものでは古今集に讀人不知の歌「玉葛はふきあまたになりぬればたえぬ心の嬉しげもなし」とあり。新後拾遺集に榮賓法師の歌「紅葉せし蔦もまさきも散り果てゝ匐ふ木あまたに山風ぞ吹く」などゝ云ふのがある。

左のかたに泰龍とある額をかけさせ給ふ。岩井の水きよらかなり。めぐりはおのづから苔にむせる石のたゝずまひもなべてならず。庭の上は色くさをつくしてよしばみたるませはゆひまぜ櫻、若楓

木々のもえぎ、うすく濃き綠はへたり。

左手の方に當りては「泰龍」と云ふ文字の額を掲げてある。其の近くに流れて居る岩間のすゞしい汚れなき清水、其の周圍に青苔の生へた石がずらりと排列よく並んで居るのも通常一樣のものとは見えぬ。庭にはまた樣々の色、樣々の種類　草花を植ゑてあつてそれに由緒あるらしいませ垣をあしらつてある。あたりには又櫻や若楓があつて其の瑞枝さす若葉青葉、萠黄色のもあれば綠の濃きも薄きも交りて中々見事なながめ、新綠の頃の鮮やかな目覺むるやうな眼前の景色!!

東北にそひて西南おもてにたかくひきく、作れる槙の屋心ことにしつらひ給ふ。このもかのも見渡すけしきなか〳〵筆に及ばず、世々のかしこき人々の詠じ給ひし唐の文心ばへありてをかしかりぬべきを書とゞめ此ろうの床の内、なげし

のうへにかけつらね給ふ。
東北の方に當りて西南に面して高低一ならず建て付けられて居る槇の屋――杉柏等の材木を使用つて建てられた家――の極めて數奇を凝らした一棟がある。此處から見晴らした彼方此方のながめは又格別であつて到底筆に書き盡される事ではない昔からの賢者達の詠まれた支那の詩。文の中で意味長く辭面白きを書き取りて此の家の床の間鴨居の上等にかけ連らねてあるのが見受けられる。
唐の文　文と云ふ中には詩を含んで居ることは勿論であつて殊には上に「詠じ」となりて居る處から見れば文よりも寧ろ詩の方を云つたものらしい。
南の門を出で、東にむかひて田面に出で山手に行く。木立ものふりて世はなれたる山は淺きやうなれど深きに似て口にはうとき鳥どものさへづるもことさらびて、所がらあはれに。おもしろき事かぎりなし。
扨又今度は南の方の門を拔けて東の方へ田圃の方へ出で、山の手の高い處に行つた。其處の樹木何れも年經たるものでこのやうに、浮世離れた所の山はさして奥深いと云ふではないが、何處かに眞の深山の奥の趣きがあつて、不斷は人の口にも云はれぬ鳥が、其の邊に翔け廻り自由に歌を歌つて居るのも、珍らしく實に面白く聞かれる。
さかひにのぼれば五知の山の流れ、鳴瀧の山、そのほか、峰あまたみわたさる。それより松杉、竹の林にまかりくだれる道、しげゝれば、あふさきるさに行來る所もわすれぬべう、やう〳〵かのろうに上り、ひねもす打かたらひ、酒肴海山のめづらしき、しな〴〵をとゝのへさせ唐のやまとのうつくしきてうどゞも、かずしらず

ならべもてなし給はりぬ。
尙絕頂のわたり迄上りつめて見れば此處からは五知山の山脉が連なりて居り、又鳴瀧山其外の山々まで眺めらる、此處からの下り道は松、杉、竹の生ひ茂る林の中になりて居るので上りて來た道は何處であつたか、歸るべき道はどれであるか、一寸見とめが付き兼ぬる程である。やつとの事で彼の槇の屋にたどり着き座敷に上り、日の一日何かと話し續けて酒、肴、肴には海の物山の物種々珍らしい御馳走を列べ支那製の器物日本製の器物の見事な者を數知ず列べ充分の御もてなしをして下された。

まことにかゝるおろかなる身のをりを得て此の莊にかたらひおふけなき此情をいかゞいはせん。ことのはもおもひたゆたふほどにあるじの歌をよみて聞えさせ給ふ。

廣澤や月見ん秋を契りおかん
　池のこゝろのへだてあらすば

春過て花はちれども柴の戶を
　とふ人からの山の下蔭

とみにさしいらへもえし侍らで、おこたり侍りぬ。

考へて見れば自分のやうな實に愚かしい身でありながら如是云ふ機會を得てこの有難い山莊に今日のやうに面白く遊び興ずることが出來たのはまあ何と云ふ幸福なことであらう、分に過ぎた果報では無いかと思ふては反つて何處にか安心せぬやうな感情が起る。此のありがた過ぎると云ふ感謝の情を口に出しても言ひきれず躊躇して居る時、御主人樣の御歌に如是云ふのが出來たと御示しになりた。

(歌)今は夏の初めである。此家の廣澤の池を照らす秋の月其月を一緒にまた如是して見たいことで

ある廣い此の池の何の遮ぎる所もないやう足下の心に承知してさへ與るれば今から此の秋の事を約束して置きたいものだ。

(歌二)最早や春は疾くに過ぎて居る、美しい花も散り果てゝ見所もない寂しいつまらぬ山蔭に、柴の折戸を敲いて訪ねて來て與れた其の志は實に恭ない、誠に山家の面目とも云ふべきである。と云ふ歌を詠んで見せて下されたが、何と御返歌して好のやら一寸の間には出合はず覺えず失禮をしたことである。

げにかうやうのたへなるところにわたりては、言の葉も及ばじとき〻侍りしもいまひしとおもひあはされて、いかになどかまねびいでんやうなくからうじて、つたなき口すさびに、心うけれどえはちあへぬ。かたはしをもらし侍る

底ひなくすむべきかげも廣さはや
　月見ん秋を猶したふなり。
よそながら思ひしよりも淺からぬ
　住む人がらの山の下いほ

凡て斯る名區勝地に遊ぶ時は果敢ない人間の言語を絶するものと云ふことを平生聞いて居るが今目のあたりの事に實にさうであると愈適切に感じた。如何にかして何とかの御返歌もして見たいと燥搔いても中々出來さうでもなかつた。苦心の結果やつとの事で拙い拙いものが口頭のものとなりた。發表して御覽に入れるのも實に耻かしくてつらかつたが詮方なしに一二を御聽きに入れた、其の歌は

(歌)申す迄もなくこの廣やかなる廣澤池の水底のはてもなく澄むべき秋の月見んことを今から願うて居るので池の心に隔ては無い筈です。

(歌二)兼々からお噂には聞いて居ましたが來て見

ればまた格別の處それも一つは御主人公の貴方樣の深い御厚情が嬉しく身に餘りて此處の片山蔭の御住家はとても忘れる譯には參りませぬ。

ながかりつる日もいつしか、入相の名殘せつなる夕月、ほそくも重なる青葉を分けてもりくる光、秋の木の間の心づくしにもまさりて、庭もまがきもこよなうあはれふかし。あかずくれゆくたそがれの空のおぼ〱しきにまいて池の面は打けぶりえんにをかしく月さしうつりたる、云はん方なし。名だゝる春秋はなほいかならんとおもふも一かたならず。

長いと云はるゝ春の日の長かつたのも何時の間にか暮れかゝつて、今は日も入相、一日の名殘惜しさは犇々と胸にこたへる。西の空には夕月の影が生ひ茂り重り合うて居る靑葉の木の間から微かに光を洩らして居る。此の美るはしい絶妙の景は物思はれ勝なる秋の月の木間隱くれにもまさりて哀が深い。實に今宵七日の夕月の弓張に照らされて居る此處の庭此處の垣根は何とも云へぬ、何物も比べやうはない。何時まで見ても飽くことはない暮れ行く黃昏時次第に暗く朦朧として來る空の具合、殊に廣澤の池の面を立罩めて來る夕煙夕靄、それは面白く艶めかしく照らして居る月光は嬌！婉！何と云つて讃めて好いのか。これから推せば春のおぼろ月、秋の冴え切りた月の風情はまたどんなに立派であらう、奇麗であらうと想像を逞くされることであつた。

とかくやすらふうち に夜もはや子 の刻ばかりになりぬれば立かへらんとす。なごりも例のさらに興じみたれ、たど〱しき道のほどもおくらせ給はりければうれしくてたゞ夢のうきはしさむ れば



おもなくわが家につく。
斯くとやかくして遊び樂しみ、夜は何時の間に更けて子の刻（今の夜中零時から二時まで）にも成つて來たので愈京都の方へ引き返すことにした。還る即下まで互に遊び興じ、日も落ち黑闇に覺束ない道を遙々と御主人樣自ら送りて下されたのは實に忝なく嬉しかつた。此の間の事何事も只夢のやうに覺えて夢中に渡たりて來た夢の浮橋其の夢から覺めたときは何となく耻しい面目ないやうな氣がしてわが家には着いた。

（完）

MISCELLANY IN ENGLISH AND JAPANESE.

By A. Miyamori.

I. Letters. 書簡

Invitation to a Magic Lantern Meeting.

20 Kōunmachi, Mata, Shiba Ku,
Wednesday, May 11.

Dear Mr. A. Miyamori:—

I write to invite you to a magic lantern meeting at my house Friday evening (May 13) at half past seven.

Sincerely yours,
Gilbert Bowles.

幻燈會に案内する文

拜啓来る十三日午後七時三十分拙宅に於て幻燈會相催候間御光来被成下度此段御案内申上候　艸々

五月十二日　　ギルバートボールス拜

宮森麻太郎様

Answer to the Above.

Thursday, May 12.

Dear Rev. G. Bowles:—

Thank you very much for your kind invitation to a magic lantern exhibition. But I am sorry I have an engagement for Friday evening. I hope you may have a succesful meeting. With many thanks and regrets,

Yours most faithfully,
A. Miyamori.

55 Sangenyacho,
Azabu Ku.

同返事

拜復幻燈會へ御案内被下難有存候得共同晩は生憎先約有之出席致兼候間不悪御思召可被下尚御盛會のほど奉祈候　草々

宮森麻太郎拜

ボールス様

Answer to An Announcement of a Bicycle Trip.

Viscount Y. Matsui,　　April 30th, 1904.

Dear Sir:—

If the weather permits and if nothing comes up to prevent my joining your bicycle club, I hope to be present at the outing on May 8th.

Very sincerely,
Yone Yanagisawa.

30 Nichome
Kobinata Dai Machi,
Koishikawa.

自轉車遠乘の通知に答ふる文

拜復來月八日晴天に有之且つ他に差支の事出來無之候はゞ御同行相願度と存候まづは御返詞まで　艸々

四月三十日　　柳澤よね拜

松井子爵樣

II. Pleasantries. 笑話

A Lovable Character.

Singleton.— How did you come to fall in love with your wife?

Littleton.— I married her for her money, and afterward discovered that she possessed twice as much as she claimed to have.

愛す可き人柄

甲曰く『君は如何して奥樣にほれるようになつたのですか』

乙『僕は家内が錢を持てゐるから結婚したのだ後になつて調べて見たら初め家内が言ふた金高の二倍持てゐました』

"The Last Shall Be First."

Tess.— I've begun to read that novel you loaned me.

Jess.— Oh! have you? It's queer the way the first chapter opens, is n't it?

Tess.— I have n't come to that yet.

甲『君が貸して下さツたあの小説を僕は讀みかけました』

乙『そうですか。第一章の冒頭が妙ではありません か』

甲『僕はまだそこまでは讀みません』

A Soft Answer.

Actress (angrily).— Did you write that criticism which said my impersonation of the "Abandoned wife" was a miserable failure?

Critic.— Ye—y-e-s; you see, you looked so irresistibly beautiful that it was impossible to fancy that any man could abandon you.

柔かなる答

女優。(立腹して)『見捨てられた妻』の私の扮裝が出來が惡いと云ふ批評を書いたのはあなたですか。

批評家。左左樣です。あなた非常に美いでしたからどんな男子だッてあなたを見捨ることが出來るとは思ひも寄りませんほどでした。だから不出來と申したのです。

Age's Reverses.

"How old is Miss Oldgirl?"

"She says she has just turned eighteen."

"Eighty-one?"

年齢の轉倒

甲、年寄孃は幾歳ですか

乙、あの人は丁度十八を廻ッたと申してゐます。

甲、其れでは八十一歳ですか。

Some Benefit.

Friend.— Has your son learned much during his college course?

The Old Man.—I'm afraid not, but I've learned a whole lot.

幾らかの益

友人、—御子息さんは大學在學中に大に學ばれましたか。

老人、—否得るところは多くなかッたしかし私は彼の在學中大に得る所がありました。

The Modern Answer.

She.— If I should die, would you soon forget me?

He.— What a foolish question! Have I not taken the full course in the "Memory-taught-by-correspondence-school?"

當世風の返辭

女。若しも私が死んだらあなたは忽ち私の事を忘れはしませんか

男。馬鹿な事を尋ねるねー。私は通信敎授記憶術を

卒業したではないか。

III. News Items. 新聞記事

Cotton Declared Contraband by Russia.

Shanghai, May 11.

Russia has declared cotton as contraband because it is used in the manufacture of explosives.

露國棉花を禁制品とす

露國は棉花が爆裂藥の製造に使用せらるゝの故を以て之を戰時禁制品と宣言したり。

The Tsar and His Troops.

London, May 15.

The Tsar left St. Petersburg on the fifteenth inst for Kharkoff and Kieff, to bid farewell to the troops going to the front. He will be absent ten days.

露帝の軍隊見送

倫敦五月十六日發電

露帝は戰地に出發す可き軍隊に告別せん爲め十日間の豫定を以て本月十五日カルコッフ及キエフに向ひ聖彼得堡を出發したり。

Admiral Skrydloff at Vladivostock.

According to a report received at official quarters, Vice-Admiral Skrydloff has arrived at Vladivostock and has embarked on the armoured Cruiser *Rossia*.

スクリドロフ中將浦鹽に着す

其筋に達せる報導に依ればスクリドロフ中將は浦鹽に到着し裝甲巡洋艦ロシア號に座乘したりと云ふ。

Japanese Spies Shot at Kinchow.

Chefoo, May 15.— Seven Japanese disguised as Chinese entered the enemy's lines at Kinchow on the 6th instant and were arrested and shot.

日本間諜金洲にて銃殺さる

芝罘五月十五日發電。支那人に假裝せる七名の日本間諜は去六日金州の敵線に入り捕縛せられて銃殺せられたり。

A Railway Accident.

Nagano, May 24.

The first up-train that left here this morning was derailed at Usui. No injuries to the passengers are reported.

鐵道事變

五月廿四日長野發電

今朝當地を出發せる一番上り列車は碓氷にて脫線せり。但し乘客死傷の報知なし。

The Premier at the Palace.

Count Katsura, the Premier, proceeded to the Imperial Palace yesterJay morning and was received by the Fmperor.

桂總理の參内

總理大臣桂伯は昨朝參內して陛下に拜謁したり。

Mr. Narita.

Mr. Narita, Japanese Vice-Consul at Manila, who has been staying here on leave, leaves Shimbashi this afternon at 4.30, and proceeds to Manila by the American steamer *Mongolia*.

成田氏

マニラ駐在日本副領事成田氏は賜暇滯京中なりしが今朝四時三十分新橋を出發し米國滊船モンゴリア號にてマニラに向ふ。



日本女子

夜の鶴

藤の舍主人補評

本書は宇佐大宮司到津公峰の母其女子に敎訓せしものにて豐前國四日市の舊族渡邊完氏の珍藏する所なり書後に貞享三年八月日とあり即ち其公峰の母は德川の中世延寶元祿の間に於て早盛年を過ぎたりし人なるを知るべし此時元和偃武の年より七八十年の後に當り德川氏太平の第二期に臨み漸く文敎の盛を致し上下の俗自然柔化に陷り淫靡の習都鄙の人心を毒し天下の士人殆んど天子あるを忘れたるの時なりき宇佐一門の士人王朝の故俗として保元建仁の遺民たるを忘れず建武延元の孤憤を棄てず閨幃の裏猶ほ王朝の古文を誦し賢母の其兒女を誨ふるに自ら規矩ありしは本書に其心情鬱積せるに見ても其子として公峰を出し其曾孫として公古を出せる亦た偶然にあらざりしを知るべきなり。

大友宗麟天主敎を信じたる時代は元龜天正の交にして宗麟西班牙人の傳に依り大に火器を鑄造し多く其領内の神社佛閣を毀ち銅材を蒐めたり天主敎信者の宗麟は素より憚る所なく神庫を侵し宇佐神宮の

金銀珍寶も多く其奪ふ所となれり爾來神苑の廢頽甚しかりしも幕制の峻嚴廣く募金を許さず公峰白方苦辭幕府の特許を得て其修營と神庫の保護を完うしたり爲めに紀傳寶什の散逸を防げり事仄かに天聽に達し竊かに綸言を賜はりしと云ふ是より到津氏の朝廷を奉ずる更に一層の厚きに至れり。

斯の公峰の母二人の女子あり姉なる人嫁つける際本書をものして與へたり其妹なる人は宮仕して後渡邊氏に嫁せりと云ふ本書は實に其の手寫せしものにして筆跡極て潤麗なり今此二女の行實詳かならざれども渡邊氏の傳ふる所によれば寔に靜淑なる女性にして同家々庭の内事此人に軌範せるもの多しと云ふ渡邊氏淸素勤儉を以て家法を立て數世文學の士を出し德を積み恩を施こし永く郷閭を風化し今日に及べるもの多く個の賢妻の内助に功ありしを知るべきなり。

渡邊氏は豐前の舊族にして豐臣德川兩世の間遂に進仕を求めず勤儉産を治め四日市の素封家たり其時雨亭記は皆川淇園の作に係り高山彦九郎柴野栗山池大雅賴春水山陽竹田雲華等常に其門に出入し宇佐及彦山の勤王諸士亦多く其庇陰を蒙れり避陬の一私門を以て歷代天下の士を牽ゐて家貲を蕩せざりしものは實に其家道の礎盤鞏固なりしを想像するに足れり。

同家に元祿以降歷代男女の衣服を保存しあり都て木綿麻の類なり前後數代高家の姫君たちも多く入輿ありしに孰れも皆家法の木綿衣服のみを用ゐたるは比類なき淸素の家風を見るに足れり其數十重の木綿麻衣類中唯だ一襲の紬紋付あり是は當時の主人幕命に依り朝鮮使節接待の職を奉せし爲めと云ふ一地方の大家舊族として富萬金を致し奢侈の世好を斥け永く家範に遵し自ら奉ずるの薄き是の如くして世を救ふに吝む所なき當今の奢侈を趁ひ世を毒して自ら省る所を知らざる者に比すれば蓋し又た玉壤の差あり。

到津渡邊兩家は叙上の如く歴世學問を好み家庭の清脩當日の武家者流にあらず婦人女子に至る迄王代の古書を誦し自然に天子の尊きを知り徳を積み恩を施こしゝかば公峰の孫に公古を出せり公古の幼時は實に本書の著者なる公峰の母の老後にして公古亦た篤く其愛育を受けしと云ふ公古小少より學問を好み博く和漢の書を讀み大義名分を明かにすることを勉めたり當時偉人烈士輩出し往々朝廷の式微を憤慨するものありたれども江戸幕府武辨の威觀竟に犯かすべからざるものあり公古慨然意を決し出でゝ京都に住し和歌を以て交を縉紳公卿の間に結び天闕に咫尺するの榮を蒙るに到れり公古素より和歌を以て當世に名あり其天闕に出入するも表面名を文墨に晦ませるも天意のある所と公古志の托する所は實に騷人無用の閑文字にあらざりしなり。

高山彥九郎の玉の御聲のかゝる嬉しさと詠せしも實に當時の事にして林子平の海國兵談ある蒲生氏鄉の山陵志ある皆な當時に屬せり而して刻本大日本史の献上あり之れに次ぐに山陽の日本外史其他各他の王覇を辯じ名分を論ぜる著書當時の作に係れるもの一々枚擧に遑あらず是れ素より文運の推移と云ふべけれど光格天皇の英明卓拔其回運の天旨畿甸の山河に盤結して卓犖の士人に感應するもの尠しからざりしに依らずんばあらず旦夕玉楷に咫尺せる公古周旋の勞憶ふべきなり。

公古光格天皇の殊遇を蒙り累進して從三位に至れり當時神職劍工等の官職は吉田官と稱し朝廷の班列に關せざるものなりしが公古の位官ありしは神職の出身なると名門たるの故を以て特例に屬し朝班に準せりと云ふ後日筑後の眞木和泉守が水天宮の神職吉田官の從五位を以て遥ちに朝班に列せしも又た此例なり到津家に於て此の位班に昇りし者は保元壽永の間に西海の重鎭として平門の一臂たりし豐肥對三州太守公通以來一人と稱せり。

公古が禁中に姻縁を繋ぎしは其書の寫者たる侍従女の宮仕に基因せるが如し是れ實に公古の大叔母に當れるなり到津氏の家庭は桂蘭庭に茂生し春風堂に芬馥たるの觀あり渡邊氏を初め親姻故舊多く其化を蒙りしもの閨幃化育の巧與かりて力ありと云ふべし後世人の母たるもの宜しく鑑みざるべからず。本書は賢母が二女子に教へたるものなれば必しも是を以て廣く世を補ふの意にあらざるべし予も亦た本書の趣旨を以て當今の女流に強ひむと欲するものにあらず唯だ斯の母たるの心を以て子を誨ふるの丁寧懇厚なる當今の女流に一省を促さむと欲する也他日人の母たるもの筆舌の美に僞善を飾り文明の皮相に牽戀して自ら省みる所を知らざる世間一様の著書と等しく譲過せらるゝこと勿れ原因結果の一斑を知らしめんが爲め予が聞く所の大要を錄すること爾り。

明治二十七年六月　　藤の舍主人

本文

長からんいのちのほども、しら雪の降りぬるとしのつもるまゝに、くれ竹の子の老いたつ世々もおぼつかなしや。位山あとをたづねてのほれども、子を思ふ道になほまよふとあり。故ある人さへかくのごとし。いわんや、我らごときの愚なる身に於てをや。またつれ〳〵草にも『鳥けだものを見よ、くちなるゆゑに、子をあはれむこと人よりもなほふかし』とあり、我又是に同し。いさめをしふべき言の葉もしらまゆみ、あれどもわらぬよしなしことを書つけ侍る。是後のあざけりをまねくなるべし。されど、ふたりの女の子とも人となりて、もし世のことわりをもわきまへなば、かつはかたみとも、またはわらひ草の種ともならんかし。

のほるへき雲路いかにと鶴の子の
すたちはなれんゆくえをそおもふ

一、女の心持の事。
一、親にかう〳〵の事。
一、をつとにしたがふ事。
一、はらからのまじはりの事。
一、家をもつ事。
一、信心をおこすべき事。
一、老をあはれむ事。
一、いとけなきをいたはる事。
一、かいま見すまじき事。（此一章は闕文となれり）
一、ひるねすまじき事。
一、よるのねさめの事。
一、雪のあしたの事。
一、おとろへたるをいやしめざる事。
一、花をたつる事。
一、文をかく事。
一、ものたちぬふ事。

一、ものねたみの事。

一、おやおりものゝ事。

女子心持の事

人として天理にしたがふときはながらへ、天理にたがふときはほろぶ。天理にまかせぬればもとめずして利あり、欲にしたがふ時は思ひの外なる害あり。すべて、人の善悪は、そのむくひなきにしもあらず。漢の馬援かいはく『一身終るまで善をおこなへども、善はなほ足らず。一日悪を行へば、悪はおのづからあまりあり』といへり。たとへば、一方の毒丸のよく命をうばふがことし。誠に心得べし。中にも女の身とうまれぬれば、よろづのこと、むつかしきものなり。されば、立ちても居ても、ねてもさめても、我心にまかすることなかれ。まかせんとおもへば、世にも足を地につけざるやうによろこばず、かなしきことありとも聲をあげてなげかず、しづかにしておくれず、さしいでず、けはしからず、じんじやうにして氣だかく、いひける言の葉もなかば過ぎぬほどにてやむべし。それはそのことわり、これは此ことわりと、道理をいひのゝしるは、似合はざるふしもあるぞかし。言葉多きは、しなすくなしとやらん、すべて女のあるべき様を能くしあんして、ものごとに心をつけて、欲あさくして情深く、端ちかくさしゐてはとふべき人にことはり、はらたつる事あるときは、おもくして、いふべき事いふまじき事をよくかんがへ、いはでかなはざることあらば、かたはしをいひさしてよし。源氏にも『すへはいひけちて』とあり。ものやはらかにして、行儀作法みだれざるはおもひいれはつかしと人も見るぞかし。我こゝろにかなはぬとて、言葉あらく聲高く、頼む人ともいはず、あしきさまにいひなしては、ひとに二たび顔をあはすべきやうなし。古

き歌に、

こゝろこそこゝろまとはす心なれ
心にこゝろ心ゆるすな

かり初もわしきかたへはひかれ行
こゝろの駒にたつなゆるすな

立ても居ても、てもさめても、我心にまかすることなかれ、我心に任せざるこそ、東洋數千年この方の婦女子の敎にぞあるなれ、これを儒の敎に順の道とは云ふなり、中程よりこまかに女の心得を説きて、欲わさく情深く云々と云へり、是れは朱子の小學に、小心翼々とある心にひとし、氣を附けて見るべき處にこそあんなれ。

親にかう〳〵の事

親にかう〳〵をなすことは、高きよりいやしき賤山かつに至るまで、其心同じ。されば、親の恩の深き事は、たとへをとるにはかりなし。かり初にもわすれまじきは、父母の事也。ふるき歌に、

子は親に似たるものぞと聞からに
こひしきときは鏡をそみる

とあれば、朝夕鏡のかげを見るたびに、先づ親をおもひ出るもの也。たとへば、植木をそだつるがごとし。草花をうゝるがごとし。根によく土をかひぬれば、其草木よくさかえ、枝葉せいちやうす。人も父母の恩を知り、先祖をわすれず。よくまつるものは、かならず子孫繁昌し、家さかうる也。しかはあれど、女は

家親に孝行のこゝろざしふかしといへども、年たくるにしたがひ、人の家をしるゆゑに、心にまかせず。いかにして深き恩を報ずべき、夫の親をわが父母とおもひ、孝行を盡し、誠をもつてつかへぬれば、一たんあしきあてがひありといへども、こと〲心ざし天に通じ、つひに孝行の名をうる也。されば、父母の名をあげぬるを第一とす。それかう〲は、こゝろみじかくてはなりがたし、日をつみ年をかさねて、かう〲の功つもらねば、親の心にかなひがたし。少しのわたくしの心ありては、天是をうけ給ふべからず。いつはりまがる心ざしありて、人をあざむくものは、まづみづから我心をあざむくなり。こゝろをあざむくは、是天道を欺くなり。いつはりをもつてまことをかざり、わたくしをもつて正直をくらます也。人は是を信すべし、天道は僞なし。心にしめてかう〲を忘れざれば、その心天にかなふゆゑに、はからざるにさきはひを得る也。

鏡の面影に親を思ひ出ると、女子に訓ふる心の程いとうつくし、女は年たくるにしたがひ、人の家をしるゆゑに心にまかせず、夫の親を我が父母とおもひ、孝行をつくせと教へたるは、誠に深き親心なりけり、今の新らしき教を受けたる女子の、後日其子に教ふべき筋は、ひとしきかかはらむか、唯だこの親心に私あらば、必ず其子を誤らむ、いと心して讀み玉へよかし。

夫にしたがふ事

夫婦はもとより貞順にして、もろともにいとひあはれみしたがふといへども、義と利と仁をしらざれば守りがたし。かり初にも夫の心にそむきぬれば、家をうしなひ、はぢかましき事ある也。たとひめしつかふ人ありとも、夫のためには、みづから立ちて宮つかへ、衣裳身のつくろひ、刀帯たたう紙までも、いたら

ぬぐまなく、心をつくべし。婦人の身と生れぬれば、寒けれどもひとり着ず、飢ても獨り食せず、折にふれては、月を見、花のもとにやすらふとも、獨行くことなかれ。

むつかしき夫婦の事はいはずもがな、當時の習としてこの敎あるは、猶ほ今の夫婦諸共に業を勉むべしと敎ふるにひとしかるべし、近頃西洋の女子の敎入り來りて、いと遠く變はれる習を打混じ、この道に迷へる人の多きを見てはまた憐れに思ふなり。

兄弟のまじはりの事

兄弟は、たがひにその禮あり。姉は、妹をあはれといたはり、ねんごろに心をつくべし。妹は姉をうやまひしたがひ、誠をもつて心さしをいたすべし。親なからん後は、たがひに紀念と見かはし、もろともに相おもふべし。我兄弟を愛する心をもつて、夫の兄弟をいつはりなく、禮義を正しうしてまじはるべき也。今の世の人を見るに、すこしのうらみをふしたてゝ、心よからず、たがひに見ぐるしき事もいひけるは、無下に口をしきことなり。

今の世の人を見るに、すこしのうらみをふしたてゝ、心よからず、たがひに見苦しき事もいひけるは、無下に口をしきことなりと、今も昔しも兄弟の交りはさること多し、殊に娶りて後ちに兄弟の情薄らぐは、多くは女子の心立如何に依るぞかし、そを互に其禮ありと云ひ、重て夫の兄弟をいつはりなく、禮義を正うせよとて、言みしかに敎へあるは、却て母の情深きを知るべし。

家をもつ事

家をさむるには、わざはひをはらふに過ぎたるはなし。わざはひを拂ふときは、さいはひおのづからいたるべし。人の心に善を起せば、善いまだならずといへども、善心すでに是又したがふ。わざはひを拂はんとおもはゞ、先づ訟を聴くべからず。うつたへをきく人は、わざはひ必らずきたるべし。其心のせばき人は、かならずうつたへをよろこぶなり。よくつゝしむべきことなり。此ゆゑに、たとひ家ひろくはんじやうするとも、心をせばくちひさくもてなし、人に人とも思はれず、廣き家もせばくなり、ほろびうせなん。せばき家のうちも、窓打はらひ、見るめのどやかにすまひなしたるは、いぶせくいやしからざる人ならんと心にくし。丹後のみかさといふ所に宿かりし人あり、あさましき小家なりしが、女の手ならひせし草紙とりちらし、硯のわたりに、八代集ぬきがき、朗詠の詩など、さはやかにかき、歌、連歌など書き捨てたる有りしに、めもおどろき侍りし、さてこそ此家に住む人の心のうちはひろく、いたらぬくまなくこそあらめと、浦山しくありしと、むかし人いひをきしなり。萬、心をつけて分にしたがひ、奢をとゞめ、欲をうすくし、ぶんさいをしり、足れりとする時は、心ゆるやかにしておそるゝところなし。

戒單に國を治め家を治むるには、一利を擧げんより、一害を除くに如かずとあり、斯の母の心も亦た爾るなり、禍を拂はむとおもはゞ、先づ訟を聴くべからずと敎へ、ひがめる心を矯て、和歌の樂みなどに移るべきを勸め、終に奢を戒め欲を制したるは、禍を拂ふと云へる、敎の條理明かなることにぞある。

しん〴〵をおこすべき事

神は正直のかうべにやどらせ給ふと、世俗にもいひならはせり。中にも、社職の家に生るゝもの、神を仰

ぎうやまひたてまつる心なくば、めうがなきなり。敷島や大和の國中にすむ人は、たれか神の御恵にもれん。朝夕忘るまじきは信心なり。わざはひ來りて、身にかふむるときにあたりて、天にいのり神に申して、のがれんことをもとむといへども、わが身天理にたがひ、神にそむき世に捨られ、人にうとまれ、果てはかのわざはひを拂ふところなかるべし。おそるべし〳〵。信心のまことをもつて、信じたてまつれば、家さかえ、子孫はんじやうすること目の前なり。

大宮司家の母の敎としては、必ず此の一段なかるべからず、おそるべしおそるべし、信心のまことをもつて信じたてまつれとは、さも厚き敬神の情、正直の一筋なる心と云ふべし。

老をあはれむ事

老たる人を見ては、かならずいやしむる事あり。これおほきなるあやまちなり。たれも、一たびは老となるなり。世にうつくしき人も、老いおとろへぬれば、手足のはたらきも心にまかせず、耳もうとく、目も見えず、腰かゞまり、歯さへ落ちぬれば、しよくするにあぢはひをしらず。かゝる身となりぬれば、若き人のあはれみならでは、一日も世に立がたく、たとひ、ひが〳〵しき事ありとも、老のひかみとおもひなすべし。かまへて〳〵、あはれむべきは、老いたる人ぞかし。

たとひひが〳〵しき事ありとも、老のひがみとおもひなすべしとは、げに深きなさけあるいましめならずや、よく心得置てこそよけれ。

いとけなきをいたはる事

若き人は心おさ〳〵として、すゝまず。ねちけず、うらやかにして、心つよう、仁ありてめやすく、うわめかず、おくれず、何事も知りてしらず顔に。いはずして、またいふべき事は、ものやはらかにいふべし。總じて、人の惡しきこと、よき事、見てみず、我よりおとなしき人におそれしたがひ、おさなきものを、いかにもおやげありてあつかふべし。いづれの子にても、おさな心にはよきはこのまぬものなり。さりとてすげなくしかり、はげ〳〵しくいひて、かさねてこざらんはしかるべからず。只毒などのやうのもの食はせざるやうにすべし。其かたへつかはしたる、其所にてやみ出したるなど、人にいはれんも口をし、また人のいとほしがる子どもを、さい〳〵よひとりいはれんははづかしき事なり、四十にたらぬうちは、心をつけてつゝしむべし。それ過ぎても、事により、人により、所により、とうぶんのぶんげんにより、心あるべきことなり。

　こまやかに說きたる中に、おさなきものをいかにもおやげありてあつかふべしと云ふて、食物の事迄心を注ぎ、愛の過ぎんも猶は戒めを加へて、四十にならぬ內は心をつけてつゝしむべしと云ひけるこそ、いとまめ〳〵しけれ。

晝寢すまじき事

女のひるねなどすること、ずいぶんつゝしむべし。しんたいよろしく、何にてもするわざなき身ならば、近くめしつかふものどもにも、やさしき昔物語などせさせ、我身も源氏伊勢物語のやうのものども見つゝ、こしをれにてもつらね、連歌の懷紙にても取出し、なぐさむべし、あからさまにも、いたづらふしゝて、人に笑れば口をしかるべし。晝寐、朝居、夕まとひ、いたつらの最上也。

小說を讀みひるねする女子の多き今日に、此の手近き敎はいと難有事共也、何にてもする事なき身ならば、讀かきをも樂めとは、孔子の行有餘力則以學文の意を得たり。

夜の寐覺の事

女は人より遲くいねて、人よりとく起き、うちふすとても心をしづめ、吹く風降る雨、月、雪、花、紅葉折々ことにふれつゝ、こしをれ歌にても案じいねたるがよし。しともなき事などおもふべからず。思ふ事をこそねでとにもいはるゝとやらん、つゝしむべし。物こしなどことにはづかしきものなり。若き女房のあつまる所には、たち聞、のぞき見などするものなり。心安きとちとて、高聲に物ねがひなどすべからず。かの在五中將のなしつぼの立聞などこそやさしきふしもあれ、ふつゝかなることといひ出で、人にきかれんかなしさや、こゝろやすきどちとて、よしなき事など語りわらひぬるは、その折は面白けれど、後ははぢかくもとゝなる也。とかく人と物語するとも、よしなきそゝろごと、ざれ事まじりにいふは聞にくし。いさゝかも人のちゑになること、やさしくおもしろきことなど、語りなぐさむべし。それもやはらかにして、あいきやうあるこそよけれ。

心にわだかまりあるをいましめて、心を沈め云々とは、げに氣高く覺ゆるなり、怨慾の念を遣るに、詩歌の道にことよせうつすは、古き敎にもあることなり、中程より手近く、愼の事を敎へ戒めたるこそ寔に修身の良法とも謂べけれ。

雪のあたしの事

雪の朝などは、千山萬木こと〴〵く白妙にして、庭の梢となるに、高き人はうけんかうらいかさねしき、八重屛風立て、凡帳のひきものゝうちにして、きよりやうあやにしき裁かさねたるおん衣に、ことゝわれて見給ふ。それより品くだりては、衣裳も見くるしからず、寒からぬほどに身をつくろひ、火桶うつみひかきおこしあたゝめ、酒などとりちらし、見るこそ、雪のあしたのおもしろさは、ひときはまさりてなどいふ。それさへつよくふりふゝきする折からは、さらし引立らるゝ身ぞかし、賤しきものゝ、薄き衣、麻の袖などはだへをかくしかね、宮づかへの身なれば、明るより暮るゝまで、雪にまみれてはしりありくは、さぞそかなしく思ふらむと、心をそへて憐みいたはるべし。雪、月、花、紅葉、たゞおもしろしと見てはかいはあらん。前世の戒行薄きが下に生れ、くわはうあるか上に生るゝ、皆おなし、人、同じ身なり。などかあはれを加へざるべき。常にめしつかふ人ならでは、物いふ沙汰し、起伏たくひなきふりふせひ、かはかたち萬をいふこと、よそにひろごりて、さたし侍る。よそのものは、心實をばしらず、よその人はまれにあへば、たしなむなり。常はうちとくるゆゑに、色々沙汰せられ侍る。只日々におそるべきは、めしつかふものなり。こゝろおくべきにこそ。

上は八重屛風凡帳のひきものゝうちにして、きよりやうあやにしき裁かさねたるおん衣、中は衣裳も見苦しからず、寒からぬほどに身をつくろひ、火桶うつみびかきおこし、酒などとりちらし、下は薄き衣、麻の袖などはたへをかくしかね、朝よりくるゝ迄、雪にまみれてはしりありくは、さこそかなしく思ふらむとて、皆同じ人同し身なり、などかあはれを加へざるべきといひけるは、樂に附けても深き戒を加へたることにぞある、當時上下貴賤の隔たりし世に、大宮司家の母なる人が、かしこくも皆同し人同し身なりと云ひたるよな、是に見ても德高き女性なりしを知らるゝなり。

おとろへたるをいやしめざる事

むかし左大將家の事にや、付句の上手なりければ、帝より給はらせ給ふ。

よことにものゝひちめきぞする

此句に、大將付かね給うて、出家せんとて、隨身一人めしぐし出させ給ふ。丹後の國雲のはたといふ所までおはして、御足いとゞありきつかれ給ひて、日のほと御覽ずれば、七つじぶんになりぬ。さらばとて、賤がわらやのあさましげなるに入らせ給ひて、御足休めなどし給ふに、おわします所の庭に、十七八ばかりなる女房の、柴といふものをいたゞきて來りつゝ、あなくるしとてきたなけもなくて、此おわしますおくの方うちに入りぬ。いねたらんかとゆかしくて、さしのぞき見給ひければ、さはなくて、机にむかひ手習して居たり。うつくしき筆のたてと、御目もおどろかれ給ふ。つくづくと御覽じて、の給ひよるべき便なければ、此句をさしやりての給ふやう、是は都方の者にて侍るが、此句を給はりてえ付侍らで、行衞もなくまかりうせなんとおもふ、御ことを見て行べくもおぼえず、あはれ此句をつけて給はらば、なかき世のともにてこそ侍らんと、かへすがへすの給ひければ、顏うちあかめて『さる御方さへさおぼしめさるゝ御大事を、此身にては』とてとりても見ず、さりとて御覽じてとさしいたさせ給へば、とりてかたはしにかき付侍る。

魚の子の竹の筧を傳ひ來て

なのめならず覺しよろこびて、かへすがへす契り置きて、都人歸らせ給ひて、奏せさせ給ふに、あまたありし付句の中にて、おもしろしとて高き御位にのぼり給ひて、御心のまゝなりしかば、彼女房むかへとらせ

給ひて、君たちあまた出させ給ふ。此はらの君立は、皆歌口にておはしけるこそふしぎなれ。女子をばよく心をとめてそたつべきものなりとにかくはきけど、われらことときの愚なる身に、ふつゝかにのみそだてぬれば、行すゑなほいぶかし。

此の故事の一段をもうけて、おのが好める讀かきの道を勵まし、われら如きの愚なる身は、ふつゝかにのみそだてぬれば、行末なほいぶかしと云ひたるはいとまめやかなり。

花を立る事

女房の座敷に花などさすに、からびたる松杉のしんなど立たるは、すげなし。折にあひたる花もみちの枝、にぎ〳〵しく、さりぬべく立なしたるよし。高松の女院は『女房の座敷には花はおとなくたてよ』と仰られし。おとなきとは、いかやうのことにて候やらんと申せしかば『唯あまた立よ』と仰られしなりとぞ。心得べし。

室内の飾り花を立る事迄、心を附けて怠りなく勉むべきを教へたるなり、唯あまた立よと女院の故事を引きたるも、そはよき程もあるものなるべけれ。

文を書く事

女の文つかはすところ〳〵、心得あるべし。親兄弟は勿論、伯父伯母、それより遠きかた、男子ならば、ことによりていらざる事なり。それもさりがたきことあらば、折にしたがふべし。若き女はさやうの事もよく心得あるべし。ものいひさがなき人の世の中に、いかなる沙汰にあはんもはからざる事也。あはれお

そろし。
文とりやりの手易き今日に、若き女の交り、此事深く謹みて誤なかるべし。心を留めて讀むこそよけれ。

物たちぬふ事

伊勢物語にも『しはすのつごもりに、うへの衣のかたをはりやりて、いやしきわざもならはさりければ』とあり。もの裁ぬふ事は、さがりたる事のやうにいにしへもいへり。されども、大内にも見くしけ殿とて、御ぞをさたし侍るなり。世のつねの人も、すこししんたいよろしき人は、御物師などいひてめしつかふ。されども、我としらぬは、したてものゝかつかふ、心にかなひがたし。源氏物語にも、紫のうへに花ちる里は、かたの手きはゝおとり給はざりし、末摘花のさび〳〵とはりなしたる下かさねはいと見苦るしとあり。何事にてもみづからしらざるものは、人にをしふべきやうなし。まきものなども、紗、綾、綸子、縮緬などやうの道にとりあつかふもの、大床小床により、長さも幅もまち〳〵なり。其外あやにしき、織物、唐織などやうのもの、はゞのひろきは長さと幅をさしあはせ、さだまりたる裁やうの外、さいてたちさまざまあり、品〳〵により、くふうあるべきなり。是はみな人のしる事なれば、こゝにしるすにおよはず。
されば染殿の后は、住吉の明神より物たつ事のふをたまはらせ給ふとぞ。
當日の大宮司家として猶懇ろに此事敎へたるは、よく行届きたることにこそ。

物ねたみの事

女のくせに、ものねたみのみに心をくだく人あり。只何事も、うき世の中に住は、うれしき事もつらき事もあるもの也。たとひうき事ありとも、我身に生れ付たる前業なるべしと、思ひなぐさむべし。さりとてまたうちとけて、家のうちに人ありげもなくおもはれんも口をし、光源氏に女三の宮わたり給はんとありしころ、紫のうへ何となき手習双紙を源氏のおはしたりければ、いそぎ御硯の下へおし入れ給ひしを、源氏あやしみ給ひて引出し御覧しければ、

　身にちかく秋やきぬらん水鳥の
　　青葉の山もうつろひやせむ

源氏やがて、その御そばに、

　水鳥の青葉は色もかはらぬに
　　萩の下葉にけしきことなる

さは身におもふ事ありとおもひしらるゝいと哀れなりとなん。又御衣の大将殿、ひめ君の御はかまきはいつのほどにや、との給へば、一品の宮、

　思ふよりまたおもふ人のありやとも
　　こゝろにこゝろとはゞしりなん

との給ひしこそ、やさしきふしもさすがにねたき御心はしられぬれ。さのみおそろしうやつれはてゝ、目やう、かほくせ、うつゝなく、聲たかく、物いひのゝしるは、うたてし。されば、そのぬしもこれをいひなぐさめて、我あやまりをもあらためんとおもへど、聲あらくはげ〴〵しきにおそれて、鬼にむかひたる心地すれば、いとうとみはてゝ、後はあたりの人までにくみあなどるなり。惣して、世に住人は名こそを

しけれ。數ならぬ身にいやしき沙汰あればそれが子にて、いやしきはたらきし侍るといひ、さるべき人のいやしき沙汰あれば、あさましと、人肝をつぶし、親伯父の名をけがすものなり。世にすめば一日に三度名のをしき事をおもへば、いやしき事なしといへり。「女は髪のめでたからんこそめやすき」とはじめはいひ、のちは『かたちよりは心ざまのすぐれたらむこそあらまほしけれ』と兼好もいひをき給ひし。誠に心ざまのゆふにやさしからんにはしかじ。

此の一段は、堅く女のたしなみを教へたることども也。うき世の中に住ば、うれしき事もありつらき事もありとて、源氏の故事ども引き上下古今の習に考へ、はしたなき心起こすまじきを戒めたるはかしこし。

綾織物の事

おりものなどの事は、いらざる事ながら、つねの衣裳などのもやう求む心得にもなるべきにやと、書付侍る也。内裏にてくゝちといふは、何にても一木か、またから草、丸のつぶ〳〵としたる花紅葉などやうのもの、大きにてもちいさくても、かうしなどのおきやうかはりてめづらしきこそよく候へ、ぬひもの繪箔の、また時々により、歌の心、詩の心も、面白く候。いかにも、これらは又きやしやにしたるがよく候。月毎の御ふくもゑよう大かた定りたるが、定家卿の歌に、

春三月柳さくらに藤の花
　うぐひす雉子ひばり啼也

夏三月卯の花かきつ撫子に
　山ほとゝぎすくゐな鵜の鳥

秋三月萩女郎花花薄、鴈に鶉なくなり
冬三月残菊ひはに梅のはな
あられちるなり千鳥水鳥

これらは、四季月々の花鳥の心をもつて、月毎に装束もさだめあるなり。そのうち、色も紋も、形織物まで、卯月ばかり、同じよもぎしやうぶ、五月五日ばかり、誰も〳〵ぬひものにめしかへども、ぬはせやうめづらしきぬし〳〵の心もみゆるなり。おなしものながら、かはりてこそおもしろけれ。七夕の梶の葉もとうせんとぞ。

綾織物の事迄心得をく様を敎へ、内裏の有様をも述べて、自ら王代の古制に考ふる所。公峯の母たる心にこそあるなれ。

貞享三年八月　日

此一巻は、大宮司到津公峯の母、おろかなる言の葉のべて女子をいさめ給ふ。我その妹ながら心さしをしへにかなはず。されども、よるのつるのおなしすだちなれば、子をおもふやみぢをたどること、誠におどるべきにあらず。よりて、つたなき筆のあとをわすれ、むすめのために是をうつしおく、我かたみともなし、心あらん子孫につたへんとなり。

侍従女

新刊 赤十字叢書 第一編

日本赤十字社三重支部事務幹事 山田覺治氏著

世界の花

四六版洋裝 全壹册 定價金六錢 郵税貳錢

本書は、日本赤十字社の趣旨及び歴史を、極めて簡潔なる文字を以て、何人にも解し得べき言文一致體により記述したるものなり、抑も吾が赤十字社の事業たる、年を逐ひて、漸やく盛大に赴くの勢ありと雖も、未だ以て現今の狀態を以て滿足すべきにあらず、益々進んで社業の發達を圖り、社運の隆盛を期せざるべからざるは勿論なり、著者玆に見るあり、此書を著して、三重縣下現社員の後繼者たる小學兒童に向ひ、本社の旨趣を鼓吹貫徹せんが爲め、特に教育家諸氏の贊助を求め、遍ねく之を各學校に配賦したるものなれば、其の内容及び由來の如何は以て知るべきなり、今本所が切に著者に乞ひて之を世に公にする所以のものは、此書の啻に一地方にのみ限れるを憾みとし、廣く之を我國全般に及ぼさんと欲するにあり、願はくば各支部、各委員部各分區委員各位、幸に本社の微衷を諒せられ、或は總會に、或は各學校に、普ねく本書流布の道を講せられなば、赤十字事業の擴張上、資益するところ決して鮮少ならざるべし、

發行所 東京々橋區築地二丁目廿一 日本赤十字發行所

十九版

細川十洲翁序　三輪田眞佐子著

愈第十八版賣切第十九版印刷中

女子の本分

金銀摺彩色表紙大和綴優美

定價金二十五錢
郵税金　六　錢

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

◎女子處世論

菊判洋裝　全一冊
定價廿錢郵税四錢

伯爵副島種臣題字　堀內新泉編

◎家庭の鑑

菊判洋裝　全一冊
定價十八錢郵税四錢

現今諸名家選述

新編ひめかゞみ

菊判洋裝　全一冊
定價廿五錢郵税四錢

伯爵東久世通禧題字　杉谷正隆編

家庭歌訓修身百首

菊判洋裝　全一冊
定價廿錢郵税四錢

發兌元　東京築地二丁目　國光社

千古靈魂

石田三成

水主天姥著

四六判定價卅錢郵稅四錢

勝では即ち官軍。負くれば即ち賊のみ。理非往々にして轉倒し、曲直或は顛逆す。天道漠々、世事茫々慨嘆さざるべけんや。三成六條河畔の露と消えしより三百有餘年に及ぶもその冤枉は依然として、伸雪する能はざるなり。著者乃ち、明決痛切の筆を操て當年の形成を描出し、東西の兩雄たる家康と三成とを較論比評するや。恰も判官の刑を斷ずるか如く、毫も假借宥恕を須ゐず、…褒一貶、一黜一陟の間文舞ひ句踊て千古の功罪を眼前に見るの思ひあり、蓋し近年の快著なり。

幕末偉人

江川坦庵

矢田七太郎著

四六版洋裝定價卅錢郵稅四錢

主人は幕末の碩儒安積艮齋をして「文武兼備勇略越倫」と嘆賞せしめし德川武士。舞臺は近世史中最も興味饒き安政嘉永の幕府時代「清瀧の文警拔の識」韮山代官の傳記として讀むも可一部の幕末史として見るも可、新文明の發達史として見るも亦可なり。道義頽敗して士氣を挑へる今日世人若し武士道の理想的人物を知らんと欲せば｜學生若し日本固有の模範的武士に泰西的紳士の品格を加味したる崇拜者を求めんと欲せば｜速に德川武士の理想的家庭を知らんと欲せば｜此の書繙かれよ

西郷從道

安田巖城著

菊判洋裝定價廿五錢郵稅四錢

大愚乎大智乎滑脫して圓轉する乎停滯して不動なる乎ナニ乎カニ乎一切分らざるよし侯の面目深く侯に私淑する安田巖城に依て寫さる世に一讀の價なしとせんや

長曾部信親

森鷗外著

本は著書森博士が土佐出身の某子爵の需に應じて作られたる琵琶歌なりといふ吟誦一番すれば戰國武士の面影の髣髴として躍るが如きを見るべし嗚呼中津留川原の血戰く骨を曝らしたる此若武者の芳名は靈山の頂と共に高く戸次川の流れと共に長し

發兌元　東京築地二丁目　國光社

S.A.
電話本局四八四番
体操器械
遊戯品一切
東京
神田
安藤商店

演壇

海戰雜話

小笠原海軍少佐談

左の一篇は六月四日女子職業學校內に於て開かれたる大日本婦人衞生會席上にて小笠原長生氏の演說の大要を筆記したるものなり文責は固より記者にあり

今日は衞生婦人會より海戰に付いて、何か話して吳れよとの御賴みがあつて出席致しましたが、是迄方々の會で御話し、また新聞にも載せましたから、定めて皆樣も御存で御座りませうから、今日は特にまだ新聞に出て居ない、御話を致しませうと思ます。

諺にも健全なる精神は健全なる身體に宿ると申しますが、實に其通りであります、如何に心中燃ゆるが如き熱誠や、勇氣や、決心がありましても、其身體にして健全で無つたならば、怎麼する事も出來ないのである、それで此度の日露戰爭に於て、我が海軍將士が世界の耳目を驚かす程の壯烈なる勳功を建てたと云ふのは、一つに身體が健全で有つた爲め、其心の赤誠を表はすことが出來たのであります、そこで昨年

と本年との兵士の健康を比較して見ますると、昨年は百に對する一、一〇〇で、本年は百に對する〇、一〇〇であります、即ち本年は千人に一人、一萬人に十人許の僅かな病者で、昨年に比して却つて少ないのです、それといふのも、兵士が各自身體を大事にして、一意專念君國の爲めに盡さうと云ふ大勇猛心があるからのことで有らうと思ひます、往昔關ケ原合戰の時、石田三成戰ひ敗れて、徳川家康に捕はれたるが一日喉の渇きに忍び兼ねて水を乞ふた、すると一卒が直ちに汲んで來たのが冷水で有つたから、三成は大喝して湯を持つて來いと云つた、傍の者が此を聞いて、何だ今日明日の中に殺さるゝ身でありながら、命が惜しいのかと大に笑つたさうだが、此は靜かに考へて見れば、三成は決して命を惜むで湯を乞ふた譯でなくして、武士たるものは、縱令息の絕ゆるまでも、健全なる身體、健全なる精神を持つて居たいと云ふ考から起つたので、寔に之が即ち日本武士の理想とする處であります。

然れば兵士は平生如何して、身體を鍛へて居るかと云へば、衣、食、住の三つに在るのでありますから、此の三つに分けて艦内生活の有樣をお話し致しませう。

〇衣服は清潔の上にも清潔を守らせて、襯衣や寢具、靴下などの洗濯は、わけて嚴しくして決して不潔を許さない、又木曜日の午後及び日曜日には、衣服の繕縫をさせる、縱令洗ひ褪らして、酷く痛んだ襯衣でも綻は決して許さない、と云ふものは、些の綻びをも構はず打捨つて置けば、自然と其の人の精神に締りが無くなる、のみならず不體裁であるから之が繕ひをさせる、水兵等は中々手器用なもので、其の日課外暇さへあれば、靴下を編だり手袋を編だり、實に巧者な事を致します。

〇次は食物ですが、之れは非常に注意周密で、嚴しく遣つて居ります、ソコで其の給する食料にも一定の分量があつて、其の炊事掛が料理したものを、主計長、軍醫長、副長の檢査を經て、是れで好しと云はれる

までは、少なからぬ手數がかゝるのである、此の如く嚴重にして兵士の健康を保たせやうとするのです。
次は住居とする艦であるが、其の中での操練は種々あるけれど、煩を省いて要を申しませう、先づ毎朝暗いうちから起きて、上甲板の掃除をやる、潮水を汲んで甲板に流し、小さきブラッシュで之を摩る、而して後に乾いた雜巾で拭き取るのである、それが濟むでから、朝食に就かせるのだが、冬の朝などは寒くなつて慄へだす、そこで端艇の競爭をやらせる、二三十分も艦の周回をめぐるうちには汗ばんで來る、が而し旅順近海の如く、寒氣の酷烈な處では端艇を吊つてある綱が水もかゝらぬに、堅く凍つて棒の樣に成つて居る、下さうとするとポッキリ折れて綱が切れて仕舞ふ、仕方がないから、甲板の上を息をも繼がせず、二三十分間走らせる、而して後に食事をさせるのであります、先年英皇戴冠式の時、參列する爲めに、私共が軍艦淺間に乘つて、印度洋を航海しました時、何んでも此度は世界中の軍艦が集るのであるから、定めて皆々技術の競爭をするで有らう、我々も負けない樣に、國の名を落さない樣に、勇ましく活潑にやりたいと云ふので、操練しましたが、最も困難を感じたのは、平時では一週一度しか仕ない戰鬪準備の操練を毎日二三度もすることに成つた、戰鬪準備と云ふのは、軍艦が戰に臨むに先だつて、艦内を片付けたり、又は交戰に必要なる器具を配備し、兵員の邪魔ッけになるもの、例へば鐵の柱や、煙管の雁首の樣な風取袋などは皆下甲板に運び去つて、彈丸除け即ち、マントレット——是は長い丸太を高く横たへて、之に繩を幾十條も懸けた簾の樣なもの——其れを備え付ける、實に忙がしい困難な操練、其を彼の暑くて堪らない、印度洋の眞中で毎日三度位づゝ行らせた、堪たものではありません、而し誰一人病氣になつたものもなく、無事に彼國に着いたのであります。是れに由つて觀れば、健全なる身體には、決して病魔の伺ふ餘地が無いのであるが、一ツは精神も與つて力あると思ひます、其處で我が海軍兵士が如何に次

夫であるかは、去る三十四年北清事變の際、列國の海軍兵が陸戰隊を編成して、北京に向つて行軍した時、よく發揮されて嶄然一異彩を放つたので分ります、一日幾里の豫定行軍を經て、目的地に着くと、諸外國の水兵は、モーヘコ垂れて靴も拔がずに打つ倒れて、寢て仕舞ふが、日本水兵はそうでない、着くと直ぐ襯衣や、ズボン下の洗濯を始めたり、綻びを縫つたり等して、一向勞かれた樣子もなく、綽々として餘裕があるのです、此れと云ふのも平生から、身體を鍛ひ鍛つたお蔭によるのであります、其處で右の如な強壯なる身體に加ふるに、勇氣凛然たる我が日本水兵であるからして、此の度の如き壯烈無比なる戰功を建つることが出來たのであります。

さて愈これから壯烈談を申しあげますが、其れに先だちて御願ひ申したいのは、將校よりも下士卒の擧動に付いて、御注目下されたいことです、と云ふのは、下士卒の擧動は國民の觀念を代表して居るものでありますからです。

四月三十一日迄の統計に依りますと、死傷の總計が、千二百二十二名で內即死九百六十六人、負傷後死十六人、生死不明八十八人、全治七十九人、入院八十五人、送還途中入院八十九人でありますが、之は參考の爲めに申して置くのです、さて第二三回閉塞の擧行に付いて、志願者を募集しました處が、一回より二回、二回よりは三回と、益々多くなりまして、實に全兵士の半分以上にも達する位で、撰拔に苦むださうです、之に由つて如何に我が海軍將士が身を殺して、君國の爲めに盡さうとする精神の旺盛なるかゞ分るのです、此の如く忠勇なる兵士、何れを何れと分け兼ねますが中に、取り分けて第三回閉塞の時、米山丸に乘つて殊勳を建てた一兵が有りました、彼は平生非常に靜かな人で、同僚のものは皆女々と云つて居た位だが、大層親に孝行でありました、其處を見拔いて撰拔したのですが、忠臣は孝子の門より出づとは實

〻善く曰つたものであります、此の兵は米山丸に乘り組みて出發し、指揮官より機關砲の打ち方を云ひ付かつた、愈々旅順港口に近寄つて、敵の探海燈の燦爛として輝く下を犯して突進すると、黄金山砲臺や其の他の砲臺から雨霰と大砲を浴せかける、其の下に在つて、彼の兵は泰然自若として、丁度演習でもする樣な容子で、機關砲を打つて居た、すると一發また一發、飛び來つて兩の股を擊つた、然れど猶平氣でやつて居る、其の內船は目的地に來たから、碇を下さうとしたが、而し此の事は中々落付いたものでなければ出來ない、其處で右の兵に其の事を云ひ付けた、言ひ付けられて、直ちに號令と共に錨を投げ込むだ、然れどまだ夫ればかりではいかぬ、水の深さを測量しなければならぬ、と云ふのは目的の成否を慥むるに必要なことであるからである、其處でまたもや、彼れに命令した、然るに彼れはこれも遺憾なく遂行して仕舞つて、軈て爆沈し、端艇に乘り移つて勇ましく漕いで居るうちに、運の極みか、復び打出す敵の彈丸の爲に終に勇敢なる最後を遂げたさうです、實に惜しい事でありました、それですから人の剛憶は平生の行爲を見て速斷することは出來ません。

次に第三回閉塞の三河丸に付いて申しませう、丁度其の時は、南風が烈しく波が高くて、閉塞の目的を達するに甚だ困難であるから、之を中止しやうとして、總指揮官林中佐が信號を掲げて中止命令したけれど信號の通せないのと、又一つには謂ゆる騎虎の勢もありて驀に突進して參りました、處が風波の爲め他の閉塞船を見失なつた、そうこうする內、前方で砲聲が聞え出した、三河丸はヤアこれは後れた、不覺を取つたと氣は氣でなく、奮然進んで行くと、暗中突然我が水雷艇に出會した、すると敵は今我が偵察水雷艇を砲擊して居る、貴船は先登第一だ、シッカリやれとの信號が有つた、此れを聞いて全船擧つて勇躍し港口目當に突入した。サア彈が來る、探海燈で照らされる、進むに從つて愈々烈しい、速射砲一齊射擊、

般々轟々、天地も裂くる樣な響をして、悉く船に集まつて落ち來るので、殆んど彈丸の天井が出來た、其の下を潜り潜つて猛然突き進むと、其處にも此處にも火災が起る、船首船尾にポツ〳〵烟が吹き出す、殘念と思て居ると、側で爆發する器械水雷の噴き上げ水で皆消えて仕舞ふ、かやうにして苦戰奮鬪邁進すると、俄然船が停つた、ハテ不思議な舵機でも擊れたのかと思つてる中に復進み出した、すると又停つて又進み出した、これは二ツの防材を乘り越えたのであります、防材と云ふのは二間位な大丸太を横に幾千本も針金で繋ぎ合せたものを、碇を付けて航路に横たへ、丁度垣でも結つた樣にして、船の進入を防ぐのでありますが、此を二つ乘り越して三河丸は奥深く進み入り、好位置に自ら破壞沈沒し全員端艇に乘り移つて、漕ぎ出しました、すると敵の驅逐艦が之を見付け出して、全速力で逐つて來ました、サア絶體絶命、前には防材がある、後には驅逐艦が迫まる、モウ是れまでと皆な軍刀に手を掛けた、が其の時敵の打ち出す砲臺の彈丸が、猛烈なので、自分の彈丸で、自分がやれらる恐れがあるから、敵の驅逐艦はウッカリ近寄る事が出來ない、暫時躊躇ッた、其處で我は其の隙に乘じ、悠々防材の間を回ぐり〳〵て、ヤッと港外に出たが、まだシッコク擊つ、モウ止せば好いにと思つた位だッたさうです、何と之に由つても、其の悽慘猛烈なる光景で有つたことが、お分りになりませう。

其の他江戸丸、愛國丸、遠江丸など八艘の船も更る〳〵突入して、各々目的地に爆沈しましたが、小樽、相模、佐倉、朝顏、の四艘の全員一人として、歸つて來ないので果して何んな處に沈んで居るか知れないけれど、敵の報告や種々な事から考へて見ると、全く閉塞の功を奏したものと思はれます。

閉塞隊員中には種々悲壯なお話が澤山あります、或る船に乘り組むだ一信號兵は旅順港口に達しやうとする前に指揮官から、此の船が沈むまで敵彈が幾つ中るか勘定しろと云ひ付つた、知らないものは呑氣なこ

と、思ふかも知れないが、中々さうではない、大きに參考になるので、一時間に何程丈けの彈丸が來るかと云ふことが推測されて、後來覺悟する處が出來るのです、其處で其の兵は指揮官の側に立つて數へ始めました、一つ二つ三つ、三十九まで數へましたが、モウ勘定し切れなく成つたと云ひます、さうでせう、亂射亂發、一度に三四も中たる、これでも其の如何に猛烈なる射擊を蒙つたかゞ分ります、又之れも信號兵でしたが、艦橋で事務に從事して居ると、雨と注ぐ彈丸で右の肩先を一發やられた、それでも屈せず、やつて居ると側に居た士官がパタリ斃れた、これはと思つて眞ぐに抱き上げ、指揮官にかくと告げて、端艇に乘せて介抱したさうです、此の話は何でもないやうに思はれますが、さうではない、實に感心の至りで、人間の高尙な思想、即ち縱令身は負傷して居つても、他の人を助ける、上官を救ふと云ふ美麗なる精神が發揮されたのであります。

それから閉塞船航海中のお話を申しますと、出發地點より旅順港口まで、一晝夜半の勤務をするのですが、其の間一兵一卒たりとも決して休まない、或は機關の手入をしたり、或はマントレット即ち彈除けを拵へたりなんどして居る、士官が見兼ねて、御前達は此から先に行つて、大事を帶びた身體であるから、休すんだら好からうと云ふても聞かぬ、再三に及ぶと、否難有お思召ではあるが、あなた方さへ休まないのに、どうして我々が、と云つて誰一人聞き入るゝものも無かつたと申します。

或る閉塞船内で今に哀れと思はれる一奇話が有ります、其れは航行中の事でしたが、如何したものか、閉塞船を受取つて乘り込むで見ると、籠に入れた四羽の鷄が片隅にありました、士官は之を見て、時に取つての好下物だ、滋養になるから捻ぢ殺して喰つて仕舞へと士卒に云つた、が誰一人手を下すものもないのみならず、パンやビスケットや種々な物を持つて來て、之に遣り、猶籠から出して、船內を自由に飛廻ら

せ其れを皆屍ッと見てゐる、何とやさしい心ではありませんか、とても我々と共に今日明日の中死ぬる命だ、なにもそんなに酷い事をと變な處に同情を以つて、鬼をも取り挫ぐ勇士が、一掬同情の涙を湛へて之れを殺すに忍びないので、餌をやりて思ふまゝに飛び廻らせたのです、嗚呼實に哀れな、やさしい心の中ではありませんか。（聽衆頭を上ぐる能はず、歔欷の聲頻なり）

以上申し述べました如く、我が將卒が悲壯慘絕なる境遇を經て、奮戰苦鬪し、以つて偉大なる勳功を奏したものは、畢竟身體が丈夫で、思ふ存分な働をすることが出來たからで有ります、此に至つて始めて健全なる思想は、健全なる身體に宿ると云ふことの眞理なることが、好く分るのであります。　（完）

出征軍人家族の救助に就いて

阿多廣介

戰場に骸を暴らすことを、何とも思つて居ないのは、吾が國民の特色であるから、忠義の爲めとあれば、笑つて地雷火の上をも踏み、悅んで十字砲火の間をも潜るのは、南山の役や、旅順閉塞の壯擧が、其の證據であるが、是れは軍人の當の務で、諦めの出來ることゝして、扨てその留守をして居る家族や、又た名譽の戰死を遂げた人の遺族の身の上を思ふと、如何なる鐵心石膓の人でも、同情の涙を濺がざるを得ない、故に國民は出征軍人の老父母や、戰死者の寡婦又は孤兒に對して、出來得る丈の慰藉を盡すべき義務があるのはいふまでもないことである、殊に働き盛りの吾子、吾夫が出陣し、若くは戰死した爲めに、左なきだに朝夕の烟を揚げ兼ねた家族が、尙ほ一層の貧困に陷ゐりて、殆んど悲慘の境遇に迫つて居るものに對

しては、それ〴〵方法を付けて、三度の食事に欠乏を告ぐることのないのは勿論、病氣の時には、醫藥の手當も充分に出來る樣にせねばならぬことである、これは當然の事であつて、其の方法は既に立派に備はつて居る筈であるのに、扨て實地さう行屆いて居ないのは、甚だ遺憾なことである。

遂此間のことであるが、予の少女の顔に腫物ができたので、ドクダミ草といふ草の葉を燒いて、それを揉むで局部に貼けると、膨れも減けば、熱も去ることを知てゐましたから、下婢に命じて、少女を負ぶせて其草を近所の畑地に採りに遣つた、そうすると其の下婢が歸つて話すには、『自分がドクダミ草を採つて居た時、見すぼらしい衣服を着て、二三歳の小兒を脊負ふたお妻さんが來て、種々と談かけられたので、自分も遂ひ釣込まれて、其話を聞いたが、このお妻さんは、第一師團の出征軍人の妻であつて、負つた小兒はその獨子であるが、此頃から耳下腫物に罹つて、苦んで居るけれど、醫者にかゝることも、藥を飮ませることも出來ないので、詮方なしに、斯うして看護をして、機嫌を取つて居るとのことであるから、自分も洵に氣の毒に思ひまして、その病氣にはドクダミ草がよろしいといふことなので、現にお內の孃樣も其の病氣にかゝつて居らつしやるので、その草を採りに來て居る處であるといふことを談したところが、そのお妻さんは非常に悅こんで、お陰で此子にお藥をやることが出來ましたと禮をいつて、早速ドクダミ草を採つて行きました』、との事であつたが、この一事でも、軍人家族救助の方法がまだ〳〵十分に行屆いて居ないことが分るのである。

勿論、軍人家族援護婦人會や、兵事義會の人々は、熱心に盡力されて居らるゝには相違あるまいが、病氣に罹つた軍人の子供で、醫著に診てもらうことも出來ず、藥を與ふることも出來ぬ者があると聞いたら、未だ會の目的が十分に達することの出來ないことを感せらるゝであらうと思ふ、尤も何萬何千といふ家族

のことであるから、一々手の屆かないのも、無理とはいはれないが、救護の方法は、成る丈け下層な貧乏な家を本として、次第に上層の人に及ぶといふ樣にせられたいもので、各區に慰問會や、兵事會などの團體があるから、最少し注意したならば、醫藥の料にも窮して居る程のものに對しては、洩れなく救助の途がつくであらうと考へる、苟が一にも團體の人々は、重もに將校などの家族に厚ふして、下士以下の家族に薄いといふ樣なことがあつたなら、それこそ實に本末輕重を顚倒したことで、全く團體の旨趣を間違へて居ることゝ云はねばならぬ、何なれば、將校以上の家族には、平日でも萬一の時の準備をすることの出來るのみならず、戰時にはその受くるところの俸給丈でも、優に家族の生活に窮しないのであるから、何か臨時に災難に罹らない限りは、別に生計に苦む筈がないのであるが、下士卒に至つては、それとは全く趣を異にして居るから、團體の平素注目して、救助に怠らざるべきは、低い低い下層の兵士の遺族である、若し又た一步を進めて論じて見ると、多くの將校が名譽ある戰功を立てゝ、論功行賞の典にあづかり一家一門の面目を施こすことを得るのは、畢竟その部下の兵士が命を棄てゝ、奮戰苦鬪するからである故、將校以上の家族は、下士以下の家族に對して、常に慰藉し、救護する義務があるといつてもよろしい、良人が赫々たる勳功を立つるのは、その部下の兵士の力であると思ふなら、その細君たる人は、良人の爲に働いた兵士の妻や子に對しては、タトヒ衣食の料を節減しても、慰めもし、救ひもすべきではあるまいか、況して初より救護を以て趣意として居る團體にあつては、餘りなさまでも足らざる憂なき將校の家族は、後廻しにして、憐むべき貧乏な兵士の家族に向つて、滿腔の同情を寄すべきである。

愛國婦人會などでも、盛んに軍人家族の訪問をして居るさうで結構なことではあるが、折角訪問された貴婦人に對して、着席を乞ふ程の座敷もなく、お茶を上げることも能はなくて、挨拶も碌に出來ない家族も

多からうと思ふ、是等の家族は訪問の親切には、深く感佩しても、其實屢々訪問されては、却つて迷惑で双方ともあたら間費しであるから、三度の訪問を一度にしても、車代を貯へても生計上の不足を補うて遣る方法を講ずるのが、實際必要であると思ふ、何も訪問が決して悪いといふのではないが、下層の社會には貴婦人方の氣の付かない所に苦痛がある、此の苦痛を醫するのが、何よりも急務である。

少しく問題が岐路に入るが、序でに陳べて置きたいことがある、それは此度の戰爭に於ける輜重輸卒のことで、これが誠に善い訓誡を與へたといふことである、新聞にも屢々出て居るが、此度の輜重輸卒の中には貴族の若樣や、金持の息子が少なくないとのことで、一寸出るにも馬車か人力車にばかり乘つて居た若樣が、馬の口を取つたり、荷物を擔いだりする、膏粱の美味に飽いて居る金持の息子が、麥飯に梅干を嚙つて、やう／＼命を繫いで居るとは、何たる哀れな話であらうか、これは當人達には善い折檻であるが、親達の心になつて見ると、下にも置かない程大事にした子供を、國家の爲とは申しながら、こんな目に合はするのは、情ないとも、可哀相とも思ふのも最である、併し善く／＼考へて見ると、畢竟自業自得の結果といふてよいと思ふ、折角立派な男子を產みながら、普通の軍人とすることの出來なくて輜重輸卒にしたのは、何の爲めであるか、全く體格が不完全で兵士たる資格がないからである、而して體格の不完全に生れたのは何故であるかと問ふて見ると、全く親達が妻の撰擇法を過つたからである、日本の美人の標本はといふと、顔は爪核顔で、脊がスンガリと瘦せて高く、色は青白くて、一見して肺に申分のありさうなものに限るのである、貴族や金持は、その身分と金錢とによりて、多くはこんな美人を娶つて妻にするのであるから、爪の蔓に茄子の生らないのと同樣、弱體な母の腹から、健全な子供が出來る筈があらうか、不完全な子を生んで、平日には其の弱體の爲に常に心を勞し、戰時となれば、馴れない艱難をさすのを可

愛相と思ふのも、詰り美人の標本を誤つたからである、さうして之が爲めに、立派な軍人となつて、戰場に功名を輝かすべき身をば、ムザ〳〵輜重輸卒にして置くのは、何々の合戰に、敵の大將の首を鎗の穗先にかけて、功名手柄を天下に揚げ、子孫に餘榮を殘された其の祖先に對しても、實に相濟まぬことではなからうか、又た豪家よ金持ちよと、一縣一鄕に重望を有して居る家でありながら、その悴を普通の兵士にはさせ得ないで、やうやく輸卒となりて國家に盡さしむるといふことは、家門の譽れといふべきであらうか、これに就ても今後妻を娶るには、日本の美人の標本には適はなくても、體格の良い、健全な女を選びて、健全な兒を擧くる覺悟せらるゝのが、必要である、予は決して輜重輸卒を卑しむ譯ではないが、貴族たり、豪族たる人の子が、體格の不完全な爲めのみで、輜重輸卒となつたのを氣の毒に思ふから、將來の注意を促がすのである。

以上陳べたところを概括すると、出征軍人の家族若くは遺族に對しては、下層より次第に上層に及ぼしたいといふのである。尤も其家によりて貧富の別があるから、下士卒が必ず將校よりも貧しいとは、いはれないのであるが、マー概して下層のものゝ方が貧困であると推斷するのが、當然であるから、先づ兵卒から下士、下士から將校といふ樣な順序でもつて、救援の方法を實地に講じたいといふのである、又た世間に立派な位置を有して居る人達の悴であつて、身體の弱いといふ點のみで、徴兵檢査に合格しない爲めに千古未曾有の時に當り、やうやく後方勤務の輜重輸卒となつて、國家に盡すことの出來るといふのは當人は固より、其親の情として、寧ろ遺憾に思ふことであらうから、願はくば身體の健全な兒を產むやうにせられたい、則ち直接には身體の立派な妻を娶るといふ事と、又間接には女子の體育發達の上に最も注意せられたいといふのである。



麗はしき家庭

阿部泰造氏夫人を訪ふ

中川愛氷

武藏野の草てふ草は敷あれど、摘菜にすればさてもすくなし、チト變つた蓼へのやうなれど、これを一家の主婦に應用せんと思ふ。

家内はよく親睦せねばならぬ。親睦すれば其家は繁昌する。これは一に主婦の心がけ如何による。女學校の必要も、文字ばかりを覺えて、得たりとする顔を見んが爲でもあるまい。

森村市左衛門氏は女子教育に意を用ひられ、嘗て日本女子大學校に數萬金を寄附せられた篤志家である、予はある日、氏に向つて其の高見を叩く。談餘、近時女學校の起る雨後の筍の如く、其の主旨はと云へば活版刷の如く、異句同音。良妻賢母をつくるにありと。然るにこれ等の學校から、良妻賢母の出ぬ事夥し。

實に然り。口では良妻賢母の四聲であるが、さう一山三文の品物の如くにはゆかぬ。さりながら、學問は良妻賢母をつくる道でないと思ふものあるに至つては、實に言語道斷である。

學問をすると生意氣になる。商人の女房は學問をせぬ方がよろしい。かゝる臺詞を常に耳にする事であるが。學問のないのが何でよろしいか。生意氣には學問がし足らぬからである。

更に森村氏に。實業家の夫人中、操行の立派な人をたづね。其の紹介を乞うた。

すると、阿部泰造氏の夫人、優子の君を紹介せられた。慥にさる二月の十八日と記臆する。

其の前日、小川直子刀自を訪ひて談話したるが、刀自が相客へ、二三回、阿部樣の奥樣は御近所で時々御出るが、實によいお心掛の方で、いつも感心して居りますと。予は其の時は聞流しにしたるが、十目の視る所と、後に氣附いた。

芝松坂町に、往來の人に記臆せしむる一搆がある。即ち阿部氏の邸である。

予はこの門をくゞること五回。羨しく感じたは、其の門の高さではない、其の庭の廣さではない、其の主人の地位でもない、其の家の財産でもない、和氣靄々たる家庭、嘗て聞く、張公藝の一家も、斯の如くありしならんと。實にそれである。

取次に出る老人、はなはだ人柄で、其の應接ぶり、極めておだやかで、謙遜で、まづ其家風を見るに足るべく。數多く見受くる令息、令孃、温順に、行儀よく。下婢を困らする如きは、藥にしたくもなきことであらう。

まづ初對面の一日を記さう。

案内に連れて、奥の廣き座敷に通る。折ふし來客あり。應接、痒き所に手屆き、談話、はき／＼して、實にしとやかなる、失禮ながら、申分のなき結搆なる奥樣である。

其の次手前の室に、一雙の屏風、これは珍品である。即ち故税所敦子刀自の短冊、あるは書翰のはりふせなり。予の常に愛誦する、大江廣元を詠ずる歌もこれにあり。

これは何よりのお品である、私は税所刀自を詠史に於ては、今古を通じて日本一、普通のも、恐らく今の歌人先生には、此右に出づるものはあるまい、と予はお世辭のなき所を云うた。

すると令夫人は、あなたは歌がお好で、税所さんのが御贔負とは何より、私はお歌はもとより結搆でありますが、歌よりも御人物で、實に税所さんは立派な御人物であります。

令夫人は、あらゆる婦人會に、否重立ちたる三四の婦人會に會員とし、役員として責任を盡されて居ら

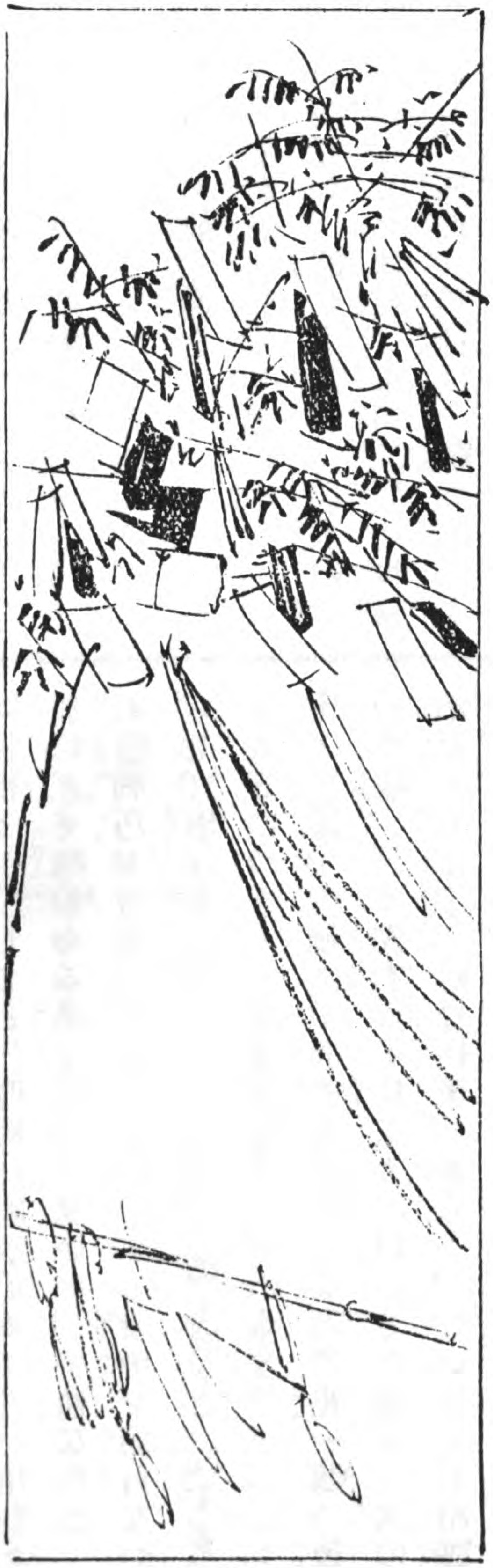
る丶が、それ等の會の、多き會員は云はず、役員中にも、操行甚だおもしろからざるがあるに、常に眉を顰めらるゝことゝ思ふ。實に人物はすくなきものである。

さりながら人物談は憚られて、歌の話となり。令夫人の近作をたづねた。

この一家の主婦として、殊に國事多端、公共の事にも毎日奔走せられ、即ち内外に立働かれ、寸暇もあるべく見受けられねど。心裡の美は、いつか文字となりしならん、廿餘首の近作を示された。筆蹟頗る美事である。

その歌は、令夫人の美風を見るべく、斯うである。

御となりどちむつび給ひて、いひかはしたまへるを、うれしみ



さしなみの隣づからはませがきの
　ほかにへだてもなきぞ嬉しき

松村、千坂の二かた、負傷したまへるをきゝて

なに事もいはで嬉しき音をぞなく
　あけにそまりし人をおもひて

清岡香久子の君の子息二かた、出立たまふに

日のみはた高くかざしてしこ草の

露うちはらふかど出をぞ祝ふ

身内なる中村正明兄弟三人出立、わかれに添え「いざともにみことかしこみわだこもる、うらるの山をふみならし來む」といひこせしいさましさに

いまさらに何をか云はむ國の爲に
　いのちを捨つる君にむかひて

折にふれて

をみな子のか弱き身にも國の爲を
　思ふこゝろをおもへますらをを

其他澤山秀逸のがあつたが、略すとして、以上の歌はどうであるか。これをもし森村、小川二氏にお見せ申さば何と云はるゝ。阿部の奥様は、歌はもとより御上手であるが、御人物がと云はるゝであらう。硯所刀自のは阿部夫人ばかりではなく、阿部夫人は森村、小川兩氏ばかりでなく、其の人を知れるほどの人は同感であらうと思ふ。

茶の入替にとて、女中が來た、多くの來客に馴れたる事とて、これも行届いたるよき女中なり、過つて咖啡の茶碗を横にして、それが座蒲團の下へ流れた。令夫人は手早くそれを拭いて、別に女中に小言らしい事もいはず、いやな顔もせられず。極めて柔和に『取替へてお出』と、命じ、女中の去つた跡で。まことに麁相をしましてと、叮嚀に謝辭があつた。事些かなれども味のある話ではあるまいか。普通なれば、奥様利巧ぶつて、失策を恐れて居る女中を面目ながらせ、客に氣の毒がらせ、自分は禮を缺くに歸する、まことにつまらぬ始末を演ずるであらう。

床には富士の軸に、令夫人がたしなみの花一瓶。後の來客、三十左右の奥様なり、口あると見ゆ、其の活花を見て、これは何流であらう、といさゝか冷評の氣味なり、令夫人曰く、これは私流。

予この時の生花を見て、令夫人が造花に近き、在閥れたる花道によらず、天眞を尙ぶ松月堂古流を學ばれしを奥ゆかしく思うた、然るにこの流儀は、股なき一本の留木に、花卉を瓶の前身に任すより、奇異

の思ひなさしめ、何流との冷評を買ひたまうた。されどこれは何流と開直つて説明すべき所をなさらず、私流として更に氣にもかけられぬ所、由來花道を學ぶ風流と申したけれど、不風流な人が多いに、さりとては恐れ入つた話である。

お茶菓子の皿は、大きな銀の器である。話の尾につれて、令夫人の云はるゝには、これは子供等が相談をして、水引をかけて私どもにくれたのでありますこれは私夫婦が、今年銀婚式に當るので、祝つてくれたのであります。私はよう氣がついてして下れた、私もお前さん方に大分苦勞をしたやうに思ひましたが、かういふやうな事をしてくれると、有難うてそんな事も何も忘れてしまひましたと禮を云ひました、親子といへば親んで狎るゝ、まことに結構なれど、敬の字其他の事を忘れて、爲に紊るゝといふことになるが、一家に住んで子が親に心づくしを贈る、親はこれに相當の謝禮を拂ふ、何とうるはしい話ではあるまいか。

其他一擧手、一投足、實に婦人の手本として、更に間然する所がない。

暫らくして老人の客あり、親戚らしい、對話中、その娘さんはお世話してもよいが、先づ他樣へ御取持するには、自分の宅に暫らく預つて、樣子を見て、いさゝか面倒を見てゞなければ、しかし中々よく行かぬ勝のもので、と。

これは盜み聞きなのであるが、この對話の一節で、事を成すに責任を重んぜらるゝ事が解る。と同時にこの令夫人の前には、いかなる女子も感化されるであらうと信ずるに、よく行かぬ勝のもので、とは注意の深さを察せらるゝに餘りありと思ふ。

阿部氏は富豪である。しかしお大名ではない、實業界に雄飛して今日あるを致したる、令夫人の内助に少くも一冊子の美談が綴らるゝことゝ思ふ。

私は子持で、と奥樣の多くは不性の楯とされるが、令夫人はなか〳〵のお子持である、これを一々立派にお仕上に成つて、一家の事、荷に餘るほどなるに

捨てゝ、外に出でゝも、この地位の婦人として盡すべき限りの事には盡力せられ、四五回の面談、これ等を問題にせられた事はない。
婦人慰問會の美擧、この令夫人の主唱に係るものと思ふ、軍人に內顧の憂なからしむる策を建てられる話は、其の以前疾く耳にしたことである。
「たのしみは夕顔棚の下すゞみ、男はてゝら女はふたのして」の和歌あり「樂しきは貧しきにあり梅の花」の俳句ある、畢竟、和氣藹々たる家庭の團欒を上流に見せぬからである、令夫人はこの歌句を何と見らるゝであらうか。

湯淺海軍少佐の令妹を訪ふ（口繪參照）

菊池雪子

旅順閉塞の決死隊に加はりて遖れ武將の譽を萬世に留めたる湯淺少佐は軍神と稱へられたる廣瀨中佐の親友で入らつしやいますが、其の令妹梅子樣は、赤十字ハ看護婦を勤めてお出になりますので、篤志看護婦人會には、いつもお見えになつて、他の看護婦方二三名と共に、會員の婦人方が繃帶を卷くお稽古をなさいますときなどに、種々お世話をなさいます。

少佐の御閱歷に就きまして、未だ世の新聞や雜誌に掲載になりません事柄を、少々うけたまはりたいと存じまして、記者は梅子樣をお訪ねいたしました。先づ少佐が今回名譽ある戰死をなさいましたことを至上の榮譽と申上げまして、それからお兄樣の幼時のお話を承はりたいと申しましたところが、梅子樣は

「はい、兄は明治四年に芝の赤羽根に生れました、幼少の時から餘程變人でございまして、格別お友達がほしいといふ樣な樣子もなく、常に一人つくねんとして遊んで居つたとよく母が申して居りました、偶にお友達が出來ますれば、舟遊や、蟬取の大將に

なつて、色々道具を持つて出かけますが、途中でまた大勢子供連が付て行列しては參りました、兄は一番この舟遊や、蟬取が大好でございましたさうです、さうして折々お友達と喧嘩をして負けでもしようものなら、剛情が強くて、容易には家に歸つて來ませんでした、お客様がお出になつても、お目に懸つてお辭義いたすことをいやがりまして、隣の室から隙見位をいたして居りました。』

『學校は礫川小學校に通ひましたが成績優等で卒業いたしました、學課の中に兄の得意のものは算術であつたさうでございます、其れから嘉納治五郎先生の塾に入りました、そういたしまして中學に通つて先生のお宅で、また柔術を習つて居りました、先刻お話申上げました程の變人でございましたけれども、先生はよく御教導なすつて下さいましたさうで、師弟の間柄も餘程親密であつたと申して居ました、先生はどうかしてよい人間にしてやりたいと、いろ〳〵御心配下さいましたと始終兄が話して居りました、修業いたします間は寒さが嚴しくても素足で股引もはかず、何から何まで働かねばならなかつたさうでございまして、寒中は手足にあかぎれが絶えませんから、父母はそれを見て足袋を送つたさうですがとう〳〵あなた用ゐませんでしたと。』

是時梅子樣が暫くお話をお休めなされて、記者に向ひ『失くなつた兄に對して妹の義務を盡したいと思ひますから、知つて居りますだけはすつかり申上ませう。』と仰せられまして、

『兄は十六才の時、父に別れました、さういたしますと自分はこれから相續の大任を擔はねばならぬと申まして、一心に學問を勵んで居られました、十八才になりまして海軍兵學校に入學いたし、廿一才に首尾よく卒業いたしました、其れから外國に參つて居りましたが、日清戰爭が始まりましてから歸省して松島艦の乘組員になつて戰地に臨みましたが、二十八年無事で歸りました、其節何か功がありましたと見えまして賞與を戴きました、三十一年大尉に

露うちはらふかど出をぞ祝ふ

身内なる中村正明兄弟三人出立、わかれに添え『いざともにみことかしこみわだこもる、うらるの山をふみならし來む』といひこせしいさましさに

いまさらに何をか云はむ國の爲に
　いのちを捨つる君にむかひて

折にふれて

をみな子のか弱き身にも國の爲を
　思ふこゝろをおもへますらを

其他澤山秀逸のがあつたが、略すとして、以上の歌はどうであるか。これをもし森村、小川二氏にお見せ申さば何と云はるゝ。阿部の奥樣は、歌はもとより御上手であるが、御人物がと云はるゝであらう。稅所刀自のは阿部夫人ばかりではなく、阿部夫人は森村、小川兩氏ばかりでなく、其の人を知れるほどの人は同感であらうと思ふ。

茶の入替にとて、女中が來た、多くの來客に馴れたる事とて、これも行屆いたるよき女中なり、過つて咖啡の茶碗を横にして、それが座蒲團の下へ流れた。令夫人は手早くそれを拭いて、別に女中に小言らしい事もいはず、いやな顔もせられず。極めて柔和に『取替へてお出』と、命じ、女中の去つた跡で。まことに麁相をしましてと、叮嚀に謝辭があつた。事些かなれども味のある話ではあるまいか。普通なれば、奥樣利巧ぶつて、失策を恐れて居る女中を面目ながらせ、客に氣の毒がらせ、自分は禮を缺くに歸する、まことにつまらぬ始末を演ずるであらう。

床には富士の軸に、令夫人がたしなみの花一瓶。後の來客、三十左右の奥樣なり、口わると見ゆ、其の活花を見て、これは何流であらう、といさゝか冷評の氣味なり、令夫人曰く、これは私流。

予この時の生花を見て、令夫人が造花に近き、在觸れたる花道によらず、天眞を尙ぶ松月堂古流を學ばれしを奥ゆかしく思うた、然るにこの流儀は、股なき一本の留木に、花卉を瓶の前身に任すより、奇異

の思ひなさしめ、何流との冷評を買ひたまうた。されどこれは何流と開直つて説明すべき所をなさらず、私流として更に氣にもかけられぬ所、由來花道を學ぶ風流と申したけれど、不風流な人が多いに、さりとては恐れ入つた話である。

お茶菓子の皿は、大きな銀の器である。話の尾につれて、令夫人の云はるゝには、これは子供等が相談をして、水引をかけて私どもにくれたのであります これは私夫婦が、今年銀婚式に當るので、祝つてくれたのであります。私はよう氣がついてして下れた、私もお前さん方に大分苦勞をしたやうに思ひましたが、かういふやうな事をしてくれると、有難うてそんな事も何も忘れてしまひましたと禮を云ひました、親子といへば親んで狎るゝ、まことに結構なれど、敬の字其他の事を忘れて、爲に紊るゝといふことになるが、一家に住んで子が親に心づくしを贈る、親はこれに相當の謝禮を拂ふ、何とうるはしい話ではあるまいか。

其他一擧手、一投足、實に婦人の手本として、更に間然する所がない。

暫らくして老人の客あり、親戚らしゝ、對話中、その娘さんはお世話してもよいが、先づ他樣へ御取持するには、自分の宅に暫らく預つて、樣子を見て、いさゝか面倒を見てゝなければ、しかし中々よく行かぬ勝のもので、と。

これは盜み聞きなのであるが、この對話の一節で、事を成すに責任を重んぜらるゝ事が解る。と同時にこの令夫人の前には、いかなる女子も感化されるであらうと信ずるに、よく行かぬ勝のもので、とは注意の深きを察せらるゝに餘りありと思ふ。

阿部氏は富豪である。しかしお大名ではない、實業界に雄飛して今日あるを致したる、令夫人の内助に少くも一冊子の美談が綴らるゝことゝ思ふ。

私は子持で、と奥樣の多くは不性の楯とされるが、令夫人はなか〳〵のお子持である、これを一々立派にお仕上に成つて、一家の事、衛に餘るほどなるに

擲て、外に出でゝも、この地位の婦人として盡すべき限りの事には努力せられ、四五回の面談、これ等を問題にせられた事はない。
婦人慰問會の美擧、この令夫人の主唱に係るものと思ふ、軍人に内顧の憂なからしむる策を建てられる話は、其の以前疾く耳にしたことである。
『たのしみは夕顔棚の下すゞみ、男はてゝら女はふたのして』の和歌あり『樂しきは貧しきにあり梅の花』の俳句ある、畢竟、和氣靄々たる家庭の團欒を上流に見せねからである、令夫人はこの歌句を何と見らるゝであらうか。

湯淺海軍少佐の令妹を訪ふ（口繪參照）

菊池雪子

旅順閉塞の決死隊に加はりて遁れ武將の譽を萬世に留めたる湯淺少佐は軍神と稱へられたる廣瀬中佐の親友で入らつしやいますが、其の令妹梅子樣は、赤十字ハ看護婦を勤めてお出になりますので、篤志看護婦人會には、いつもお見えになつて、他の看護婦方二三名と共に、會員の婦人方が綳帶を卷くお稽古をなさいますときなどに、種々お世話をなさいます。
少佐の御閲歷に就きまして、未だ世の新聞や雜誌に掲載になりません事柄を、少々うけたまはりたいと存じまして、記者は梅子樣をお訪ねいたしました。先づ少佐が今回名譽ある戰死をなさいましたことを至上の榮譽と申上げまして、それからお兄樣の幼時のお話を承はりたいと申しましたところが、梅子樣は
『はい、兄は明治四年に芝の赤羽根に生れました、幼少の時から餘程變人でございまして、格別お友達がほしいといふ樣な樣子もなく、常に一人つくねんとして遊んで居つたとよく母が申して居りました、偶にお友達が出來ますれば、舟遊や、蟬取の大將に

なつて、色々道具を持つて出かけますが、途中でまた大勢子供連が付て行列しては參りました、兄は一番この舟遊や、蟬取が大好でございましたさうです、さうして折々お友達と喧嘩をして負けでもしようものなら、剛情が強くて、容易には家に歸つて來ませんでした、お客様がお出になつても、お目に懸つてお辭義いたすことをいやがりまして、隣の室から隙見位をいたして居りました。』

『學校は礫川小學校に通ひましたが成蹟優等で卒業いたしました、學課の中に兄の得意のものは算術であつたさうでございます、其れから嘉納治五郎先生の塾に入りました、さういたしまして中學に通つて先生のお宅で、また柔術を習つて居りました、先刻お話申上げました程の變人でございましたけれども、先生はよく御教導なすつて下さいましたさうで、師弟の間柄も餘程親密であつたと申して居ました、先生はどうかしてよい人間にしてやりたいと、いろ〳〵御心配下さいましたと始終兄が話して居りました、修業いたします間は寒さが嚴しくても素足で股引もはかず、何から何まで働かねばならなかつたさうでございまして、寒中は手足にあかぎれが絶えませんから、父母はそれを見て足袋を送つたさうですがとう〳〵あなた用ゐませんでしたと。』

是時梅子様が暫くお話をお休めなされて、記者に向ひ『失くなつた兄に對して妹の義務を盡したいと思ひますから、知つて居りますだけはすつかり申上ませう。』と仰せられまして、

『兄は十六才の時、父に別れました、さういたしますと自分はこれから相續の大任を擔はねばならぬと申まして、一心に學問を勵んで居られました、十八才になりまして海軍兵學校に入學いたし、廿一才に首尾よく卒業いたしました、其れから外國に參つて居りましたが、日清戰爭が始まりましてから歸省して松島艦の乘組員になつて戰地に臨みましたが、二十八年無事で歸りました、其節何か功がありましたと見えまして賞與を戴きました、三十一年大尉に

露うちはらふかど出をぞ祝ふ

身内なる中村正明兄弟三人出立、わかれに添え『いざともにみことかしこみわだこもる、うらるの山をふみならし來む』といひこせしいさましさに

いまさらに何をか云はむ國の爲に
　いのちを捨つる君にむかひて

折にふれて

をみな子のか弱き身にも國の爲を
　思ふこゝろをおもへますらを

其他澤山秀逸のがあつたが、略すとして、以上の歌はどうであるか。これをもし森村、小川二氏にお見せ申さば何と云はるゝ。阿部の奥様は、歌はもとより御上手であるが、御人物がと云はるゝであらう。阿部夫人は稅所刀自のは阿部夫人ばかりではなく、阿部夫人は森村、小川兩氏ばかりでなく、其の人を知れるほどの人は同感であらうと思ふ。

茶の入替にとて、女中が來た、多くの來客に馴れたる事とて、これも行届いたるよき女中なり、過つて咖啡の茶碗を横にして、それが座蒲團の下へ流れた。令夫人は手早くそれを拭いて、別に女中に小言らしい事もいはず、いやな顔もせられず。極めて柔和に『取替へてお出』と、命じ、女中の去つた跡で。まことに麁相をしましてと、叮嚀に謝辭があつた。事些かなれども味のある話ではあるまいか。普通なれば、奥様利巧ぶつて、失策を恐れて居る女中を面目なからせ、客に氣の毒がらせ、自分は禮を缺くに歸する、まことにつまらぬ始末を演ずるであらう。

床には富士の軸に、令夫人がたしなみの花一瓶。後の來客、三十左右の奥様なり、口わると見ゆ、其の活花を見て、これは何流であらう、といさゝか冷評の氣味なり、令夫人曰く、これは私流。

予この時の生花を見て、令夫人が造花に近き、在觸れたる花道によらず、天眞を尙ぶ松月堂古流を學ばれしを奥ゆかしく思うた、然るにこの流儀は、股なき一本の留木に、花卉を瓶の前身に任すより、奇異

の思ひなさしめ、何流との冷評を買ひたまうた。されどこれは何流と開直つて説明すべき所をなさらず、私流として更に氣にもかけられぬ所、由來花道を學ぶ風流と申したけれど、不風流な人が多いに、さりとては恐れ入つた話である。

お茶菓子の皿は、大きな銀の器である。話の尾につれて、令夫人の云はるゝには、これは子供等が相談をして、水引をかけて私どもにくれたのでありますこれは私夫婦が、今年銀婚式に當るので、祝つてくれたのであります。私はよう氣がついてして下れた、私もお前さん方に大分苦勞をしたやうに思ひましたが、かういふやうな事をしてくれると、有難うてそんな事も何も忘れてしまひましたと禮を云ひました、親子といへば親んで狎るゝ、まことに結構なれど、敬の字其他の事を忘れて、爲に紊るゝといふことになるが、一家に住んで子が親に心づくしを贈る、親はこれに相當の謝禮を拂ふ、何とうるはしい話ではあるまいか。

其他一擧手、一投足、實に婦人の手本として、更に間然する所がない。

暫らくして老人の客あり、親戚らしゝ、對話中、その娘さんはお世話してもよいが、先づ他樣へ御取持するには、自分の宅に暫らく預つて、樣子を見て、いさゝか面倒を見てゞなければ、しかし中々よく行かぬ勝のもので、と。

これは盜み聞きなのであるが、この對話の一節で、事を成すに責任を重んぜらるゝ事が解る。と同時にこの令夫人の前には、いかなる女子も感化されるであらうと信ずるに、よく行かぬ勝のもので、とは注意の深さを察せらるゝに餘りありと思ふ。

阿部氏は富豪である。しかしお大名ではない、實業界に雄飛して今日あるを致したる、令夫人の内助に少くも一冊子の美談が綴らるゝことゝ思ふ。

私は子持で、と奧樣の多くは不性の楯とされるが、令夫人はなか〳〵のお子持である、これを一々立派にお仕上に成つて、一家の事、衒に餘るほどなるに

搗て丶、外に出で丶も、この地位の婦人として盡すべき限りの事には盡力せられ、四五回の面談、これ等を問題にせられた事はない。

婦人慰問會の美擧、この令夫人の主唱に係るものと思ふ、軍人に内顧の憂なからしむる策を建てられる話は、其の以前疾く耳にしたことである。

『たのしみは夕顔棚の下すゞみ、男はてゝら女はふたのして』の和歌あり『樂しきは貧しきにあり梅の花』の俳句ある、畢竟、和氣靄々たる家庭の團欒を上流に見せぬからである、令夫人はこの歌句を何と見らるゝであらうか。

湯淺海軍少佐の令妹を訪ふ（口繪參照）

菊池雪子

旅順閉塞の決死隊に加はりて逸れ武將の譽を萬世に留めたる湯淺少佐は軍神と稱へられたる廣瀨中佐の親友で入らつしやいますが、其の令妹梅子樣は、赤十字の看護婦を勤めてお出になりますので、篤志看護婦人會には、いつもお見えになつて、他の看護婦方二三名と共に、會員の婦人方が繃帶を卷くお稽古をなさいますときなどに、種々お世話をなさいます。

少佐の御閲歷に就きまして、未だ世の新聞や雜誌に掲載になりません事柄を、少々うけたまはりたいと存じまして、記者は梅子樣をお訪ねいたしました。先づ少佐が今回名譽ある戰死をなさいましたことを至上の榮譽と申上げまして、それからお兄樣の幼時のお話を承はりたいと申しましたところが、梅子樣は

『はい、兄は明治四年に芝の赤羽根に生れました、幼少の時から餘程變人でございまして、格別お友達がほしいといふ樣な樣子もなく、常に一人つくねんとして遊んで居つたとよく母が申して居りました、偶にお友達が出來ますれば、舟遊や、蟬取の大將に

なつて、色々道具を持つて出かけますが、途中でまた大勢子供連が付て行列しては參りました、兄は一番この舟遊や、蟬取が大好でございましたさうです、さうして折々お友達と喧嘩をして負けでもしようものなら、剛情が強くて、容易には家に歸つて來ませんでした、お客様がお出になつても、お目に懸つてお辭義いたすことをいやがりまして、隣の室から隙見位をいたして居りました。』

『學校は礫川小學校に通ひましたが成蹟優等で卒業いたしました、學課の中に兄の得意のものは算術であつたさうでございます、其れから嘉納治五郎先生の塾に入りました、さういたしまして中學に通つて先生のお宅で、また柔術を習つて居りました、先刻お話申上げました程の變人でございましたけれども、先生はよく御教導なすつて下さいましたさうで、師弟の間柄も餘程親密であつたと申して居ました、先生はどうかしてよい人間にしてやりたいと、いろ〳〵御心配下さいましたと始終兄が話して居りました、修業いたします間は寒さが厳しくても素足で股引もはかず、何から何まで働かねばならなかつたさうでございまして、寒中は手足にあかぎれが絶えませんから、父母はそれを見て足袋を送つたさうですがとう〳〵あなた用ゐませんでしたと。』

是時梅子様が暫くお話をお休めなされて、記者に向ひ『失くなつた兄に對して妹の義務を盡したいと思ひますから、知つて居りますだけはすつかり申上ませう。』と仰せられまして、

『兄は十六才の時、父に別れました、さういたしますと自分はこれから相續の大任を擔はねばならぬと申まして、一心に學問を勵んで居られました、十八才になりまして海軍兵學校に入學いたし、廿一才に首尾よく卒業いたしました、其れから外國に參つて居りましたが、日清戰爭が始まりましてから歸省して松島艦の乘組員になつて戰地に臨みましたが、二十八年無事で歸りました、其節何か功がありましたと見えまして賞與を戴きました、三十一年大尉に

其の前日、小川直子刀自を訪ひて談話したるが、刀自が相客へ、二三回、阿部樣の奥樣は御近所で時々御出るが、實によいお心掛の方で、いつも感心して居りますと。予は其の時は聞流しにしたるが、十目の視る所と、後に氣附いた。

芝松坂町に、往來の人に記憶せしむる一搆がある。即ち阿部氏の邸である。

予はこの門をくゞること五回。羨しく感じたは、其の門の高さではない、其の庭の廣さではない、其の主人の地位でもない、其の家の財産でもない、和氣藹々たる家庭、嘗て聞く、張公藝の一家も、斯の如くありしならんと。實にそれである。

取次に出る老人、はなはだ人柄で、其の應接ぶり、極めておだやかで、謙遜で、まづ其家風を見るに足るべく。數多く見受くる令息、令孃、温順に、行儀よく。下婢を困らする如きは、藥にしたくもなきことであらう。

まづ初對面の一日を記さう。

案内に連れて、奥の廣き座敷に通る。折ふし來客あり。應接、痒き所に手屆き、談話、はき／＼して、實にしとやかなる、失禮ながら、申分のなき結搆なる奥樣である。

其の次手前の室に、一雙の屏風、これは珍品である。即ち故税所敦子刀自の短冊、あるは書簡のはりふせなり。予の常に愛誦する、大江廣元を詠ずる歌もこれにあり。

これは何よりのお品である、私は税所刀自を詠史に於ては、今古を通じて日本一、普通のも、恐らく今の歌人先生には、此右に出づるものはあるまい、と予はお世辭のなき所を云うた。

すると令夫人は、あなたは歌がお好で、税所さんのが御贔負とは何より、私はお歌はもとより結搆でありますが、歌よりも御人物で、實に税所さんは立派な御人物であります。

令夫人は、あらゆる婦人會に、否重立ちたる三四の婦人會に會員とし、役員として責任を盡されて居ら

る丶が、それ等の會の、多き會員は云はず、役員中にも、操行甚だおもしろからざるがあるに、常に眉を顰めらる丶こと丶思ふ。實に人物はすくなきものである。

さりながら人物談は憚られて、歌の話となり。令夫人の近作をたづねた。

この一家の主婦として、殊に國事多端、公共の事にも毎日奔走せられ、即ち內外に立働かれ、寸暇もあるべく見受けられねど。心裡の美は、いつか文字となりしならん、廿餘首の近作を示された。筆蹟頗る美事である。

その歌は、令夫人の美風を見るべく、斯うである。

御となりどちむつび給ひて、いひかはしたまへるを、うれしみ

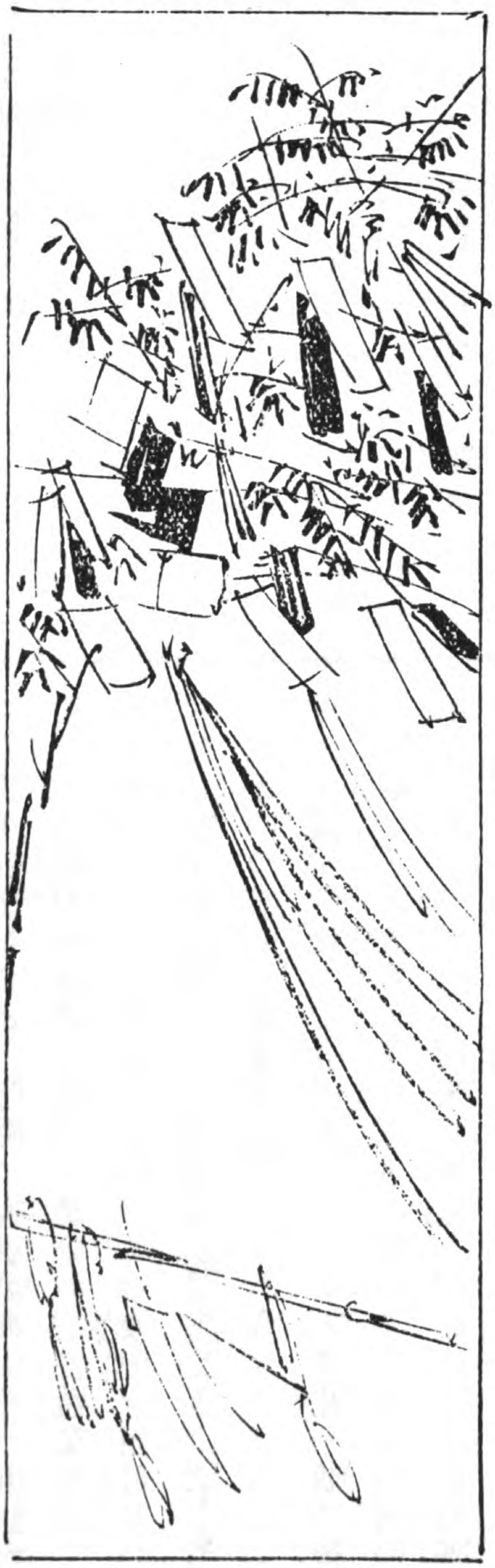
さしなみの隣づからはませがきの
　ほかにへだてもなきぞ嬉しき

松村、千坂の二かた、負傷したまへるをきゝて

なに事もいはで嬉しき音をぞなく
　あけにそまりし人をおもひて

清岡香久子の君の子息二かた、出立たまふに

日のみはた高くかざしてしこ草の



露うちはらふかど出をぞ祝ふ

身内なる中村正明兄弟三人出立、わかれに添え『いざともにみことかしこみわだこもる、うらるの山をふみならし來む』といひこせしいさましさに

いまさらに何をか云はむ國の爲に
　いのちを捨つる君にむかひて

折にふれて

をみな子のか弱き身にも國の爲を
　思ふこゝろをおもへますらを

其他澤山秀逸のがあつたが、略すとして、以上の歌はどうであるか。これをもし森村、小川二氏にお見せ申さば何と云はるゝ。阿部の奥樣は、歌はもとより御上手であるが、御人物がと云はるゝであらう。税所刀自のは阿部夫人ばかりではなく、阿部夫人は森村、小川兩氏ばかりでなく、其の人を知れるほどの人は同感であらうと思ふ。

茶の入替にとて、女中が來た、多くの來客に馴れたる事とて、これも行屆いたるよき女中なり、過つて咖啡の茶碗を横にして、それが座蒲團の下へ流れた。令夫人は手早くそれを拭いて、別に女中に小言らしい事もいはず、いやな顏もせられず。極めて柔和に『取替へてお出』と、命じ、女中の去つた跡で。まことに粗相をしましてと、叮嚀に謝辭があつた。事些かなれども味のある話ではあるまいか。普通なれば、奥樣利巧ぶつて、失策を恐れて居る女中を面目なからせ、客に氣の毒がらせ、自分は禮を缺くに歸する、まことにつまらぬ始末を演ずるであらう。

床には富士の軸に、令夫人がたしなみの花一瓶。後の來客、三十左右の奥樣なり、口あると見ゆ、其の活花を見て、これは何流であらう、といさゝか冷評の氣味なり、令夫人曰く、これは私流。

予この時の生花を見て、令夫人が造花に近き、在觸れたる花道によらず、天眞を尙ぶ松月堂古流を學ばれしを奥ゆかしく思うた、然るにこの流儀は、股なき一本の留木に、花卉を瓶の前身に任すより、奇異

の思ひなさしめ、何流との冷評を買ひたまうた。されどこれは何流と開直つて説明すべき所をなさらず、私流として更に氣にもかけられぬ所、由來花道を學ぶ風流と申したけれど、不風流な人が多いに、さりとては恐れ入つた話である。

お茶菓子の皿は、大きな銀の器である。話の尾につれて、令夫人の云はるゝには、これは子供等が相談をして、水引をかけて私どもにくれたのであります

これは私夫婦が、今年銀婚式に當るので、祝つてくれたのであります。私はよう氣がついてして下れた、私もお前さん方に大分苦勞をしたやうに思ひましたが、かういふやうな事をしてくれると、有難うてそんな事も何も忘れてしまひましたと禮を云ひました、

親子といへば親んで狎るゝ、まことに結構なれど、敬の字其他の事を忘れて、爲に來るゝといふことになるが、一家に住んで子が親に心づくしを贈る、親はこれに相當の謝禮を拂ふ、何とうるはしい話ではあるまいか。

其他一擧手、一投足、實に婦人の手本として、更に間然する所がない。

暫らくして老人の客あり、親戚らし、對話中、その娘さんはお世話してもよいが、先づ他樣へ御取持するには、自分の宅に暫らく預つて、樣子を見て、いさゝか面倒を見てゝなければ、しかし中々よく行かぬ勝のもので、と。

これは盜み聞きなのであるが、この對話の一節で、事を成すに責任を重んぜらるゝ事が解る。と同時にこの令夫人の前には、いかなる女子も感化されるであらうと信ずるに、よく行かぬ勝のもので、とは注意の深さを察せらるゝに餘りありと思ふ。

阿部氏は富豪である。しかしお大名ではない、實業界に雄飛して今日あるを致したる、令夫人の内助に少くも一册子の美談が綴らるゝことゝ思ふ。

私は子持で、と奥樣の多くは不性の楯とされるが、令夫人はなか〳〵のお子持である、これを一々立派にお仕上に成つて、一家の事、荷に餘るほどなるに

搗てゝ、外に出でゝも、この地位の婦人として盡すべき限りの事には盡力せられ、四五回の面談、これ等を問題にせられた事はない。婦人慰問會の美擧、この令夫人の主唱に係るものと思ふ、軍人に内顧の憂なからしむる策を建てられる話は、其の以前疾く耳にしたことである。『たのしみは夕顔棚の下すゞみ、男はてゝら女はふたのして』の和歌あり『樂しきは貧しきにあり梅の花』の俳句ある、畢竟、和氣藹々たる家庭の團欒を上流に見せぬからである、令夫人はこの歌句を何と見らるゝであらうか。

湯淺海軍少佐の令妹を訪ふ（口繪參照）

菊池雪子

旅順閉塞の決死隊に加はりて遖れ武將の譽を萬世に留めたる湯淺少佐は軍神と稱へられたる廣瀬中佐の親友で入らつしやいますが、其の令妹梅子樣は、赤十字の看護婦を勤めてお出になりますので、篤志看護婦人會には、いつもお見えになつて、他の看護婦方二三名と共に、會員の婦人方が繃帶を卷くお稽古をなさいますときなどに、種々お世話をなさいます。

少佐の御閲歴に就きまして、未だ世の新聞や雜誌に掲載になりません事柄を、少々うけたまはりたいと存じまして、記者は梅子樣をお訪ねいたしました。先づ少佐が今回名譽ある戰死をなさいましたことを至上の榮譽と申上げまして、それからお兄樣の幼時のお話を承はりたいと申しましたところが、梅子樣は

『はい、兄は明治四年に芝の赤羽根に生れました、幼少の時から餘程變人でございまして、格別お友達がほしいといふ樣な樣子もなく、常に一人つくねんとして遊んで居つたとよく母が申して居りました、偶にお友達が出來ますれば、舟遊や、蟬取の大將に

なつて、色々道具を持つて出かけますが、途中でまた大勢子供連が付て行列しては參りました、兄は一番この舟遊や、蟬取が大好でございましたさうです、さうして折々お友達と喧嘩をして負けでもしようものなら、剛情が強くて、容易には家に歸つて來ませんでした、お客樣がお出になつても、お目に懸つてお辭義いたすことをいやがりまして、隣の室から隙見位をいたして居りました。』

『學校は礫川小學校に通ひましたが成蹟優等で卒業いたしました、學課の中に兄の得意のものは算術であつたさうでございます、其れから嘉納治五郎先生の塾に入りました、そういたしまして中學に通つて先生のお宅で、また柔術を習つて居りました、先刻お話申上げました程の變人でございましたけれども、先生はよく御教導なすつて下さいましたさうで、師弟の間柄も餘程親密であつたと申して居ました、先生はどうかしてよい人間にしてやりたいと、いろ〳〵御心配下さいましたと始終兄が話して居りました、修業いたします間は寒さが嚴しくても素足で股引もはかず、何から何まで働かねばならなかつたさうでございまして、寒中は手足にあかぎれが絶えませんから、父母はそれを見て足袋を送つたさうですがとう〳〵あなた用ゐませんでしたと。』

是時梅子樣が暫くお話をお休めなされて、記者に向ひ『失くなつた兄に對して妹の義務を盡したいと思ひますから、知つて居りますだけはすつかり申上ませう。』と仰せられまして、

『兄は十六才の時、父に別れました、さういたしますと自分はこれから相續の大任を擔はねばならぬと申まして、一心に學問を勵んで居られました、十八才になりまして海軍兵學校に入學いたし、廿一才に首尾よく卒業いたしました、其れから外國に參つて居りましたが、日清戰爭が始まりましてから歸省して松島艦の乘組員になつて戰地に臨みましたが、二十八年無事で歸りました、其節何か功がありましたと見えまして賞與を戴きました、三十一年大尉に

昇進いたし、三十三年海軍兵學校の教官に任せられましたが、其頃妻を迎へまして只今では三才になる女の子が一人でございます。」

　と、話しかけて、梅子樣はツと彼方の小箱から寫眞二葉を取り出して、記者にお見せになりながら、

「是れが兄でございます、こちらは姉と姪ですと、お示しになつた時、記者はまだお若い夫人が忘れ形見の幼ない令孃と共に、あはれ此世を嬉しくや、憂くや、お過しなさるかと思ひましたら、御心中そゞろに思ひやられまして覺へず暗涙を催ふしました、梅子樣は二葉のお寫眞をお見せになりながら。

「始ての方に面會いたしますときは、極くもう口重な質でございますが、長く交際いたします間には、却て人樣よりも親密になるやうです、學校では生徒方に對し、あまり嚴重と見えますが、さうかといつてまた生徒の方で尋ねてお出になる人でもあらうものなら、それは〱細々と親切に自分の經驗談をいたして時の經つのを覺へない位でありました、又母には勿論妻や姉や妹の私にはまことに優しくして呉れまして、大聲など出したとは決して御座いません、そうして家に病人でもございますと、非常に心を用ゐて心配してくれますのには誰も感心して居りました。」

　お兄樣の御嗜好はとお尋ねいたしましたところが

「はい兄の嗜好でございますか！若い時から道樂と申せば、書物を讀むことでございましたよ、新版の書物が出來たとか、珍しい書物が出たとか聽きましたときは乾度買ひに參るのが僻でありました、餘り本道樂だと母から小言をいはれる位でございました、毎朝四時か五時に目を醒しまして、人がまだ寢んで居ります間に、勉强いたすのが習慣で、それから子供を抱いて海邊を運動して、家に歸りますのが規則のやうになつて居りました、其れが濟んで、朝の御飯をいたゞくのでした、これは官舎中の評判になつた位なさうであります。」

「其れから、愈々日露戰爭が開かれさうになりまし

て、兄も戰地に行く心得で、一月の中旬でございました、暇乞と申して一夜歸宅いたしました。』記者はお尋ねいたしましたところが、梅子様は『格別の話もありませんでしたが、戰爭に行くのは死に、行くのではなくて、義務を盡しに行くのである、けれど義務を盡すためには死をも厭はない、充分目的を達して軍人となつた本分を盡したいものであるなど、話して居られました、それから姉はじめ私共にも、留守中は家内睦じく、體を大切にして、特に子供の敎育に注意して呉れいと申されました。』と話しながら一通の手紙を取出し『これは兄が出發の際よこしましたので、只今では忘れられない形見になつて居ります。』と記者にお見せ下さいましたから、拜見しますると、

前略御細々の御手紙正に拜見、皆々様益々御機嫌よく御消日の由、大慶此事に御座候、扨今回は旅順方面に於て、聯合艦隊大活動有之候に付ては、小生は決死隊に御撰拔の榮を荷ひ、誠に身に餘る光榮と深く悅び居申候、無論生死の程も相別らず何事も天祐と諦らめ、笑を含んで死地に乘入申候、兎に角本紙御一覽の頃は、旣に小生の運命も新聞紙上にて判然致可と存候、私戰死後の事は別に相認め置候間何れ御手元に参る筈に御座候
先は取急ぎ出發に臨み御暇乞迄一筆如此に御座候早々

出發に臨み　湯淺竹次郎

母上様

榮子殿

あゝ此の手紙を落手なされた時の母君と夫人はどんな心地でお出でしたらうか、けれど、これは私情に過ぎないことで、さすがは前以ての御決心、御良人が公に報じなすつた、武勇の働きをいと御滿足におぼされて、御出になりますとのこと、記者は心中に夫人よ、いまよりは垣根の撫子一もとを、露霜にも枯らさずして、美しい花を咲かせたまへや、と少佐

の功を讃嘆いたすと同時に、夫人の勇氣を讃嘆致しました。ガラスの窓にうつる黄雲のちぎれに鳥の塒求めに行くけたゝましい音に、記者はお暇いたし歸りました。

露帝アレキサンドル一世の教訓

上へ/\

梅本政

露帝アレキサンドル一世は珍らしい賢君であつた、或時近侍も連れず唯一人微行して巡行されたことがある、その時の服裝は極く粗末な軍服を召されて居られたから、何人も陛下とは氣が附かなかつたのである、さて陛下が片田舍へ參られた所が路が二筋に岐れて居て何處へ行きて可いやら頓と分らなくなつたに依て、幸ひ檐際に立て居た人に『カルガの方へ行くにはどちらの路が宜しいかな』と馴れ/\しく尋ねられた、

問はれた人は、立派な軍服を着て口に烟管をくわへサモゑらさうに控て居たが、陛下の服裝を見て、此奴は下士官か何かつまらぬものであらふに、乃公に向つてなれ/\しくものを聞くとはヘンな奴だなと云はぬばかりの顏付で、兵卒に號令するやうに

軍人『右へ』

と、簡短に答へた、

陛下『有りがたう御座る、序にもう一つ御尋ね申したい』

軍人『何んだ』

と、極く横柄に問ひかへした、

陛下『貴官は陸軍で何をなされて居らつしやるか』

烟草の烟を吹きながら、

軍人『中てゝみよ』

陛下は内々可笑しく思ひ給ひ、

陛下『中尉で御座るか』

軍人はいよ/\ゑらさうに鼻高々と、

軍人『それよりも上じや』

陛下「大尉で御座るか」

軍人「まだ上だ」

陛下「少佐」

軍人「ウム」

と、威張り返つてうなづきました、陛下は可笑しさを隠して、此のゑらい人におじぎを為された。

少佐「今度は乃公が聞かう、貴様は一體どふ云ふ役じやノー」

陛下「中て丶御覧なさい」

少佐「中尉かァー」

少佐はそうは云つたもの丶、心中では彼奴中尉どころか高か〳〵軍曹位じやらう、是から段々下げるも一興だと、お臍で笑て居ますと、これは少々案外

陛下「上です」

少佐は意外だと云つた體で、

少佐「大尉ですかな」

陛下「まだ上」

少佐は驚き、少し言葉も丁寧になり、

少佐「少佐でござるか」

陛下「上へ〳〵」

少佐「大佐で御座りますか」

少佐は先きの高慢な顔付を何處へか隠して仕舞ひ、口から烟管を外しで、

陛下「もう一度」

少佐「貴官は陸軍少將で居らつしやつたか」

陛下「大分近づいたやうだ」

少佐は此時帽子をぬいて、

少佐「左様ならば大將閣下で御座りましたか」

斯様に言つた時は、先刻までさも横柄であつた少佐も氣抜けがしたやうな顔付で、恐る〳〵陛下を眺めて居た、

陛下「まだ〳〵もう一度申せ」

大將より上だと聞いたから、少佐はたまらない、ぶる〳〵と慄ひ出し、覺えず手から烟管を落とし、

少佐「皇帝陛下でおはしましたか」

陛下は少佐の樣子の變つたをお笑ひながら、

陛下「その通り」

と答へられた、是に於て少佐は陛下の足下にひれ伏

し、
少佐『陛下お恕し下され、おゆるし下され』
と泣き出した、
陛下『悪いことをせぬものに、何の恕すことがあらう、其方は只朕に路を教へて呉れた計りである、有難く禮を云ふぞよ』
陛下は斯様に仰せられてカルガの方へと行かれた、此の問答は少佐の爲には良い教訓であつた、少佐は此時のことが膽に銘へて一生涯忘られなかつた、不圖下役のものに向て横柄にあしらひかける時は、何時も此事を思ひ出して心から恥かしくなり、直ぐに丁寧な擧動をするやうになつたと云ふことである。



澳帝ヨーセフ二世の愛嬌（それよりもよし）

澳帝ヨーセフ二世陛下は常に單身でツインナ府外の近郊を逍遙なさることを好ませられた、一日例の如く御者をも召されず馬車を驅つて居らしたが、一天俄に曇りて墨を流し、見る〳〵驟雨降り出してその勢の凄じさ篠を束ねて突く有様であつた、折柄一人の下士官がいきせき走せ來つて、馬車へ突貫したのであ

その主人の何人なるをも知らで、いきなり便乗を求めた、

下士「君御迷惑でせうが僕は今日始めて着た新裁の軍服の汚るゝが愛いから便乗させて呉れ給へ」

馬車の主人は下士官が頼むまゝに拒まで雨を凌がせられたが、さて、

主人「君は何處から來りしか」

下士「僕は同僚の守衛から歸りがけです、今朝衛所で結搆な朝食を頂戴した」

主人「ア、左樣か、その結搆な馳走とは何だ」

下士「試に當てゝ見給へ」

主人「余には譯らない、併し判斷も一興だ、當てゝ見やうか、肉汁に麥酒位だな」

下士「中か〳〵それよりもよし」

主人「さらば「シュクルート」か」

下士「否な、それよりもよし」

主人「然らば犢の股肉か」

下士「否な〳〵それよりもよし」

主人「されば余は最早判斷することが出來ない」

下士官はさもあらんと云ふやうな顔付で身を少し前へ乘出し、輕く主人の膝を拍て、

下士「僕が結搆のものとは雉子のことだ、辱くも天皇陛下が御遊獵で獲させ給へる雉子の肉であるから結搆ではないか」

と、さも有難き感に堪へざるやうであつた、その内に馬車は段々と馳せつゝあつたが、最早府内に到らうとする頃、馬車の主人は序でだから下士官の住居まで送るべしとて、その何處の住居なるかを問はれた、下士官はその厚意を謝して、紀念の爲め主人の姓名を尋ねたら、主人は笑て、

主人「今度は君の番じや、試に當てゝ見よ」

下士「然らば貴下は陸軍に居らつしやるか」

主人「左樣」

下士「然らば下士官ですか」

主人「否なそれよりよし」

下士「然らば尉官で御座るか」

主人「否なそれよりもよし」
下士「然らば佐官殿で御座りますか」
主人「否なそれよりもよし」
下士「將官閣下で居らしやりましたか」
主人「否なそれよりもよし」
下士「果して然らば皇帝陛下の外はないのだ」
此時馬車の主人は外套の釦を外されて、その服裝を示し給ひて、
「左樣、汝に結構な雉子の肉を喰はしめた陛下だ、」と、仰せられたから下士官は魂飛び心亂れ、顏色變へて驚き惑ひ、幾回となく不敬の罪を謝し、馬車を停めて臣を降し給はれと願ひました、陛下は微笑し給ひて、
陛下「否な／＼、汝は陛下の雉を馳走になつた後で、陛下が更に汝の家まで送られたと、誇らしめさせふ」
と仰せられて、遂に下士官が賤しき住居まで送り遣はされた。

家庭植物

牽牛花

倭翁

◎後水尾院の御製に、

朝顏の朝な／＼に咲きかへて
盛り久しき花にぞありける

とある如く、實に牽牛花は七月上旬から咲かけて九月下旬までも毎朝美麗なる花を開きて目を悦ばせ、自然と早起して新鮮なる空氣を呼吸させるなど、衞生上に大なる稗益を與ふるは言ふに及ばず、三ケ月の間も續いて夏季の花には珍らしい程その精力の衰へないのは、實にこの花の外にはありませぬ、さてその培養も誠に容易であつて、素人や女性の手で世話も出來ますし、その上年々いろ／＼の變花を生ずるなど、一たび培養を試みると云はん方なき興味のあるものであります、故にその愛玩の極、知らず／＼深入りして、變物を作らうと夢中になる人もありますが、此等も閑人の道樂として見れば、先づ罪の

ない慰みでありませう。
◎もし縁日もので間合せますれば、一鉢僅か五六錢から得らるゝので、二三十錢も掛けましたら、長い夏の間毎朝新らしい美花に對して樂むことが出來るのであります、ですから金殿玉樓に優遊高臥して、階前萬頃の庭園を占め給ふ上流貴紳から、九尺二間の裏店借屋に齷齪蝸居して、窓外掌大の庭先すら有せざる下層の細民に至るまで、平等一樣に賞觀し得らるゝは、獨りこの牽牛花あるのみと云つて宜しい、これ時節柄翁が、家庭の娯樂の一として此の愛らしき植物の培養を、お勸め申す所以であります。
◎朝顔は元來温帶地方の産でありまして、我邦にも天然に生育したものもありましたが、今日培養せられて居る種類は最初藥用植物として支那から輸入したもので、頃は平城の朝の末から平安の都の始に當りて、渡來したのじやと云ふことであります、其培養が追々盛になつたはヅヽト後の事で、寛政文化の時代に數多の變物が出來、嘉永安政の頃に至て、いよ〳〵流行の頂上に達したのであります、所がかの黒船の出沒してより、世の中物騷と相成り、終に維新の大改革となつた始末ですから、朝顔の流行も一頓挫をして、僅に二三種の殘りたるのがあつた位でした、其後明治十二年頃から又ボツ〳〵と流行し出まして、爾來今日と進み、輓近歐米人まで多く賞賛することゝなつて、海外へ輸出する盛況を呈するに至りました、東京、横濱、名古屋、新潟、京、大阪等地方々々に同好者の組織になれる朝顔團體があつて、毎年珍花奇葉を持寄りて品評會を開き、互にその優劣を爭ふ有樣であります。
◎最初渡來のときは淺黄、紅、白の三種でありまして、その異種の世に出たは文化の頃、江戸下谷御徒士町の植市の變化種を出したのが始りで世に廣まつたので、天保の饑饉に一時衰退を來たしましたが、弘化年間に江戸入谷の成田屋百次郎と云へるが、熱心栽培して珍品奇種を出したから、遂に嘉永安政の盛況を來たしたのであります。

元來この植物は花葉共に變り易きものでありまして、年々珍奇なる新種が出來るから、その種類の如き、今日に至ては數限りがありませぬ、所で先づこれを大輪と變物との二に分けます、そこで大輪ものは花徑三寸以上のものを申すので、近年は園藝術が甚だ進歩いたしまして、五寸七八分位の花を咲かすやうになりました。

◎變物は花、葉、莖とも普通の範圍を出で丶、種々形狀を變化したものを申すので、最も面白く出來て居るものがあります、此等の花葉は花瓣の變化したもので殆んど朝顔の花と見えぬやうなものもあります、その重なるものを擧げますれば、花には、孔雀咲と云つて雄蘂變形して瓣となり、花底より細長き花瓣が出て居るもの、風車咲と咲つて瓣が五枚に切れ、各一定の方向に捻れ、恰も風車のやうになれるもの、花瓣五個所に切れて、桔梗に似たるものを桔梗咲と申し、六枚に切れて、咲けるを六曜咲と云ひ、花瓣の縮みたるを縮緬咲と云ひ、花瓣細に割て多瓣となり、位置不定なるを亂獅子咲と云ふのであります、この外牡丹咲、唐花咲、風鈴咲、撫子咲、抱へ咲、細切咲、茶臺咲等の別があります。

葉には、雨龍葉、林風葉、柴舟葉、柳葉、七福葉一名亂菊、鍬形葉、七五三葉、南天葉、笹葉、孔雀葉、松島葉、布目葉、打込葉、抱葉などの別ありて、葉莖相密接して重り合へるものを渦葉と云ひ葉面に白斑點あるものを斑入葉と云ひ、斑點の純白なるものを水晶斑と云ひ、斑點の散在せるものを切れ斑、裏に散在せるものを裏切れ葉と申す類であります。

◎朝顔を培養するには、これが準備として培養土と肥料とを拵へねばならぬ、土は塵溜の下土か、又は下水浚の土などを採りて、日光に曝らし、篩にかけて石や竹屑、木切を去りて作るのであります。

◎肥料は干鰯、鳩の糞、豆腐粕、人尿、魚類の洗汁、蠶糞、過燐酸等いろ〳〵ありますが、經驗上油粕を宜しいと思ひます、そこで先づ油粕一升に水一升の割で甕に入れ貯へ置くときは、日が經つに從ひ、水

が腐敗して青色を帯びて來る、さればその上澄みを一升に水五升の割合で、一日置きに施すのであります、若し油粕を粉のまゝ遣るときは、虫が生きて根を腐らす恐れがあります、又魚類の臓腑を腐らして五十倍の水を加へて、十日に一回位やるもよろしい。

◎さて土と肥との用意が出來たら、次は苗場の拵へ方であります、これは日當りのよい場所が宜しいので、若し日蔭ならば蔓が延びて仕舞ふ恐れがあります、土は普通の畑土へ川砂を二分通り混ぜて仕立て、又鉢蒔にするには口徑一尺位の平鉢か、又は木にて作れる五寸位の高ある箱鉢に、水抜き數個をあけ、その下底に炭屑か小石を敷きて、普通土と川砂を混せたものを盛り、更に前に拵へ置きたる培養土を、その上に被せて、その面を平にするのであります。

◎その播種の時期は、氣候と土地の寒暖とによつて、自然相違のある譯ですが、要するに八十八夜前後に限ると思はれます、時節が早や過ぐれば、發芽遅くその上霜に苛められる恐れがあります、又遅くなれば發芽、成長とも馬鹿に早く蔓の延び過ぐる憂ひがあります、即ち八十八夜頃になつたら、兼て貯へある一番種を取りて、胚の方を下に向けて蒔のであります、この胚は根及び芽の出る所でありまして、俗に臍と申します、若しこの臍の位置を間違へて上の方へ向けると、根が土の上へ突出たり、又外皮を被たまゝ發芽して腐ることがありますから、一寸注意すべきことである、又土を厚く被くれば、發芽の妨げとなるから、薄き方をよしとします、故に鉢蒔ならば、指頭にて深さ二三分の穴を三つ四つあけて、種子二粒づゝ蒔き、細い川砂を蔽ふて置くがよろしい。

種子の發芽力は、四年間位なもので、それよりは漸次その力が減じて、七年も經つと全く發芽しないやうになります、もし此年經た種子を蒔くときは、數日間之れを水に浸して、日向に置くのです、されば發芽力あるものは、水氣を含むで參ります。

◎かくて首尾よく種を下し終つた時は、別に經五寸

深四寸位の鉢へ培養土を入れ、（尤も鉢は素焼の荒いものを撰ぶが良し、瀬戸類を用うれば、水の乾きが悪いからであります、）その鉢へ種子が發芽して、二葉から一枚本葉を生じた頃に、移植するのであります、即ち日和のよい夕方に、竹の箆様のものを執て、深く土中にさし入れ根を損せぬやう、少々土をつけて抜取り徐に植うるのであります、さて移植し了つたら、直に水を施し、二日間計り日光をよけて、それから外へ出す、その後は風通りよき日向に置くを肝要と致します。



◎朝顔を作る秘訣は、能く乾かせて、よく灌ぐにあるのです、既に日當りよき空氣の流通する所に置て乾かす上は、これから程よく水を灌がねばならぬ、即ち普通は毎日夕方に一回施せば十分でありますが土用の如き暑き時は鉢の内の水分が乾きて、葉の凋れかゝることがありますから、正午頃に一回施すがよろしい、尚烈しき炎天には朝晝、夕の三回やるが宜しい、水は汲置がよし、井戸の冷水を用うれば、花葉の光澤を失ふ恐れがあります、それ故常に甕又は桶を用意して水を汲込置き、一日々光にあてゝ温氣を含ましめた後に使用するがよろし、河水又は泉水はそのまゝにても差支ありませぬ、最も天氣の悪い

ときや、鉢の土に濕りあるときは見合せるので、灌水が過ぐれば蔓の延び過ぎるものであります。

◎それより先づ花色を鑑別して心覺をして置き、新芽の延びるやうになつた時より、肥料水を施すのでありますが、肥料が過ぐれば葉のみ大になつて、花が小さくなるから、肥料水は少々づゝ隔日又は三日目位にやつておき、餘は水のみを與へるやうにするがよし、朝顔は小さいうちに、花の善惡が分るゝ次第ゆゑに、その間は最も注意を要するわけであります。

◎蔓が段々延るに從ひ、葉の間から枝蔓が出ます、此ときは根元の方にある一本を殘して、その外は、悉く摘み取て、本蔓一本を育てるがよし、蔓が多いと養分が別れて自然と花が小輪となるものであります。

◎次に蔓を纏はせる爲に、立柱を拵えねばならぬ、その拵方に帽子作り、行燈作り、枠作りなど申す好みがあります、竹で作り、針金で結び付けるので、細い寒竹を用ると高尙に出來ます、之に蔓をなるべく下の方へ纏はせるがよろし、蔓は四尺位延びた所で、先を止むることが肝要です。

◎さて蕾が附けば、一つ隔てに摘去るがよろし、一節に蕾を二個三個持つときは、中央を殘して他を摘取らねばならぬ、花が開けば、毎朝賞觀した後で、花の未だ萎まぬうちに、蔓際から花莖を剪取て、次の花に精氣を殘させるやうにするが良い、かくすれば終りまで花の見劣りはせぬものであります、花が四五輪も咲くと、自然小さくなる氣味がありますから、その時は肥料水を增して、灌水を減ずるやうにすれば、即ち回復します、先きに剪取た花を紙に挾んで、重をして乾かしたら、年月經ても凋萎しないから、後日の娛みとなるものです。

◎かくて今年の花も、賞觀して了うたら、翌年の種子を採おかねばならね、この時充分なことを云へば、別に圃地に親木とも云ふべき苗を養成して、秋に成熟したものを撰びて貯藏するが良し、もし盛夏の頃、

採收する場合には、未だ充分實の入らざるうちに、實付のまゝ蔓を切て炎天に晒し、その固まるを待て、收め措くのであります、又種子の結び難いものは、肥料を斷ち、差水を控へ目にすれば、實を結ぶことがあります、すべて採收した種子は、袋に入れて天井に釣るし置くがよろしい、而して採た種子には黑、白、茶、黄などの色があります、又形に丸形、凹みなどの別がありまして、大輪物は普通形でありますけれど、變り物は小形で凹みがあります、茶色で黑斑のある種子は、斑入葉であります、親株に人工媒女法を行なつたら變物を生じますが、その花形は雌性の性に似て、色澤は雄性に類するものであります。

◎變物を作るには、其發芽後本葉一枚出したときに、一旦假植をして置きて、更に五六葉も出したとき本鉢へ植直し、二三日の間は、日光を避けて、それから次第に日向へ出すのであります、灌水の度は前に話した大輪ものと異いはありませぬ、勢力を弱めて、不具なものを養ふが目的でありますから、成るべく肥料を多量に遣らないやうにするのであります。

◎牡丹咲のやうな變物を作らんと思はゞ、先づ牡丹性の親木、これは牡丹咲を生ずべき系統中で其變化の度少きもの、即ち未だ牡丹咲とならない普通の丸咲から採るのであります、例へば牡丹性の種子十粒を下種培養するとせば、その内四本は牡丹咲の花を開き、殘り六本は矢張り普通の丸咲であつたとき、其丸咲の花を開いたものが、牡丹性の親木で、この親木から得た種子を翌年に用うるのであります、併しながら同じ元株から採た種でも、その上品なる元株から採つたものは割合に變化が少なく、下品な色澤を有せるものから得た種子には、多く變化が出來るものであります。

◎朝顔は、その持前の色を子葉及び莖に顯はすものでありますから、豫め注意さへすれば、其花の色を知ることが出來ます、最も成長するに從ひ、次第に薄くなつて、遂には消えてなくなりますから、最初双葉の時に之を見分け置くのがよろしい、是れ前に

花色を鑑別して心覺えして置くやうにと云つた譯なのです。莖色にて分けるには、その莖色が紅なれば花は紅色、淺赤なれば桃、濃紫なれば瑠璃、柿色なれば蔦、又莖根際に白の縦線あるは覆輪、斑點あるものは其色に依て絞り、立筋あるものは刷毛目であります。

◎子葉の色にて分くるには、赤、桃、藤紫、紅蔦の類は葉の全體に固有の色を顯はして居る、鼠色、納戸色、鳩色、栗色の類は葉の半程まで其固有の色を顯はすものであります、其外紫色、瑠璃色、紺色は葉から莖へかけて其色が出ます。

◎又葉の形にて豫め花の形を知ることも出來るものであります、常葉即ち普通の葉形のものは丸咲、七福葉即ち菊葉に似て亂れたる葉形のものは亂菊咲、砂摺葉即ち縮緬葉と云つて葉の縮れたものは花台咲、抱へ葉と云つて葉の周圍表面に返轉つたものは獅子咲、孔雀葉即ち丸形で、少し長きは孔雀咲、楓葉即ち楓に似た葉形で五枚に切れたものは五枚切咲と云ふやうなものであります。

◎すべて朝顔の栽培は、葉を小さく、蔓を細く、花を大きく作るが名人であります、又子葉を落せば、價値を下げるから、これを落さぬやうに作らねばならぬ、その落る原因は培養土の乾濕が程々を得ないからでありますから、よく終始鉢の水分に、過不足のなきやうに平均させて置くがよろし。

◎さてその種屬は、双子葉、單瓣花に屬する蔓生一年植物で、此花の名はいろ／＼ありまして、その書方も澤山ですから序に著しいものを擧げて見ませう、かゞみ草、しのゝめ草、あさな草、假君子、蕣花、勤娘子、狗耳草、盆甑子、牽牛花、朝顔、草金鈴、其他種子の黒を黒丑と云ひ、白き種子を白丑と云ひ、又西洋では「イポメア、ヘデラセア」と申すのであります。

（をはり）

體溫器の事

よし子

體溫器は身體の溫度を計る器械であることは、誰方でも能く御承知のことでありますが、その器械には種々ありまして、一番使用に便利なのは、攝氏であります、攝氏の體溫器は、水點から百度に割つてありまして、健康な小兒の體溫は、大人と同じく三十六度五乃至三十七度の間を昇降して居るのであります、之を圖解して見ますると

41,5	
41,	
40,5	大熱
40,	
39,5	中熱
39,	
38,5	少熱
38,	
37,5	
37,	平溫
36,5	
36,	

右は勿論必要の部分丈を說明したものでありますが若し熱度が四十一度以上四十二度にもなりますと、生命も早や危篤に迫つて居るのであります、尤も少熱位は左まで恐るゝに及びませんが、それにしても、二日も三日も續いて、その熱度が同しでありますならば、決して油斷はできませぬ。

それから使用法は、腋の下、或は股の間に差入れて靜かに壓へ、十五分間經つてから、そつと拔き取つて、水銀の在點を撿して、溫度を見るのであります、又た臀部に挿入する方法は、時間もたつた五分經てばよいのでありますから、簡便ではありますが、これは腋の下よりは五分程熱度が高いといふことを承知して置かなくてはなりませぬ、何れにしても、之を挿む時には汗で濡れて居つたならば、よく之を拭ふてからする樣に、又た衣服の端などが、挾まれてない樣に注意するが肝要であります、氣候の寒い時には、小兒は突然器を挿入せらるゝを嫌ふものでありますから、母親は一旦器を自分の腋の下で少し溫めてからなさるがよろしいのであります。

右に陳べました事は、知つて居らつしやるお方には殆んど半文の價値なきお話ではありますが、或る大家の醫士から承はりますと、どうも吾國の母親は、下層社會は申すに及ばず、中等以上の人でも、診察を乞ひに來て醫者の尋ねる事を、滿足に答辯する人は、甚だ少ない、それゆゑ診察上少なからぬ不便を來しますとのことでありまして、是等は甚だ其の愛兒に對して、不親切なことであると思ひます、殊に體溫器の如きは一家に必ず備へて置かねばならぬものであるのに、實際備へて居る家庭は十分の一もないとのことで、隨つて使用法も御存じない方が多からうと考へますから、大方の笑を忍びて、こゝに其の概畧を述べたのであります。

モ一ツ御注意申して置きますのは、此の體溫器を購求する時は、代價の高下を問はず、出來る丈確かな店で正しいのを需めなくてはなりませぬ、中央氣象臺又は顯微鏡院の檢定濟の物を購ふか、又は其道の人に精細なる檢定をして貰へば大丈夫であります。

電車中の家庭

内田茂文

芥子粒一個の中にも一の世界が具備され、壺中の局裡にも別個の天地を存せられてあるからには、宇宙の萬象には悉く夫々の社會が發現されて居るものである。

品川より新橋に至る僅に四哩に足らざる間を運轉する、電車の裡には、種々なる社會の情態を描き出されて居る、其を仔細に觀察し來れば、宛も是れ一つの社會觀を啓發するの趣味を感ずるのである。男性女性、老たる人、若き人、ハイカラの紳士、朴訥の田夫など、有ゆる階級の人が乘り合て居る。

見渡した所、乘客の總數は二十餘名、中央の位置に座を占めた夫婦連の客は夫妻とも未だ三十に達しない若夫婦で、夫は二歳ばかりの眠れる男兒をサモ愛

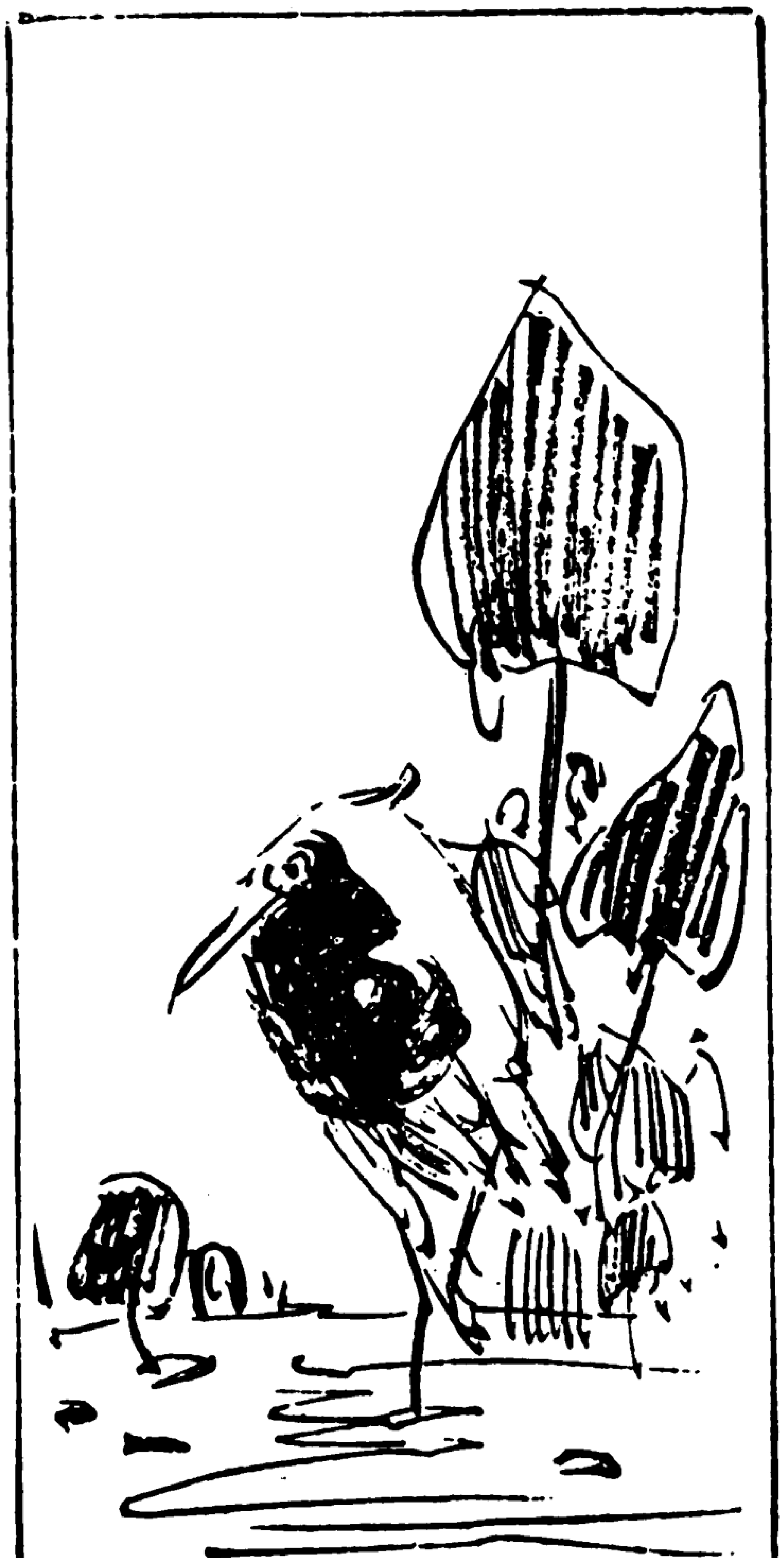
らし想に、抱て居る、妻は傍から注意して脱げ落ちんとする小兒の帽子を冠せ直し、夫に向つて言た「郎君暑う厶いませう、少し代りませうよ」夫は妻に言つた「ナニ宜い折角能い心地に寢て居るのを起しては可憐そうだから」、「マア熱そうに汗をかいて」と妻は袂からハンカチーフを把出して靜に小兒の汗を拭き取て遣つた。

噫、何たる娯しき家庭であらう、藹々たる和氣は車窓から吹き入る春風と倶に全車に滿つるの思ひがした。

此夫婦と斜めに向ひ合て居つた十七と十五位の姉妹らしき二人の娘、何れも帶はお太鼓に結び、姉と見ゆるは銀杏返し、妹と思はるゝは唐人髷である「嶋渡御覧よ可愛い事ねエ」と前の夫婦の愛兒を見せしひべく唐人髷は言つた「然うねエ、肥つてねエ自家の金坊と全然よ」と銀杏返しは言ひつゝ、尚も夫婦の小兒を注視て居るのであつた、此隣りに體格屈竟なる一人の赤帽戴きし兵士と年頃二十一二のヤケに大きな根の下つた丸髷に赤い手柄を掛けた婦人とが居た、言ふまでもなく兵士は、召集に應じて上京した後備兵で、婦人は無論その妻である事は折々語り合ふ談話で明瞭である「先達停車場まで送つた時に態じ尋ねて逢ひになんぞ來ては善くないと、お前さんに具々も言はれたのは、知つて居るけれど、私の身にさア成て見れば、お前さんの事が氣に懸つてなんねエから、と言た處で、東京さア着かれても、何處へはア宿が定まつた事やら分りましねエから、飛で行き度い程思つても、仕樣がなくつて居た處、お前さんから一昨日の晩、村長さん所へ寄越された端書で、宿が判然たから、直さア遣て來たのよ」と懐しそうに妻の言ふを兵士は「克く直に己の居る寺院が判然たなア」「お前さんの端書には圓何とか寺と書て有たのを餘まり急いで所書まで忘れて來たもんだから、方々で尋ね、交番さア行て漸と尋ね當たのよ」と、知るべし是れ入營前に於ける假に寺院に收容され居る應召兵士に遙々面會に來りたる鄉里の妻女が

相攜へたもので、素より生還を期せざる遠征の良人に、生別死別を兼ぬる、征婦の情緒は其言葉にこそ出さゞれ、推し來れば頗る纏綿たるものがあるので、彼の京極何某の『歸るべき越の旅人待ち詫びて都の月に衣擣つなり』など詠める歌さへ連想され、否、より以上の同情を表するを禁じ得なかつた。

兵士夫妻の二三人前の腰掛の隅に、年頃二十七八の婦人が居たが、車中の客には眼も觸れねば談話に耳も藉さず、頻りに毛糸と編棒とを以て、餘念なく小兒の涎掛けを編で居るのであつた、軈て鈴は響いて電車は金杉に止つた、婦人は俄に氣の付きし如く、編み掛けし毛糸其他を風呂敷に包み、而して帶の間から、ソツト一冊の帳面を把出した、表紙には確かに『毛糸渡し控』と記されてあつた、婦人は件の帳簿を他に見せしめざる樣に密かに披き見て片手の指を折り數へて頷くのであつた。



電車の芝大門に至るや、「卸して下さいよ」と此婦人の下車すると倶に入替りに乘つた婦人は二十四五の束髪で、クッキリと色の白い細面の美人、着物はお納戸色の縮緬で繻珍の帶を〆め、十七八金のルビーの指環を嵌め、其手に五歲許の愛らしい女兒の手を曳て居る。「御免下さいまし」と傍邊の人に會釋しながら、空いた處に腰を掛けた、其女兒も其母に似た容貌の美、其着物も之に對して派手で、上品な紫勝の幽禪縮緬

採收する場合には、未だ充分實の入らざるうちに、實付のまゝ蔓を切て炎天に晒し、その固まるを待て、收め措くのであります、又種子の結び難いものは、肥料を斷ち、差水を控へ目にすれば、實を結ぶことがあります、すべて採收した種子は、袋に入れて天井に釣るし置くがよろしい、而して採た種子には黑、白、茶、黃などの色があります、又形に丸形、凹みなどの別がありまして、大輪物は普通形でありますけれど、變り物は小形で凹みがあります、茶色で黑斑のある種子は、斑入葉であります、親株に人工媒女法を行なつたら變物を生じますが、その花形は雌性の性に似て、色澤は雄性に類するものであります。

◎變物を作るには、其發芽後本葉一枚出したときに、一旦假植をして置きて、更に五六葉も出したとき本鉢へ植直し、二三日の間は、日光を避けて、それから次第に日向へ出すのであります、灌水の度は前に話した大輪ものと異いはありませぬ、勢力を弱めて、不具なものを養ふが目的でありますから、成るべく肥料を多量に遣らないやうにするのであります。

◎牡丹咲のやうな變物を作らんと思はゞ、先づ牡丹性の親木、これは牡丹咲を生ずべき系統中で其變化の度少きもの、即ち未だ牡丹咲とならない普通の丸咲から採るのであります、例へば牡丹性の種子十粒を下種培養するとせば、その内四本は牡丹咲の花を開き、殘り六本は矢張り普通の丸咲であつたとき、其丸咲の花を開いたものが、牡丹性の親木で、この親木から得た種子を翌年に用うるのであります、併しながら同じ元株から採た種でも、その上品なる元株から採つたものは割合に變化が少なく、下品な色澤を有せるものから得た種子には、多く變化が出來るものであります。

◎朝顏は、その持前の色を子葉及び莖に顯はすものでありますから、豫め注意さへすれば、其花の色を知ることが出來ます、最も成長するに從ひ、次第に薄くなつて、遂には消えてなくなりますから、最初双葉の時に之を見分け置くのがよろしい、是れ前に

花色を鑑別して心覺えして置くやうにと云つた譯なのです。莖色にて分けるには、その莖色が紅なれば花は紅色、薄赤なれば桃、濃紫なれば瑠璃、柿色なれば鳶、又莖根際に白の縦線あるは覆輪、斑點あるものは其色に依て絞り、立筋あるものは刷毛目であります。

子葉の色にて分くるには、赤、桃、藤紫、紅鳶の類は葉の全體に固有の色を顯はして居る、鼠色、納戸色、鳩色、栗色の類は葉の半程まで其固有の色を顯はすものであります、其外紫色、瑠璃色、紺色は葉から莖へかけて其色が出ます。

◎又葉の形にて豫め花の形を知ることも出來るものであります、常葉即ち普通の葉形のものは丸咲、七福葉即ち菊葉に似て亂れたる葉形のものは亂菊咲、砂摺葉即ち縮緬葉と云つて葉の縮れたものは花台咲。抱へ葉と云つて葉の周圍表面に返轉つたものは獅子咲、孔雀葉即ち丸形で、少し長さは孔雀咲、楓葉即ち楓に似た葉形で五枚に切たものは五枚切咲と云ふやうなものであります。

◎すべて朝顏の栽培は、葉を小さく、蔓を細く、花を大きく作るが名人であります、又子葉を落せば、價値を下げるから、これを落さぬやうに作らねばならぬ、その落る原因は培養土の乾濕が程々を得ないからでありますから、よく終始鉢の水分に、過不足のなきやうに平均させて置くがよろし。

◎さてその種屬は、双子葉、單瓣花に屬する蔓生一年植物で、此花の名はいろ〳〵ありまして、その書方も澤山ですから序に著しいものを擧げて見ませう、かゞみ草、しのゝめ草、あさな草、假君子、蕣花、勤娘子、狗耳草、盆甑子、牽牛花、朝顏、草金鈴、其他種子の黑を黑丑と云ひ、白き種子を白丑と云ひ、又西洋では『イポメア、ヘデラセア』と申すのであります。

（をはり）

體溫器の事

よし子

體溫器は身體の溫度を計る器械であることは、誰方でも能く御承知のことでありますが、その器械には種々ありまして、一番使用に便利なのは、攝氏であります、攝氏の體溫器は、氷點から百度に割つてありまして、健康な小兒の體溫は、大人と同じく三十六度五乃至三十七度の間を昇降して居るのでありますす、之を圖解して見ますると

41,5	
41,	
40,5	大熱
40,	
39,5	中熱
39,	
38,5	少熱
38,	
37,5	
37,	平溫
36,5	
36,	

右は勿論必要の部分丈を說明したものでありますが

若し熱度が四十一度以上四十二度にもなりますと、生命も早や危篤に迫つて居るのであります、尤も少熱位は左まで恐るゝに及びませんが、それにしても、二日も三日も續いて、その熱度が同しでありますならば、決して油斷はできませぬ。

それから使用法は、腋の下、或は股の間に差入れて靜かに壓へ、十五分間經つてから、そつと拔き取つて、水銀の在點を撿して、溫度を見るのであります、又た臀部に挿入する方法は、時間もたつた五分經てばよいのでありますから、簡便ではありますが、これは腋の下よりは五分程熱度が高いといふことを承知して置かなくてはなりませぬ、何れにしても、之を挿む時には汗で濡れて居つたならば、よく之を拭ふてからする樣に、又た衣服の端などが、挾まれてない樣に注意するが肝要であります、氣候の寒い時には、小兒は突然器を挿入せらるゝを嫌ふものでありますから、母親は一旦器を自分の腋の下で少し溫めてからなさるがよろしいのであります。

右に陳べました事は、知つて居らつしやるお方には殆んど半文の價値なきお話ではありますが、或る大家の醫士から承はりますと、どうも吾國の母親は、下層社會は申すに及ばず、中等以上の人でも、診察を乞ひに來て醫者の尋ぬる事を、滿足に答辯する人は、甚だ少ない、それゆゑ診察上少なからぬ不便を來しますとのことでありまして、是等は甚だ其の愛兒に對して、不親切なことであると思ひます、殊に體温器の如きは一家に必ず備へて置かねばならぬものであるのに、實際備へて居る家庭は十分の一もないとのことで、隨つて使用法も御存じない方が多からうと考へますから、大方の笑を忍びて、こゝに其の概畧を述べたのであります。

モ一ッ御注意申して置きますのは、此の體温器を購求する時は、代價の高下を問はず、出來る丈確かな店で正しいのを需めなくてはなりませぬ、中央氣象臺又は顯微鏡院の檢定濟の物を購ふか、又は其道の人に精細なる檢定をして貰へば大丈夫であります。

電車中の家庭

内田茂文

芥子粒一個の中にも一の世界が具備され、壺中の局裡にも別個の天地を存せられてあるからには、宇宙の萬象には悉く夫々の社會が發現されて居るものである。

品川より新橋に至る僅に四哩に足らざる間を運轉する、電車の裡には、種々なる社會の情態を描き出されて居る、开を仔細に觀察し來れば、宛も是れ一つの社會觀を啓發するの趣味を感ずるのである。男性女性、老たる人、若き人、ハイカラの紳士、朴訥の田夫など、有ゆる階級の人が乗り合て居る。

見渡した所、乘客の總數は二十餘名、中央の位置に座を占めた夫婦連の客は夫妻とも未だ三十に達しない若夫婦で、夫は二歳ばかりの眠れる男兒をサモ愛

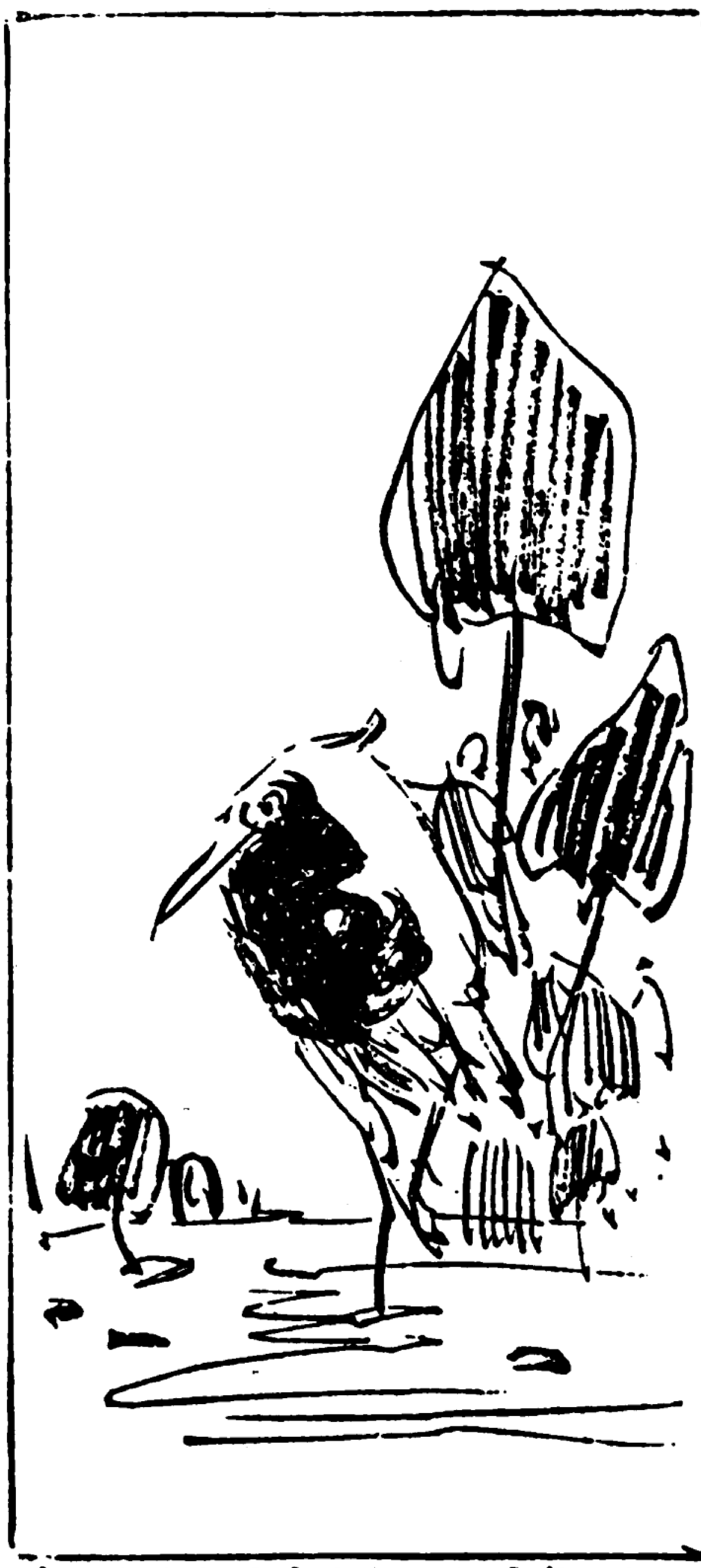
らし想に、抱て居る、妻は傍から注意して脱げ落ちんとする小兒の帽子を冠せ直し、夫に向つて言た「郎君重う厶いませう、少し代りませうよ」夫は妻に言つた「ナニ宜い折角能い心地に寢て居るのを起しては可憐そうだから」「マア熱そうに汗をかいて」と妻は袂からハンカチーフを把出して靜に小兒の汗を拭き取て遣つた。

噫、何たる娯しき家庭であらう、靄々たる和氣は車窓から吹き入る春風と倶に全車に滿つるの思ひがした。

此夫婦と斜めに向ひ合て居つた十七と十五位の姉妹らしき二人の娘、何れも帶はお太鼓に結び、姉と見ゆるは銀杏返し、妹と思はるゝは唐人髷である、「鳥渡御覧よ可愛い事ねエ」と前の夫婦の愛兒を見せしむべく唐人髷は言つた「然うねエ、肥つてねエ自家の金坊と全然よ」と銀杏返しは言ひつゝ、尙も夫婦の小兒を注視て居るのであつた、此隣りに體格屈竟なる一人の赤帽戴きし兵士と年頃二十一二のヤケに大きな根の下つた丸髷に赤い手柄を掛けた婦人とが居た、言ふまでもなく兵士は、召集に應じて上京した後備兵で、婦人は無論その妻である事は折々語り合ふ談話で明瞭である「先達停車場まで送つた時に憖じ尋ねて逢ひになんぞ來ては善くないと、お前さんに呉々も言はれたのは、知つて居るけれど、私の身にさア成て見れば、お前さんの事が氣に懸つてなんねエから、と言た處で、東京さア着かれても、何處へはア宿が定まつた事やら分りましねエから、飛で行き度い程思つても、仕樣がなくつて居た處、お前さんから一昨日の晩、村長さん所へ寄越された端書で、宿が判然たから、直さア遣て來たのよ」と懐しそうに妻の言ふを兵士は「克く直に己の居る寺院が判然たなア」「お前さんの端書には圓何とか寺と書て有たのを餘まり急いで所書まで忘れて來たもんだから、方々で尋ね、交番さア行て漸と尋ね當たのよ」と、知るべし是れ入營前に於ける假に寺院に收容され居る應召兵士に遙々面會に來りたる郷里の妻女が

相携へたもので、素より生還を期せざる遠征の良人に、生別死別を兼ぬる、征婦の情緒は其言葉にこそ出さゞれ、推し來れば頗る纏綿たるものがあるので、彼の京極何某の『歸るべき越の旅人待ち詫びて都の月に衣擣つなり』など詠める歌さへ連想され、否、より以上の同情を表するを禁じ得なかつた。

兵士夫妻の二三人前の腰掛の隅に、年頃二十七八の婦人が居たが、車中の客には眼も觸れねば談話に耳も藉さず、頗りに毛糸と編棒とを以て、餘念なく小兒の涎掛けを編で居るのであつた、軈て鈴は響いて電車は金杉に止つた、婦人は俄に氣の付きし如く、編み掛けし毛糸其他を風呂敷に包み、而して帶の間から、ソット一冊の帳面を把出した、表紙には確かに『毛糸渡し控』と記されてあつた、婦人は件の帳簿を他に見せしめざる樣に密かに披き見て片手の指を折り數へて頷くのであつた。



電車の芝大門に至るや「御して下さいよ」と此婦人の下車すると倶に入替りに乘つた婦人は二十四五の束髮で、クッキリと色の白い細面の美人、着物はお納戸色の縮緬で繻珍の帶をメめ、十七八金のルビーの指環を嵌め、其手に五歳許の愛らしい女兒の手を曳て居る。「御免下さいまし」と傍邊の人に會釋しながら、空いた處に腰を掛けた、其女兒も其母に似た容貌の美、其着物も之に對して派手で、上品な紫勝の幽禪縮緬

で、緞子の帶をやの字に結び、其上から鬱金縮緬を結んで下げてゐる、頭髮はお下に緋のリボンが結んでゐる、而して此女兒の手には派手な琥珀の小さい信玄袋を携へて居るのであつた。是と向ひ合つて居つた三十格好の頭髮を櫛卷にした婦人も、矢張り五歳位のお河童頭の女の子を連れて居つた。お河童頭は羨ましそうに今乘つた美裝の女兒を眺めて居つたが軈て「母ちやん私いも彼樣な帶を買てよ、ねエ母ちやん」と頻りに强請つた、「ア、此度買て上るよ」と櫛卷の母親は小聲で慊しながら、自分も件の美人母子を熟視し、心中何かの感に打たるゝが如く見受られた。お河童頭は尙も念を押した「此度つて何日、今晚？、明日？、ねエ母ちやん何日だよう、何時買て與れるの？」、「靜にしてお居よ今に父ちやんが歸つたら買つて上るから」と母は慰め制した「父ちやん何日歸つて來るの？父ちやん早く歸れば宜なア」と果は恨めしげに獨り言を言て居るのであつた。

觀じ來れば美裝せる束髮母子と櫛卷の親子には、是れ明らかに社會の階級を示して居る、束髮も櫛卷と均しく家庭を作つて居るのではあるが、兩者のスタイルが著しく各自境遇の差を具體的に表現して居るのであつた。去り乍ら美裝必ずしも直ちに家庭の圓滿を證據立て居るものでも有まい、粗服が强ち家族の團欒を缺いて居る結果とも限らないのである。

斯て電車は新橋に着た。愛兒を擁した夫婦も、銀杏返しと唐人髷の姉妹も、兵士の夫妻も、美裝せる母子も、各種の乘客十の七八は下車したが、櫛卷の母子は尙依然と乘て居つた。而して今又新たに乘つた裏店式の婦人が有つた、櫛卷は顏を見て「オヽ」裏店式と同じ言葉で答へ而して問ふた「主婦さん何處へ……先達は參上て御馳走さまに成りました、新さんは愈よお出征なすつたかへ」「ハア難有う其節は色々御心切に……今日あたりはモウ廣島から戰地へ參る筈です、多分來月に這入なければ、郵便は來ないでせうと思ふんですよ」。

茲に於てか始めて知り得た、お河童頭の女兒が「早

く歸つて來れば宜い』と言ふ父ちやんは即ち出征軍人の新さんなる事を。其留守宅に詫しき家庭を作り居る櫛卷婦人は名譽ある軍人の妻として、社會より尠からぬ同情を寄せられつゝある者。知らず是れ他日高き階級の家庭に女王として尊敬を拂はるゝやも、お河童頭の女兒も同時に令孃として、嘗ては羨みし美裝に飽くの運命に際會せずとも圖られぬのであらう噫々、僅に三十分に過ぎぬ電車の運轉間に斯の如き社會の現象を我等に示したのであつた。

家政學資料（つゞき）

磯部武者五郎

銀行の預り金は大概左の三種のものなり。

當座預金

特別當座預金

定期預金

定期預金は六ケ月又は一ケ年と一定の期限を定めて預け置くものにて其の利子は五分より七八分の間とす、現今は大概五分なり、若し七八分の利子にて預る銀行あらば、資本の多からざるものにて危險なるべければ、利子は少くとも確實なる銀行に預くるを可とす。

當座預金は預け主の請求次第何時にても返還するものなれば期限を定めざるなり、故に其の利子は低きものにて、大概日歩七厘より一錢の間なり。

特別當座預金は預金を爲し、小切手の帳簿を銀行より受取り、入用ある每に其金額を小切手に記して支拂ふときは、小切手を受取りたる人之を銀行に持參して現金を受取るものにて、取引の多き家又商店にては現金を取扱はざる便利あるものなり、其の利子は最も低くして日歩五分より七分位のものなり。

此の外に保護預りといふあり、それは銀行が金錢を只倉庫に預り置くとにて、預け主より保護料を取るか、又は利子を附せざるかにて預るものなり、家計上此三種の預金につき其の便否利益如何を一言せば、

一定の金額を使用せずして、單に利殖せんとせば定期預金に若くはなく、又手許に現金を置くが不安心なるときは當座預金に爲すべく、又、手許に現金を置くが不便なるのみならず、金錢の出入頻繁なるときは特別當座に爲すを便利とすべし。

保險の種類

保險とは讀んで字の如く解釋すべからず、若字の如く解釋せば危險を保護して危險を避くるといふことになるなり、然るに實際世間の事此の如くなる能はず、保險に加入せりとて人の死や船舶の沈沒や、火災に罹ることを全然保護して、避くること能はざるものなり。

保險とはかゝる意味のものにあらず、自分が罹る災難の苦痛を輕くし、一人にて被る災難を多人にて分擔して貰ふ爲に設けたる組合をいふものなり、即ち人々相互に助け會の制度にて保險組合の處を保險會社といひ、保險を申込みて仲間入をして居る人を被保險人といひ、保險の爲に會社に支拂ふ金を保險料といひ、會社より渡す金を保險金といふ保險の種類は大別すれば、

海上保險
火災保險
生命保險

の三つなり。

海上保險は船舶及び船に載せたる貨物に海上にて蒙る損害を償ふものにて、船舶業者をして安全に海運に從事せしむることを得るなり。

火災保險は家屋、家具、倉庫、貨物等が火災に罹りたる場合の損害を償ふものなり、火災保險は火事に罹らざれば保險金を得ること能はざる故に、平素支拂ひたる保險料は無益なるが如しと雖、之を以て安心を買ひ置くことゝせば、無益にもならざるべく、若一朝火災に罹りたるときは、保險金を領收して忽ちに家屋を新築することを得るのみならず、少しも一家の經濟を紊すことなくして濟むことを得ば、此の上もなき有益のものなるべし。

火災保険の保険料は家屋の種類に依て高低あり、即ち木造家屋は煉瓦造より高く、又近隣に火災に縁ある危険物あらば高し、即ち湯屋、製造場、等ある場合なり。

火災保険は大概一ヶ年又は半ヶ年づゝの期間を定めて約束するなり。

生命保険は被保険人の死亡せるとき、又は一定の年齢に達せしときに一定の金額を支拂ふものをいふ、生命保険には其種類極めて多くあれども、通例は死亡せる節保険金を渡すことにて、終身保険と稱するものなり。

生命保険の保険料は契約の金額に應じて差等あり、而て火災保険に比すれば其の割合高きものなり、生命保険を契約せんとせば、先づ保険申込書に詳細に事項を記入して會社に出し、出張せる會社醫員の身體検査を受け、合格したるときは保険料を拂込むべし、然るときは會社は保険證劵を交付するなり。

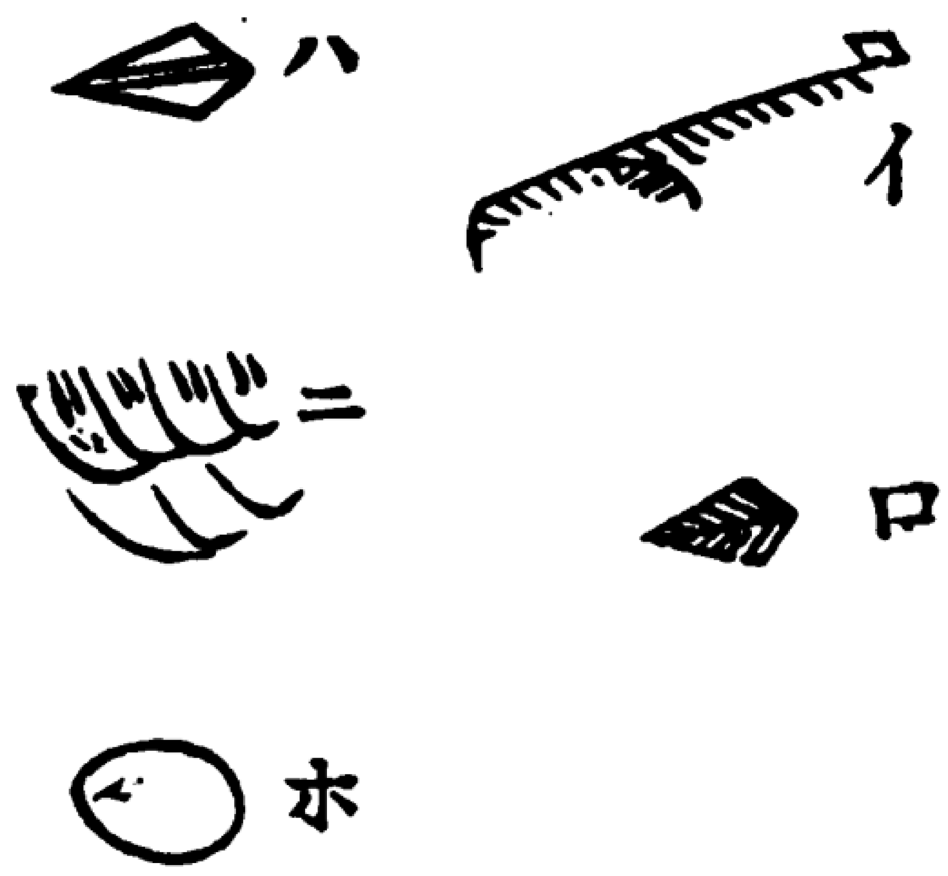
刺繍

文鳥搓糸及び平糸縫ひ

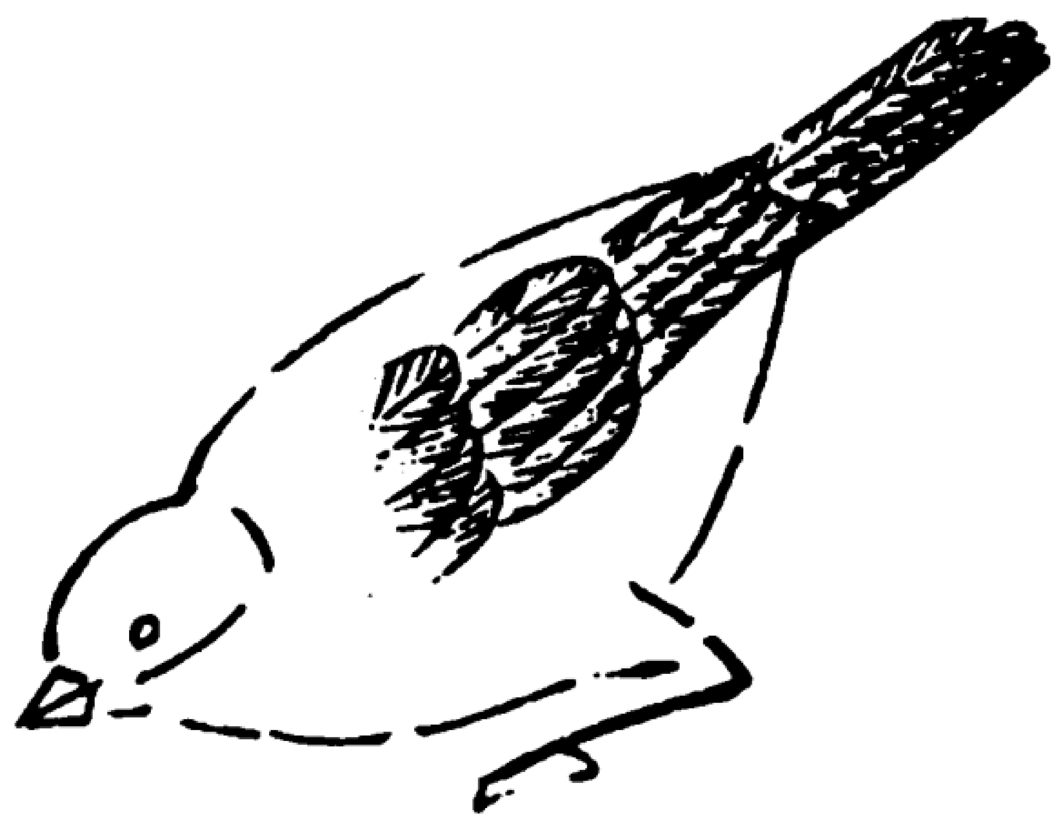
上村百世子

●鳥是を縫ひますには、先づ先きに葉から致します、糸は通常草色一本のかま糸を用ひまして縫ひます、されども其糸の細きと太さとによりて加へたり、少なく致しましたりして、縫ひます、縫ひ方は、楓の木綿糸、練習の時と同じ事で御座います、枝は青茶で、細き所は割合せで致しまして、太き所は出し合せで致します、太き枝には、梅の枝を縫ひました樣にさびを縫ひます、次に鳥で御座います、先づ始め羽から致します、一二と茶ねずみのかま糸を割り合せにして、圖の如く縫ひ、此の羽を縫ひました糸よりも、一段濃き物で三を縫ひます、尾は藍ねずみで、矢張り圖の如く縫ひます、是はなか〳〵針目がそろはず、其上最初はよりのそろわぬもので有ますから

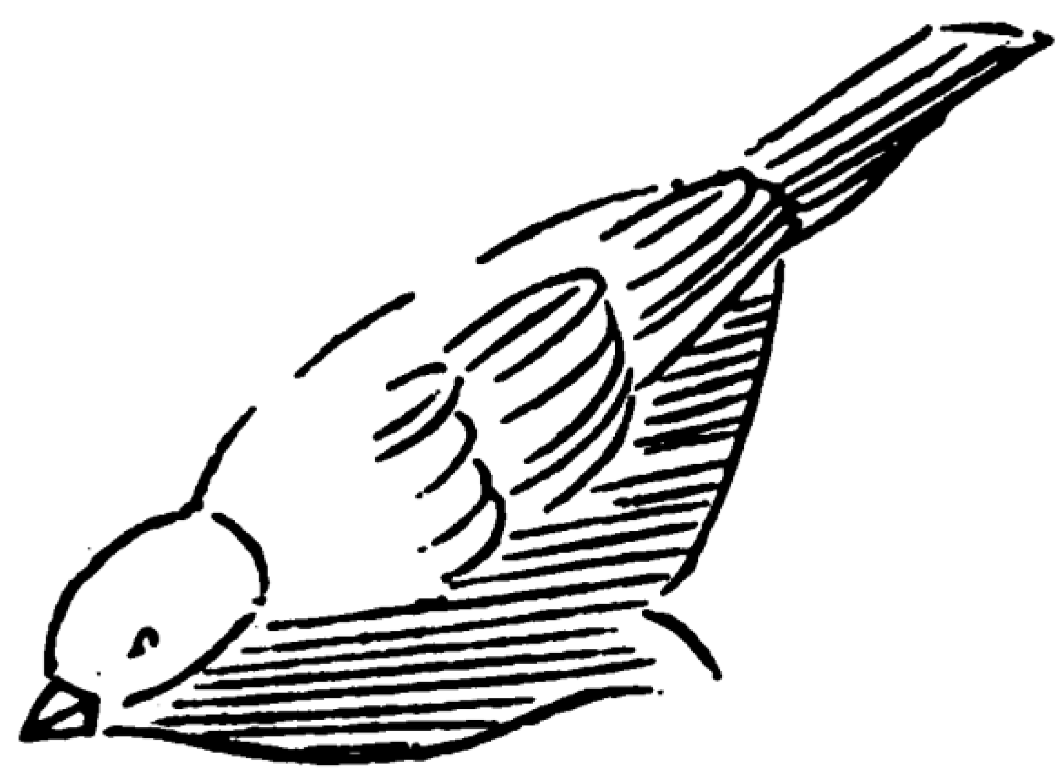




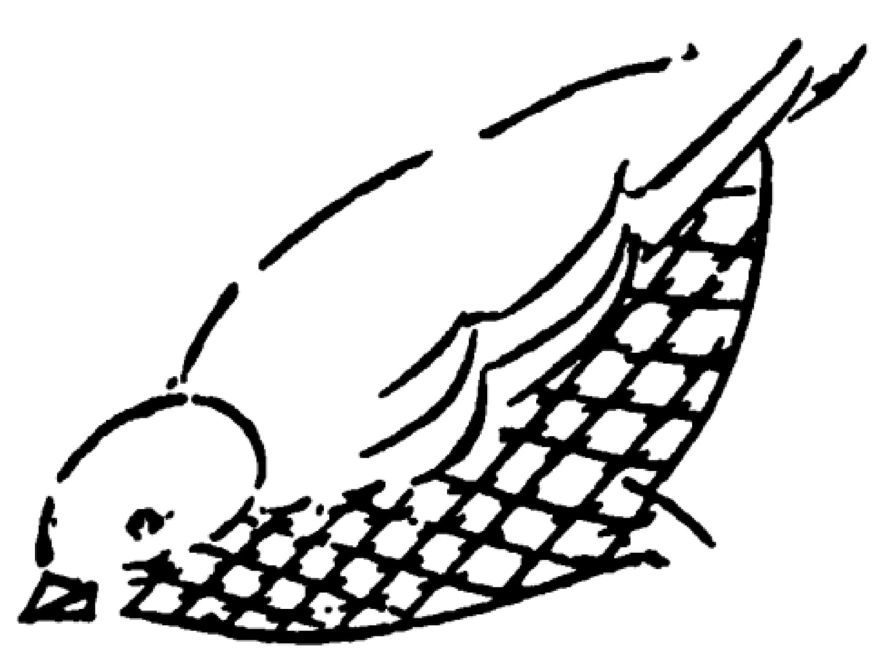
第一羽縫ヒ方



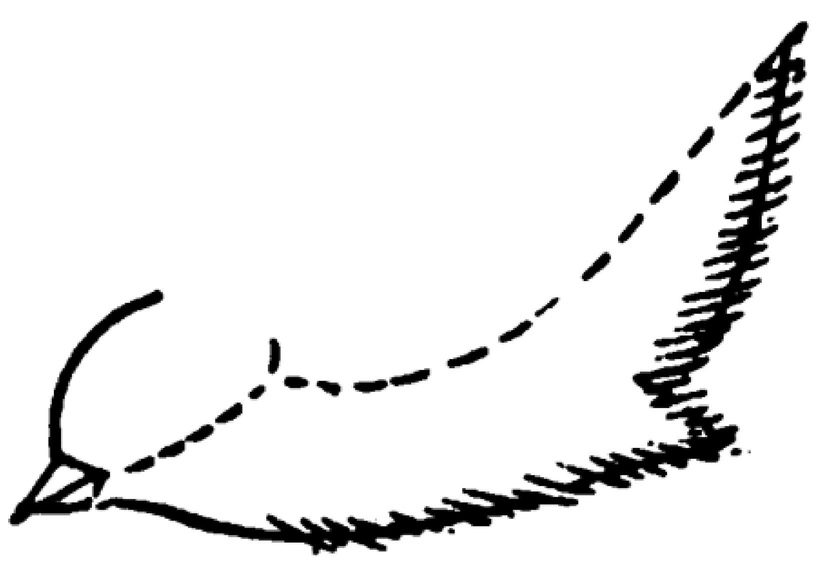
第二白カマ腹下引



第三菱掛



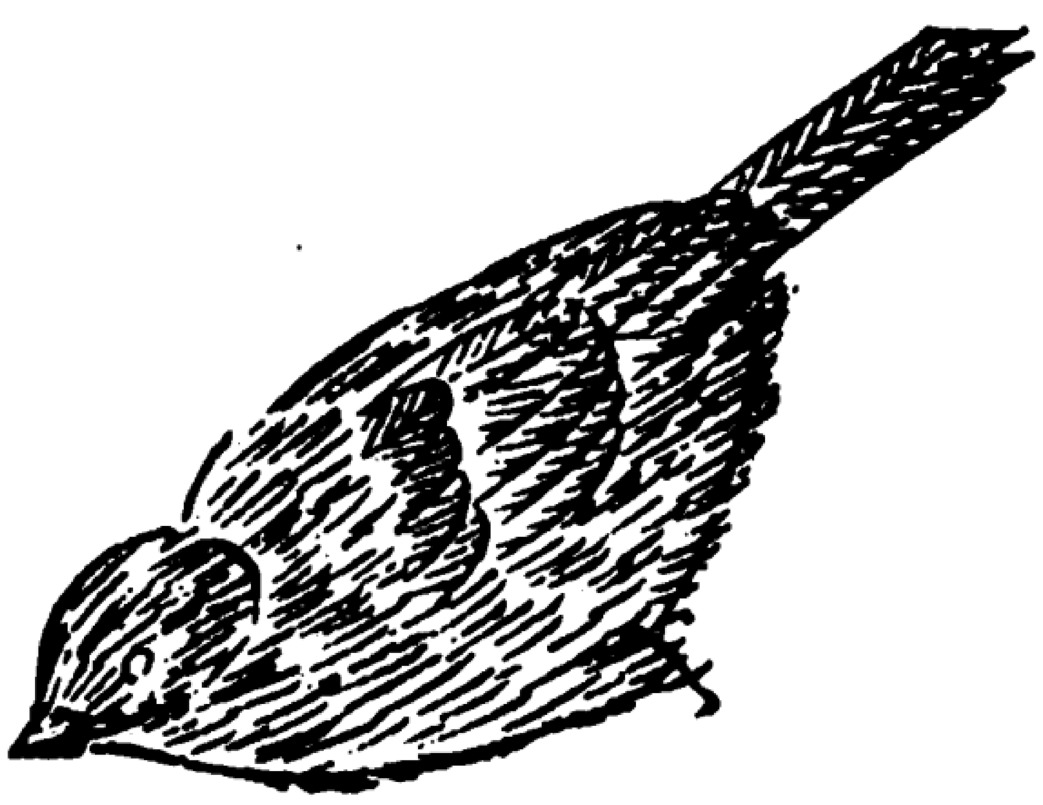
第四毛掛ノ始メ



第五



第六出来上り



よく丁寧に縫はなければ、羽の様に見へません、次に腹部に白かまで下引きを致します、第二圖に有ります様に、地質の見へぬ程に、針目を込まして致します、次に二すかで第三圖の如くひし掛に致しまして、其所を圖の如くとじまして、足を縫ひます、是は時色かま糸を割り合せにし、(細口なれば)太口なれば、四すか程取りまして、甘よりに致しまして、指し圖に有る如く縫ひます、次に其上に藍ねづみの二すが合せにしたるものにて、(イ)圖に示したる様に縫ひます、是は前時色で縫ふて有りました所に、指の曲りました所まで一本渡し、次に爪の所まで、致まして、圖に有る如く、其渡しました糸の上から、細かく縫ひます、次に白かまを二すが合せに致します、是は餘りからく無い様によりまして、第四圖に有る如く、少し下引きよりも地質の方に出して、第五圖に有る様に、其間に針を出し、次第に口の所まで能く集合する様に縫ひます、之はなか〳〵集らぬもので有ります、あまり針目を長く致しまするど、下引の能く見ゆる物で有りますから、能く注意して、針目のそろはぬ様に、餘り長からぬ様に致します、次に脊は藍ねずみのかま糸で、前の如く下引を致しまして、菱掛をし、其上に矢張り二すが合せの糸で、毛掛を致します、次に頭も矢張り黒かまで下引及び菱掛をして、毛掛を致します、是は嘴の所に集合する様に縫ひます、脊の方の毛掛は、襟元の所に、集合する様に縫ひます、次に目を入れます、是はかま糸で、初め竪てに縫ひ、次に横に縫ひまして、其外側に金糸を綴じます、次に赤のかま糸二すが合せで、其外側をまつり縫ひに、極めて細く致します、嘴は時色のかま糸を割り合せに致しまして、通常は縫ひますけれども、是も其糸の太さと細さとによつて異りますから、適度に致します、縫ひ方は(ロ)圖の如くに致します、次に鼻は黒かま二すが合せにしたるものにて、(ハ)圖に示したる如く縫ひ、次に頭と脊との間を藍ねずみのかま糸二すが合せになしたるものにて、まつり縫ひに致します、是は肩を造る爲めに縫

ひます次に、脊と羽との間に、一分程の長さにして、(ニ)圖の如く白茶かま糸三すかばかりにて縫ひ、次に頬の所に丸き斑を入れます、是は原紙を(ホ)圖の如く切り、頬にあて、其廻りを極く小なる刷子に、淡墨を付け、上部は濃く、下方は淡くして、ぼかします、而して後に其原紙を取ります。

だいところ

石井湧太郎

一中皿　豆腐玉子卷　酢煮若大根

料理法、豆腐を鍋に入れて之れを崩し、能く崩れたる時に、水を少し多き位に注入して、火上に掛けて湯煮するのである、然して其の湯の透明になりたる時に、笊等に上げて湯を絞るのである、可成よく絞れたる後ちに醤油、味りん、砂糖等にて味を付け、能く煮染るのである、之れを暫く風に當て冷して後ち、生玉子を加へ攪き交せ置くなり、扨て別に玉子を焼鍋にて薄く焼き、此の内に右の豆腐を入れ、布巾を以て卷き包み、此れを蒸籠にて少しく蒸して取り出し、冷して後ちに、小口より五分位に輪切りとなすべし、之れは一ト皿に三ッ程付けて出すのがよろしい、尤も豆腐の内に生玉子を加へず直ちに卷きても出來得るものなり。

次は附合せの若大根である、之れは水で能く洗つたら葉付きの處から、二三分程莖を殘して切り去り、根の方も一寸五分程の處にて切り、扨て之れを立に薄く切り、暫らく冷水に浸し置いて後ち、直ちに甘酢の内に入れて煮てよろしい、甘酢は酢と砂糖と食鹽とで加減するのである。

一吸物　粉山椒。鯉骨切り。
　　　順才。

料理法、汁は味噌汁で仕立るので、三州味噌と並味噌を同量に合せて、擂鉢にて擂り、裏漉で漉し、之れを堅魚汁にて溶くのである、次に鯉は三枚に卸し

て、其の身を皮のあるまゝにて、皮を下にして、身の方を片端より、至極細かに皮の極まで、切目に入れる、恰も丁度連りたる刺身の樣に、之れを適宜の大きさに切つて、前の味噌汁少しを別の鍋に取り、分けて下煮をして置く、小骨の多き魚なる故に、右の如くなすものなり、又多くの人の中には川魚の香ひを嫌ふものあり、此の塲合には、灰の上に濡れたる美濃紙を敷きて、其の身を置きて、暫くする時は、其の香を去るものである、其の次は順才であるが、之れは沸湯の中に一寸入れた位でよろしいのです、夫れで味噌汁の沸きたる時に、鯉と順才とを椀に盛り、汁を入て粉山椒を少し入ればよろしいのである。

一椀盛　わんかけ
　あいなめ
　みつば

料理法、魚は三枚に卸して、其の身に鹽をしておいて、二三十分過ぎてから、大概鹽氣の染みた時分に、水洗をして適宜に椀の大さに應じて切つて、之れを蒸籠の中に竹の皮を敷き、此上にならべて蒸すのである、凡十分間計りでよろしい、其所で三つ葉はざつと茹でゝ一寸位に揃へて切ります、以上は椀種の拵方で、次は餡汁でありますが、之をば露汁を沸立させて置て、葛を絡りに入れます、割合は煎汁七合に、醬油が五勺五夕、味淋四勺に砂糖が三匁、食鹽一匁五分であります、葛は二十一匁を水二合で溶きまして掻まはしながら入れます、此れで丁度一升位のあん汁が出來ます。

汁の種類

普通味噌汁、之れは並味噌を鉢にて擂り漉して、水にて溶き緩め仕方たるもの。

白味噌汁、可成上等の白味噌を擂漉して酒にて少し溶き、餘は水を以て能き程になし仕立たるもの。

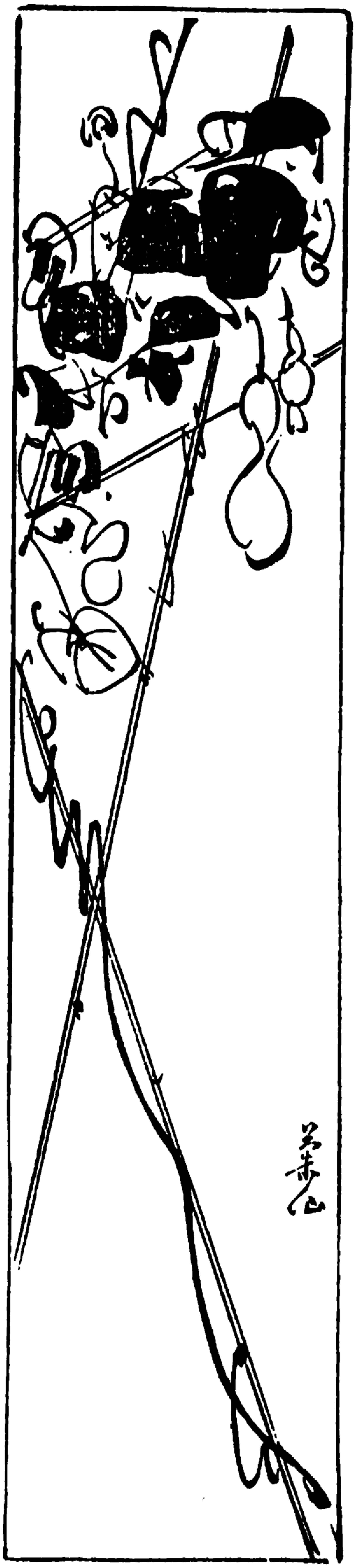
煮抜汁、通常の味噌を其のまゝ擂らずに酒少しと鰹節煎汁等を、よき鹽梅に調合して煮あげ、水嚢にて漉し醬油少し加へてよろし。

納豆汁、納豆と味噌をよく擂り混せ、漉篩にて裏漉し、鰹煎汁にて溶き、一度煮立て後ち、豆腐の才形と敲き菜を入るべし。

卯の花汁、先づ豆腐の滓を擂鉢にて能く擂り、次に味噌を裏漉し、煎汁或は水にて溶き、而して葱の五分切りに、蜊のむきみを入れ煮熟すべし。

酒粕汁、可成よき酒粕と味噌とを等分に合せ擂り交せ、裏漉にかけ、煎汁にて溶きのばし、葱の五分切に鰯の三四分筒切、豆腐才形等實に用ひてよろし。

どぜう擂り流汁、どぜうを酒にて殺め沸湯の中にて一寸湯搔き、其の身を取り、味噌と共に擂り交せ、水にて溶き仕立るなり、實は線午蒡など入れてよろし。



女學校

實踐女學校女子工藝學校

及び其の寄宿舍

菊池雪子

茲處は澁谷村常磐松の御料地內、新たに切り開かれたる道を通つて參りますと、筆太に帝國婦人協會、また較小さく實踐女學校、女子工藝學校と認められたる標札が、懸つて居ります、これが則ち校長

下田歌子女史

が、その理想を實驗せんが爲めに、創立せられたる學校でございます、然るに女史は華族女學校の學監

といふ重き職務を負ふて居らつしやいますから、專ら此の學校に御從事遊ばす譯に參りませんので、副校長の

青木文造氏

が、女史に代りて、萬般の校務を攝して居られるとのことでありますが、さて何時もながら、一寸申述べて置きたいのは、記者先日

麻布邊の某女學校

に參りまして、參觀を願ひましたところが、――紹介ない方には一切拒絕いたしますが、ちとお待ち下さい、幹事に尋ねて參りますからと申されて彼方へと赴きました、ところが其の婦人はやがて歸り來て記者を應接所に案內いたされました、さう致しますと待つこと凡そ半時間餘にも及びまして、一人の婦人が見えましたから、記者はまづ始めて面會の御挨拶をいたしました、ところが其の婦人は靜に椅子

によりながら仰せられますには、當校は紹介ない方には參觀をお斷り致て居ますが、小使を以てお斷りいたしますことは、あまり失禮と存じまして、應接所にお通し申ましたのでと、此時記者は空う時間を過した後のことでございますれば、たゞ惘れて歸宅いたしましたことがございます、御丁寧なお待遇でもございませうが、半時間あまりも待たせて置いて御門前拂ひとは、あまり有難くは御座いません。

本校は之とは違ひ制服を着けられた生徒さんが、ちら／＼廊下の右に左に歩るいて居られましたが、入口に參りますと、一人の生徒さんが、進んで取次の勞を取つて下さいました、間もなく木村芳子樣と云ふ先生がようこそお出下さいましたと、記者の參觀をおよろこびなすつて下さいました、それから

校長室

に案内せられて始めて副校長靑木樣に面會いたしましたが、此時新入の生徒さんが母君に伴られて校長

室に居られて、副校長はその方に割烹御稽古のことについて御話中でありましたが、まことにお心よく記者の參觀を御承諾下れまして懇に仰せられますには、木曜か土曜にお出下されば、生徒方が手製の西洋のでも、日本のでもお料理を差上げることが出來るのですが……それから暫時お料理のことにつきましてお話がありました。

西洋料理を敎へますには、長らく公使館のコックを致して居られました人を聘して居りますが、料理法をはじめ室内裝飾の順序までも敎へますので、晝頃お出のお客樣ならば、朝の中に分つて居りさへすれば、生徒の拵らへたお料理を差上げることが出來ますのです、先日マギー夫人と一行の婦人方が本校に參られました時も、接待饗應など生徒方が致されましたが、料理は中々よく出來まして、カステーラなどは先生がなさいましたのも、生徒方の調へましたのも、殆んど同じでございますが、菓子のはうは餘程六ケ敷いものださうで私共素人が折々行つ

て御馳走になりましてはどうも先生のお調へなさつたはうが、おいしいなど、よく批評をいたして、參るのです、卓子に花などを飾りますことは、生徒方がもう會得んで、それは〱よく出來るのです、側に腰かけてお出になる木村先生も、なにかとお話しになりまして、種々御紹介下さいました。

室内の粧飾

校長室の粧飾といたしましては、入口より左壁に添うてガラス戸棚があります、其の中に四尺位の衝立障子が二つ立てられてございまして、いづれもこまやかな刺繍一つは松上の鶴いま一つは藤に雀が數羽止つたところを寫してございます、此の藤の衝立は先年上野の展覽會に出品せられて、一等賞を得られたものとのお話でございますれば本校に取りて洵に名譽の品と存じます、葉の濃淡色の配合といひ小鳥の眞に迫まつて居るさまといひ　實に輕妙の筆づかひを以て寫生されたもの丶やうに見えました、押繪には伊豫簾の卷き上げられたところに、菊の楠玉が五色の糸を長く引いて寫眞を置かれるやうに出來てございますが、何となく其處には中宮定子と少納言が在すやうな心地がいたされました、造花は鉢に植ゑられたる紅や、白の美しい花小枝が手折られたま丶に横へられてありますのやら、さま〲ございました、又本校は當年で第四回專修科卒業生第三回高等女學校卒業生を出されましたそうでございまして、それ〱卒業生の寫眞が室内に飾られてありました。

高等女學校

實踐女學校の名稱は高等女學に付けられたので、工藝學校は專修科と補習科に生徒を收容致しますものなそうでございます、高等女學校の方は他と同じく五ケ年で修業し、專修科は二ケ年、補習科は二ケ年、この二科には高等女學校卒業生か、若しくは同等の學力ある方が入學いたされますので、隨分專修

科一年級にすぐ入學しましては苦しうございますから、豫科一年といふものを設けてございまして、都合三年になりますとのことです、專修科の學科は和服裁縫、造花、刺繍、割烹などで、いづれも家政に必要な課でございます、高等女學校五年級に進みますと、割烹を稽古いたしますさうです、また專科補習科の生徒さん方は、先生方から時間のゆるされる限り、他の級の學業を傍聽に行かれるとのことで、種々便利が與へられてあります。

和文家政

下田女史の擔任は、源氏物語のお講義と、家政學の御教授でございまして、副校長は増鏡大鏡などのお講義をお受持になつて入らつしやるさうでございます、補習科生徒は跡見女學校華族女學校、女學館等の卒業の方もございますやうに承りました。

教師

先生方の數は四十五名、其の中男子の方が十四五名で三名は高等師範からお出になつて、他は華族女學校の囑托の方で入らつしやいますとのこと、青木樣の仰せられますには、此の學校は他校と違ひ、敎師の數が割合に多いのです。

生徒

總數四百名餘ございますと、木村樣は始終微笑を湛えてお聞かせ下さいました、本年の卒業生でございますか？あの——高等女學校の方に五十名、專修、補習科の方に三十名、皆で八十名でございました、生徒は學校を自分の家のやうに思ひましてお客樣がお出になりますとき、例へば咖啡茶椀が不足いたしますれば、私が持つて參りますと申まして、銘々家から持參いたしますから、お家ではまた今日もお客樣が幾人お出になりますねと、すぐにお當になるさうでございます、立派なお道具を持つて參られますときは、學校のと釣合ませんので、おかしうご

ざいますよ、そうして彼が學校にないからいけません、是もなければなりませんなど、申まして、寄附される方もあります、とお仰つて机上の大きな花瓶をお指しになりまして、これも生徒が食卓に飾る花瓶が無いからと申まして、卒業の時、寄附されました品でございます、さうですから卒業生は學校をお里のやうになつかしう思つて居りまして、學校に何事がございますと、直に駈けて參ります、先頃江の嶋まで遠足いたしましたとき、卒業生も招きましたところが、規定の時刻よりはずつと早く新橋の停車場に集りまして、嬉しいあまりに早く集つて、大悦びで參りましたことを、先生方にお知らせ申たいためですと申されましたが、是時も卒業生が殘らず集つて居りました。

教場

人家にかけ離れて、四面みな野原で、新鮮な空氣が始終流通し、室内が生々として居ますので、聞ゆるのは先生のお講義の聲と、生徒が順次に讀み上ぐる讀書の聲のみで、一室に多きは五十名、少きは三十名位揃ひも揃うた制服を着て新らしい校舍、新らしい机に倚つて居られますのは、まことに清潔で心地よく見受けました。

押繪

藤、百合など、折にふれての花をかたどつた美しい寫眞入が、いづれも見事に出來上つて居ました。

造花

薔薇、百合、櫻、西洋花、蝶花は實物の通りまがふやうに花瓣が出來まして、これから蝶花の葉に取掛られるやうでございました、生徒方が寫生をしてそれから造り出しましたとのお話でございました、木村樣には造花二ッをお持ちになつて、一ッは新入の方に、一ッは記者に紀念として下さいました、造花は思ひのほか進歩が早うございますと、靑木副校

長は仰せられました。

刺繡

碇に櫻を散らしたのは時節柄まづ目を引きましたサック、ハンケチ、皿敷を美事に縫ひ取りして、居られた生徒方の内に、支那から留學の女生徒さんも二人交つて居られました、製作品を寫眞に撮つて飾つてございましたが、それは、米國博覽會に出品いたしたところの刺繡でございますさうです。

高等女學校敎場

二年級は裁縫、三年は國語、四年は地理、五年は地文敎授のところでございました、二階の敎室でございますから、眺望のよいことは、市中の學校の遠く及ばないところで、御料地に隣りわつて居りますから、此後とても人家の建てられる恐れはございません、是は何よりのことでございます、廣い野原に綠の草が風に波打て居ますのを指さして、彼の草を刈り取つて乾して置きまして、陛下を御はじめ皇族方の召上る牛乳を奉る牝牛の食料にいたすのですと、靑木樣はお話になりました。

校內の商店

學校で用ゐますものは、御自分で買つて來る人もございますが、學校に居ります人は、麴町まで買ひにわざ〱參らなければなりませんから、便宜を計つて信用ある商人を入れて開店いたさせて居りますと靑木樣は仰せられながら、木村樣と共に彼方の寄宿舍の方にお導き下さいました。

美しき一軒

女禮式、挿花、割烹の敎場は、まことに學校らしくなくて家族的の建築でございますから、生徒方が他日良妻となつて家事を整理する時の實地練習が、今から充分に出來ること丶存じます、來客接應のときも、此處でなさるさうでございます、此の建築

物は横濱の茂木氏の寄附と承りました。

寄宿舍

廣大な寄宿舍でありますから、東西の二つに分れて入口に應接所がございます、靑木樣の御紹介を受けて、記者は舍監をしてお出になります時任竹子樣にお目に懸り、御案内下さるまゝに各室を拜見いたしました、室は揃つて十五疊の間でございました、六七人づゝ生徒方が居られるやうです、支那の留學生も四名居られて、其の内の一人にお目にかゝりました、この方は上海で教育をうけて、二年前日本に遊學なさいまして、御良人も先年帝國大學を卒業して、お國に歸つて大學敎授をなすつて居れますとの事で、しとやかな優しい日本婦人としか見上げられません、日本語を巧にお話しなさいますが、發音といひ、口調といひ、どう致しましても、支那婦人とは思はれません、又時任樣の御案内で風呂場臺所を見ましたが、臺所は東西に一つづゝ附てあります、

献立は上級生、料理は其次の級、煮方は最も下の生徒方と、役割が定まつて居るさうです。

校舍は清潔で、眺め最も好く、向ふに櫻花が咲いて見へるときなどは、大層よろしうございますと、靑木樣がお話になりました、時任樣は暑中は是非泊りがけにと、長く御懇意いたした方のやうお氣輕に仰せ下さいましたのは、記者もうれしう存じました、木村樣も是非また木曜か土曜にと、御深切に何かとお聞かせ下さいまして、如何に木村樣が教育に御熱心で入らつしやるかが知られます、副校長樣もわらためて申までもなく、職務に非常に御熱心なさいますことは一見して、それとお見受け申ました。

記者は厚くお禮を申しまして、良妻賢母が續々この學校から出られますことを祈りつゝ、歸途に就きました、こんなに鄭寧に、さうして親切に觀せて戴きますと、心持よく參觀も出來まして、どんなに嬉しう御座いませう、他の學校も參觀人のある時には、此學校を手本にして貰いたいものです。

浦和の女學校を觀る

記者

途中

青葉の緑を吹く風に送られて、午前九時上野發青森行の滊車に乘込んで浦和へと向ひました、何處の女學校の生徒にや、今日郊外の運動會と見へて、幾百といふ大勢が、敎師に率ゐられて、同じく乘込むで居ましたが、何れも年頃の娘達で、大分活潑さうに見受けられるのが多くありましたので、先生も嘸かしお骨の折れるとであらうと存じました、此の一行は皆な田端に下車してしまいましたので、車室も餘程空地が出來て、くつろぐとも自由になりました、そこで窓から遠近を見渡しますと、別に換はつた景色はありませぬが、廣々たる田や畑や野や原が、みな一面に青み渡つて、其處此處に林や森が、堆く茂つて、鬱蒼たる景色を示して居る處は、塵の街に埋つて、公園の樹木位を樂しみにした眼から見ると、自づと雄壯の情が生じて、何となく愉快を覺へました。

縣廳

とかうする内に、浦和に着きました、先づ埼玉縣廳に參りまして、刺を通じて、書記官横山三郎氏に面會を求めましたところが、給仕が來て、早速書記官室に案内されました、横山書記官は嘗て大分縣參事官をせられて居つた頃、度々お目に懸つたこともありましたので、久濶を叙して、それから、予が故郷の竹田のことや、鄕友廣瀨中佐のことや、その銅像建設のことに就いて、種々お話を致しまして後、埼玉縣の女子敎育のことに及びますと、書記官は答へられて、本年度は、校舍も増築する筈であつた、其他の設備もする筈であつたが、時局問題の爲めに、事業中止、又は繰延となつたので、敎育當局者は、定めて諸般の事に、不自由を感じて居るであらう、女子師範學校も、高等女學校も直ぐ近くにあつて同

一構内に建設してあるから、兎に角行つて見給へ、マア何かの參考にもならうからとの言であつた、餘り長座をしては、事務上のお邪魔であると考へて、まだお話は盡きねど、匆々縣廳を辭し去つて、直ぐ其足で女學校へと參りました。

女學校

埼玉縣女子師範學校　浦和高等女學校と標札を掲げた大門を通ると、是時は丁度午前十一時の休憩時間であつたので、數百の女生徒が、銘々勝手に運動をして居つて、或はロンテンス、フートボール、ブランコなどに、餘念のないのを見まして、體育上洵に悦ぶべき現象であると思ひました、學校により、又た生徒によりては、休憩時間にも、陰氣さうに、運動場の片隅などに集つて、小さい聲で、唱歌をしたり、教室の中に殘つて居て書物をイヂッテ見たりする人もありますが、これは甚だ當を得ないことで職員たるべき人々は最も注意すべきである、然るに此校では多數の生徒が、運動場に出て居て、内に居るものは殆んど見えないのは、當局職員の注意の行屆いて居て、生徒もみな活潑であるといふことが分りまして、大に滿足に感じました。

校長

校長の伊藤徳定氏は、男子の師範學校を始め、女子のも、また高等女學校の方をも兼務されて居らるゝので、午前中は、多くは男子の方に行かれることになつて居るとの事であるから、教頭の高橋謙次郎氏に面會して、種々と學校のことを承はりました高橋氏は淡泊な、話上手な人であつて、一見して舊相識の感じが致しました。

生徒及卒業生

生徒の數はと尋ねると、高等女學校の現在數が二百二十五名、今年は第四回の卒業で、その數が三十五人、補習科が九名でした、師範學校の方は百五十六

人で、本年初めて第一回の卒業生を出しましたが、其數は本科が三十七名、講習科が三十九名でした、高等女學校の卒業生は、尚ほ一層高尚な學校に入るものが多いですかと問へば、左樣今年の卒業生の中で、今日まで分つて居るのが、女子大學へ四名、補習科に十一名で、その他はまだ分つて居ません、修業年限はと問くと、本科は四ヶ年で補習科が一ヶ年英語と裁縫とは隨意科にしてあります、何しろ校舍も運動場も狹いので、甚だ困つて居ります、校舍の方は今年建增しの筈であつたのが、時局の爲に中止となりました、運動場は御覧の通り元來土地が狹いのであるから、どうも仕方が御座いません、最少し當局の人に奮發して貰はなければ、教育上に少なからぬ差支があります、現に教室の如きは、寄宿舍の一部を割いて、之に充てゝある位であるから、其他は御察しを願ひます。

寄宿舍

寄宿舍の模樣は如何です、御差支へなくば、拜見いたしたいと云ふと、ハイ何れ舍監にさう申しまして御案内致しませうが、現在の寄宿生は二百五十五人で、其内百二人は高等女學校、百五十三人は師範學校の生徒であります、二十四疊敷の間が二十三室ありまして、これには十人づゝ住つて居ます、又二十一疊の間が二室で、八人づゝ容れてあります、兎に角御案内致して、御覧に入れませうと、應接室を出て行かれて、暫らくすると、一人の女教師を伴れて來られた、それは教諭で舍監を兼務して居られる茂木こう子といふ方で、洵に柔和な、愛嬌のある、一見して生徒から、先生々々と慕はれさうな、温和な方でありました、サアどうぞこちらへと、先きに立ちて誘はるゝまゝ、高橋氏と共に話しながら、後に跟いて、長い廊下を通ると、その廊下の端に、棧が拵らへてあつて、その上に幾らも盆栽が載せてありました、問ふまでもなく、これは生徒達が山野に散歩された時のお土産ものであらう、流石は女性の心根

の愛らしさよ。

食堂

それから其處を通り過ぐると、廣い板の間があつて、左右前後に食卓が排列してありました、勿論此處は食堂で數百の生徒と共に、數十人の敎員達が、一同會食せらるゝのであるから、室も至つて淸潔で、卓の列べ方なども中々むまく、殊に窓の下には、洋琴が据ゑ付けてあるのは、何より床しく思はれました、さて今日の御獻立はなんであらうか、もう十二時近くであるから、チヤンと御馳走が卓上に列べてありましたので、近よつて見ると、鮪のお刺身とお芋の甘煮が、むまさうに、可愛い女生徒の小さな口の開くのを待つて居るのでありました、それから炊事場に行くと、西洋料理の器械もあつて、その傍には黒板に今晩のお獻立が記してありました、それは何でも豚のお料理で、シチウ見た樣な和洋折衷のものであつたと記憶して居ます、茂木こう子孃は是時親切に種々な說明をして下さいましたので、お見かけ申す處では、中々御馳走が多いと存じますがお賄料は、何程ですとお尋ね申すと、こう子孃はホ、と微笑を湛へられて、ハイ一ヶ月四圓の極でとの言であるから、そんなお廉い事でどうしてこんなといふを待たず、ハイそれは生徒が更番に炊事割烹を致しまして自炊同樣にして居りますから、自然お廉く上るのです、併しお晝飯丈けは學科を休ませる譯に參りませんから、炊事人を雇ふてそれにさせるのでありますが、先天的に女の役目と極つて居るのでもありませう、みな我れも〳〵と襷がけになつて、悦んで働らきますので、ホ、、、學校生活も中々愉快なもので、マー貴郞一度其樣をお目に懸けたいものでと仰しやるので、イヤそれよりも、差詰めその御料理の方を頂戴して見たいものでといひたかつたが如何に無遠慮な記者でも現在眼の前に、御馳走を拜見しながら、さうも言ひ出し兼ねて、成程々々と御返事をして、洗面場を通つて行く

寄宿室

土地は高燥であるし、空氣の流通はよし、清潔な室に四人位づゝ、差向ひに奇麗に机をならべて、二三冊の書籍や雜誌が、チャンと載せてあつて、一片の紙切れも取散らしてない、そうして、いづれの室にも、花瓶や掛花瓶があつて、芍藥や、薔薇や、木蓮や、撫子の花などが、挿されてある風情は、家庭的生活の趣味に富んで居ることも推はかられましたが、是時丁度十二時を知らせる鐘が鳴つて、此處彼處の敎室から、生徒達が出て來られたので、茂木孃は勿論、高橋氏も、定めしお心せきの事と思ふので一先づ厚く謝辭を申し、再會を期して、學校を辭し去りました。

停車場に參りますと、間もなく上野行の汽車が參りました、今日見た學校の生徒達が、どうも立派な細君になられるやう、又た立派なお母さんになられるやうになど心の中に祈つて居ると、汽車は間もなく東京に着きました。

地方の女學校を參觀したことは、數年前九州に居た時には二三度もありましたが、まだ其頃には海老茶の袴がめづらしさうに、其の土地の人の眼に映る頃であつたから、敎育の施設も十分でなく、女生徒の氣風は至つて因循主義であつて、何だか齒痒い樣な足らぬ樣な感じがしたのを記臆へて居ますので、其後は地方の女學校は何處でもみな左樣であらうと臆斷して居ましたが、今度浦和の女學校を見て、成程世中の迄歩といふものは、洵に速いものである、殊に女生徒の氣風が一變して、活潑（お轉婆といふ意味ではない）となつたのは、何よりも悦ぶべきことであると思はるゝ中にも、浦和の女學校は、尤も萬事が進歩して居るのであらうと思はれました、此の女子敎育の著しき發達は、我國の將來に何程の關係があるかと考へると、大に賴母しい事でございます。これから追々各地方の女學校を參觀しやうと思ひます。

戰國時代 奥羽の婦人（一）

介詞主人

今や東北の健兒に依て組織された第二師團の精鋭は、鴨緑江を渡り九連城を攻落して、世人の耳目を驚かす大功をなしました。此際是等健兒の祖先でありますところの女性は如何なるものであつたかと云ふことを知るのは、敢て無用の事でもありますまいと存じますから、元龜天正頃の戰國時代に一際すぐれた功績を殘し留めました婦人の傳記を纂めて貴社へ送りますから何卒餘白へ御掲載を願ひます。

少納言喜多子（片倉景綱の姉）

喜多子は伊達政宗の幕下に其人ありと天下に智勇兼備の名を轟かしました、片倉備中守景綱の異父同腹の姉であります、喜多子の父は是も政宗の臣下に武勇絶倫の譽れ高き、鬼庭（後に茂庭と改む）周防良直後に入道して左月と號した人で、此人は天正十三年十一月、仙道人取橋の合戰難儀に及びました折、七十三の老軀を以て身に甲冑をつけず、水色の法衣に黄絮帽子をかぶり、敵中に突進して遂に戰死を遂げました。母は本澤刑部眞直と云ふ人の女で、周防に嫁ぎ一女喜多子を生みましたが、仔細あつて離縁になり、女の子は女につくが、其頃の常法でありますから、喜多子を伴ふて家に歸りましたが、まだ年も若くありましたから、軈て片倉景重の後妻となり、喜多子も同家に養はれる事になりました。片倉家へ再縁の後生みましたのが、即ち智勇兼備の小十郎景綱であります。

喜多子成長するに從つて智慧逞ましく、女の道は云ふに及ばず、廣く文武兩道に通じ常に好んで兵書を講究しまして、年頃になりても良緣をもとむる事なく、常の詞に世間には自分が良人として仕へ樣と思ふ丈夫がないから、自分は生涯獨身で暮す決心であると云て、何方へも緣付かず身を持すること極めて堅固清淑でありましたから、伊達輝宗即ち政宗の父に見出されて其後宮に仕へ、政宗の保姆となりて輔導の任を盡し、異父弟なる景綱をたすけて、其家を興隆せんことをのみ心に祈り居りました。

抑も此の片倉家は、羽州置賜郡屋代鄕八幡社の祠官でありまして、世々伊達家につかへ、景綱も亦四人扶持に金二兩の徒士組におげられ、世子政宗につけられました、然るに政宗は人も知る如く片眼で容貌あがらず、加ふるに性寬仁優柔に過ぎて他人と應對するにも何か耻かしがると云ふ風がある故、時の人陰かに誹りて大將の器量なしと云ひ、母君も亦世子を疎んじて、次男の小次郎のみを寵愛せられましたが、獨り景綱は世子の凡ならざるを識り、此君こそ祖業を繼ぎて、益々恢宏し給ふの御器量あり、世人はそを見るの眼がないのであると、愈々謹愼して勤めました。然るに年久しく卑職に置かれて一向拔擢せらるゝ模樣もありませんから、或日つら〳〵思ひますには、男兒區々として一貧半給に甘んじ、いつまでも斯てあらんには龍門に登るの機を失なひ、生涯青雲の志を果し難かるべし、むしろ斷然笈を負ふて遍ねく天下を歷遊し、名君賢主の知遇を得て身を立て家を興し、名を後世に揚んにはと、心に決しましたから、一日喜多子の許に參り、其決心を告げました、其時喜多子は暫く默然として居りましたが、軈て口を開き、姉弟の遠く別れるのは悲哀極まりなき事ではあるが、男兒一たび青雲の志を達せんとならば、敢て止めまじ、たゞ發程の日には必ず來れ、共に離盃を擧げて、互に今後の無事をいのり、又心ばかりの餞けをも贈るべしと約束しました。景綱は姉の許を得て、大に喜び、家に歸りて僅の家

財を賣しろなし、旅裝をとゝのへて、再び姉の許へ參りますと、喜多子は威儀を正しまして、其許は忠臣二君に事へざるの金言を知らざるか、今政宗君に背き、其心を二三にするとは何事ぞや、血氣にまかせて大義を忘る不忠之れより大なるはなし、ましてや世人嘗て世子をさみし、大將の器量なしと誹謗せしとき、汝獨り非凡なり、將來に望を屬すべしと云たるにはあらずや、かく望ある名君を捨て、其身を他邦に估んとは何の心ぞや、他邦にいかなる明君ありとても、寸功だになき一介の新參者を突然高官に登せ重祿を授くべきや、好し萬一望外の選を蒙むるも、生涯不義の名はまぬかるべからず、むしろ他邦の君に仕ふるの心を以て本國の主君に忠節を勵みなば、忠孝ふたつながら全うすべし、汝之を良心に問へと理を盡くして諭されました。景綱は之を聞き大に憤りまして、左樣な御意見があるなら、なぜ始に言て下さらぬ、唯今となりましては、僅の家財道具も賣盡し、進退維に谷まりて、又

如何とも爲し難しと怨言を出しました。其時喜多子は言葉を和らげまして、凡そ人は物きはまりて後に事成るものであるから、自分には最初から、異見はあつたが、先日は騎虎の勢ひ中々止まるべき氣色なかつたゆゑ、後日を待ておもむろに止めんと思ひ、陽はに承諾したのであると、猶も言葉を盡して諭されましたから、景綱も大に悟り、出發の事は思ひ止まり、其後政宗に隨從して屢次大功を奏し、遂に國家柱石の重臣となりましたのは、其人の英武智勇にもある事ながら、實は喜多子が開諭奬勵の力に依ると申ても過言ではありますまい。

扨喜多子が一生の事業の中に就き、最も目覺ましきは豐臣太閤に對する所爲であります、天正十八年小田原の北條氏亡びて後は、天下の諸侯其妻子を京都伏見の邸に置て人質に充てましたから、伊達家にても夫人を始め一同伏見の邸に居られ、喜多子は奥女中の頭となりまして、後宮一切の支配をなし、屢次太閤にも拜謁しました所から、太閤にも其器量拔群を

愛されて少納言の任命を下されました。其頃政宗の愛妾某と云へるは、天のなせる麗質、花にも月にも譬へがたなき美人で、政宗の寵愛一方ならず、三千の後宮顔色なしと云ふ有樣でありましたが、如何なる隙に太閤之を垣間見けん、英雄の本色殊の外懸想され、是非にとの御所望でありましたが、政宗是のみは御免蒙り度と辭退して御請致されません、或日の事政宗遊獵の留守中、太閤は老女を使として政宗の邸へ遣はされ、唯今献進ずる樣にとの台命を傳へられました故、喜多子は使者に面會して、主人不在中なればと切に辭退しましたが、使者は中々聽入ませんで、是非伴ひ歸らねばならぬと言張ります、喜多子熟〱思ひ廻らし、台命もだし難く、其上一婦人の故を以て社稷を危うするは得策にあらずと、斷然意を決し、愛妾某を使者に渡しました。



斯る事あるべしとは夢にも知らずして、政宗遊獵地より歸り、其顛末を聞くより喜多子の專斷を憤り、召出して嚴に詰責を加へられしに、喜多子は從容として騷げる色なく、君にも夙に知らせ給ふならむ、太閤の婬虐無行は常理の外で、他人の妻妾愛女を召し、若し其意に悖り其命を拒めば、誅罰踵を廻らさず、蒲生家の國易、利休の切腹抔、前車の覆轍眼前にあり、這回の台命は

實に國家安危の分る丶所で、若し之を惜み進献せざらんには、油々敷大事を惹起さんこと火を見るより瞭かで、一婦人を以て國家に換ふべきにあらねば、斷然かく計ひました、潛越の罪は喜多死を以て謝しますにより、速に妾の首を刎ね給へと、色をも變へず自若として言上しました。此の喜多子の諫言は誠に道理の至極なるもので、若し此時美人進献の命を拒んだならば、左なきだに猜疑の目を以て太閤から睨まれて居る政宗の身上は、直に滅却の非運に逢つたであらう、喜多子は實に伊達家の守本尊である、政宗も前後を考へ、漸く怒は解けましたなれど、專斷の罪はのがれ難く喜多子は遂に奧洲の鄉里へ蟄居を命ぜられました。

實に驕る者は久しからず、さしも榮えたる豐臣家も慶長三年八月太閤の薨去と共に、日に月に衰へ行き慶長五年には東西兩軍關ヶ原に戰ひ、東軍の大勝利になりましたが、政宗は其時東軍の味方でありましたから、功によつて白石城を賜はり、之をば片倉景綱に預けられました、仍て喜多子も共に白石城に移り城内を巡視しまして、後景綱に向ひ、此城の本丸表門唯一重にて甚だ手薄く、危うければ、外圍を築き、濠を掘り、塀を繞らし、小門を設けられよ、然らずば大敵を防ぐに十分ならじとの忠言、景綱其意見に從ひ、君公に請ふて、免され、修築を加へたのが菱門であります。

斯て後喜多子は刈田郡藏本村瀧の觀音と稱する閑雅幽靜の地に庵室を結び、深く佛法に歸依し、行ひ澄まして年を送り、慶長十五年七月五日七十二歲の高齡を以て大往生を遂げられました。法號は圓同院月鱗妙華大姉、景綱哀悼に堪えず、菩提のため一寺を建立して圓同寺と稱しましたが、元和元年十月景綱卒して玆處に葬り、寺を山上勝坂に移し、傑山寺と改めましたが喜多子の墓は今猶其庵室の舊跡にあります、仙臺藩第二世忠宗の時喜多子の功勞を追賞し親戚を召出して家祿三十貫を與へ、片倉の姓を稱し今に歷然とあります。

雄才大畧あり、兼て深謀遠慮に富む喜多子の如きは、實に女中の英雄で、當時豪傑雲の如き大藩中所天と仰くべき男子一人もなしと言へるは、あながち囈語でもなかつたかと思はれます。

滿洲の動物

佐藤三溪

滿洲は、支那の領地の最も東部に位する地方で其の面積は六萬三千餘方里あります、南は遼東半島から北は黑龍江まで擴がつて居る地方ですから、氣候も南部と北部とは隨分異つて居りまするし、從つて動物の種類なども南部と北部とでは餘程異つて居ります、今此の滿洲地方に棲息する動物の中著しいものに就てお話をしやうと思ひます。

△虎

滿洲に產する獸類の中には、猛獸も頗る多くありますが、中にも虎は深山の林中に棲んで居つて屢々人や家畜などを殺し食ふとがある、此の地方の虎は印度のベンガル地方に居るものと同じ種類で、頭から尾の端まで凡そ九尺餘に達するものがあります、滿洲の都會地では到る處に虎の皮を販賣して居りまして、しかも中々多數賣り出して居るといふとです、其れで見ても山中に虎の多いことが知られるのであります。

虎の通例居る所は水邊に接して居る所で、例へば池沼又は山間の溪流に沿ふて居る藪とか、林などの內に棲んで居ります、斯樣な所に居るのは虎の爲に至つて都合のよいことである、何故かといふに狐や狸などの樣な小獸は、水を呑む爲に時々水邊に來るものであるから、是等の小獸の通りさうな所の傍に潜み隱れて、獲物となるべき小獸の來るのを待つて居ります。

若し他の獸類などの近づいて來る響を聞くと虎は其の腹を地面に附け、見付けられるのを防いで、愈々一と跳びに跳び附いて咬へることの出來る距離に近

づいて來れば、躍り出で丶之を攫み、同時に咬み付くのである、若し又其の小獸が自分に近づいて來ない時には虎は腹を地面に附けたま丶匍匐して、其の小獸に近寄つて行きますが、其の匍ひ方の上手なことは丁度蛇が叢の中を匍ふのに似て、人類すら之を見出すことが難いほどであるそうです。

虎の性質の猛烈なこと丶、大膽なことは、實に驚くべき程であつて、若し餓ゑて居る場合には、他の動物が如何に強力であつても、又人が多數居つても少しも躊躇することなしに跳び付くのです、嘗て騎馬の人の一隊が、深い林の中を横ぎつた時、一頭の虎が突然林の中から躍り出で、騎手に噛み付いた、其の人は非常な苦しみと驚きとで、虎と共に馬から落ちた、すると虎は落ちるや否や、其の人の胸部を咬へ、森の中に突進して行く方を見失つた、此の虎の動作實に神速で且つ猛烈なので同行の人も之を救ふ暇がなかつたといふことです。

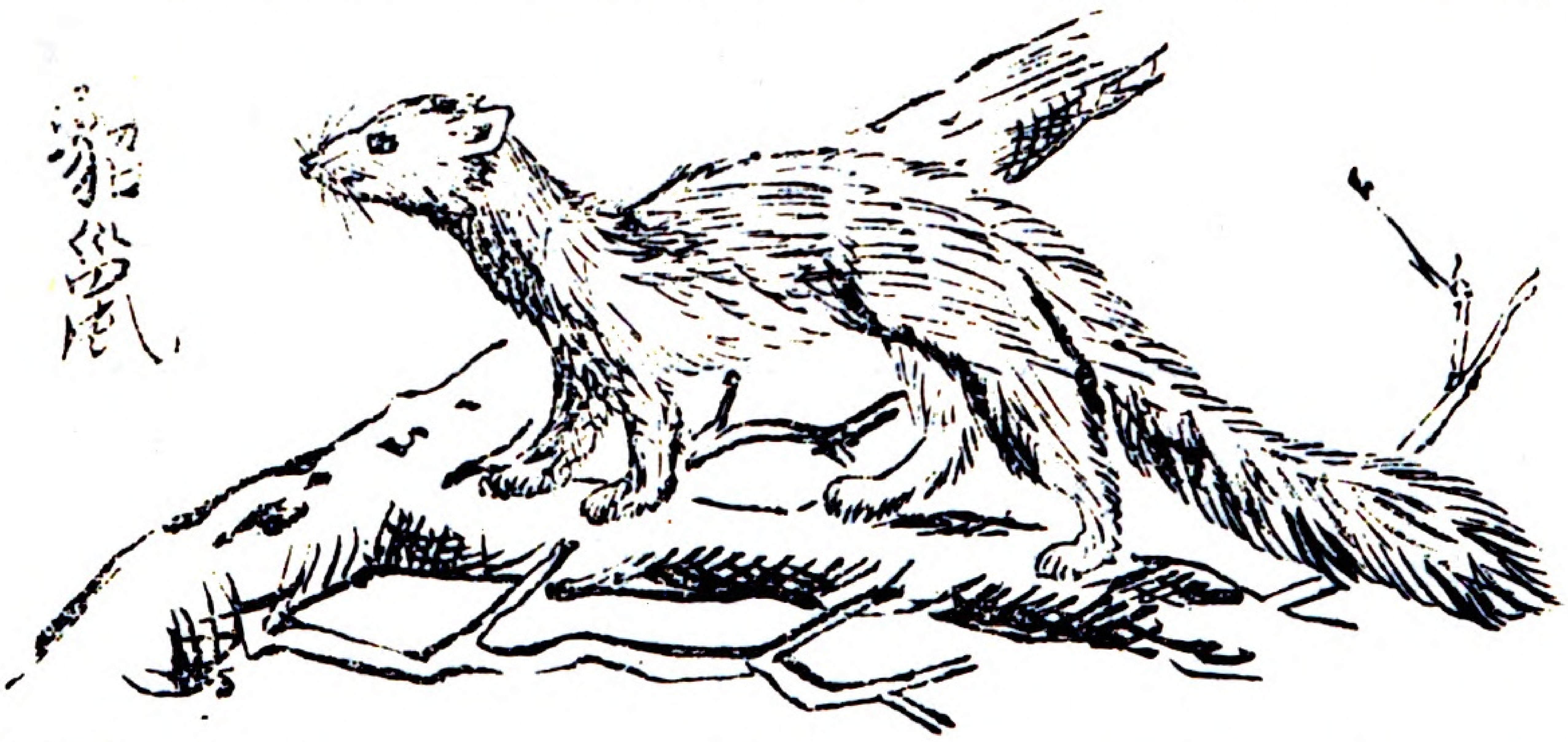
△貂鼠

滿洲殊に黑龍江に沿ふた地方には貂鼠（英語でセーブルと云ふもの）が居ります此の獸の毛皮は甚だ貴重せられるもので、トングス人は貨幣の代りに用ひることがある、卽ち貂鼠の毛皮一枚を貿易の價の單位として他の物品と交換するそうです、其の毛皮は柔軟で、毛は至つて光澤があり、美しくあるばかりでなく、甚だ輕く暖かであるから、重に衣服の裏として用ひられ、露國皇帝や、土耳其帝や、蒙古王などの冬着の裏には、多く此の貂鼠の毛皮を用ひるといふとです、此の獸の大さは、さほど大きくはなく頭の先から尾の本まで、二尺許しかないのですから、其の毛皮も餘り大きくはないが、其れでも一枚の價が十五圓から五十圓位です、其故一枚の冬着に貂鼠の毛裏を着けると、五百圓餘もか丶るそうです露西亞の本國で年々使用するのは凡二千五千枚の多數であるといふことです。

此の獸は我が國の黄鼬や鼬鼠に似た形でありまして、其の大さは凡そ黄鼬ほどであります、常に深山

の林中に棲んで居て、木に登ることは極めて上手であります、晝の間は木の洞穴などに隠れて居て、夜になると現はれ出で、森の樹の枝に眠つて居る小鳥を捕へたり、或は鳥の巣を見付けては、其の卵を奪ひ食したり、又木の下をわさり廻つて、蛙や昆虫の類などをも喰べて居ります。

清國政府では、從來此の貂鼠を繁殖せしめて、其の毛皮を採る爲に、森林の採伐を禁じたことがあるそうです、貂鼠の毛色は種々であつて、黒色、赤茶色、黄褐色など種々の等差がありますそうして其の毛色の濃いのと淡いのとで、價が大層異ります、其れ故熟練した鑑定者は、此の毛皮は何處から出た貂鼠か、又何の森で獵り取つたのかと、一寸見て鑑定することが出來るそうです。



貂鼠は奇妙な性質の獸であつて、其の棲んで居る森林によつて、毛皮が異います、松杉の林に棲んで居る貂鼠は、毛皮最も黒く、價も最も高くあります白楊の林に棲んで居るものは、毛色やゝ赤茶色で、價も前のものゝ次ぎである、落葉松の林に産するものゝ毛皮は最も淡色であつて、市場の價も最も劣等である、又貂鼠の尾は、特別の用があつて、種々の裝飾に供し、或は襟卷を作ります。

△麝　其の形

麝は其の躰から麝香を採られるので、有名な獸であります、此の獸は亞細亞洲の中央部にも居りますが、此の滿洲にも隨分澤山居ります、體は大き

麝



い犬位の大さで、頭から尾の本までの長さ、凡そ三尺許體の高さは二尺許である、一體此の獸は、鹿や羊など、同じ部類に屬する獸であつて、胃の腑は數個に分れて居るから一度嚥んだ食物を再び吐き出して嚙み直して、又嚥む性質がある、其れ故是れも矢張り反芻類に屬するのである、此の類の多くのものは角を持つて居るが、麝は雌も雄も共に決して角を持たない、併し雄と雌とは異つた點があるから直に區別することが出來る、即ち雄の上顎には長い牙があつて、唇の外に突き出て居るが、雌には左樣に長い牙がない、雌にも牙があるけれども、短いから唇の外に突き出ることはない、又雄には其の腹部の後方、肛門に近い所に麝香の入り居る嚢があるが雌には斯樣な嚢がない。

△麝香嚢

麝香嚢は雄の後脚の間にある小さい嚢であつて、外に口を開いて居る、其の嚢の内には年中麝香があるけれども、冬になると、其の分量が殊に多くなる、

是れ冬には雌と雄とが一所に居る時季であるから、麝香の分量も増して、其の香も一層強くなる、麝香嚢は何の爲に雄にのみ具へて居るかといふと、是れ全く雌を呼び招ぐ手段に過ぎない、彼の雄鹿などは一種の聲を出して雌鹿を呼ぶが、麝は聲で呼ぶ代りに、香で招ぐのである、造化の仕組も、中々奇妙なものではありませんか。

さて一頭の麝香嚢には、幾何の麝香が含まれてあるかといふと、獸の體の大小によつても異るが、平均凡そ一オンス即ち我が八匁二分許を含んで居る、其の分量は斯樣に少くあるが、其の香氣は甚だ強くあるので、其の一滴を一室の床に落せば、數年經つても其の香が失せない屠者が、此の嚢を獸の腹から取り出す際に、若し不注意で、此の香氣の強いのを多く吸ひ込むと、頭痛を引き起すといふことです麝香の新鮮なものは、稍蜂蜜に似て、茶色を帶び、幾分か脂氣があるけれども、月日を經てだん／＼乾けば、黒茶色を呈し、其の質も多少粒狀となります、麝香嚢の大さは、此の獸の年齢と季節によつて同じでないが、年老ひたるもの丶麝香は、分量も多く、質も良いので、賞美せられます。

又西藏產の麝香は、滿洲產の麝香よりは、質が餘程優つて居るのであるから、滿洲麝香は一旦支那に送られ、西藏麝香と混合して、他の諸國に輸出するそうです、支那から年々英吉利國に輸入する麝香は、平均一萬オンス以上である、是で見ても、麝が如何に多く居るかといふことが察せられます。

△麝の繁殖

麝の雌は成長すれば、毎年六七月頃に仔を生む仔は一回に通常四頭位づ丶である、併し此の獸は奇妙に孤立單獨に生活するを好むもので、雌と雄との一所に居るのも、冬季だけで、其の外は皆別々に離れて居る、又四頭の仔を生んでも、其の四頭の仔を一箇所に置かずに、あちらの籔に一頭、こちらの丘に一頭、といふ樣にあちこちに分ちて生み置き、乳を飮ませる時だけ、親麝が各〻の生み場所を巡つて行

くので、其の親麝も乳を飲ませる時の外は、仔と一所に居らぬとは、實に奇異なる性質であります。斯樣な性質であるから、母麝は仔のことを忘れて居るのかといふと、左樣ではないらしい、何故かといふに、若し其の仔を生捕した時、之を打ちて叫聲を出さすると、往々、母麝が走り來るからである、しかし母麝が仔を連れて歩み居ることがなく、又二頭の仔が連れ立ちて居ることがない、つまり此の獸は單獨に一頭づゝ別れ〱て、生活する性質なのでありましやう。

△麝の棲所

麝は高山に棲息する獸でありまして、滿洲、西藏等に最も多いが、又朝鮮の高山にも棲んで居る現に我が東京の動物園に飼つて居る麝は、朝鮮産の雌であります、滿洲でも平地には居りません、大抵六千尺以上の高山に棲んで居る、斯樣な山に行くと、至る所に隨分數多く居る、殊に一方に積雪のある寒氣烈い所の森林などに、好んで居る、其の性質は極めて臆病で、そうして良く走ることは、甚だ兎に似て居る、又前足に比べると、後足が長くて、丈夫なことなども、兎に稍似て居る、其故跳ぶことも甚だ上手であつて、少しの傾斜を有する坂では、一ト跳びに六十尺位を跳ぶことがある、此の獸は夜性のものであつて、晝間は藪の間や茂つた樹の下に隱れて、夜になると隱所から出て、食物を搜し歩くものである、食物は苔、雜草、灌木の若枝の葉などである、又晝間の隱れ塲所は、常に一定して居つて、毎夜諸方を歩き廻はつても、復元の隱所に戻つて來るのであります。

△麝を捕獲する法

麝は麝香を採る目的で獵られる、其の肉も食用にすることが出來る、しかし雄の殺されて後幾日間も、麝香嚢を切り取らずに置けば、全身の肉に麝香の香氣が附いて、食用にすることが出來ぬ樣になる、其の毛皮と雄の長い牙とは、共に種々の用に供することが出來る。

此の獸を捕るには、其の往來する場所に係蹄を仕掛けるとか、或は其の晝間の隱れ場所を搜し、追ひ出して銃を以て射殺します、又韃靼人や、滿洲人は、若い麝の叫聲の眞似をして、其母麝を呼び出して、弓矢で射ることもある、そうして母麝の居る近所には、雄麝の居ることも通常であるから、之を搜し出して、捕獲するのであります。

手向草

東北新聞主筆記者　藤原愛之輔

藤原君の令孃辰子は我が敎へ子なり。のゝさま幾つ十三の春、病をえてまださきあへぬ蕾の花と散る。ありし世の明媚嬌頰の愛らしさ、すなほの氣だてのいぢらしさは、師にも友にも又なきものと思はれしを、まして人の親の心やいかなるべき。孃が凶報の傳はりし日、小さき友達、廊下に庭隅に、首をあつめ、聲をひそめて「藤原さんは」と驚き悲しみ、受持の師は「よい子は命みじかくて……」と繰り返しつ。校に操行簿あり、兒童の性行を公正なる理の批評によりて書き記さる、辰子について曰く「温良、好學」と、之の四字これ我が校が孃の尊き紀念の文、今あらためて墓前に手向んに何ものか之に如べき、思へばこの世に生れて、師となり弟となる何の緣ぞ、むくつけき吾等をもなつかしみ、手をひき袖に纏はりて、庭の櫻の花陰に、柳の下に「先生々々」と遊び興じけんその折よ、生先のめでたさは、その目その頰にもかゞやきしを、校庭の花、今を盛にして嬉々たる兒群にその人亡し。さるにても親、師、友の眼に胸にまざ〳〵と殘れる影のみぞ、長へ滅へぬ箇きしるし。孃の御靈も安かれよ（吉野宮城縣師範學校附屬小學校主事記す）

汝は、何しかも、爾く短かき生涯もて生れ來にけん。

明治卅七年四月十五日といふ日は、わが胸に永久消

えざる悲みの創痍を生じたる日なり。世に子を失へる親は多かり。其悲みは皆同じかるべきに、我のみ事々しう女々しさの數々を、書き綴るなど、耻かしう面なきわざなれど、思ふ事の限を、書いつけて、汝が小さき靈に手向けましかば、少しは我胸もすが〳〵しうなりぬべく、汝も亦、愚かなる父の繰言を聞き、草葉の蔭にて思ひ慰むることもあらんか。

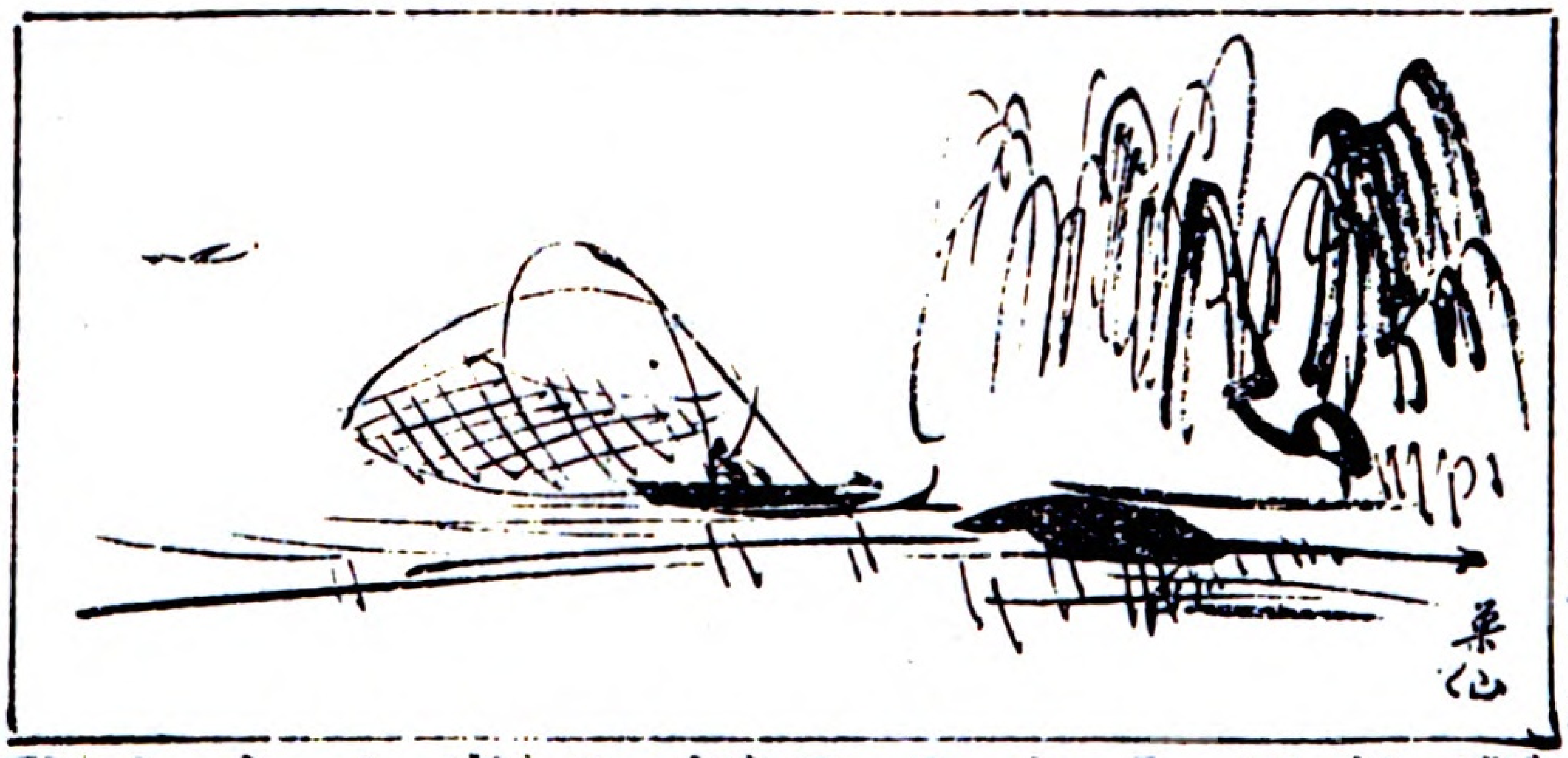
汝は、明治廿五年九月一日といふに、仙臺琵琶首袖振丁の僑居に生れたりき。生後二三日にして目を患ひ、又百日が間夜泣するなど、賦質の弱きこと著ければ、別て劬り育みしが、翌る年の夏、われ病めることありて、大橋側に轉居せりき、其頃よりは秋田に居りし汝の兄も來りて、我寒素なる家庭も稍賑かになりき。同じき年又本柳町といふに轉居しけるが汝は賦質こそ弱けれ、病むこともなく成育ちて、この子はいと怜悧なりなど人々に褒めらるゝ毎に愚かなる汝の父母は、心の中に嬉しみて、汝の行末をのみ樂みに思ひき、廿九年には汝の弟生れ外記丁といふに移り住みしが、卅一年汝が七歳の春、宮城縣師範學校附屬小學校に入學させけるに、怕見といふものにやありけん、幾日を經ても母と共に行き母と共に教室に入らでは泣きさわめきて止まず、汝の母は汝の弟を負ひつゝ學校に通ひつること廿日餘り、斯くては際限なければ、來年の學期迄は就學を見合せよかしなど言合せありけるに、汝は又學校に行きたしとて泣く、さらば汝一人にて行くやと問へば、母上と共に行きたしといふ、畢竟母が子に甘き故、さる氣儘をも云ふぞかし、今日は父こそ率て行かめ學校の門迄送り行き午後に母上の迎へに行く迄は一人にて居るや如何にと問へば、それにてよしと答へ、我と共に校門まで行きけるに、汝は我袖をひきてかしこの玄關迄送り給はれといふ、玄關迄行けば、又我袖をひきて、かしこの控所まで送り給はれといふ、控所にて汝は他の少女等と遊ぶさまなれば、立ち去らんとせしに、汝はひしと我に縋りて離れず、色々にすかし宥むれども聽き入れざるにぞ、出勤時刻の掟

厳しき所に通ひ居る我は、せん術を知らず、途法にくれて再び汝を率て歸りき。さて何時ともなく六十日程經て汝は一人にて通ふようになりしが、今にして思へば、汝の斯る性癖は全く我より遺傳せしなりけり、汝の祖母君は後に我に語りけらく、其方は世に稀なる怕見兒にて、八歳の時物學びの師に通はせけるに送り行ける祖母君の傍を寸時も離れず、輙もすれば、泣きわめくからに祖母君は毎日其方と共に通ひ、書物一卷ほどは誦んじ給ひきと。さては學者のいふ交叉遺傳にて、男親たる我が性癖の著しき偏傾は、女の子たる汝に其儘傳はりしならん、汝の氣儘を罵り叱りし我は、此事を思ふ毎に、汝を憐むの情に耐へざりしが、汝の死後に至りて、更に回想すれば、何となくなつかしき心地して、今一度斯ることもあれかしと思ふは何故にか、卅二年には、汝の次の弟生れ、卅四年には、汝の妹生れたりしが、汝は二弟一妹を愛するの情いと濃かにて殊に不具なる弟の行末を憂ひ、時々我に語りたりき。汝は又我の生計に疎拙くて好める酒も快くは得飲まぬを見又汝が母の常に寒庖に嘆くを見て、悲しとや思ひけん、卅五年の冬の頃と覺ゆ我等に向ひて云ひけらくわれは女醫になるべしと思ふはいかに、幸に一家を成さば父上には酒と肴との不自由させじ、母上には、よき衣裳を着せ柔き座布團の上に座らせ世間の奥様の如く婢女を使はせ參らすべしと、我は此夢の如き空想を面白しと聞き、汝の母と共に笑ひしが汝は眞實爾く決心したりけん、居を大佛前に移し、頃よりは只管學業を勵み、高等小學二年を終へなば高等女學校の入學試驗を受け得べしとて指を摟へて前程を數へ、明治卅七年三月に高等二年を終へその四月こそはと待てりしが、今にして思へば、その四月は榮々しき高等女學校ならで、淋しく冷かなる土の中に只一人入るべき運命の月なりけり。

病に罹りしは、卅六年の春なりき。初は感冒ならんとて打棄て置きしに容體日ましに惡しく、或時は學校にて先生の介抱を受けたりなどいふこともあり。

加ふるに痔疾、僂麻窒斯さへも併發したりければ、愛生園主伊藤彪君の治療を乞ひ先づ痔疾を根治したれど、同君は神奈川縣に赴かれけるにぞ、更に天精堂主桑原君の治療を乞ひしに、肺を侵されたる疑ひありといふ、咯痰を檢鏡するに、陰性にて菌體を見えずとのことなりき、汝は鏡下に己れの咯痰を見て歸り、さて云ふ、黴菌は見えざれども已に疑ひありといへば、今は不治の病に罹れるなりと、又曰く此病は他人に傳染すと聞く、今よりは食器衣類など凡て我身に觸るゝものは別所に格納して混同せぬやうにすべしと、斯て汝は死に至る迄、自ら定めたる掟を嚴重に守りたりき。されど此頃迄は肺を侵されざりきと覺しく、病は漸く怠り、桑原君もはや全治せりと告げ、此上は海水浴もて强壯に堅むるこそよけれとのことなれば夏期の休みをしほに、汝の兄をば秋田に汝と汝の二弟一妹とを汝の母と共に菖蒲田の海水浴に遣し、我は土曜日毎に夜を冐して菖蒲田に行き、汝を見舞ひき。汝が漸く肉づきて、濱風と潮水とに肌の黑めるを見ては、炎天の急行も物の數かは、深夜遠足の苦をも忘れつ、汝曰く、父上は此炎熱の際に晝は社務に勞れ朝夕は自炊の勞を執り給ひ土曜日日曜日には鹽釜仙臺間を步行し給ふに、我等が悠々として海邊に遊ぶは勿體なし、父上もせめては、世の紳士の如く人力車にて往復し給へ、我等の小使錢を節しなば、車賃位は剩し得べきなりと。されど汝も亦決して悠遊にはあらざりき、汝が不具の弟及び頑世なき弟妹を怪俄あらせじ泣かせじと注意する汝が母の忙しきを見ては、汝の性質として、身を勞し心を苦しむるを免かれざりしなり。斯て九月の末に仙臺へ歸りき。其當座は健康の如く見えしが、十一月三日天長節の式に出校せし時、病再び起り、愛生園主伊藤君の診察を乞ひしに、肺炎なりといふ、伊藤君はいと懇に治療を施し給ひしかど、汝は日々に衰へ行くのみ、汝曰く、正月の餅をものして逝きたしと。斯くて歳の大晦日には努めて起出

で、兄弟姉妹打揃ひ兩親の前にてめでたく齢を重ね翌る一月一日よりは床にも就かざりしが、二月の初旬より發熱して容體惡しくなりき。かくて三月に入り、汝は頻りに寫眞を撮りたしと請ひ、又リボンの附きたる娘靴を求めたしとて、かねて貯へ置ける僅斗りの錢をこそ出したりしが、今にして思へば汝は死期の漸く迫れるを知り、秋田なる曾祖母君祖父母其ほか知れる人々、恩顧を受けし人々に永く訣別せんとてなりけり、例の不如意なる我はさばかりの費用にも差支へ、社友に繰替を請ひ、四月六日寫眞師佐々木氏を招きしが、汝は寫眞師來れりと聞き、新しき衣裳を着け袴を穿ち、我に抱かれて庭前に出でつ、靴なくて遺憾なりやと我のいふに否と輕く答へき、撮影を終りて床に就きし後は、復起きず、頻りに寫眞の成るを待てりしが、汝の注文せし通り六



枚の寫眞成るや、秋田なる曾祖母君、祖父君、仙臺なる祖母君、伊藤國手及び夫人、大阪なる池田女史盛岡なる菊池君などにそれ〲送り、これにて心安しと語りき、三月下旬伊藤君が外征の途に上ることゝなり、出發に臨みて、リボンの付たる娘靴を汝に與ふるや、汝は瀕死の床にあり乍ら宿望の遂たるを喜び、力めて起上りてそを穿ち、床の上を歩みつゝ雀躍せしが、その後は復起きずして、美しき靴を枕邊に飾りて眺めくらすのみ、或夜我にいひけらく靴を穿ちて榮々しう歩かん望みも今は絶えたり、我死後靴を人には贈り給ふな、價高きものぞかし賣て弟妹の小使にして給へと、我は何事をか答へんとして脣をば動かしたれど、聲は出ざりき、嗚呼價貴しとて、靴一足何程の事かあるべき、瀕死の汝をして、斯ることをも云はしめたるを思へば我が胸は張

り裂くる心地ぞする。去年十一月より學校に之行かざりしかば、退校するや否やと、學校より問越しゝに汝は學籍をな除きそと答へ、やがて新學期の月謝帳を配られしに、汝はそを珍重して肌を放たず、我に告げて曰く、永く〳〵學籍にあるなりと、又曰く我爲に拂ふ月謝もて末弟を幼稚園に就け給へ、さらば母上も少しは手隙となり弟の行儀もよくなるべしと、又汝の爲に東京より求めし藥草の種を、我手づから庭前に植うるを見て、汝曰く、藥草の萌ゆる時われあるべしやと。かくて四月五六日頃となり汝は愈々衰弱し、死期の近づけるを知りしにや、一切死てふことを云はずなりき。我に向ひて今年の夏は秋田に行きて曾祖母の君祖父母の君に逢ひ、珍き菓實を賞翫すべしなど語り、或時は又、本年も海水浴にこそなど言ひ、努めて前途の好ましきやうに言ひ做し淋しき笑を衰へたる瞼に上するを常とせりきされど追々臨終の近づく頃には、さすがに堪へざりけん、母に向ひて父上母上に別れて逝くはいやなりと語り、暫くありて又、一たび死にて再び歸る人はあらじと獨語き、我をば、故叔父上の側に送り給へと語りきとか。十三日の夕暮に我社より歸りしに、汝曰く、我を菩提寺には葬むり給ふな、かしこは淋しくて心細し、必ず故叔父上の側に埋め給へと。我例の胸せまりて聲出でざりけるに、汝は二度三度繰返し、我の點頭くを見てやみたりき。汝又云く、秋田の祖父母君に逢ひたし孫と生れて相見ずして去るはと云ひさして已みにき。此夜我は汝の母と兄弟とを汝の枕邊に招き、言ひ殘すことはなしやと問ひしに汝は力ある聲にて熱心に語りていふ、父上母上に孝行せんと思ひしも、今はせんなし、兄上は御身を健康に保ちて學業を成就し我の分をも孝行し給へ、父上母上に苦勞させさせ、兄上にもわが病中醫師を迎へ藥を取りに行くなど、勉强の時間もなき程煩勞させたり、免し給へと。我等は只歔泣するのみにて一語だも發し得ざりき。仙臺なる汝の祖母君と二人の叔母君とは、太く汝を憐れみ始終看護の勞を執り

給ひ、夜は氷を〳〵といふ聲に眠らず、我も業を休みて、臨終近き汝に最後の看護をと思ふ情切なりしかど、動める身の心に任せず背後より引かるゝ思ひにて家を出づる毎に、汝はさやかなる聲にて「唯今」といひき。その聲の今猶耳底を去らざるぞわりなき。十五日にも我は早く出勤し英雄マカロフ中將を吊ふの文を草して新聞の社說となしつ、英雄國家の重きに任じて斃るゝも一生名もなき老書生が子の、生れし甲斐もなくて野末の小草なんどの枯るゝやうに世を去るも一生、幸不幸のけじめはあらじなど思ひつゞけ、午後四時過に心も心ならず夢路を辿るやうにして歸りしに、汝は猶息ありしも、はや臨終に迫りたりき。汝が慕ふ祖母の君叔母の君も急ぎ來り、保井君の母堂も汝が爲に臨終を護り給ひき。汝はこの生園主伊藤國手も心を盡して治術を施し、我が友村人々の厚き情の下にありて、午後六時といふに、短く慘憺たる十三年の生涯を終りたりき。愚かなる汝の父は、せんすべも知らず心地惑ひて聲さへ淚さへ出でず、傍に披きてある歌集を見るに「一世には再び見えぬ父母をおきてや永く吾は分れなん」といへる一首の偶然に目に入りて始めて我にかへり、人々の手前の恥かしさも忘れ瀑布なす淚止めあへず、子故の闇に迷ふ親の、醜き擧動の限りを盡しぬ。(四月十八日稿)

○十六日の朝ものに書つけたる歌

父よばふ聲も聞えず夢さめて
　さびしき夜半にわれ一人泣く

○隔生即忘とはいへれど此契りはかへじ

來ん世にも又來ん世にも親となり
　子と生れよと契りおくかな

○釋氏諡して智秀妙艶といふ、寫眞に回向して泣く

ちゝのみの、父の手はなれ、はゝそはの、母の傍さり、とこしへに、歸らぬ道を、汝一人、さびしく辿り、行くらむを、思へばかなし、ふり返り、こひつゝ離り、行くらむを、しぬべばわは

れ、假の世に、假の姿と、思へれど、眞土の底の光なく、冷たき穴に、葬れば、かなしきかもよ、春の花、秋のもみぢも、知りえずて、年月たてば、末つひに、塵土としならむ、小女子汝は。

反歌

めぐし子の辿らむ路を照すてふ
　三世の佛に汝すがり行け

○或は山に或は海に、汝を率て遊びしことを、汝が病中に我はしば／＼語り出で丶、樂しかりし過去を汝と共に思ひ出で丶、しばしば憂を忘る丶こともありしが今はそを思ひ出るだに耐へ難し

山櫻變らぬ色にさきぬべし
　見んといひし兒今はあらなくに

玉藻よるさうぶた濱の夕月夜
　今年も見んと汝はいひしを

東京　鈴木三伯

亡き人をしのびつ丶泣く窓の夕べ
　櫻の花の露ながら散る

妹の墓にぬかつきて　兄　藤原學

汝が身はつぼめる花と散りはて
　とこしへに殘る松風の音

手向草の後に　吉野甫

誰が生命守らむとてか藥草
　あ丶地の上に萌え出でにけむ

春の香のとこしへに滿つ花園に
　蝶よ淸けきみ靈のせゆけ

讀多武計草愴然賦之　鈍軒居士

憖折蘭摧定宿因、花開花落十三春、新篇讀了頻揮涙、吾亦當年傷逝人、

夢裏相逢歡笑催、醒時難耐肺肝摧、欲依杯酒忘悲痛、酒力却增悲痛來、

米國通信

澁谷馬頭

予はシャトルに於ける教育的、社會的、事情の偵察の任務を終へましたから、是から南方百里以外の或る地に向つて進發致します。此の四月の末日に船が出ます、其上陸地點は秘密に屬する譯もございません、いづれ此後の通信によつて御わかりになります。

シャトルに於ける苦心慘憺の偵察事情はいづれ時機を見て發表致しまする事に致しました、よしや、只今書きつけて差上ました所が、編輯局は之を秘し置くに相違ありません。

暫く他の事項を申上げて、責をふさげます。

（一）米人日本領事館に聟の周旋を頼み込む

◎日露戰爭始つて海軍大勝利の報知が頻りにまゐりますので、在留日本人の脊が俄に高くなりました、また鼻も俄に高くなりました、そこで或る米人の一人娘が、夫を選みましたに、白人もいや、黒奴はなほさら、是非とも、ヘロイック、ジャパニイス（勇敢なる日本男兒）でなくちやならぬと、兩親に迫りました、兩親も尤もの事と納得して、早速大日本帝國領事久水三郎氏に其適當なる人選を頼み込みました。

◎其米人の身元をたゞしまするに、シャトル市ジャクソン街の電車を眞直に、ワシントン、レーキの湖水を渡つて、島の中に廣大なる果園を持つて、數萬の資産を有するサイウワシで御座います。

◎サイウワシ Siwash と申しますのは、米人の元祖と申しませうか、白人渡來以前に、米國を占めて居ました、銅色人種の事です。

◎前件の成行は、まだ其結末をきゝません。

（二）瓜生海軍少將及び其夫人

◎少將は、米國アンナポリス海軍大學の卒業生で、夫人繁子はヴアサル大學の卒業生で御座います。

◎少將留學時代の學友なるチャーレス、ステワード

と云ふ人が、ウヲルヅ、ウヲークと云ふ雜誌に投書しました、記事は少將の學生時代の當時の狀況を詳しく述べてあります、之を一寸抄出して申上ます、チャーレス、ステワード氏も只今米國海軍部内に在る軍人です。

◎少將は千八百七十七年から四年間アナポリス兵學校に御出で、卒業して御歸りになりました。少將の同窓の日本人は、他に世良田さんと井上さんと二人ありました。瓜生さんと世良田さんは寄宿の室も同室でした、たしか第八號室で御座ます。御二人ともに耶蘇敎信者で御座ました。

◎同窓の學生等井上さんを Any way とわざ名を呼びました　蓋し音相近いからです、世良田さんはテムと呼ばれました、瓜生さんは字名をつけられませんでした。

◎卒業のをりに、世良田さんが成績一等でしたが、瓜生さんは機械學、造船學、公法、西班牙語、佛蘭西語等は世良田さんよりも秀でました、此他に文學の趣味を御持ちで、バイブル、沙翁全集、ベーコン集等始終喜んで見てお出でした。

◎瓜生さんは英語は勿論達者でしたが、併し他の日本人の如く Th をsと發音しまして Thirty Three をばSirty Sreeと申しました。

◎瓜生さんは、性質善良、寛大、勉强大膽でした、曾て千八百九十八年に扶桑艦長として、同艦の沈沒の災難に遇ひましたが、アナポリス兵學校に包む所なく、其失策を報告してまゐりました。

（三）露國大使の妻女

◎カシニー伯と云へば米國に駐劄して居ます露國の大使で御座ます、ワシントンの外交界では最も古參者で、最も勢力家で御座います、然るに日露戰爭始つて米國の官民共に日本びいきと來て居ます者ですから、カシニー伯とんと巾がきかずなりました、それは本國ロシャへ呼び戻されるやの噂さへ立てられまして、近頃一向引こもりがちの樣に見えます。

◎カシニー伯爵夫人は、非常に愛國心の深い人でロ

シヤ人としては、珍らしいので御座ます、在留の露人では、ともすれば日本の方へ同情をよせる者もある中に、伯爵夫人は、只今は本國の負傷兵士の治療に用ゐまする繃帶を手づから製造して居られます。

◎先般わざわざ巴里の仕立屋へ注文して日本風の模樣の衣服を一そろひ作られました所、此の戰爭始つてから、漸く出來あがりまして到着致しました、伯爵夫人は最早見るもいやだと云ひまして、召使つてる日本の下婢にすぐやつて仕舞ひましたさうです、（ローゼン男爵夫人は、わざわざ白木屋につくらせて持ち歸りましたさうですが、外交官の妻女は矢張掛引の上手な者です）

◎カシニー伯の娘が、主唱者となりまして、大統領の妻女、各國の使臣等の妻女等と相談致しまして、露國恤兵金募集の爲め一大音樂會を開く計劃があります。

◎カシニー伯の妻女の行動は、慥かに伯の面目を立てます、敵國の女性ながら感心の至りです。

◎外交官の妻たる者は才色兼備の者でなければならぬと、誰やらが申しましたやうでしたが、實に左樣だと思ひます。





つなぎ墨

幸田露伴

いろは短歌の縁は異なもの、畫樣をそのまゝ束髮散髮姿にして見るやうなる不釣合の夫婦の、女は河豚とも虎魚とも云はん方無き醜貌なるに、男は象牙雛に臙脂點したほど美しう上品なる其の男の語りける。

我が口より如是云ひては可笑けれど、我は人中へ出ても、十人二十人の並べる席にては、先づは洋燈近き場所に座らせられても氣の怯けるやうなる心持もせぬ生れつき、自惚の駄味噌をあげるでは無い親の手柄で眼鼻立も繪心に付いて居れば、罵詈しては憫然ながら、石菖の枯れて仕舞ふた黑岩に眼口を取り付けたやうな今の女房に連れ添うて居る事、もしや持參金に惚れでも仕ての事かと、口善惡無い人の惡推な陰言も折々は耳に聞えて、さらぬだに朝夕を樂しからず暮す上を、無實の噂まで被せられて、口惜くもまた馬鹿〳〵しく、此のやうな埋らぬ話が有るものでは無しと、思へば〳〵腹の立つて、折節は合せ物はもと

〳〵離れ物、筆を三行半にさへ使へば濟むことゝ考へぬでは無けれど、いや〳〵これが緣といふものと諦らめて、昨日までも今日までも濟ませて來たものなれば、可厭〳〵とは心にも絕えず含みながらも、明日も明後日も今年も來年も、來年の其のまた來年の末々までも、明けては日の光に、暮れては燈火の光に、彼の燒き損ひの鬼瓦が動き出したやうな恐ろしいものを見て暮すことなるべしと、しみ〴〵我が運の不思議さを我ながら感じ入るなり、我もたゞの人たゞの男、蜀の軍師や毛利の智者のやうに、普通はづれて醜い妻を有つて平氣で居らるゝほどの度量は無ければ、抽かぬ無盡の籤を中らぬと限らずに、今度は何樣な良い緣を取り中るか知れずと慾張つて、今のを出して後釜を搜すといふ仕方も知らぬにはあらねど、まだ二十歳代の其の疇昔、そも〳〵第一の好い緣を取り失つてより、二度目三度目四度目五度目、一度は一度より惡い緣を取り當てゝ、六度目に持つたが今の家内、もうこれより惡いのはあるまいとは思へども、若し此女を出して今度はまた此女より惡いのに取り中るかも知らずと、豫想を仕て見れば其事が恐ろしくて顏が人間らしく無いだけで氣は獸類臭くも無く、密夫をこしらへて吳れぬのがまだ〳〵上等の部かと、無理な忍耐をする氣になるのも我ながら白痴で可笑いが、孱弱い人間の果敢無さには見えぬ前途が怖くて、も一度新しう籤を抽いて見やうといふ心になれぬのも、考へて見れば異なもの、矢張りこれが今の家内に一生添ひ遂げる緣といふものでがなあらうと思はれる。

それにつけても最初の緣を取り失つたが口惜く、今だに思ひ出しては情無い氣がして、何樣しても折角の好い運を破した自分の愚さを恨まずには居られぬ。

談は虛誕のやうな小い〳〵事で、其の結果は化物と添ひ遂げねばならぬやうな今の運命に至つたかとおもへば、自分の愚痴から老人染みた事をいふやうなれど、眞實に誰にも彼にもよく〳〵勸めて、一寸した事

をも粗略におもはせぬやう、鐵砲の恐ろしい働きも曳金の一分か二分の動きからといふことを合點して、苟且の笑話にも氣を配つて欲しい、と心底から意見をいひたい氣がする。

我が世渡る業は知らるゝごとく、墨を含み朱を舐り雌黄白緑を塗り散らして、繪を畫き候で日を送るなるが、雅號が當世に響けるでも無く、識者に目を屬けられて居るでも無く、たゞ饑ゑず凍えずに身を過すといふだけなるが、我が師の名をいふも我が今の甲斐無ければ面伏なれど、我こそ如是劣れ、我が師は人も知れる亡き何某なり、我まだ齡の十六より師に就きて、十七、十八、十九、二十、二十一と足掛六年精出して勵みしに、生れつきも左まで不器用ならねば師の愛厚く、苟且の御教も他の弟子によりは詳しく優しくて、噛んで含まするやうに諭したまはれば、年ゆかぬ身にも有り難さは分りて、自分も御世話を空にはせじの意氣組より、膠の扱ひ難き冬も惰けず、繪の具皿取り散らしたる中に籠り居の辛き夏も勤めて、一心に上達を願ひ居たり。

滋くとも培ふ樹の實は生る例なれば、拙くても勵めば勵みしだけの効はありしと見え、師のおぼえはいよ〳〵めでたく他弟子に超えて、何事にも先づ我を先立て給ふに、技の出來ぬ奴より一番に嫉妬は云ひ出して、先生は彼を聟に取り給はん下心よりの御贔負と云ひ觸らしぬ。それまでは何の心も付かざりしが、陰言云はれて急に顏の火照る思し、我には二つ年下の先生の娘御の、繪にも無い御容貌好の學問の出來たまふが、日頃我をば優しう仕玉ひて、なつかしがりたまへる樣子も嬉しく、先生の我を愛しみたまふも、成程たゞ藝事の質が良い故の御贔負とばかりでも無いやうなるに、羞しいやら悅ばしいやらに心おちつかず、月日さへ立つたら龍宮へでも渡るやうな氣がして、毎日〳〵嬉しい事ばつかり、技は出來るだけ勵む、先生へは出來るだけ忠實にする、娘へは出來るだけ優しくする、其中に當分内弟子に來て居て見よとの先生

の仰に、いよ〳〵亀の背上に乗つた心持、二ッ返事で早速御厄介になり、朝夕御親切の御教を受くるばかりか、奥と表との隔てそあれ、彼方にお染さまの御笑顔あれば、此方に久松の莞爾つきありて、たゞ美しう現るゝ高嶺の雪の初戀の、解くるまでには至らざりしが、我は内々顔料に豆油を混ぜて丹精麗しき筆描友禪の半襟をこしらへてまゐらせ、孃樣は縮緬の色々を集せて菊花式の肘突を造りて賜はるといふやうなる罪無き嬉しい思の遣り取り仕て、夢と光陰を送り居たりしが、一日の事、先生は某侯爵の御宴に招かれたまひての御不在、孃樣と先生の御机の傍にて譯も無き雜話を仕居たる折柄、不圖歙州の硯近くに、もはや摘みかぬるまでに磨り減らしたる墨に新しき一挺の墨を繼ぎ足して、猶使ひ枯したる小さきを盡く磨り得べきやうに仕たるを見出したり、別に咎むるといふまでの意も無かりしが、先生にも馴れ馴染みたる餘りの心易立より、是は先生にも似合はず吝嗇なる爲され方かな、墨のいよ〳〵小くなりたるは我等風情さへ使はず、墨の頭を使ふものは提灯屋ばかりと定りたるに、先生ほどの御身分にて此のやうな事を爲さるゝは餘りなり、人が見たらば物吝みといひて笑はずには居るまじ、と云ひ出せば、孃樣も成程と點頭きて其日は其儘に濟みしが、それより三日目の夜のいと靜に、五月の雨のしとやかに降れる時、茶をとの御望に孃樣御手づから玉露を淹れて持ち行きたまひたる後、やがて先生の御聲の高くはあらねど、叱りたまふやうに洩れ聞えたれば、例の無き事と不審におもひて、ひそかに襖の外に至りて耳を立てしに、彼の墨の事に就きての御話にて、常ならず先生の御聲には角を含みたり。

成程吝嗇とも思はうが其は間違ひなり、一度は使へぬものを二度使つたり、使はなければならぬものを使はずに濟まさば、それは眞實の吝嗇といふものなれど、使ふべきものを使ひ盡すは吝嗇とは違ふ、たとへば尖頭の切れた筆を強ひて使つて畫を描き、又は使ふべき金粉を十分に使はぬ、といふやうなことならば其は

吝嗇、使ふべき墨を使ひ盡すが何の吝嗇、墨は松烟のもある、油烟のもある、油烟に寄せ燈心のもある、一本燈心のもある、また墨に用ゐてある膠にもそれ〳〵がある、筆に精粗があれば、墨にも精粗がある、既に李廷桂の墨といへば千金にも直る。乃公は李廷桂の墨も使つては居らんが、書を以て世に立つて居るから凡墨は使はぬ、相應な良工の精製したものを使つて居る。一旦撰み定めてからは十數年來同じものを使つて居る。此後も長く同じものを使ふ。始終同じものを使ふのは經驗を善用するので、一生に使ひ餘るほど同じ品は貯へてあるが、小くなつたものをも惜むのは金を吝むでは無い、全くたゞ〳〵墨を惜むのだ。墨はもと〳〵膠で固めたもの故、磨り減らしたのと新に下すとを同じ墨汁で續ぐ時は、無益に廢らず使ひ盡さるゝ。乃公が續ぎ墨を仕て置いたのを見て感心は爲いで、人が笑はう故好ましう無いと云ひたるとは扨々心の淺い男、第一技藝にたづさはるものが、人の笑はうか笑うまいかゞ氣になつて、早くも胸に浮ぶやうでは、一切の心の着けどころが虚僞になつて仕舞ふ。良い若い者だと思つたが鑑識違ひなりし、何も此程に云ふには當らねど、汝にも彼が凡物といふ事を、呑み込ませて置く要のあるまゝ此樣に諄く云ひたるなり。今宵より其のつもりにて眼を着けて見よ、凡物の證據は數多見ゆべし。解りたりや。との物語なりしが親子は恐ろしや孃樣も成程と合點せられし樣子なり。

洩れ聞きし我が口惜しさは云ふまでも無し。たゞ彼の續ぎ墨をさみしたる一言の過失より、彼方には悦ばれず、此方にはまた隔て心起れば、何時と無く此方の心沮み、彼方の辭少くなりて、思ひ褪めされたりや孃樣とも疎くなりて、終に先生の許面白からず其家を立出で、龜に乘つたる思は仕たれども龍宮には至らで、今だに乙姫のその俤ばかり眼に殘つて、嗚呼惜いことをと悔しくのみおもふなり。第一の好き緣を取り失つてより、其後の事は云ふまでも無し。或は出られ、或は死なれ、不緣の數重なつ

て今の妻なり。龍王の娘を貰ふ筈なりし男の、とゝの詰りが虎魚に添へるも情無く、人々も知りたまふが如くに我は折々續き墨といふことして、小さき墨の使ひ掛けをも棄てざるが、其の續ぎ墨磨る度に、硯の海に彼の娘の俤が……。

嗚呼我は續ぎ墨を用られど終に凡物にして、長へに虎魚に添ひてゐるべきなるべし。

（終）

辨當の行衛

ローテ、デ、ニツコルス作

河越輝子譯

「メリッサ。お前は時間を忘れはしませんか。學校がおそくなりますよ」

とベーカル夫人の聲は隣室なるメリッサが裁縫機械の音響よりも高かつた。

「阿母樣まだ八時半ですよ。私廿分かゝつたら行かれるのですもの。急いでしないと獨立祭のまに合ひませんワ」

ピン。ピン。ピン。ピン。車輪の音は益々急になる。阿母は氣が煎れて仕方がない。

「それはお前。急いで行けば廿分でも行かれやうけれど。其れでは身體のために惡い。それに今朝は御飯を半分しか喰べなかつたではありませんか。」

礑と車輪の音は止んで、顔を眞紅にほからした若い娘が此方に走りきて、鏡臺に對ひ頭髪をなでつゝ獨言を云て居る、

『嬉しいこと、裾の方は出來たし。最う胴服を土曜日全體かゝつてすれば好いのダ、彼の市街にあつた白い胴服が欲しいネ、けれど一圓も出るから仕方が無い、オヤおそくなつた、阿母樣、それでは行てまゐりますよ』

疾風の如くに走り出た後で、母は金截聲を擧げ、

母『メリッサ、メリッサ。お辨當』

メ『オヽ、私全く忘れて居ました。然れど最う時間がありません』

母『宜しい〳〵。アズロが來やうから停車場まで持たして遣りませう。バブを取りにおよこし』

メリッサが手をあげて、遙に感謝の意を示し、牧塲を通じて、彼方の岡の小さい赤い建物さして走り去た後で。母は打笑みつゝ思考に耽つた、

『ホヽ、輕卒しい娘だネ、けれど感心に自分の衣服は自分で縫うし、家は助けるし、學校は能く治める、おまけに彼の顏の美しいこと、誰れを見たつて彼の娘にまさる者は無い、どうか、こつそりと、彼の白い胴服を買ておいて喜ばしてやりたいネ』

とは思たが、考へて見ると此夏亡き夫のために、大理石の石碑を造らねばならぬ、夫人の眼は涙にみちた。

折しもアズロの聲で

ア「今日は」

母「アズロか。鳥渡待てお呉れ、嬢がお辨當を忘れたから、お前御苦勞だが停車場まで持て行てお呉れでないか、先方からバブを取りによこす筈だから。お前遠くから來てお腹がすいたであらうネ。是を一つおあがり」

肉饅頭を與へると、牛飼のアズロは、ムシャリ〳〵喰べつゝ持て行つた。

ア「デブさん今日は、先生の辨當だよ。バブが取りに來るからナー」

デ「アズロかエ。宜し〳〵」

驛長なるデブは、發車の時間には、まだ餘程あるので、遙か向ふの馬鈴薯の畠に草を拔いて居たが、今アズロの聲を聞いて「宜し〳〵」とは云つたものゝ、實はバブと辨當の此二言の外は聞かなかつたのである。其れから、二時間たつて停車場に歸り、自分の辨當を喰べて、新聞を讀んで居ると、プラットホームの方から輕い足音が聞えた。バブが來たのだらうと回顧ると、バブではなくつて都會風の若い華奢な畫師が立てゐる。

畫「山の方には一時に出るのですネ」

如才なく會釋して腰をかけた。

デ「否。其れは夏期の爲ですから、次の週間からです。今は五時半でなければ出ません」

「五時半……私は大層空腹です、彼方此方見取して、今朝の八時から歩き通しなのですから、那邊か飲食店か、農家は有りませんか」

デ「お氣の毒ですが一哩行かねば有りません。此停車場は村と村との間に立て居て、其間には何も無いのです。たゞ學校が一軒ある外は」

氣の毒さうに見てゐたが。フト思附いたやうに、

デ「オヽ爰に辨當が有ります。バブと云ふ學校の小兒なのですが、貴方半分ほど喰べて拾錢ばかりお遣りなさい。彼奴大喜びで取替へますワ」

・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・

驛長は立て畠の方に行た。男は最う腹が減つて腹が減つてたまらぬ。おまけに十二時を十分も過ぎてゐるのに、バブは來ず、そこで、陰りと辨當の蓋に手をかけた。オヤ〱何と云ふ好い香ひだらう。此香ひを嗅いでは如何でか、一刻も猶豫の出來やう。遂に開けた。

「ヤヽ、截肉饅頭。好味そうだな。バブさんや、是は幾何出しても乃公が貰ふよ」

衣嚢をさぐつて、十錢銀貨と五錢玉と三個の銅貨を取出し、恭しく、十錢玉を食卓の上においた。

「是がお饅頭のため、次は何だらう。オヤ〱乾酪か、無論是も」

又も五錢のニッケルが置かれた。其れから殘りの三錢は水菓子のためと、

「バブさんや、此果實はお前には不消化だよ、然れども乃公には恰度好いやうだ難有い。甘そうな麪が二個ある。一つはお前に殘してやるぞ、果實も半分、乾酪も半分。けれどもお饅頭は悉皆乃公の者だ、ドリヤ始めやうか。何だか氣が咎めるやうだぞ」

とう〱麪が口に這入つた。空腹に不味い者はない。一口毎に、氣が強くなるやうで、頰もおつこちさうだ。間もなく半分づゝ平らげてしまつた。そこで衣嚢を探ると驚いた、金子が最う少しもない。否ないで

はない細い者がないのだ。先程道で泣てゐた小兒に遣てしまつたのだ。ハーデーは思案にくれた。

ハ『ハテナ、一圓札では過るし、十八錢では足らぬし、いつそ悉皆たべたらどうだろう。而して其ために一圓。ハ、、、好い考だ。バブさんや、お前には誰かゞ分て遣るサ。お前はまだ生れてから一圓札を手にした事がないだらう』

案を起すと同時に實行した。其れから小さい紙が取出されて、其上に左の如かゝれた。

バブさんよ。空腹な旅人がお前の辨當の好き香氣に誘はれ申候。どうぞ此金を獨立祭の爲に御使ひ下されたく候。

悔悟したる　ハ、ペ、

喰べ終つて停車場を出ると、向ふから十才ばかりの裸足の小兒が一生懸命に馳て來た。是を見た彼は何だか盜でもしたやうで氣が落膽りした。で、隱れて居らうと急ぎデブの畠に來て見ると、デブは手を休めて汗を拭きつゝ如何にと樣子を尋ねる。男は身を小陰にかくして事情を語つた。デブは驚いて

デ『エ。悉皆喰ひましたか。ハ、、バブは金錢を儲けて喜びませう。然れども一口や二口は殘して貰ふと思ひましたに』

ハ『私は非常に空腹でしたから、バブが來る前に悉皆たべてしまつたのです。然れど同代りに一圓札を入れておきました』

デ『一圓札……』

デブの顋ははづれた。

ハ『怒りはせぬでせうか』

デ『大丈夫です』

慰めがほに云て居ると、彼方から疾風の如くに、バブが叫んで來た。ハーデーは、萬事デブに頼んでおいて、自分は側の生垣を越え、小川の岸の繁林の中に身をかくし、徐々と歩みを運ばせた。漸々川は廣くなつて瀧は漲り、苔蒸す大木の燦々と白銀の玉を浴びて居る樣は得も云はれぬ美しさである。此目ざましき光景に、彼は辨當の事も打忘れて、餘念なく見取を始めた。やがて五時となつて歸つて見ると、デブは既に官吏の威嚴を以て切符を切てゐる。ハーデーの顔を見るや、可笑しさに堪へぬ樣で、横手の窓から顔を出し、

デ『貴方は善くおやりでしたぜ。感心です。ハヽヽヽ』

ハーデーは心配そうに、

ハ『怒りましたか。金子が足らなんだではありませんか』

デ『ワハヽヽヽ、バブのでは無かつたのです、學校の先生ので、メリッサ、ベーカーと云ふ娘つ子のですよ』

ハ『エ。先生の……有識婦人の……』

デ『ヘー。而して市中一番好い娘なのです。知らぬ人から金子など貰ふやうな娘では有りませんさ、だから貴方、バブ奴が心配してのう、泣てゐますダ。ワハヽヽヽ』

『デモ。僕が食ふ前に君がバブのだと云つたではありませんか』

頗る不機嫌だ、

デ『シッ。ソラ來ました。――バブも同道で、最う五分かない。早く行て逢てお出なさい。早く〱、確りして。ワハヽヽヽ』

ハーデーがプラトホームの方に嚴粛なる歩行を運ばせたときに、デブは窓から顔を出して其方を見遣りつヽ獨言を云てゐる。

『何て云譯をするか、先生が最う眞赧になつてゐらう。ソラ、バブ奴が何か云出したぞ、一圓札はどうしたのだらう。ヒヽヽヽ』

一圓札はメリッサの慄へた手の中にある。彼女は始めてバブから其報知を聞いた時に、既に其人格を想像して金子を返し、心善く免してやれば雜作なく事はすむと思つてゐた。所が來て見るとさうでない、旅に汚れた不作法な田舎者と思ひの外、若い背の高い、品格ある青年が突然前に現はれて、恭しく禮をしたので、彼女は思はず赤面し金子を握つた手を袴の襞にかくしてしまつた。

ハ『どうぞ御免下さい。ベーカル孃よ。私は貴孃の辨當を盗みました、けれども全く此の小兒のだと思ひましたので』

顔を眞紅にして。殆んど所置に苦んで居る愛らしき娘に向て青年の態度は恭謙である。

メ『否。どういたしまして、私はそれほどお腹がすいてゐません』

ハ『左樣仰つて下されば私は眞に貴孃に謝します。私は非常に空腹でした、たゞ是ばかりです、貴孃にお免を願ひ得る言葉は、而し彼の肉饅頭は實に好味うございました』

如才ない青年の氣質に。メリッサは全く落付いて、

ハ『ハイ。母はお饅頭を拵へることが上手で御座います』
折しも發車を告ぐる滊笛の聲に。メリッサは急ぎ一圓札を出して、
『是はお返しいたします』
渡さんとすると男は推し返し、
ハ『其れは是非取て戴かねばなりません。どうぞ、阿母樣と御相談なさつて貧民になりとおやり下さい』
メ『ハイ……それでは。』
握手と共にハーデーは滊車の中に飛込んだ。

。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。

其夕方日が西に入るまで、ペーカル夫人を始め驛長、バブ、メリッサ等數人の間に、種々なる相談や笑聲がきこえてゐたが、怜悧なる夫人はつひに斯う云ふて、人々の言葉をおさへた。
『お辨當は私の物です、ですから此お金も私のです。靑年が奇麗に拂つて行きました。而して私の好いと思ふ通りに使つて呉れと云たでせう。ですから私が好いと思ふ通りにつかひます』
仲々如才ない。やがて牛飼のアズロが、歸りがけに何かヒソ〳〵と夫人の門口で囁やかれてゐた。而してメリッサは彼の白い襞ある胴服を獨立祭の爲に母から貰うのを拒まなかつたとの事である。

（をはり）





宮中月次御歌會御兼題（六月）

螢叢中

田中光顯

身にあまる光しあれは叢に
いかで螢のうもれはつへき

同　伊與子

しけりあふ草葉の露を命にて
すたく螢のかけのすゝしき

高崎正風

さつきやみあやめもわかぬ草村に
きらめく露は螢なりけり

渡邊千秋

草むらにみをかくしても螢火の
わかき心はよをてらしけり

鍋島直大

夏の日はまたくれぬとも草むらに
ほたるの光みえそめにけり

本居豊穎

とふ螢雲の上までゆくへきを
なと草むらに身はこかすらむ

黒川眞頼

からんとも思ひし庭のくさ村に
螢のやとをしめてける哉

津輕承昭

水きよきよ川のきしのくさむらに
きらめくかけは螢なりけり

渡邊清

夏草のかけにかくるゝいほなれは
すたく螢のかすそしられぬ

小畑美稲

夕月のかけはかくれてくさむらに
もゆる螢そみえそめにける
北小路隨光

草ふかき野澤のみつにすゝしくも
かけをうつしてゆく螢かな
町尻量衡

むらさめのはれゆくにはの草村に
すたく螢のかけのすゝしき
梅溪通治

風にちる露かとみえて涼しくも
庭のくさむらほたるとふ也
竹屋光昭

草むらにともす火かけは小夜ふけて
すたく螢のやとるなりけり
前田利鬯

風ふかぬのへの草むらおく露の
みたれてちるは螢なりけり
藤井行德

くれたてしのみちをゆけは草村に
もゆる螢もたのまるゝかな
同鐵子

さとの子か見殘したるみちのへの
草むらいてゝほたるとふ也
唐橋在世

はしゐして月まつ庭の草むらに
みゆる光はほたるなりけり
水野忠敬

草むらのしけみにむすふしら露の
光すゝしくとふほたるかな
日野西光善

草ふかき野川のみつにかけみえて
光すゝしくとふ螢かな
常盤井堯熙

風わたるのへのくさむら亂れたる
露とみえしは螢なりけり
藤枝雅之

草深き野中のしみつくみにきて
蛍のかけをみそめつるかな
小原適

草村のほたるのかけをたよりにて
くらき夜道をたとりける哉
澁谷得敎

夕されはしけれる庭のくさはより
玉とみたれてとふほたる哉
千種任子

草むらの露かとみしはそれならて
すたく蛍のひかりなりけり
小倉文子

夕つゆのかすそはりゆく草むらに
すたくほたるの影の凉しさ
圓磯子

あけまきかゝりのこしたる草村に
すたく蛍のかけのすゝしさ
姉小路良子

夏草のしけみにさはるほとならし
蛍のかけのうすくみゆるは
宮地厳夫

雨はれてつゆもまたひぬくさ村に
すたくほたるの影の凉しさ
坂正臣

里の子かわけあらし入る草むらも
夜はほたるの花さきにけり
近藤久敬

ふく風にあらそひかねて草むらの
そこにほたるの光るよは哉
小池道子

はなれてはあつまるみれは草村の
露や蛍の宿りなるらむ
藪兼子

草村のしたゆくみつにかけみえて
いまた蛍のとはむともせす
北島糸

かきりなくもゆる螢のひかりには
やみのよつゆもみゆる草村

津守好子

草むらのつゆのひかるとおもひしは
はうらにすかる螢なりけり

吉田愛

くさのかきのかはの岸をふく風に
つゆとみたれてとふ螢かな

平田三枝

くさむらにおく白露をぬはたまの
やみにもみせてとふ螢かな

萩原嚴雅

よひの雨のはれたる庭のくさむらに
のこるしつくは螢なりけり

小杉榲邨

にはもせの草のむら／＼露ならて
光もしけるよはのなつむし

植松有經

ふくかせにつゆはこほれて螢のみ
はすゑにすかるにはの草村

中邨秋香

かち軍いはもひくやのくさむらに
光そへてもとふほたるかな

鎌田正夫

ゐまつにもくさふかけれはとふ螢
うち落しても取れさりけり

大口鯛二

よをてらす光ひそめてくさむらに
いつまてこもる螢なるらむ

猪熊夏樹

夕風になひくなつのゝくさむらに
こほれぬつゆや螢なるらむ

千葉胤明

とりにうむうなゐもみえすうつさわく
のへの草村螢とへとも

滋野井實麗

くひなゝくこゑもすゝしき谷川の
草むらかくれほたるとぶ也

遠山英一

わけいれは水のなかるゝ音すなり
螢とひかふものへのくさむら

加藤義清

はなちたるよひの螢のかけふけて
つゆおきわたす庭のくさ村

尾崎宍夫

里の子にかきさくられて草むらの
一むらほたるむれてたつなり

須川信行

露みえてまたくれはてぬ草むらに
すかる螢のかけそほのめく

緑發行について

塙忠雄

みとりのかけよしせはくとも
天地のまことうたはむ

わかうたむしろ
ふるきしらべ新しき調べ
わかいつく神のをことに
あはせてをみむ
いさたまへみどりの陰に
つとひませいつはらぬ友
へつらはぬとも

牛島之春

折々に雲間をもるゝは月影に
ほたるともみん
庭くさのつゆ
風流男の初音待ちわぶ時鳥
軍ひとらは
いかにきくらん

教の庭

正三位子爵 黒田清綱先生撰（代撰菊池武則先生）

軍人

天

海山にかちをしめたるますら夫は
よろつのくにのかゝみなりけり

前橋市 林廣子

地

ますらをはおほみ軍に魁して
國の御稜威をかゝやかすへき

京橋區采女町 森まさ子

人

黒金のつな張つめしとりてをも
やふりてすゝむやまとますらを

東京々橋區南鍋町二丁目七番地 渡邊初子

甲

かつことに猶もかふとの緒をしめていさをかさぬるいくさひとかな
東京 山本茂子

君ありて我身ありとも思はさるやまとたけをそ世にいさましき
三河 榊原てる子

いさきよくちるを心のいくさ人すめらみ國の花とあふかん
松山 たけ子

我國のひかりのよもにかゝやくはみなますらをの力なりけり
大阪 天野近尾子

日のもとのみゐつのひかりかゝやかすときこそきつれ進めますらを
大和 栗山多加子

外國にまされるわれのつはものはやまとこゝろのあれはなりけり
神田 山田婦美子

乙

ますら男のつくすこゝろはまのあたりふれよりひゝくかちときの聲
日本橋 神戸すゑ子

さちなれや生れし甲斐のあれはこそいくさ人てふよにたゝへらる
陸前 前田河千年子

すめ國のみたてとなりしますら雄の赤き心のみゆるころかな
松山市 山崎匡子

ますらをかいのちをまとにすゝむなり露の玉ちるもろこしか原
神田 たまき子

大丈夫の國につくさんまごゝろは事ある御代にあらはれにけり
本所 三坂きやう子

國のためちるをゝしまぬますらをのこゝろの花のいさましきかな
山梨 標武子

東京 梅津せつ子

事あらはみ國のためにつくさんとはやるこゝろの勇ましきかな
長野 田島みよ子

つるきたちとりはきゆきて敷島のますらたけをの勇みたゝかふ
大和 栗山俊子

とつ國のうみにかはれは さらすともきよき名あけ よくものゝうへまて
長野 中村佐喜子

雨あられふりくるたまをくゝりつゝあたうちすゝむ軍人かな
福井 平田そう子

いさきよや御劍はきてますらをかかへらしものと勇むかとては
水戸 細谷波留子

ひとことにつとめはあれどいさといはゝ瑞ほの國はみな軍さひと
下野 菅 つれ子

こもりたる大和たましひふりたてゝ清きほまれをたつるますらを
奥市 和住千鶴子

大つゝの音もなんのそのふる彈をあられとみつゝ進むますらを
よみ人不知

大君の御たてとなりてますら夫のなにもそむかぬ軍人かな
下野 菅 德子

いさきよき大和こゝろを打たてゝはやく露國をうてやますら夫
東京 ちか子

深みゆきわけつゝすゝむものゝふのゆくゑはいつこ滿洲のち
美濃 吉田澄子

大君のみたてとなりてあたゑひすたゝひとうちと勇むますらを
神田 荒井滿武子

君かため御國につくすときをえていさむ心の手つなしめつゝ
神田 荒井廣久子

天照御國のひかり身にそへて今日のかとてをいはひぬるかな
肥後 德永多稲子

野への露海のもくつときゆるともなにかいとはんやまとますらを
日本橋 牛山業子

たらちれの親より子よりつまよりも名こそをしけれみ軍の人
長野 小泉たつじ子

敷島のやまとさくらのかくはしき名をこそのこせ我いくさひと
長野 山本基子

國のため盡すこゝろはますらをのすゝみて退かぬ身にこそ有けれ
東京 [illegible]井豊子

もろこしの廣のもゆるくはかりなりみいくさ人のかちときの聲
本郷 青木たま子

ひとすちに御國につくす ますらをの御いくさふりの いとゝをゝしき
神奈川 森田はな子

千早ふる神代なからのますらをのほまれは高く世をそてらせる
三河 永井さい子

君か爲身をすてゝこそものゝふの名は世になかくくちせさりけれ
陸前 前田河みさを子

四千よろつ民のうちよりえらまれてみいくさ人となるそ嬉しき
長野 小泉みつじ子

國のためいさやふるはん益荒雄かかれてかためしやまとたましひ
小石川 辻岡ゆかり子

敷島の日本島根のものゝふの力しめさむ時は今そも
奈良 千賀すみ子

かためてし仇のとりてもうちこえていやすゝみゆく皇軍の友
和泉 工藤かず子

いのちよりなこそをしけれものゝふも今は限りとあたまもるらむ
岩代 鈴木春子

すみ／＼の外國々にひゝくらむわかものゝふのたかきいさをは
和泉 稲原薫子

清き名を千代にのこして君のためちるををしまぬいくさ人かな

名古屋　木下鶴子

此頃はいくさに習れてなか〳〵につゝのおとせぬ夜こそさびしき
肥後　徳永萬壽子

皇國にあたなすあたを打はらひよにかくはしきやまとますらを
神田　荒井千代子

おのか身を國にさゝけてすゝむにそけに日の本の神の子なるらん
長野　山本直枝子

のりことの重きを負ひていて立をかろくそ進むやまとますらを
水戸　細谷やす子

ちからつき斃るゝときは神となりて仇つくされはやましとそおもふ
肥後　徳永廣子

身は火筒こゝろは玉にますらをかつくすいさをはすめ國のため
東京　山田静子

國のため君のためにはますら男かいへをも身をもわすれぬるかな
東京　渡邊名加子

ひの本のみいくさ人のいさをしはよの果までもとゝろきにけり
和歌山　樋口はつ子

おほ君のあたを破らむひとすちに家をも身をもわすれはてけむ
横須賀　岩橋花子

海ゆかは水つくかはれとうたひつゝ仇うちすゝむやまとますらを
肥後　岡山登壽子

一筋にみかとをまもるまこゝろをとつ國までもかゝやかすらん
肥後　秋吉輝尾子

國のため天皇のため火水にもたちていろへきやまとものゝふ
三河　きく子

しへりやのふゝきの中も何ならて勇みてすゝむますらをのきみ
三河　しづ子

時きぬとゑみかはしつゝいくさ人いて立さまのいさましきかな
秋田　細矢はる子

なみのおとまたまくらには馴れともあつさもうきもわすられにけり
埼玉　横田秋子

君の爲國のためとやすゝむらんますらたけをのたけき心に
埼玉　横田やな子

いさましきやまと心をこゝろにてすゝむや御代のほまれなるらん
埼玉　横田音羽子

すめらぎの御國をまもる軍人君か爲にはつくすこゝろか
札幌　小山かく子

満洲の荒野に生ひし醜草の根も殘さしと刈れ軍ひと
肥後　千知波楠子

朝な夕なてにとる銃のおとたかきほまれをあけよくものうへまで
前橋　竹のふし子

いさをしをたてゝちりにし軍人とこしへまてもそのなはくちし
秋田　古瀬りく子

大きみのおほせかしこみ大丈夫かいてゆくさまそ勇しきかな
薩摩　松原みれ子

たゝかへはかならす勝ちぬ日の本のみいくさ人のいさほたかしも
神田　荒井あさ子

武士のつくすこゝろはよろつ代のときはの松のみとりまてもと
北見　中川いよ子

君のためにほふさくらのそれのこと散をなしまぬ我いくさ人
赤坂　小谷治子

くにの爲そこのもくすと消つれといくさの神や國まもるらむ
秋田　伊東よし子

おほ君のめくみ身にしみいくさひとおのかてからをきそふころ哉
松山　ひで子

みいくさにかちときあけしますら雄の心のうちや嬉しかるらん
三重　神田みよし子

つまもこもかへりみもせて國の爲門出をいそくやまとますらを

露の玉雨とふれともいむかひてかちときあけろやまとますらを
東京 學子

大やしまよものうなはら守りえてくにに仇なすとつくになうて
下野 井上尙子

おほきみのしこのみ楯とたかにはにあしふみなつむ武士のとも
但馬 田尻保代子

家人を跡にのこしていさましくわたうちにゆくたけきものゝふ
下谷 杉田はん子

神風にみはたなひかすいくさ人あたのゝ罪のたまはあたらす
下谷 河合泉子

あさひこの旗おしたてゝますらをは君のみたてといさむなりけり
福岡 山川敬子

露の玉雨と降にもむかふらしいくさにすゝむやまとますらを
福岡 竹内みつ子

武士のきよき心をしきしまのよしのゝ花にたとへつもかな
磐城 三森須磨子

むかしよりつたはりかけし我國のいまにかはらぬいくさ人かな
丹後 森本ひで子

君の爲みをもいとはすますらをかいくさにすゝむもろこしか原
北豊島 松本松子

大君の股肱とたまふものゝふにいかゝ答へて我は願はむ
長野 大町かほる子

碎くともいとはて玉とますらをかくにのためとてなほ進みけり
下谷 椎野秀子

そひらには丸はうけしと大和魂こゝろにもてるわかいくさ人
麻布 林艶子

己か身を國にさゝけていくさひと門出のさまのいさましき哉
麻布 林環子

いさやいさふるひて立よますら雄のちからためさん時は此のとき
麻布 上田雪子

國のため君の爲めには玉の緒のわがものとしも思はさりけり
兵庫 飯島淳子

うてはかちせむれは取ていくさ人國のみいつをかゝやかしけり
松山 上原のふ子

いくさ人むれにかけたる黄金色のとひに功績はかゝやきにけり
山口 村上操子

國の爲つくすこゝろはかはられと御軍ひとはをゝしかりけり
松山 田村多豆子

君のためくにのためとてますら夫のかさす太刀には向ふてきあらし
上總 高石登代子

いのちをは鳥のはよりもかろくして仇にむかへる身こそおもけれ
三河 本多きさ子

いさやいま時はきにけり去し世のうらみはらせややまとますらを
三河 服部爲子

避暑

天

夏しらぬ山のおくなる谷川は
わつさを洗ふ處なりけり
埼玉縣川越町 横田秋子

地

いそつたひ浪うちきはの貝ひろひ
ことしも夏を忘れつるかな
日本橋區通四丁目 牛山素子

人

やまひにはわらぬ暑さも忘れけり
きのふはわたみけふははこねに

三河國寶飯郡
下地町　永井さい子

甲

松影の清水のもとに庵しめてことしの夏をわすれける哉
京橋　森　政子

奥やまのおとろかもとのましみつも人にしらるゝ夏はきにけり
岩代　鈴木善子

そゝくゆに夏のあつさをなかしやりてすゝしくやとる鹽原のさと
下谷　河合象子

こん夏もこゝに過さん二荒やま峯に起きふし夏はかよはす
麻布　林　艶子

たへかたき夏のあつさをわすれ貝ひろふたもとに濱かせそふく
三重　神田みよし子

みいくさを思へは夏をわすれくさつみて過さむときならめやも
山梨　標　武子

夏としもおほえさりけり岩しみつわきてなかるゝ山かけのいほ
東京　渡邊名加子

風そよくはひろかしはの下すゝみまたるゝ秋もわすられにけり
長野　田島みよ子

山里に今年もなつをのかれきてすめは心もすみよかりけり
奈良　千賀すみ子

乙

この夏をいかほの里におとつれてあつき盛りをすこしてしかな
三河　き　く子

かはきしの草のほそみちたとりきてあつさにあはてかへりけるかな
秋田　細矢はる子

いく結ひ蠶縫はすれと夏の日のあつさもゆめも只長くして
埼玉　横田やな子

ふむ足もこかるゝはかりおもふかなあつきさかりの浦の眞砂路
埼玉　横田音羽子

避暑に來し甲斐よといはゝさなるへし團扇も持たて廿日いれたる
札幌　小山かく子

六月のあつさくるしき夏の日をよそにすみ田のかはつらのさと
肥後　千知波橋子

ふく風に谷のまし水おとそへてなつのあつさをわすれけるかな
肥後　岡山登滿子

夕立の名こりすゝしくふく風になつのあつさもわすれけるかな
肥後　秋吉輝尾子

たに河のかは風すゝしかのあつさいまはいつこに流れゆきけん
秋田　伊東よし子

草もきも枯んはかりのなつのひを海のほとりにくらすたのしさ
赤坂　小谷治子

こん年も暑さはこゝにさけ入らむ夏もすゝしきやまなかのさと
薩摩　松原みれ子

休らはて業する人に吹きかよへあつさ忘するゝ山里の風
海老原信子

おほ磯かはたすしいかほ何かせむみやまのおくにしみつくみつゝ
前橋　竹のふし子

まつかけのいはもる水をくみにきてあつさをよそになかしてしかな
秋田　古瀬りく子

たへかたき暑さをさけて汐あみのひとそつとへる大いそのさと
北見　中川伊代子

伯耆　樋口つる子

此頃の堪へぬ暑も住吉のさすかに涼し森の下かけ　神田　山田静子

のかれこし山下かけに住みぬれはあつき日かけもあらぬ嬉しさ　長野　小泉みつじ子

なくせみのこゑも涼しき山かけに夏のあつさをわすれけるかな　長野　小泉たつじ子

岩つたふみつに松かせおとつれてあつさをしらぬ山かけのいほ　東京　山本茂子

たれこめしうちやゆかしき玉たれのたきにあつさをけふもよきつゝ　讀人不知

とつくにのをとめもましろ二荒の山のたかとのなつとしもなし　神田　山田婦美子

しはらくはあつさわすれてましみつの流るゝかたにいこふ旅人　神田　荒井満武子

うのはなのさかりもすきてきのふけふ遠山かけてあつささけつゝ　陸前　前田河千年子

君のためさゝけし身とはおもへとも堪ぬあつさはさけさらましを　肥後　德永廣子

谷川の清水をむすふやまのいほになつをわするゝみやこ人かな　東京　渡邊勒子

けふもまたすゝみにゆかん大宮のひかはの森のまつのしたかけ　讀人不知

棹さしていさこき出てむ松島や松の木かけに月は昇りぬ　神奈川　森田はな子

木の陰の流れの清水むすひつゝけふのあつさもしのきつるかな　長野　山本基子

水むせふたに川あたりすみぬれはまたるゝ秋のこゝちこそすれ　神田　荒井豊久子

此頃はたきの音のみきゝつるをまたわすられぬほとゝきすかな

たまくしけ二見の浦にきてみれは神かせすゝし夏のゆふくれ　美濃　吉田澄子

波の音きしの松かせすゝしさになつは日れもすこゝにすこさん　肥後　德永廣壽子

都へのちりにたえかれとひ來れは秋かとまかふ大磯のさと　和歌山　樋口はる子

風清きわかはのかけにふみよみてけふの暑さをわすれつるかな　和泉　福原菫子

のかれすむ草の庵もこのころはあつさゝけんと木陰もとむる　陸前　前田河みさを子

箱根山暑さはかりか世のちりをはなるゝのみもすゝしかりけり　名古屋　木下鶴子

老松のこすゑにたかくつきみえて吹く風すゝし志賀のからさき　和泉　工藤かず子

なく蟬のこゑしなけれは夏のひもしらてすくらんたま川のさと　横須賀　岩橋はな子

とこなめの清水のもとにことりとひふく風すゝしなつのやまふみ　福井　平田そう子

さら／＼となかれいてたる岩清水むすふたもともすゝしかりけり　大和　栗山たか子

風さやくはひろかしはの下すゝみゆめにも夏はみえぬなりけり　長野　田島みよ子

ちりふかきみやこをあとにかのいそに涼はん今日そ樂しかりける　かち子

きてみれはけふのあつさを忘れけりみゝにすみける瀧のひゝきに　大和　栗山倹子

此なつをいそへあたりになつさはり我身ひとつの秋をしめはや　東京　松澤まつ子

月なからせき入るしみつ結ひては夏ともしらぬまつかせのふく　奥市　和住千鶴子

東京 梅津せつ子
しけりあふ松の木かけに來てみれはひるの暑さもわすれけるかな

肥後 德永多瑙子
人しけきみやこ大路をよそにみていはまの淸水くむそすゝしき

陸前 前田川千年子
のかれきて谷川水をむすへともなほさけかたきあつさなるかな

松山 たけ子
暑さをも風のはらひてすゝしきは夏しらかしのかけにさりける

本郷 青木たま子
木さくろみやこのあつさひきかへてころもてすゝし大きゝ

東京 鯨井豊子
岩まもるしみつむすひて夏のひのあつさわするゝ山かけのいほ

長野 山本直枝子
とひ來れは門に眞しみつ庭にまつ夏を知られぬやまのしたいほ

下野 井上倘子
にたる山にし川はあるわか里にあつさわするゝこのかせはなし

松山 匡子
ふく風をすゝしきとのみおもひしは月見ぬ時のこゝろなりけり

磐城 須磨子
夕くれてまつのしらへのいと妙にひかりをちこちいざりひのかげ

東京 田中とし子
大磯にちりのみやこをゆめみつゝいそうつ波のしらへたのしむ

靜岡 竹内みつ子
たへかたきあつさしのきのもろ人にみやこめきけりおほ磯の里

福岡 山川敬子
なみ風のすゝしきいそにうつりすみ夏のあつさをしはし忘れん

麻布 林環子
はこれ山岩もる水をむすひあけてあつさわするゝ今日にもあるかな

北豐島 松本まつ子
箱根山しけきこかけの宿かりてなつのあつさをしのきつるかな

下谷 椎野秀子
をみなこも通ひちやすしはこれ山あつさはかりをあとに殘して

神田 金原たまき子
あつさをはみ湯になかして足柄のとひのかふちに夏はくらさむ

下野 井上滋子
濱よしとやむみも友にさそはれて暑さわするゝきのふけふかな

愛媛 高橋茂
なつしはし暑さよけして山里もすめは都とすみなれにけり

麹町 石川瀧子
しみつせくやまへのやとを尋ね來て夏のほかにも秋をこそまて

三河 服部傚子
山里になつをのかれてすきのもとにきくもすゝしき日暮のこゑ

大阪 桝田益子
みな月のたへぬ暑さをうみ果てぬなつはなきさの浦すまゐせん

三河 本多きさ子
山里にあつささけこしかひありきたにのしみつも軒ちかくして

三河 河合ぬひ子
ひるのまのあつさは瀧になかしけりなつ白幡のもとにやとりて

豐橋 鵜野くわ子
よもやまのみゆるかきりは夏なからあつさをしらぬみ山への里

松山 上原のふ子
うつまさもあつさの塵は遁れれは夏しらかはのおくにこもらむ

上總 高石登代子
かる井澤きよき小川のすゝしさをみやこのつとになすよしもかな

山口 村上操子
日をおほふ松の木かけのこけ淸水扇の風はかさとしもなし

松山 田村多豆子
風あまる山もあれともこのなつはうしほをあみてあつさ忘れむ

福島 中島武子
遣水の音をきくにもあつけさをわすれそはつるみやまへのさと

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

七夕祭の記

地

札幌區北一四七の一　小山かく子

けふは七日なればと弟妹ら、七夕のお祭りせんと騒がしう朝餉もそこ〳〵に、刄物携へて出行きし間もなく、枝ぶりよき竹の細き一もとを肩に、しづ〳〵と歸り來る軍歌の節面白し。机おし並べて下げ髪と一分苅りと相對して筆の運び巧なり、赤、黄、青、白、と裁ちませし色々の紙、何事を認むるにやと打見れば、天の川。七夕祭り。星合の空。など幾度かくり返されつ、はては同じ文字のみの興游しと悟りてや。吾國の弱虫。我軍大勝利。帝國萬歳。いろはにほへと。杯でたらめの事かきつくるをかしさよ。罪もなきおさなご等の、限りなき樂書見そなはし給ふ七夕の君には、嘸やほゝ笑ませ給ふこともやわらん。

思へば、われ六才の時青葉城下に、今宵の樂しき一夜を送りてより早九年の昔となりぬ。『今年豐年七夕祭りよ』と聲はり揚げて、われと共に蠟燭乞ひ歩きし當年の友らは、今宵も亦戰勝祝賀ならぬ小さき提灯行列の、樂しき可笑き一夜を送るなるべし。日清役の平和に局を結びし年と、日露事件の破裂せし年。扨も思ひ出多き七夕祭りの一夜よ。

人

東京日本橋區濱町二ノ十一木内武一郎内　松澤まつ子

夕風涼しく吹き渡りて、親星二ッ三ッ見え初むる程裏の畑に下りたちて、未だ手もつけぬ爪茄子、さては

桃の初なりなんど、清き器に入れ、庭の眞中に机をすゑてそなへ、葉末の露を硯に受けて、五色の紙に七夕の古歌書いつけ、はた衣の形など切りて、竹のさきに結びつけ高くさゝげ、梶の葉取りて何くれと思ふ事どもかいつけて互に「此願ひ三年のうち必ず叶へ給ひてよ」などつゝましげもなう念ずるもをかしう、螢さへ其處此處飛び交ふに、空打守れば、流星か、あらじ彦星なんめり、一ッ二ッ又一ッ天の川の邊りをつと渡りて彼方へ行きけるに、幼き人達は「さぞや今頃は彦星の星姫に逢うて戰爭の物語りにてもするならむ」などいふに皆々笑みくづれつ、母君も日頃の憂さも晴れ給ひて、何くれと七夕の話などせさせ給ふも時にとりて興深く、琴とりいでゝ彈ずる程に、あかつき近くなりけむ、いつしか星のかげも薄らぎ、山の端白く見え初むるに、さらばとてそなへし物ども門の流れに流しやりしぞ、何となう名殘をしかりしかも。

出征軍人の首途を送りて

地

山梨縣東山梨郡岡部村　標　武子

兼て覺悟の上にこそあれ、なつかしき故山を出でゝ、遠き異域の死地に勇み立ち給ふ、兄君の今日の門出、國の爲め盡し得らるゝ身こそ、こよなく目出度けれ。然ど之を此世の生別かと思へば、嬉しき事悲しき事、交々胸に行きかひて、落つる涙ぞ止めあへずなん。

かくて停車場に到れば、早や見送の群衆數知れず集まり萬歲の聲湧が如し、折しもひゞく滊笛の聲と共に兄君の一隊勇ましく列車に乗り込めば、萬歲の聲またも天地もゆるぐ計りなり。見れば車窓に軍人の笑顏凉しく凜として勇氣溢れ、最早露國を一呑にしたらんが如く何れも意氣天を衝く、間もなく滊車は萬歲の聲に送られて、徐々と進行し心なくはや森影にはかくれけるよ。

あはれ、大君の爲め二つなき命もものかは、死して迄も護國の鬼とさへなる、武士の胸中には、前途の光明に照らされて、涙一滴落さぬ健さよ。あゝ我も男子ならましかば、十年の昔、我同胞が血を流したる遼東の野に、戈とりて先の恨を晴さんものを、甲斐なき女子の身にしあれば、仇討つよすがもなく、口惜しくてなん。あはれ徒らに暖かき褥に起臥して、錦をまとひ、現世を夢に永らえつゝある、世の令嬢たち、虎ふす野の草を枕らに、安からぬ夢をむすび給ひ、ひたぶるに大君のため、死をも厭はず勇み進む我が兵士の上を想ひみよ等おもへば云ふに云はれぬ感にうたるゝ折しも、雲とまがひし道のへの櫻、東風に二ひら三ひら袖にかゝりけるぞ。天晴我軍人の心根と思はれ、いとゞ哀れ深うなむ。

人

肥後國葦北郡湯浦村　鶴田よしの子

日の本の國に仇なす露西亞國いかで許すべきや。吾國の自衞の爲に、東洋平和のために、また、世界の平和を保たん爲、尤も義理ある戰爭ゆゑ、畏くも　大元帥陛下には征露の詔勅を煥發せられ給ひ、忠勇義烈の軍人、時をも移さず出征せられ、今や清韓兩國は、交戰の衢となり、降る砲彈の雨霰、銃聲天に轟きて耳をろうし、劍はさながら林をなし、濺たる血汐は川をなす程にて物凄ごきに、日頃きたひて待ちにまちたる軍さ人、腕をためさんものをとて、物ともせずに攻め破り、事ともせずに進み行かれぬ。しかるに君樣にも、昨日の第二回充員召集に應せられ、明日より御出で立ちたまふとかや、げに我が古郷の青き山、白き水は長へに君を守りて嬉しげに送り、老の父君や母樣も幼なき方に至るまで、祝ひ〳〵て喜ばしく、御首途を送りたまふらん。一郷の男女打集ひ、君の門出を祝ひつゝ四方に起こりぬる　天皇陛下萬歲の聲は御國の爲に君の健氣を祈るらん、數多の人に送られて無事にがいせん、がいせんと右と左に袖を分ちつゝ

お互につきせぬ名殘は、山と川有らん限りとこと〴〵に別れゆく。斯く諸人の勇み〳〵て賑かに、お見送り申上るは皇軍の勝利疑ひなきしるしにて候はん。元より死を以て忠を盡さるゝ事に豫て御決心あらせらるゝ事故、今さら申上る迄も之なく候へともたとえ大和の櫻となり散りてはかなくならせらるゝとも必らず後れて恥を取りたまふなよ。噫、君樣の斯く千載一遇の戰ひにおあひ遊ばされしは、抑も軍人たるものゝ冀ても再びなき好き時節に候へば、何卒〳〵お命を捨てさせらるゝ覺悟にておはたらきありて、天晴れ御武勇をあらはしたまへ、假令君樣が幾久敷く年月を遠き外つ國に出て征せらるゝとも御家にまします老の御兩親樣を始め皆の方々は、跡にのこりし我々がおいたはり皆々集てお慰め申上べく候へば、御心殘さず征かせられんことを。之れ内にある國民の本分とも存せられ候ゆゑ、必ず〳〵御心配なき樣祈り上候。時候も次第に暑さをむかへ可申、萬里の波を越へなれさせられぬ外つ國に居らせられ候事なれば、御自愛あらせられ、敵なる露西亞を征服せられ、功名御手から有りて吹き來る平和の涼風に日章の軍旗をひるがへし、金鵄勳章を輝かし御健勝にて御がいせんの時を今より期して御待をり候。此の一と包みは私家に先代より傳へられたる軍の神、摩利支天の御守に御座候。此の度び若樣の戰場に於て御武運つよくあらせらるゝ爲め差上申候間御はだへにつけて御出陣下さる樣願入候。申上度事は濱の眞砂よりも多く候得共取急ぎ御首途にのぞみ、御見送りまで申上まゐらせ候。可祝。

七夕祭の記

肥後　千知波橘子

ごよひはいつよりもそらはれて、天の川水はたりやすくや、二星の心おしはかりはべりぬ。さればれい年のごとく、葉竹に五色の糸をかけ、神酒をそなへ、ともどちうちつどひて、あるは衣をぬひ、苧をうむなどとりどりに、手向のしなうづたかく奉り侍りて、琴に笛にしらべあはせてにぎはしう、まひかなでて、夜のふくるをもしらざりき。

肥後　岡山登喜子

天にふたつの星あり、なかに天の川をへだててすみけるが、こよひをかぎり河をわたりて相逢とかいひつたへぬ。そもや乞巧奠とて星を祭、なに〱れとなく女子のわざのすぐれんことをいのる風俗はいつのころよりか始まりけん。さま〱のものをなむけ、梶の葉に歌たかき、色紙短册なとを笹竹につけて學業のすゝまんことをいのり、あるは五色の糸をそなへ。うるはしき衣類をも其ほとりにならべて供るなりしも管絃の音は天人の樂を奏するがごとく、ひとしほしづかなる空のけしきを仰ぎみれば星は光て夜はいよいよふけゆきぬ。

伯耆　樋口つる子

奈良ぢや奈良ぢや奈良の都の八重櫻何とした美しい水だらう男竹女竹に五色のたんざく下げて其には思ひ〱に七夕の天の川織姫様とか、かさゝぎの橋水茎のうるはしく新筆もてさら〱書流し、思ひ〱の枝にくゝしつけおそなへ者もかず品々に中には頭の如き好味しさうなが二ッ三ッ夜に入れば小形の提燈手んでにさげて得意さうに打ふり打ふり隊もみださず聲はり上げて奈良ぢや〱のふし面白く氏神様を始めお稲荷を懸けて夜のふくろも打忘れやんやと老も若きも打まじり此間都であつた提燈ぎやうれつもかくやあらんと今更におどろき入りました妾等は年に一度の此樂み何より愉快に指折りまつのみぞかし早や來年の御約束を隆代の君や久子の君とやくそくして居ます

熊本　指原みさを子

一天藍の如くなるに、一帶の銀河南に流れ、點々たる星光の閃々たるは、將に下界を射る心ある者の如し、これ舊文月七夕にして、手習稚兒等が文字の滑らなるを誇りかに、五色の紙に文字を記して、牽牛織女二星に奉る舊慣の夕なり、五彩の糸は五倫に象り、五色の紙は五常に準ふものか、又或は法使として、手習ひ奨勵の手段に出でしものか、人を敎へ導くの重任を負ふ者、斯の如き機知あるへし、皆らしむへく、知らしむへからすとは、それこれをいふへきか。星又何そ神にあらさらんや、神と云へは物皆神なり。信じて祭れば凡て神ならざるはなし、蒼々たる天にして夫神ならざらんや、祭るも佳なり、祭らさるも可也、

七夕の天津妹背のことのはを
　たれかこちたくいひつたへけん

と吟したる、眞淵翁も眞淵翁なるかな。

肥後　德永峴子

むかしは七夕のまつりもいとにぎ〱しくありしか、ひらけゆくまゝにかゝることは、年ごとにおとろへ、今は絶なんばかりなるを、今年は討露のいくさもありければ、七夕祭もよからめと母人のすゝめたまふにうちよろこび、朝とく起いでゝ、里いもの葉や、梶の葉などの、玉なす露をあつめて、墨摺ながして待ゐるほどに、まねきし友達も、夕方より來ぬれば、妾も五色の短册とり出で筆染て　よとこひければ親しきがまゝに年長の人筆とりて

星あひのゆふべ涼しくなりにけり
　天のかはせはいつわたるらん

また一人の友は

今宵こそまちにまちしか星あひの
　天のかはふれいまうかぶらん

妾はふかき意をおもひ出すふしもなければありのまゝに

年ごとに星のあふ瀨のかはられば
　まつるもうれしけふの七日を

とかきつけたるをのびたちし新竹にむすびつけぬ。母人もよませたまひしかあまたありけれどうつしもらしぬ。梶の廣葉に五色の糸を供へたるはいと神さびてゆかしくなん。夜も更ゆくほどに、天の川瀨に立霧もはれつらん。いとたのしかりしまゝかくはしるしぬ。

肥後　秋吉輝尾子

ふく風すゞしく秋をはらひ、霧はふかく雁啼かへる文月の七日とはなりぬ。古へよりの習ひとて彦星織女の双星天の川瀨にあひあふとかやいひつたへて、さま〱のものを供へぬ。機織の業にちなみて五色の

糸を棹頭にかけてそのみちたくみならんことをぬぎまつるなど、こゝにめざましきことなりれば今宵こそみやびにこゝろさしたまゞ母君をはじめ心あへる垣のたれかれうち集ひ初學の三十一文字を五色の短冊にかきつ兩星にさゝげまゐらせぬ。なりしも南より北に一流の銀河皎々。ふと耳そばたてれば曉告る鳥のこゑなり。あはれたのしかりしの空いつのまにか更ぬらん。

出征軍人の首途を送りて

岩橋花子

我が知れる軍人、今度の戰ひに動員令の下りて、今日しもそが首途なりけり、君の喜びは例ふる物なく軍人としての譽よ、適れかしこきあたりの宣ひけん義勇公に報ぜんは實に此時こそと、日頃より勇ましき君の一入勇ましかりき、この美はしき首途送らんと集へる人も多かる中に、わらはも日頃よりしたしみしなれば、人々に打ち交りて停車場まで行きぬ。道すがら傍近く來りて云ひ給ふいかに花子の君よ軍人として戰地に向へる者如何でか命を全うして歸らん、身をも家をもかへり見ず、仇打ち進みて、かへりみんや、二度この地の花や眺めじと、妾ははげまさん言の葉もなし、あはれ遂げて來ませ討死を、さりとて死するのみ軍人の務めならじかし、御機嫌美はしうと漸う云ひぬ、いと嬉び給ひつ列車には乘り給ひぬ、しばしは萬歲てふ聲のなりもやまざりし、見れば父母君のいと嬉しげに居給ふ、さすがに女氣の母上、眼には涙の露いと淺くさりとては、厳めしき御姿一人あはれなりき、喧しき聲の内に滊車は行きぬ、あはれ仇し野の露の醜草なぎ拂らひ、適れ名をこそ輝かしませ、異國の月雪君が御口に、語り給ふ日はありやなしや

肥後　佐々有鄰子

今日は征露軍人の首途なりければ、某師團長をはじめとして數千萬のもののふを、朝日の豐坂登に、空うるはしく、軍服いさましく、騎馬の人あり、大砲あまた馬上よりひきゆく大隊あり、小銃隊は四列をつくりてすすみゆく、天皇の御楯となり、皇國の鎭となり、額面に矢はたつとき背には傷を負はずて、外國の海陸さして、すゝみすゝめる。其兵士のをゝしさ、げに櫻花國の武士にこそありけれ。首途をおくる男女は、旭旗おしたて、もろ手をあげて皇軍の萬歲を呼聲、遠き露西亞の天地もくづるべく轟きわたりけり。滊車のはしる途中には、各學校の生徒を敎員に引連れて。數千人立並てぞ奉送せる。其姿はいとあひらしくをかしかりける。妾も女敎師のはじにつらなりてこそ奉送せしが、滊車より手をふりたまふ某の少將ありふり仰ぎみれば出征の隊長にてぞましましける。昨日とか此隊長の命は下りぬとなんいへり。そも〱武名をしべりや鐵道の遠ながく、軍隊もろともに千五百長秋あげたまへと、首途の祝言を三度となへてかくなん。

北海道　小山かく子

數十日以前よりお待ち兼れの動員下令にて、昨夜いよ〱召集令狀を受け遊ばされし御事、扨は平素の御希望に叶ひて壯快なる御遠征の日も近からんと信じ御滿足の程お察し申すになん。あはれ妾等の望みは去る日の演說會にいとも壯嚴なる君の口調にて承りし『時局に對する國民の覺悟』をば、天晴御實行あらまほしき事にこそ。お留守宅にはつゆみ心を惱し給はずとも妾等が力の及ぶ限りお見舞申すべし。尙云ひ度き事の數あれど氣のみせきて筆の運び儘ならず、すべて汲み給ひてよ。かしこ。

肥後　秋吉輝尾子

日清戰爭後の遼東還附の事より、日にまし幾干はんたなる事情しげく、かつ常ならぬ露國、暴戾のふるまひに、兩國の平和やぶれ、戰討の事とはなりぬ。ものゝふのならひとして、召集の命令をうけて出征の途につくものは、實に名譽の事にこそ。中にも本校に敎鞭をとりたまひし師の君も豫備兵にて、此度出征の途にのぼらせたまふ事になりぬ。妾も停車場まで、御家族の人々と送り奉りぬ。常に父とし仕へ、見

としいつくしみたまひし御事とて今更別れ來る事のいたはしや。さはいへ重き軍人のつとめを術ひたまひ、　天皇の御ため國のためつくしたまふ御心のほどをさつしまゐらせ涙の露を袖に包みて、先生萬歲を三聲あげぬ。年老たまへる御母君と、令夫人は、愛しきボッチャンをつれたまひたり。御母君は、師の君にむかひたまひて、皇國のために天晴なる手がら高名のほどをいのるよとの、御言葉さすがに軍人の母たる人々はあはれかくこそあらまほしけれ。ボッチャンのむじやきに父君われも軍にゆかんと、したはるるを、令夫人は、坊も大きくなりてとのいましめ、さすがは御家庭のほどもゆかしくおもはれ、そゞろ感涙を催されぬ。滊笛一聲いさましく、今は黑煙のみ空になびきて、車はみえずなりぬ。

肥後　岡山登彌子

あまた出征軍人の首途をおくれる人のなかに、いとあはれにもまたかれんなりしは、陸軍士官某氏の出征の途につきたまひし時にこそ。氏は熊本縣出身の人にして、今の夫人の君と、結婚の式をあげたまひてよりはづかに一月も立ぬまに、今回の事變おこりて、にはかに出發なしたまふやうになりぬ。誠に名譽の出征とは申ながら、夫人の心中思ひやるだにあはれにおぼえ侍りぬ。妾は今の夫人の君とは、いとしたしき學友にして、姉妹のごとくしたひつしたはれゐるものから、今日も夫人とともに停車場まで御送りまゐりせぬ。其道すがら種々かたりつゝ、夫人の君の申たまふやうには。軍人の妻となるからは、かゝる事は、かねての覺悟名譽の出征、のぞみしことゝよろこびたまふ、心のうち察しまゐらせ、そゞろあはれにおぼえ侍りぬ。なりから見おくりの人々うちつどひ萬歲をとなへ氏の首途を祝す、氏はいと滿足なる面色をあらはし一禮して滊車の中にいりたまふ。妾は氏の後影を拜みて感涙にむせびいりぬ。ひそかに夫人の君を見やれば、いとうれしげに良人の首途を送り給へり。さすがに軍人の妻君たるべき人と、今更のごとく感じいりぬ。

兵庫　飯島淳子

うつりかはり兎角不順の折柄、御全家御揃ひ遊ばし御壯健に渡らせられ候御事とこよなう存じ上候。さても日露の開戰以來、海に陸に捷報突々傳はり、一般婦女子と雖、肉をどり血わくの思ひいたし候折柄、君にはいよ〳〵來る何日御出征の途にのぼらるゝよし、兼ての御願望成就の御事とて、其御喜びや如何ならんと推察にあまり候。申すまでもなき事ながら、國のため、君の御爲め、且つは御家の御爲め、一意專心御奉公のほど願ひ上候。世には死を以て最上の名譽とおもひ、あやまる者もこれあり候とか、元より特功を立てゝの戰死は、誠に名譽の事ながら、茲に最も恐ろしきは、病魔になやまさるゝ事に御座候。戰場にいでゝ病死するほど、世に殘念なる事は候はず、何卒食物飲用水に充分御注意なされ、武運を天に任せて御前進、ひたすらに御戰功の大ならんことを、祈り上候。われ等留守居いたす者の此後の御願は、たゞ〳〵忠勇なる我軍の全勝に歸し、凱歌のこゑもいさましく、一日も早く御歸省あらん事を神かけいのり〳〵候。先づは御出征に際して、一筆御祝ひ申上度斯くなん。あなかしこ

福岡　中島武子

あすは、我廿四聯隊の出征と告げぬ。我も見送らばやと、午前三時に支度して、市に入れば、門毎に御旗揭げ提灯ともしなどして、人々の往來、軍馬の嘶、辻々にともす篝火のほ影、見る物毎に勇み渡りぬ。博多驛には兵士の數隊、早到着せり。諸人の之を送らんとて、集へるもの數を知らず、さしも廣やかなる場內、人の山を築きて立錐の地を餘さず、そが中には、兵士のうからやからも、多かるに、若やかなる妻、老いたる母の子を思ふ闇にも亂れず、私の絆にも迷はず、只國の爲に、後の世に名を殘せかしと雄々しく淸く送れるを見るも、いと胸ふたがる心地ぞせらるる。軌道の左右には、諸學校の生徒、旗を以て數ふべく、手に手に、紙製の日旗、球燈などかざして、兵士の出立をまてり。やがて兵士が車に乘り込むや、萬歲の聲天地に響き渡りぬ。生徒等が赤心もて與へたる日旗球燈もて、列車は時ならぬ花を咲せたり。烟火數發滊笛の合圖と共に、進行を始むるや、瞬た打ふる男兒「ハン

カチーフ」をかざす少女等が、添ふる勇氣に、兵士も狂せん許、打躍りつゝ、今を限りに呼ばはす萬歳の聲は、前にも倍して、百雷の落つるが如し。見るが中に勇ましの餘聲を殘して、列車は次第々々に遠ざかり行くに、夜は早や明けそめて朝日子のさし出づる樣は大君の輝く稜威の如く、滿洲の野にひろごる醜草の露もえたへまじう。なつかしの兵士が、力風に打靡かせて、立歸らんは、いつの日にやと、げに勇しの門出を、見るにつけても、萬感、一時に溢れて、我も諸手をさし上げたるまゝ、しばし打たゝずみぬ。

岡山　ふ　る　た　子

勇ましきかな、君が今日の首途、頼もしきかな、君が行末、いかなる拔群の効をや、奏し給ふらん、行けや君、ふるへや君、生還を期せずとの御覺悟、日頃の御氣象、さもこそと、推しはかり侍りぬ。さはさりながら死するばかりが、強ち能事にてもなかるべく、あはれ戰地に渡り給はん後は、萬事に御手落なく、君國の爲めに、天晴なる御働き遊ばされ、最大なる御名譽と、金鵄勳章とを、輝かし、めでたく凱歌をあげて、歸り給はんことを、ひたすら祈り奉るになん、其折には武夫の忠勇なる有樣を、始めコサックの話など承はらんと、今より待ち居り侍りぬ、あとには貞烈なる妻君の、ありて御老親に事へ給ひ、御子達の御敎育をもせさせ給へば、かまへて〱御あとになな心を殘させ給ひそ。及ばずながらも折々は、參ゐりて心をもそへ侍らんと、思ひ居り侍りぬ、此手製の靴下、御許にさゝぐるを、はかせ給はんには、こよなき幸になん、何れ後ほど御見送りに、まかり侍らなん。あなかしこ

熊本　猪　原　みさを子

喇聲かすかに響きて、出征軍人の發途を告ぐ、此日天氣朗かにして東紅次第に明く、神心爽快云はんばかりなし、幾百の學校兒童隊々として歩調嚴に、校旗を朝風に飜して、雄壯暢然の軍歌を唱へて眞先に進めり、次に一群は旭旗を高く上げて、青年會てふ筆太の文字に、眞紅二條の徽號しある旗立て、萬萬歳を祝しつゝ歩せるは、所謂青年の一團なり、應召の軍人は勇氣滿面に顯れて、云はずも見ゆる心の内、時は來れり大日本軍人の、義膽忠勇更に幾程の點に表るかを、世界に知らしむる千歲一遇の今日と、漸くにして大門の濱に至れば、汽笛一聲又一聲、巳に出港は整へり。波堵の觀者山の如し、此盛大なる光景や、出征軍人の前途を祝するに足れり、必ず多年を出ずして、見事に凱歌を唱へて、各胸間に樣々の勳章を輝して、父祖郷友を喜ばしむる、時あるを知れり

立昇り朝日のみはた押立てゝ
　　むかはゝなとか露のきえさる

吳市　和　住　千　鶴　子

千早ふる神代よりしも、我國はとつ國人に侮りを受けしためしさへなきものを、かの荒鷲のしこゑびす翅をのべて我思ふ心のまゝにかよわき國をしひたげつ。其振舞に憤り、かくて起りしみいくさに吾谷良雄はいつとなむ。今日と定めし朝より停車場にと集ひこし送りの人は、さしもに廣き構内せき入るゝ人波を見やりつゝ打語ふ、軍人の心の中やいかならむ。滊關車に焚き出す烟は空に漲りぬ。滊笛はなりぬ。車は進み初めぬ。送る人、送らるゝ人、もろ手あげつゝ萬歲々の聲は天地も動ぎいでなん計りなり。あゝ此等勇士の心情、住みこし里を立ちいでゝ風さやく異國が原の敵うちはらび、うらるの山邊、日の本の山櫻花砂し植ゑなん其心勇むながらもしかすがにみ空にかゝる月みれば、みつはぐむまで老にける親をし思ひ出ぬらん。やよ君たち出で給ひし後は君に代りて母そばの、うさを慰めまつらんに心やすけく國の爲。尊き務なしをへて猶幸あらば、淚に送る此停車場に、やがて凱歌の聲をきかなん。

上野　ち　か　子

いよ〱十五日には御出征のよし誠にみ國の民たる者の、面目之に過ぎざる事と存しまつり候、君樣にも、日頃よりの御望み叶はせられしことなれば、いかばかりか、御うれしかるらんと、かげながら御悅び申上ぐるになん。承たまはるにつけても、我が身のをみなに、生れて

ことの、はかなさに、御戰に加はりて、ほこをとりて、憎き敵をたほさんすべもなく、只だ頼みとするは、忠勇にとめるみ國の武士に、たのみ參らす外ぞなき、今更にかれこれと申すも、烏滸がましけれど君よ一度戰地に出でゝは、よく其命を守り事にのそんで、命は毛よりもかろしと心得、いさゝかも不覺の御振舞なく、大和健兒たる中の大和健兒の、御功名遊ばし給ひがいせんの折にはやさしきみむれに金鵄勳章を輝かせ共に〳〵樂しき其日の近からん事を、いまよりまち申すになん、二ツには御身のほどよく〳〵御手當遊ばさるべく、御留守中は及はずながらも、何かと御相談相手ともなりぬべく候まゝ、かまへて〳〵御けれんなく、御機嫌よく御立ち出で給ひてよ、別包は聊かながら、御出征をことほぎて、御覽に入れ中御笑納遊ばされたく余は御目もじの上にて。かしこ

和泉　福原菫子

こたび君には、從軍の榮を得させせられて、今日午後にはいよ〳〵御出征の途にのぼらせ玉ふこそ、實に臣たる者の盡すべき道たるは言ふも更にて、いとも得がたき御譽れにぞありける。常々より雄々しきみ心にし侍れば、御よろこびやいかばかりなるらんと推し計りまゐらするさへ嬉しき極みになん。只氣候風土の大に異なる異國の空、それのみ心かゝりに侍れば御心し玉ひて御身を御大切に、御國の爲め大につくさせ給はんを祈り、其れと共に大和櫻のあはれかんばしき功を立てゝ美しき錦を裝ひめでたく凱旋して歸りまさん日を只管祈りまつるになん、御留守中の事は及ばずながら何くれと預かり侍らんに御心安うおぼし玉ひてよ。あなめでたやな。

小石川　松川ちよ子

あな勇ましや、今日の門出。あゝ壯なり、此見送る人々、淸けき風さへも、義に勇めるものゝふを送るがごと、昇る旭のかけは、それを祝ふにさも似たり。まして、心雄々しくいでたついろれの君たちを、歡び送る我身の愉快さは、何にかなとへん。新橋發の列車の前に、堤の如くにひかへたる人々なむ、皆我等と心を同じうする人なりける。時の迫りくるまゝに、いふにいはれぬ思は空に充ちみちたり。遂に時は來れり。今やますらを乘せし車は、汽笛ふきならすとひとしく、黑烟をひきて、靜かに離れんとす。車內には勇ましき萬歲の聲起りぬ。あはれ人々の心はいかなりなん。帽をあげ、はんけちをふり、天地に轟くばかりに萬歲々々と。聲こそ嗄れ、はやかの車は、見えずなりにき。いでや、かの赤心愛國の士たちよ。日頃鍛へに鍛へにし手なみを見するは、此時ぞ。いざ、斃るゝまでもと、奮ひ戰ひて、皇國の光を世に輝かせ、瓦となりて殘らむよりは、玉となりつゝ碎けよや。

肥後　德永康子

すぎしころより討露軍のうはさ有ければ、兵役につらなる人におきては、いかにまちわびつらんか、さるを明治三十七年の今日といへるに、わが兄省二君にも命令ありけり。今上天皇の御惠の程をかしこみて、大君のため皇國のためには身命をすてゝつくすべけれ。目出度首途を祝て、おくるも、ゆくも、いさめはげまし、實に皇國の民日本魂の光にて、人民の心一ちせる事のはげしさよと外國人もほめうらやむもうべならずや。別てわが兄君には、たまたま大日本男子と生れ、一度は砲煙彈雨の下に戰爭せまほしと。かたりたまひけるなりからなれば、いとうちよろこび給ひて、此度こそ男子のかひありけり。いさぎよく露の荒野の烏合兵、太刀うちふりてかりつくさん。首途を祝ひて、はづかしきふるまひを、子孫にのこすまじと仰せられぬ。かれて泪もろき身もかゝるをりには心をかたくいましめておのづと勇氣もまし共に戰場にゆかまほしく覺えて

うらやましたをやめの身をいかにせん
　　今日のかどでをいはひぬるにも

と口ずさめば、兄君もいたくよろこびたまひ、かまへて其心わするべからずと、出たちたまふ。一度もあと見かへりたまはねは、いといさましく覺えて、うれしく首途を送りぬ。

松山　たけ子

日露戰爭起りしより每に動員令をのみを待ちにまちつゝありし陸軍

歩兵第二十二聯隊の兵士ども愈々出征の途につく事とはなりぬ。あゝ忠節なる同胞よ心々に國家に盡くすは此時ぞと勇みにいさみ立つらん、あな羨まし我もをのこならば共に及ばん限り立働かましを、

五月の廿日あまり一日、つとめて起き出でつ、いざや軍の門出見送らましとて西堀端に至れば、いつのまに集ひけん、路傍歡送の老皆男女あまた居並びたりけり。我もそが中に交りてしばしたゝずむ程に、早定めの時刻とやなりけん。喇叭の聲と共に、住み馴れし兵營をあとにして出で來る夥多のいくさ人、肩には村田銃をかけ腰には日本刀をおびたる樣、是ぞ眞の日本男子なりける、赤き心自づから其面わにさへあらはれて、いとも勇ましげに進み行くを見るだにも、あはれ此のちの辛苦やいかにと、思ひやられて、そゞろ涙さへさしぐまるゝよ、されど、皇國に生れていとも甲斐ある勇士たちなれば、やがて功績をたて、名譽を擔ひて、歸りまさんと思へば、我胸中さへも、いさましうなりもてゆきつ、み國の爲の一すぢにつくして日の本の光をいよゝ海外にはなちてよと、心のうちに祈りつゝ、軍隊またく過ぎ終る迄、見送りけり。

國の爲君のためにといさみ立つ
　いくさの門出祝ふけふかな

東京　石川かほる子

停車場は今や多くの人をもて滿されぬ紋服或は袴シルクハットさては老幼男女とりどりに手に小さき旗を持つあり往き來さに隙もなし、何れも勇敢、眞心をもて笑み滿ちぬ、これなんこたび日露戰端開かれつ滿洲の地遙か露の醜草打拂ふべく出陣し玉ふ某の君を見送り參らせんとの催しなりき、小童は二三に組しつゝ手に手に國旗を打ふるあり、稍々ありて武士を載せし列車は着しぬ。同時に起る軍樂隊、國風の勇歌は誰となく多くの人より唱ひ出されつ數流の軍旗暖風に翩翻し萬歲の聲は大山も崩れ大海の水も震動せんかと斗り、げに勇敢目ざましゝ多くの軍士は勇める顏に笑含みつ、帽打ふりて萬歲をとなへ給ふげに勇ましの光景なりしが、軍樂と萬歲の聲は送られて滊笛一聲黒煙を後に滊車は進行し初めぬ、帽をふるあり旗をふる者あり叫ぶあり、實に一場の勇狀なりし、勇敢敬愛する同胞よ恙なれかし而て御國に仇なす醜草打なぎて御威稜いや高き我日の本の國體を海外に輝かしめよ、噫勇ましの武士よ、行け勇ましき同胞よ……

松山　うたかた女

五月廿一日は、當地軍人の出征なりしかば、我が縣人こぞつて、けふこゝに盛大なる國旗行列は行はれたり、我も兄の門出を送らん物と家族共々三津ヶ濱へと至りぬ、道の左右には學生、町々の人、軍人の家族等に埋められ生徒等は、コサック兵も何のその、忠義の二字をたてにして、みがきくし日本刀、拔きてしこ草刈盡せ、十有餘年の血の涙、はらすは今の時なるぞ、との意を歌ひ出、こゝかしこに叫ぶ萬歲の聲は、天に響き、地に淀み、時ならぬ雷の感ありき、あはれ、そが中を靜々と進む出征軍人の心の內やいかに、嬉しかるらん、船は出んとす、いづれも笑もて別をつげられしかば我も後れしと、「兄君乞ふ、廣瀨中佐の如くあらんことを」兄君は只幸あれとの言を殘せしのみ、忠勇義烈益荒武雄をのせ、いつこをあてともしら波の奥に姿消え行けり。暫ありて、家に歸りふと机の上を見れば、兄の筆蹟にて、

小金にも玉にもかへぬ身なれとも
　ちりよりかろし國のためには

しき島の大和心の櫻花
　もろこしの野にさかすうれしさ

とありあなゆかし、

肥後　千知波橘子

狂雲四に空に起り、師團はいづくの里にも召集せられて、出征の途につきぬ。わが皇國はいにしへより、一度も外國人のをかせしことなく、まことに目出度き國からなりけり。されば出たつますらをよ、家をわすれ、身をわするるをしへをふかく守りて、外國ににほはぬ。日本櫻のはなばなしく、うつ太刀に、むらあたを。木葉のごとくきりはらひ、やがてかゞやく朝日の御旗を、外國の空にひるがへしわが天皇のみよ萬代とうたひてかへるをまつになん。

短文

いちで

群馬　竹のしふ子

夕げを終へて弟のそゝのかす儘裏廻りにと下りたちぬ弟は早や花畑にて手招く急ぎ見ればこは去る日父上に一本乞ひて手植ゑし苺なりしいつの程にか紅の色美しく觸らば落ちん迄に熟しぬ何個取らばやとためらふを僕の年程取りてよと云ふがまに〳〵七ツとりて渡せばその内の殊に色こきを三ツ程えりて口にするかと思ひきや走り歸りて其を母上の佛前に供へまつり三ツを妾の膝の上に餘を嬉しげに眺めつゝ舌皷うちて味ひ始めぬ嗚呼無邪氣なる此振舞よ

永久のかたみ

前橋　林廣子

都の友より、送りおこされし、白リボンの色は褪せうつしえ、いとううすうなりぬ、思へば、三年の昔にて、ありけり。やよ此のうつし繪此のリボンあはれ今はや、とこしへの、かたみとなりぬ、されどちかひし我が心は、千歳ふるとも、ゆめ、かはらざるべし。あはれ、此のものに、心ありせば、如何で物語やせんずらんものを。噫。

釣魚

札幌　小山かく子

かん〳〵と照りつくる日中、友は皆ハンモツクに助けられて當時流行の催眠術實驗を試みんとす、我一人十二尺餘の釣竿一本を手にして豐平河畔にさ迷ふ。楊柳青く濃く、水晶の水小砂利を洗ふて、勢ひ鋭く流るゝあたり、じツと見つむれば急流を泝る者あり、何物ぞ。鮎?山邊?蚊針九つ結びつけし用意の釣竿取て手早く中流に放てば忽ち手答あり。すかさずびゆツと引揚ぐればあらず。大事の針二つ迷子となれり。叱！何物の細工ぞ。同じ事繰り返しつゝ上流に進む事約五丁、今度こそと引き揚ぐる途端に、大なる、然も三寸の餘赤腹一尾、我足元に躍り出せり、覺へず竿を放つて――釣ツた〳〵――叫びに應じて帽子飛び、魚盛に舞ふ、河畔の寂寞を破りし我聲には我さへ驚かされつ。

幸ある小蝶

東京　石川かほる子

憐何處の誰にさいなまれしや黄色の兩袖は破れなよ〳〵と飛び來る小蝶一つ、今しも遊びに餘念なき小女の前に立ち止まりぬ福々として柔しき煙花の蕾の如き口は何時しか結ばれて胡蝶は、小さき温き手に捕えられぬ。盛なるばらを見し時彼はツトそが、大きなる花に彼の蝶を置きぬ、さわれ憐なる蝶は花の香を味ふべく餘り力弱かりき、シカト花を抱きつそよとだにせざりき、アゝ彼女が珠の如き眼は盈りて讃美の聲は打震ひぬ憐幸あるは彼の蝶よ今や彼は樂數未の御前にと飛び去りぬ。

別格官幣社菊池神社大祭の記

肥後　千々波橘子

今日はしも名たゝる菊池神社の官祭勅使の參向式を拜たてまつらんと一人二人の友どちいざなひて詣んとおもひ侍るなりから大空うちくもり雨さへふりいでんけしきなるにかくてはとためらふ時しも吹くる風に雨雲消て空晴れわたりぬ　さらばとて立いづれば往き來るさ人のにぎはひいはんかたなし並木の櫻みどりしたゝるばかりみづ枝さしかはしいとすゞしゝおぼゆやがて拜殿にぬかづきをろかめば心すが〳〵しくてなん

あはれなる號外賣

前橋　花野薫子

去りぬる日、我が家のほとりを、いと勇しき聲にて、號外々々と、二聲三聲呼りつ、走り行くを見しかば、妾は何ぞと門邊に出で見れば、年もまだ六ツか七ツかと思しき、いとあはれなる男の子、號外を手にし居る様、いとゞ勇し。あまりのけなげなさにそを求めやりしに、いと愛らしきおもざしに、笑をたゝへて、うちよろこびつゝ、走りゆきぬ。あゝかの男の子は如何なる運命におちいりつゝあるか。いと〳〵あはれ深うてなん。

短歌

戦死者を弔ふ　下野　非上なほ子

いさぎよく満洲のゝにちらばきみよろこびてよといひしわがとも

看護婦　三河　さく子

國とくにへたてはあれとみとりするこゝろの海はひとつなりけり

折にふれて　東京　大塚里子

千早振神の軍の旗かせになびかぬ國はあらしとそおもふ

捕虜　三河　しづ子

つゝとりてむかひしあたもとらへられてひさをると見れはあはれなりけり

折にふれて　小石川　辻岡ゆかり子

荒わしのたけき翼も何かあらむ日本男の子の腕鍛えあり

磯に立ちて夕べの海をなかめなれは白す白はま濱のよりくる

鴨緑江架橋　長野　山本民年子

岸あらふ水おとよりも橋かけしいさをはたかしありなれの川

日本軍人　築地　山崎女苑

國もつ神の子それが天かけりいかるにたりやまと勇士

月西にこまのせさむくかへるころなくかとりてのやまほとゝきす

五月雨晴　東京　敷島うた子

さみたれはいつしか晴れてにはさくら葉風すゝしく露しほれきぬ

五月雨　本所　三坂きやう子

梅のみのうみては落るなかあめにかやか軒はもくちはてにけり

夏海　大阪　黒田代育子

もしほやく海女もくもゐのあてひともへたて渚にうしほかつきぬ

海軍船にて失にし人をいたみて　神田　たまき子

海ゆかはみつくかはれといそしみて國につくせしあはれ益らを

卯のはな　下野　菅徽子

卯のはなの咲ける山路をなかむれははたへにつもるゆきとこそ見れ

撫子　下野　同

うすくこくいろ様々に咲きいでぬ妹がかきねのとこなつの花

友の入營を送る　常陸　栗原はま子

ひさかたのくもゐにのほる龍よりもたかきなあけてかへれますらを

里夕立　大和　栗山たか子

たゝならぬくものゆきゝとみるうちにこほれかゝりぬ夕たちのあめ

水戸　細谷波留子

あたらしき卒塔婆の前に少女子が泣てたむけし白百合の花

おりたちてあかくみながらやまの井に姿うつしぬとし若きあま

樵夫　水戸　細谷やす子
折り／＼に斧のひゞきのと絶ゆるはむれに憂ある樵夫なるらん

田家雨　長野　小泉みつじ子
山田もる賤がいほりをおとつれて夕へさひしく雨のそほふる

兄を送る　長野　上野よし子
きみのためみくにのためとわが兄の門出おくりぬ月うすき朝

星　和泉　稲原菫子
いさり火はいつしかきえて海原にのこるは星のひかりなりけり

出征の首途に　岩橋花子
人とゝもにいくさのかとて祝ふ日になと露しけく袖におくらん

橘公と一所に戰死せし菊池七郎武吉の勳功の追慕祭を拜み奉りて　肥後　板坂惟子
みなと川やへなる波もかくはしきこゝろつくしのしら菊のはな

陸軍の大勝を聞て　東京　大塚里子
黒雲はみはたの風に拂はれて朝日かゝやくもろこしが原

明治三十七年五月八日よりわが家をいでゝ京都にのぼりて滞留中の歌ともひとつふたつ　肥後　千知波橘子
旅まくらちよもむすはんから崎のときはかきはの松の木かけに

駒鳥　薩摩　松原みれ子
谷みつの音もすゝしくきこえきてみとりの森にこまとりのなく

軍國田家　三河　しづ子
なのかしゝわさをはけみて君のため國のためにとつくすへきかな

笹の葉に砲のあとあるを見て　磐城　須磨子
草葉にもわかみいくさをいのるらむ笹のうらはにいてし赤心

養蠶　山梨　標武子
ひたすらに御國のとみとよろひろにかひしかひあり蠶の白まゆ
こゝかしこ桑とる人の見ゆるかな今かかひこのさかりならまし

出征軍人の許に　北見　中川伊代子
あら鷲のつはさはいかにつよくともうちてこらせや大和ますらを

戰死者　同
國のため命をすてしますらをのその名は千代もくちせさるらん

夏のはじめ　下野　すみれ
おしなへて夏し來ぬれは野も山も青葉茂りて風の涼しき

撫子　下野　菅沼とく子
我がやとのまがきはしらにつゆおひてひとりほゝゑむなてしこの花

卯のはな　下野　菅　總子
ほとゝきすなきつる頃となりぬれは山路ましろに卯のはなの咲く

夏のはじめ　下野　菅　菫子
夏來れはかすみのころもぬき捨てゝみとりそいゆく四方の山の端

題しらず　吳市　和住千鶴子
いさゝらは散るまて匂へ國のためいくさの庭の山さくら花

提灯行列のその夜　築地　山崎女苑
大きみのみまへにひゞく市ひとのいはふもろこゑ神々しきよろ

根ざしせし草花を戰友の墓へ手向ゆきぬときゝて　美濃　吉田瀞子
亡き友のみはかに植し花やなにあやめいまさかりなりふるさとの庭

鐵條網
さゝかにの蜘蛛はあみはりまもれとも増荒蜻蛉の羽にやふれけり
くろがねの網はろくもゝひのもとのますらあきつに勝れさるらむ

孫女靜尾子が婚禮式に詠てやる歌　肥後　澤田春子
青柳の風になびくはよのならひくるしはつれと身をはつとめよ

いと幸なかりし妹の身まかりけるをいたみて母上の御もとに　東京　大塚里子
女郎花霜よりしもにかれはてゝ花さくときのなきそかなしき

朝郭公　同
朝ほらけ夢のなごりのあととひてはつねうれしき山郭公

父君に學問せし末永庄太郎氏が討露戰の首途に太刀一振

を鍾ぜらる丶を承りて　　肥後　佐々有鄰子

しき島のやまとますらを太刀とりて露うちはらへしへりやの原

水泳場　　札幌　小山かく子

圓く長く右に左に泳ぐ子等の蛙に似たる背の黒さ哉

今様

田植
水戸　細谷波留子

田植も今はなかばなり　戰も今は盛りなり
次の凱旋きく頃は　早苗も米となりぬへし

琴の音
小石川　辻岡ゆかり子

誰なまつよのすさびかや　絶へぬ思ひの調べかや
軒端のをすのひまもれて　床しくかよふ琴の音

時鳥
同

若葉にかゝる村雨の　名殘すゝしき此夕へ
おばしま近く月までは　一聲なのる時鳥

雨後の夏月
長野　上野よし子

さみだれ晴しはちす葉の　なごりの露に風みえて
黄金の花かとばかりに　みるまにちるよ月の影

うの花
前橋　竹のふし子

垣根に雲のかゝりけん　うの花くだしさみだれの
ふりしぼりてぞなくかはず　更け行くまゝにかすかなり

朝顔
京都　鈴木すみれ子

我が古さとにきてみれば　昔ながらの庭のおも
まがきにたよる朝顔の　露のなさけも變らずて

舞子の濱
同

走る車もけふのみは　運しとかこつ我さへも
こゝにはしばし止めてむ　舞子の濱のゆふげしき

軍艦
和泉　稲原菫子

進むみふれの帆柱に　きらめき渡る朝日かげ
高き稜威を知らせんと　益荒武雄の勇み乘る

にくや鐘
伯耆　樋口つる子

はかなき夢の跡追ひて　おもひわづらふれやの内
時計のおとにも驚くに　曉告ぐる寺の鐘

折にふれて
東京　敷島うた子

ふみもならはぬよみの旅　けふより一人やたどるらん
吾膝ちかくゐさり來て　ゑみし笑顔は消えなくに

山家夏
同

青葉を渡る風の音　清水に宿る月の影
山の奥家は夏ながら　夏にもあはで暮れにけり

日露開戰を
栗原はま子

我が日の本の御光りに　やがて消ゆべき露の身を
知らで御國にあだなして　いむかふ敵のおろかさよ

安藤よし子
同

しのび／＼ておく露に　しほれふしても女郎花
時しきぬれはたかき名を　雲のうへまであげにけり

五月雨のをりにふれて

須磨子

嗚呼たらちねやはらからの　あらばとひとり梅雨に
われてそ物を思ほへは　女鑑の文の慰め與ろゝ

寡婦

札幌　小山かく子

柔しき君が情には　感謝の焔もゆれとも
嫁ぎ欸けり初つまの　愛の片身にひかされて

我無き妹

山梨　標　武子

今さしのぼるかの月は　とゝせのむかし我妹の
ふけゆく秋ともろ共に　虫のなくれを知るべにて
露のなみだに途られて　いそぎし墓の松がえに
かゝりし月に變られど　照りはてけんはかの下

勇士の御墓

岩　清水子

青葉茂れる青山の丘に　新らしき奥都城一つ
渤海の泡と消えに玉ひし　『軍神』の亡き大み魂の
安らけく眠れるは此處　結び迴らせし眞榊の枝に
西の空より飛びつ來りて　翼休むる一羽の鳥の
哀れ淋しく一聲啼くは　君の御靈を弔ふ聲よ

白鳥よし子

黒雲怒り荒び狂へは　白雲やさしう慰めるまはろ
青雲一人が遠く〳〵　高い處で知らぬ顔

	歌	文
八月	夏海 述懷	盂良盆の日祖先の墓に詣でゝ 出征軍人の家族を慰問する文
九月	初秋月 閑居	夏季休業中の事を記す 志を述べて親しき友に贈る文
十月	山家霧 電信	仲秋月を觀ざるの記 出陣中の父君（若くは兄弟）に贈る文
十一月	風前紅葉 烟	天長節 秋季運動會
十二月	歳暮 杖	家庭日記（三日間） 歳の暮に故郷の母君に贈る文



○地久節

五月廿八日は皇后陛下第五十五回目の御誕辰祝日に相當せしを以て宮中にては前日來種々の御準備あり皇后陛下には香川大夫の言上に依り同大夫、山内亮、萬里小路補助、高倉典侍、姉小路、千種、園、小倉各權典侍、小池掌侍、津守、吉田、六角、北島、香川各權掌侍、西、三上兩命婦、生源寺、平田、樹下、吉田、藤島、大東各權命婦等を從へさせられ午前十一時先づ南溜の間に出御、御在京各皇族殿下を始め奉り大勳位、各大臣、親任、同待遇、宮内省勅任官、同待遇、公、侯爵等の參賀を受けさせられ更に東二の間に於て宮内省奏任官一同に謁を賜ひ各皇族方には人形の間に於て又大勳位以下には豐明殿に於て御祝宴を賜り年長者林友幸子の發聲にて陛下の萬歳を奉祝し零時五十分御散會相成りたり尚ほ奉祝に關する事柄を擧ぐれば左の如し

▲賀陽宮の御祝電●●●●● 京都在住の賀陽宮邦憲王、同妃兩殿下には同日、皇后陛下御誕辰の御祝電を贈らせられたり

▲戰地の地久節●●●●●● 出征軍司令部にては同日適宜の時間を以て其々地久節を奉祝し戰地相應の祝盃を擧げ又各皇族殿下を始め奉り黑木大將以下陸軍各將官東郷司令長官以下海軍將官は總代の名を以て奉祝の電報を奉呈したる由

▲臺灣の地久節●●●●● 臺灣總督府にては地久節遙拜式を行ひ後藤民政長官以下各高等官、判任官一同、陛下の御眞影を奉拜し「君が代」「磨かずば」等の唱歌あり市中には何れも國旗を揭げ盛んに奉祝の意を表したる由電報ありたり

▲華族女學校の奉祝●●●●●● 華族女學校にては午前九時臣

十分より細川校長を始め下田學監淺岡幹事外職員、教師、生徒一同講堂に集り「君が代」「磨かずば」等の唱歌並に校長の勅語捧讀等あり一同陛下の萬歲を奉祝し畢て茶菓の饗應を受け同十時三十分散會せり

▲諸學校の奉祝　帝國大學、第一高等學校、高等師範學校、高等商業、同工業學校を始め學習院、慶應義塾、早稻田大、中學其他の官公私立中小學校にては何れも午前十時より校長、教員、生徒等講堂に集まり「君が代」「磨かずば」等の唱歌並に勅語捧讀等ありて地久節を奉祝したり

○高輪御殿の御近事

高輪御殿に在らせらる丶常宮周宮兩內親王殿下が兩陛下御思召の程を奉體せられ常々民の心を以て御心となし給へる難有御懿德の程は豫々承り及ぶ所なるが殊に今回日露開戰後は御寢食の間にも軍國の事を忘れさせ給はず先頃は御側の人々に命じて御邸內なる赤穗義士割腹舊跡の右手なる小亭を淸めさせ其所に祭壇を設けさせ給ふ如何なる御思召にかと何れも恐れ畏む程に兩殿下には我忠勇なる將卒の戰死の報に接せらる丶每に小形なる白木の位牌に親しく其姓名を記させ給ひ壇上に列べてその前に菓物を供へ親しく御弔祭あらせらる丶さへあるに此程は又出征將卒の困苦を推し測かり給ひて御養育掛さては御側の人々を御相手となしほと〳〵御日課を廢して只管繃帶の御製作にいそしみ給ふとぞ聞くも畏こき次第にして外征の將卒若し斯と聞かば定めて感奮興起していと丶鴻毛の身を惜まぬなるべし又去る三月下旬の事とか御側の或人より宮本步兵大尉の私信によりて出征途中の歡迎模樣を言上せしに其書柬見せよとて最と御滿足げに御一覽あらせられ其後同大尉が戰地より寄せたる私信を御目に掛けたる際の如きも篤と御精讀遊ばされし上御側の者をして特に寫し取らし給しとか又曾て同大尉の從僕たりし補充大隊第二中隊力石梅吉が大尉の後を追うて戰地に赴かんとすることを聞召さる丶や特に御庭前にて一兵卒に面

謁を給はり御菓子など賜りてさて佐々木伯爵夫人を通じ力石とは強さうな名なれば國家の爲めに盡せよ抔種々難有御言葉を下されしかば御側の人々は世にも難有御心の程を畏み合ひ力石は感涙に咽びて少時は爲す所を知らざりしよし漏れ承りぬ

○巖原の篤志婦人會

同會は高等文武特志婦人會と稱し會員の大半は在巖原將校 夫人及 高等文官の夫人とにて其創立は實に明治廿年の頃に在り其主旨とする處は一朝國家の危急に際し吾が忠勇なる軍人諸民が傷病に苦しまるゝに際し此絶海の孤島に在ては內地の如き應急救護法を施すに困難なる事情あるを以て特志婦人會を組織し此任務を可及的完全に行はんが爲め專門家に就き繃帶術及看護法を修め來りたるものにて明治廿一年の頃時の水野司令官 上京の際小松宮妃殿下にも聞え上げ畏くも殿下の嘉賞に與りしとのことなり爾來多少の盛衰ありしも綿々として今日に至れり明治卅四年今の警備歩兵大隊長佐土原少佐夫人會長となりしより該事業は益々面目を改め會員の團結も一層強固となり別に創立されし地方看護婦人會も之が爲め益々其盛大を見るに至れり今回日露開戰以來何れも其素志を實施するは此時なりと窃に其時期の至るを待ちつゝあり斯くて各夫人は日々病院に通勤し偏に患者の慰諭看護に從事しつゝあるのみならず夜は自宅に於て千金丹の袋廣告紙を折り或は養蠶の業に從ひ其所得を恤兵其他の義捐に充てんと會員は孜々晝夜の別なく大に奮勵する處ありといふ

○軍人遺兒遺族保護會

麴町成女學校の職員たる伊東龜、豊山千代、横山好、源利亞、鹽崎春の諸孃等は、今回左記各夫人等の賛襄を得て、軍人遺兒遺族保護會なるものを設置したり其概則は左の如し

▲賛襄者人名 伊東子爵夫人、佐藤夫人、桒夫人、ポルトカル公使夫人、ミーラ夫人、白耳義公使夫人、宮田脩、宮田夫人、ベルツ博士、日本體育會體操學校、大宮夫人、教員生徒有志者團體

井田夫人、東京慈惠醫院看護婦有志團體、嘉悅孝子、東京女子職業學校教員生徒有志團體、東京女子美術學校教員生徒有志團體、女子商業學校教員生徒有志團體、成女學校教員生徒有志團體、聖書學館有志團體、ヘルム夫人、辰巳博士夫人、松本重太郎夫人、高平丁輔夫人

概則

第一條　本會を軍人遺兒遺族保護會と稱し事務所を麹町成女學校内に置く

第二條　本會は有志相謀り今回の事局に關し出征及び應召軍人の遺兒を育成し且つ事實上遺族なるも出征前終に入籍の手續を結了し得ざりし者を慰問し且つ其病者を收容治療するを以て目的とす

第三條　病者の收容治療は事變の終局までとし孤兒育成は永久持續するものとす

第四條　孤兒は一般普通教育を授けたる後相當の事務に就かしむるものとす

第五條　本會の目的を達する爲め有志又は團體より寄附金を以て之が費途に充つ

第六條　本會に慰問者並に醫師看護婦保育者若干名を置く

第七條　本會の情況及び計算は春秋二期を以て報告す

第八條　本會の事業即ち治療方法及び兒童教育並に重要事項を議定せん爲め評議員若干名を置き時々評議會を開く

第九條　本會には理事若干名を置き會計庶務を囑托す

第十條　本會は寄附金二萬圓に達すれば相當の塲所を撰み兒童を收容すべき家屋を建築し同時に社團法人に變更すべし

○英米子供の寄附　大山侯爵夫人新渡戸夫人津田梅子谷田部順子ミスハーツホーン諸女史の發起にて毛絲編物腹卷五千枚以上を調製して出征軍人に贈與するの計畫あることは既報の如くにて之に對する内外有志の寄附も尠からざることとなるが英國公使館内及び在留英米人の十二三歳位の小兒數名の編輯しつゝあるトーキヨー、バッチウオーク雜誌にて此程同誌主筆ドロシー、パークレー孃の名を以て去る二日附にて左の書面に金十圓を添へ寄附を申込まれたり奇特の事と云ふべし『拜啓チルドレンス東京バッチウォークの編輯部員は初號即ち五月發行分の收益を擧げて日本兵士の爲毛絲編物腹卷を寄附する御計畫

中に寄附することに決定仕り金十圓封入御送り申上候尤もこれは第一回分寄附に有之候雜誌はなほ巡覽いたされ居候へば追て此上の御寄附致し得べくと存じ候何卒受取書一通被下度候也七月發行の雜誌に掲載仕度きものに御座候敬白一千九百〇四年六月一日英國公使館内東京バッチウォーク主筆ドロシー、ケーバークレー』なほ同雜誌は編輯に任せる小兒の文章を集め筆記し母親達が意匠繪畫等は手傳ひたるものにて一回閲覽料金十錢なりと兎に角何となく喜ばしき事ならずや

○米人の讃歌　左は米國紐育音樂會社の近作にして在シャトル愛國婦人會員久水和歌子（久水領事夫人）より愛國婦人會に送り來るものなり亦以て同地日本贔負の景況を想ふべし因に記す同地には愛國婦人會員既に百餘名あり久水夫人熱心に勸誘しつゝありと云ふ

可愛き日本

一、看よや朝日の御旗の下に　人道正義の爲としあらば
艱難辛苦饑渇は愚か　萬死も更に惜きにあらず
國こそ波濤と環らす島よ　起ちてはかよわき彼の支那國が
危急を救ひて其安全を　堅固に保たせ得させん爲めに
勇戰闘奮海又陸に　荒ぶるロシヤ熊打ちてし拂ふ
古今類なき忠勇武烈　さても至誠の日本の人や

合　唱

可愛き日本は如何なる國ぞ　知らざる者は今こそ知らむ
其海軍と陸軍は　怒濤朔風物とせず
文明の道履行して　イヴアンの子孫を一撃す
ロシヤの恫喝爭で能く　可愛き日本に敵し得ん
可愛き日本　萬歳　萬々歳

二、北の暴逆忍びに忍び　臥薪嘗膽若し此上を
忍ぶは反つて神意に背き　外交手段は唯徒らに
時を費す徒事なりと　思はるゝ迄忍びし日本
今や無法の掠奪者をば　懲らして汝の眞價を擧げよ
榮譽と正義は汝に命じ　露國の野心を打破らしむ
神は正義を無窮に愛し　常に汝と共に在さん

合　唱

可愛き日本は如何なる國ぞ　知らざる者は今こそ知らむ
其海軍と陸軍は　怒濤朔風物とせず
文明の道履行して　イヴアンの子孫を一撃す
ロシヤの恫喝爭で能く　可愛き日本に敵し得ん
可愛き日本　萬歳　萬々歳

○島口兵曹の妻看護婦を志願す　第三回旅順閉塞の際生死不明となりたる海軍二等兵曹島口一二氏の妻ハマ子より五月廿四日赤十字社へ宛て左の書面到來せるが同社にては從來の方針として素養なきも

のは一切採用せられざる筈なるも今回の申込に就ては特に詮議の上何分の挨拶に及ぶ由なり

拜呈私儀は帝國軍艦橋立乘組海軍二等兵曹島口一二の妻に御座候が島口事今回第三回閉塞船相撲丸に乘り込み遂に生死不明と相成私事も愚夫が御國の爲め相勉め居り候折柄空しく消光致し居り候事は誠に不本意の次第に有之せめては看護婦とも相成奉公の萬分一なりとも申度存念に御座候間御採用被成下度切に奉懇願候敬具

○東洋婦人會と蒙古王妃　東洋婦人會は事業益々擴張せるを以て新に鍋島侯爵夫人を會長に推薦したるが蒙古王妃福晉殿下も同會の主意を賛成して今度入會を申込まれ且つ其事業費の中へ若干の金圓を寄贈せられたる由因に云ふ同會事業の概要は東洋諸國に廣く會員を募集する事、會館を設置して各國會員の音信、交詢、來遊等其他の便宜を具備する事、會館には客室及圖書室を附し四方來遊の會員に便じ又其共同智識に裨益する事、會報並に會の主旨に相應せる諸種の文書を出版する事、東洋婦人の福利と爲るべき諸種の研究を爲す事、東洋婦人の文化に裨補すべき學園及講話會を創開する事、留學生の爲めに諸種の便宜助力を與ふる事、會員以外と雖ども凡そ東洋婦人の遠來する者の爲に諸種の便宜を供する事、東洋婦人を代表して西洋婦人との交誼を計り世界女德の圓滿大成を希圖する事、以上九種の事業に類し其主旨の目的に相應せるものは適宜着手すべきこと等なりと

○女子英學塾の美擧　麴町區五番町十六番地なる津田梅子女史の設立にかゝる同校にては此程來恤兵部へ献納せん爲めスコッチ製の腹卷五千個を調製しつゝあり右はスコッチ毛糸三オンスもて六十五の針目長さ二尺に製するものにて來六月十六日迄に製了する筈なるが同志の方は何人を問はず自ら來つて調製するも又金力上に寄附するも可なりと云ふ

○女子大學の養雞　日本女子大學に於ては本學期より實業部を新設し高級女學生をして實業を練習せしめんと先づ家庭的副業とも云ふべき養雞事業を試みん爲め小石川大塚阪下町の鹽田家禽場に委囑し同家禽場を摸範として十數個の雞舍を建設せしめたる由

○陋巷の孝女　京橋區鈴木町三番地森田方に寄留せる竹村きし子(十九歳)といふが孝行のことに就いては都下各新聞にも已に記せるところなるが麹町區有樂町一丁目土居香海氏が態々本社を訪はれて同女の行狀を物語られたるを聞くがまゝに詳記せんにきし子は三重縣士族竹村勗といふ人の女なるが父なる勗は明治十三年の頃一家を携えて上京し或時は官衙に仕へて書記となり又た會社の事務員など勤めしことありしも兎角災難不幸のことのみ打つゞき家計最と困難を極めければ僅かの俸給にては家運の回復覺束なしとて飲食店を開き又た下宿屋業を營みしことありしも馴れぬことゝて忽ち失敗し彌が上に困難ますく加はりけりさる程に泣面に蜂の譬へに洩れず父三畏は久しく病に伏して醫藥の料の重みし末遂に黄泉の人となりしのみか妻あさは一女を產みたる後故ありて間もなく離縁となり後妻ひさは難產の末返らぬ旅路へ赴きければ重ねぐの不幸の爲め衣類を始め家財什具までも典賣し盡して一貧洗ふが如くなりけり搗てゝ加へて勗もまた昨年十一月より肺結核に罹りしさへあるに老母いか(七十八)は眼病にかゝりて盲目となり近ごろは肺炎に惱みて起臥自由ならざるに至りしはよくく不幸の家といふべしされば初の程こそ親戚知人も見るに見兼ねて相應の救助もしたれ斯く長びきては力及ばざるが多く唯自然の成行に任するの外なかりき然るに女きし子は二歳の時生母に別れ八歳の頃繼母に別れて祖母と父との手に育ち別に敎育など受けしことゝてはなけれど天性柔順にして善く親に事へ祖母を看護するなど幼さ頃より早くも近隣の評判となりけるが今は恰かも妙齡十九歳大方の女子は髮の飾よ衣服よと立騷ぐが常なるに左る浮きたる樣は露程もなく頭は蓬の如くなれども梳らず顏は垢に充つれども浴みする暇なく豫て心臟病に苦しめるにも拘はらず身を棄て心を勵まし晝となく夜となく常に父と祖母との枕邊を去らずして介抱至らざるところなく又た洗ひ濯ぎなど家事一切を親らせるのみかその間隙には軍用ビスケツ

ト入れの紙袋を張りて百枚二錢の手間賃を取て醫藥の料となすなど其行狀洵に感ずるに餘あれば知るも知らざるも聞くものみな袖をしぼりて哀れまざるはなき内にも芝區琴平町の醫士仁保氏の如きは日々に往診して懇ろに治療を施し居れりといふ德孤ならず必らず隣ありとかやきし子の至孝大方の仁人の省みるところとなりてあはれ病父の一命救かりて祖母また餘命を繋ながんには孝女の悅びは之に優るものあらざるべし

○軍國の束髮　戰後の流行にて一番目立つものは婦人の束髮頭なり同じ束髮を結ふにも夫々心懸けの違ふ所あり某留守師團の下に在留さるゝ或大佐の夫人は今年二十八にて美人の評判高きが綠の髮の美しきを惜氣もなくグル〳〵と束ねて居らるゝを見或人がこれでは折角のおぐしがと言ふを待たで『イエ私の近處には大分軍人の奥樣も被在いますが髷に結ふ方はお一人も見えません中には髮結錢を儉約して恤兵部へ獻納するといふお心懸けの奥樣もおあんなさるさうですが私は夫よりも唯質素の誠心を持つといふ事に止めて置きました當節は海軍の方の軍港にても參つて見ますと束髮を派出に結んでさへ氣恥しい程で那處は一層軍人の奥樣方の御心懸けが美しいさうで厶います何に致せ良人は海でも陸でも煙硝の煙で眞黑になつて働いて居るのですもの留主を守る妻は髮飾り化粧よりも尙大切な任務があると思ます』と語られし由なるが是等こそ軍事多端の際儉素を旨とする婦人の心懸といふべきなれ

○情の腕環　其名の分明ならざるが一入床しくも亦懷かしき心地ぞする我大御軍の幾度も戰ひて幾度も勝つを祝ぐ心最と深く又我將士の時には憂さも辛さも慰めばやの優しの思を西の方遠き印度のカルカッタより寄せて彼の四人の貴き婦人は王族タゴール氏の手を經て黃金製の腕環裝飾品など數々を送りて我恤兵費中に其値收めてよとの事なりけり人の情は何國も變らざるこそ嬉しきものゝきはみなれ

○初夏と小兒の病氣　初夏となると自然氣候が不順になるので小兒など病に冒され安い市内でも殊に麻疹百日咳の流行は猖獗を極めて居るので此際小學校幼稚園等では一層注意を加へ少しでも發熱の氣味があるとか屡々目を擦するとか又咳き入る者には一層意を加へて居るさうであるが是等の衛生法に就いて母親の心得となるべきものを云つて見ると麻疹は輕症なれば左して驚くべき病でない外氣に觸れぬ樣室内に靜臥させて置けば漸次發熱は降下するが重症にては發熱の爲め餘病を惹起し肺炎などを併發する事が多いから注意しなくてはならぬ百日咳は從來良藥に乏しく一歳未滿の小兒が此重症に罹ると咳が甚しき爲め乳を吐き營養の不足を來して疲勞性に陷り終に死に至ることがある左もなくば胸骨に異狀を醸し爲に歩行する事さへ遲く發育を防げる事となる中には麻疹に罹つて百日咳を併發する如き事が往々ある斯は至極危險であるから親たる者は今日此頃の不順な氣候にはよく注意せねばならぬ

○露國女丈夫の遠征

哈爾賓車站の邊りに多數の武弁士卒相聚りて視線を那の一方に注げるあり諦視すれば即ち容姿端麗なる可憐の一少女驪駒に騎しつゝ車站の一隅に佇立せるなり渠れは身に離披たる輕裘を被り脚には長け高き革靴を穿てり衆相顧みて曰く女人の騎士なり騎士なりと偶々ノーウオ、ウレーミヤ新聞の通信員其前を過ぎたりしが同人を古昔の稗史小説中に女人にして戰亂の際自から進んで義勇軍に投せるもの往々之れあるを聞き渠れも亦必ず汗馬の勞を厭はす矢石を冒して名譽の場所に出陣せんことを志願したる女丈夫なるべき歟兎に角其實を質さんとて歩を進めて渠れの馬前に至り其來歷を質したりしに左の如くなりしと云へり

少女名をアントニーナと呼び姓をトベローワと稱へワシリーエフ某の子にして歐露サラトーフ市の佳人なり渠は同地の尋常中學を卒業し芳紀正に十九歳、

幼にして帖恃を失し零丁孤苦以て今日に至れりと嚢に我露國が日本に對し宣戰の詔勅を發表するやアントニーナ女は義勇奉公の念に驅られ慨然として是非とも壯兵の資格を以て遠征軍に加はらんことを希望せり會々其鄕里なるサラトーフ市より第三十六狙擊聯隊の第三大隊が極東の戰地に向ひ出征するを聞きアントニーナ女は其軍に隨はんことを請へり而して渠は素より煢々たる孤兒にして貧苦の中に生育したるものなれば發するに臨みて身邊復た一旅具を携へず左るにても渠れは其意志頗る堅剛にして動かすべくもあらざれば飄然馬に騎りて鄕關を出でたり然るに各地より麕集せる露國の梯隊は貝加爾に於て一定の軍紀に循ひ進行せざるべからざることとなりたればアントニーナは一には一旦己れが身を託し其庇護に預りたる第三大隊を離るゝに忍びず一には旅行に利便なる馬車を賃借するの餘資なきより大膽にも兵卒と相伍して貝加爾を徒涉して跋涉することに決意せり是に於てアントニーナは征途に上りしが不幸にして其四十二露里の行程を通過する間は天候常に嶮惡にして寒氣殊に凜烈たり加之ならず飛雪繽紛として其紅顏を撲ち朔風獵々として蜷蜒を拂ひ途上の困難言ふべからざるものあり況んやアントニーナは卒伍より輕き毛裘を以て其軟骨を掩ひ襯衣を以て弱肌を纏ふに於てをや恁の如くアントニーナは備さに梳風沐雪の辛酸を經歷したるに格別の故障もなく哈爾賓に到着するを得たり然るにアントニーナは身に取りて玆に一大恨種を生ぜりと云へるは遠征軍の梯隊は渠れを哈爾賓より以東に同行するを許さゞることとなりてアントニーナは同所より再び歐露の鄕里に歸るか否らざれば哈爾賓に駐まるか孰れかに決するの已むを得ざる場合となりたればアントニーナは一旦志を決して義勇隊に別れ千軍萬馬の間に馳突して勁敵を披靡せしめんとの初心を飜へし驍勇を劍戟砲彈の間に振ひて百分の一にても武功を樹てんと欲せば壯圖を棄て野戰赤十字社の看護婦たることに決心したり然るに看護婦たらんとせば必ず何等歟の衞生部隊

に隷屬し而かも其姓名を編籍簿に公然登錄せざる可からざるの規定あれぱアントニーナは資格其他入隊の手續等に關し又看護婦たるを得ざるべしとのことゝなれり

是に於てアントニーナ嬢は今や俄かに一身を託する所なき天涯絕域の遊子となり其身跡恰も浮萍の岸際に漂へるが如し渠れ既に貝加爾行路に於て備さに跋涉の艱難を嘗めり而して今は復た遼遠なる他鄕に至りて一知己なく一哥なき苦境に陷れり玆よりアントニーナ嬢は意氣日に揚らず見るものをして宛から愁雲其の眉尖を閉ざし悲火其心頭に燃ゆるの想あらしめたり適々曩に嬢が從ひ來れる第三十六大隊の或る士官は其境遇を憫察し哈爾賓駐在の赤十字社なる衛生部隊に入勤のことに百方盡力したりと聞たるが嬢は不日同地より極東の或る野戰病院に向け出發すべき筈なりと云へり

○戰捷紀念簪　今回京橋區尾張町白牡丹本店に於て發賣したる戰捷紀念簪四種の內殊に日英米三國同盟の意を寓せしものは最も意匠嶄新にして精巧の品なれば賣行き最もよしと此四種はいづれも純銀にて製造し金色及び七寶を配合せし優美なる品にて束髮ピンの普通前差しに兼用する至極便利なる簪なり

○女子高等師範學校　今般校則第八章に基き私費數學、物理、化學專修科を開設し修業年限は二ケ年二學期にして官公立女學校卒業生及び之と同等學力を有する者より試驗の上入學を許し便宜實地教授法を練習せしむる由志望の者は來る八月廿五日迄に願出べしとなり

○篤志看護婦人會　同會は去十七日午後二時より赤十字病院內に於いて開會伏見若宮、梨本宮、久邇宮、山階宮等の各妃殿下を始め奉り鍋島會長以下百五十四名出席し足立軍醫監の病者看待法の講義ありたる後指頭人字帶の復習を爲し同六時過散會せり當日は英米貴婦人の參觀もありて近來の盛况なりき

（右六月十八日〆切）

幼にして怙恃を失し零丁孤苦以て今日に至れりと會に我露國が日本に對し宣戰の詔勅を發表するやアントニーナ女は義勇奉公の念に驅られ慨然として是非とも壯兵の資格を以て遠征軍に加はらんことを希望せり會々其鄕里なるサラトーフ市より第三十六狙擊聯隊の第三大隊が極東の戰地に向ひ出征するを聞きアントニーナ女は其軍に隨はんことを請へり而して渠は素より煢々たる孤兒にして貧苦の中に生育したるものなれば發するに臨みて身邊復た一旅具を携へず左るにても渠れは其意志頗る堅剛にして動かすべくもあらざれば飄然馬に騎りて鄕關を出でたり然るに各地より會集せる露國の梯隊は貝加爾に於て一定の軍紀に循ひ進行せざるべからざることとなりたればアントニーナは一には一旦己れが身を託し其庇護に預りたる第三大隊を離るゝに忍びず一には旅行に利便なる馬車を賃借するの餘資なきより大膽にも兵卒と相伍して貝加爾を徒涉して跋涉することに決意せり是に於てアントニーナは征途に上りしが不幸にして其四十二露里の行程を通過する間は天候常に險惡にして寒氣殊に凜烈たり加之ならず飛雪繽紛として其紅顏を撲ち朔風獵々として蜷蠖を拂ひ途上の困難言ふべからざるものあり況んやアントニーナは卒伍より輕き毛裘を以て其軟骨を被ひ襯衣を以て弱肝を纏ふに於てをや恁の如くアントニーナは備さに櫛風沐雪の辛酸を經歷したるに格別の故障もなく哈爾賓に到着するを得たり然るにアントニーナは身に取りて玆に一大恨種を生ぜりと云へるは遠征軍の梯隊は渠れを哈爾賓より以東に同行するを許さゞることとなりてアントニーナは同所より再び歐露の鄕里に歸るか否らざれば哈爾賓に駐まるか孰れかに決するの已むを得ざる場合となりたればアントニーナは一旦志を決して義勇隊に別れ千軍萬馬の間に馳突して勁敵を披靡せしめんとの初心を飜へし驍勇を劍戟砲彈の間に振ひて百分の一にても武功を樹てんと欲せば壯圖を棄て野戰赤十字社の看護婦たることに決心したり然るに看護婦たらんとせば必ず何等歟の衞生部隊

に隷屬し而かも其姓名を編籍簿に公然登錄せざる可からざるの規定あればアントニーナは資格其他入隊の手續等に關し又看護婦たるを得ざるべしとのことゝなれり

是に於てアントニーナ孃は今や俄かに一身を託する所なき天涯絕域の遊子となり其身跡恰も浮萍の岸際に漂へるが如し渠れ既に貝加爾行路に於て備さに跋渉の艱難を嘗めり而して今は復た遼遠なる他鄉に至りて一知己なく一哥なき苦境に陷れり茲よりアントニーナ孃は意氣日に揚らず見るものをして宛から愁雲其の眉尖を閉ざし悲火其心頭に燃ゆるの想あらしめたり適々曩に孃が從ひ來れる第三十六大隊の或る士官は其境遇を憫察し哈爾賓駐在の赤十字社なる衞生部隊に入勤のことに百方盡力したりと聞たるが孃は不日同地より極東の或る野戰病院に向け出發すべき筈なりと云へり

○戰捷紀念簪　今回京橋區尾張町白牡丹本店に於て發賣したる戰捷紀念簪四種の內殊に日英米三國同盟の意を寓せしものは最も意匠嶄新にして精巧の品なれば賣行き最もよしと此四種はいづれも純銀にて製造し金色及び七寳を配合せし優美なる品にて束髪ピンの普通前差しに兼用する至極便利なる簪なり

○女子高等師範學校　今般校則第八章に基き私費數學、物理、化學專修科を開設し修業年限は二ヶ年二學期にして官公立女學校卒業生及び之と同等學力を有する者より試驗の上入學を許し便宜實地教授法を練習せしむる由志望の者は來る八月廿五日迄に願出べしとなり

○篤志看護婦人會　同會は去十七日午後二時より赤十字病院內に於いて開會伏見若宮、梨本宮、久邇宮、山階宮等の各妃殿下を始め奉り鍋島會長以下百五十四名出席し足立軍醫監の病者看待法の講義ありたる後指頭人字帶の復習を爲し同六時過散會せり當日は英米貴婦人の參觀もありて近來の盛況なりき

（右六月十八日〆切）

新刊批評

△日露戰爭少年讀本 卷之壹　特に少年の讀物にとて解し易き文章を以て開戰以來の事實を歷史的に記したるものにて處々に逸事軍歌なども挿み戰爭に關する插繪なども入れたり口繪には重なる海陸軍人の肖像、軍艦及び地圖等ありて時節柄少年の悅ぶ讀物なるべし（定價十四錢京橋區銀座四元々堂書房發行）

△家庭日用理科しるべ（松本高等女學校長井田竹治氏著）石鹼、牛乳、猫、金魚、電氣、秋の虫、米、菊、白粉、酒など家庭日常の物品を理科的に解說したるものにて頗る面白味あり有益にして且趣味ある家庭の讀本といふべし（定價三十五錢發行所同上）

△家庭十二ヶ月料理法　割烹の大家たる赤峰一家の著述にかゝるものなれば其の價値如何は更めていふまでもなし編纂の順序の整ひ居るのみならず索引によりて何品にても容易に其の調理法を知るを得るの便あれば研究上の必要のみならず家庭用として必ず一本を備え置くべく料理界に於ける近來の大著作なり（上下二卷各定價五十錢日本橋區通一丁目大倉書店發行）

△日本女子大學校學報 第三號　校長成瀨仁藏氏の卒業生に告ぐの一篇は女子教育家の熟讀を要すべき價値あり西園寺侯爵大隈伯爵の講話中川篠田兩氏の講演また面白し文苑及雜錄には才媛達の傑作もありて往々感服すべきものあり但だ本誌の發兌が年僅に四回なるは惜むべしせめて隔月發兌とせられなば女子教育上の裨益更に大なるべし（定價一部十五錢小石川區高田日本女子大學校內學報編輯部發刊）

定價

一冊	前金貳拾錢
三冊三ヶ月分	前金五拾七錢
六冊半年分	前金壹圓拾錢
拾貳冊一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁三十二行	金八圓
一頁六拾四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附ありたし

明治三十七年六月三十日印刷
明治三十七年七月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十番地　渡邊森一
印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　河本龜之助

發行所　株式會社 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

少年武士道史傳

菊判洋裝各定價拾九錢郵稅四錢

文學士大町桂月著

● 壹編 山中鹿之助

▲飯沼珠城畫

山陰の麒麟と稱されたる勇士山中鹿之助は新月の前立打たる鹿の角、五枚兜 緋縅の鎧を着し武士道の標本として現れ出でたり著者桂月氏よ嘗て山陰の古戰場を經歷して勇健豪快の筆を揮ひ珠城畫伯は北颯爽たる英姿を着色に描きたれば人をして元龜天正の昔に生れて鹿之助其人を眼前に見るの思ひあらしむ

文學士三好物外著

● 貳編 上杉謙信

▲飯沼珠城畫

謙信は特り我武士道の本尊として尊崇すべき英傑なるのみならず夙に尊王の大議を唱へ屢次上洛して天顔に咫尺し宸襟を慰め奉つりし一事は群雄の遠く及ばざる所にして別格官幣社に列せらるゝの恩命わる豈に偶然ならんや、著者は越後村上に生れ夙に謙信の義烈を景慕し親しく其の遺蹟を尋ねて後筆を本編に執る故に考證的確叙述縱横、不識庵當年の風采面目をして紙上に躍如たらしむ

文學士笹川臨風著

● 參編 本多平八

▲飯沼珠城畫

豐太閤は關東第一の武邊者と稱し東照公は我等の分身と愛で玉ひ慓悍勇武の甲州武士をして『家康に過ぎたるものが二つあり唐のかしらに本多平八』と歌はしめたる絶代の英雄三河武士の模型なる平八郎忠勝は笹川文學士の妙文に活現せり朝昏是を誦讀せば遊惰の氣を一掃して敵愾尚武の志を發揮することを得べし

田岡嶺雲著

● 四編 小早川隆景

▲小堀鞆音畫

朝廷の綸旨を請うて逆臣陶全姜を誅し、本能寺の兒變を聞きて豐臣秀吉と和を請ふ、一よ能く大義名分を明にし、一は人を厄に苦しめず、君子なる哉此人而も碧蹄館に五十萬の明軍を一掃す、勇武も古今に超絶せり、田岡君が嬌健の筆は―あら面白の春雨や花を散らさぬ程にふれ〳〵と謠ひし文武兼備の英雄を寫生し、小堀畫伯は五史に據り古實を正して碧蹄館大決戰の圖を抽く錦上花を添へたるの觀あり

發兌元 東京築地二丁目 國光社

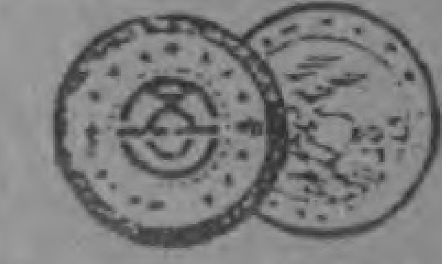
第五回內國勸業博覽會

銅牌并に褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい



錫栓附乳白硝子罎入



ヴワイオレツト水

壽美禮おしろい

●ねり製（定價 大罎二十錢 小罎十二錢）

水製（定價 大罎二十五錢 中罎十五錢 小罎十錢）

すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て配劑したるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせも等を生ぜず御肌へを清々しく天然の白色きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁長く保つが故宴會祝席雜踏い場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして其意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

●皮膚艶白劑壽美禮あらひ粉

●綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢

罐詰六錢五厘　袋入壹錢

●弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生ぜず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標

滓色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHING IOWDER.

壽美禮あらひ粉



製造本舖

東京東兩國（兩國橋際）元町

伊勢吉壽美禮堂謹製

賣販所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

明治三十七年七月一日發行　每月一回一日發行　第拾四年第八號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

山葉製風琴ハ第五回內國勸業博覽會ニ於ノ第壹等賞牌ヲ受領セリ

● 山葉製風琴





壹號形　金拾六圓五拾錢
貳號形　金廿六圓五拾錢
三號形　金參拾七圓
四號形　金四拾參圓
五號形　金四拾八圓
六號形　金五拾五圓
七號形　金六拾五圓
八號形　金七拾五圓
九號形　金百圓
十號形　金百貳拾圓
メーソンモデル
第壹號　金百參拾圓
同第貳號　金百五拾圓
同第三號　金貳百圓
新形一號　金八拾圓
同　二號　金四拾五圓
足折形一號　金廿五圓
同　二號　金參十五圓

● 山葉製洋琴　參百五拾圓以上。各種
● 舶來洋琴　參百圓以上參千圓。各種
● 舶來風琴　百圓以上千五百圓。各種
● 鈴木製ヴアイオリン　五圓以上五十圓迄各種
其他弓箱附屬品等各種
● 舶來ヴアイオリン　各種
● 樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器新着品　各種



右の外手風琴バーモニカブラジョーレット各樂器附屬品各種
郵券貳錢御送付あらば美麗なる目錄進呈す

共益商社編（文部省撿定濟）
● 唱歌教科書

教師用 全四冊
第一卷定價金參拾錢
第二卷定價金參拾錢
第三卷定價金參拾錢
第四卷定價金參拾錢

生徒用 全四冊
第一卷定價金拾五錢
第二卷定價金拾五錢
第三卷定價金拾八錢
第四卷定價金拾八錢

郵稅一冊に就き各金四錢

☞ 空前の唱歌良教科書
檢定濟教師用生徒用完備唱歌教科書の嚆矢

小山作之助先生編
輪唱歌集
全一冊 壹部 定價金三十五錢 郵稅金四錢

共益商社編 高等女學
音樂教科書
全四冊卷一既刊二、三、四近刊 壹部 定價金四十五錢 郵稅金八錢

共益商社編 師範教育
音樂教科書
全四冊卷一既刊二、三、四近刊 壹部 定價金三十五錢 郵稅金六錢

共益商社編 中學
唱歌教科書
全三冊卷一既刊二、三近刊 壹部 定價金三十五錢 郵稅金六錢

石川喜三郎先生譯
音樂と詩歌
全壹冊 壹部 洋裝美本 定價金三十五錢 郵稅金六錢

比留間賢八先生編
マンドリン教科書
全壹冊 洋裝大形美本 定價金四十錢 郵稅金六錢

琴曲大家山登萬和先生作曲 箏曲
地久節
全一冊 大形美本 定價金五十錢 郵稅金六錢

諸大家作歌曲 討露軍歌
かちどき
第一冊 美本 定價金五錢 郵稅金二錢

東京市京橋區竹川町十三番地
共益商社樂器店
電話新橋五二九　電信略號キヨ

東京築地株式會社國光社印刷